京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告　二〇二一－八

富ノ森城跡

富　ノ　森　城　跡

公益財団法人　京都市埋蔵文化財研究所

2022年

公益財団法人　京都市埋蔵文化財研究所

富 ノ 森 城 跡

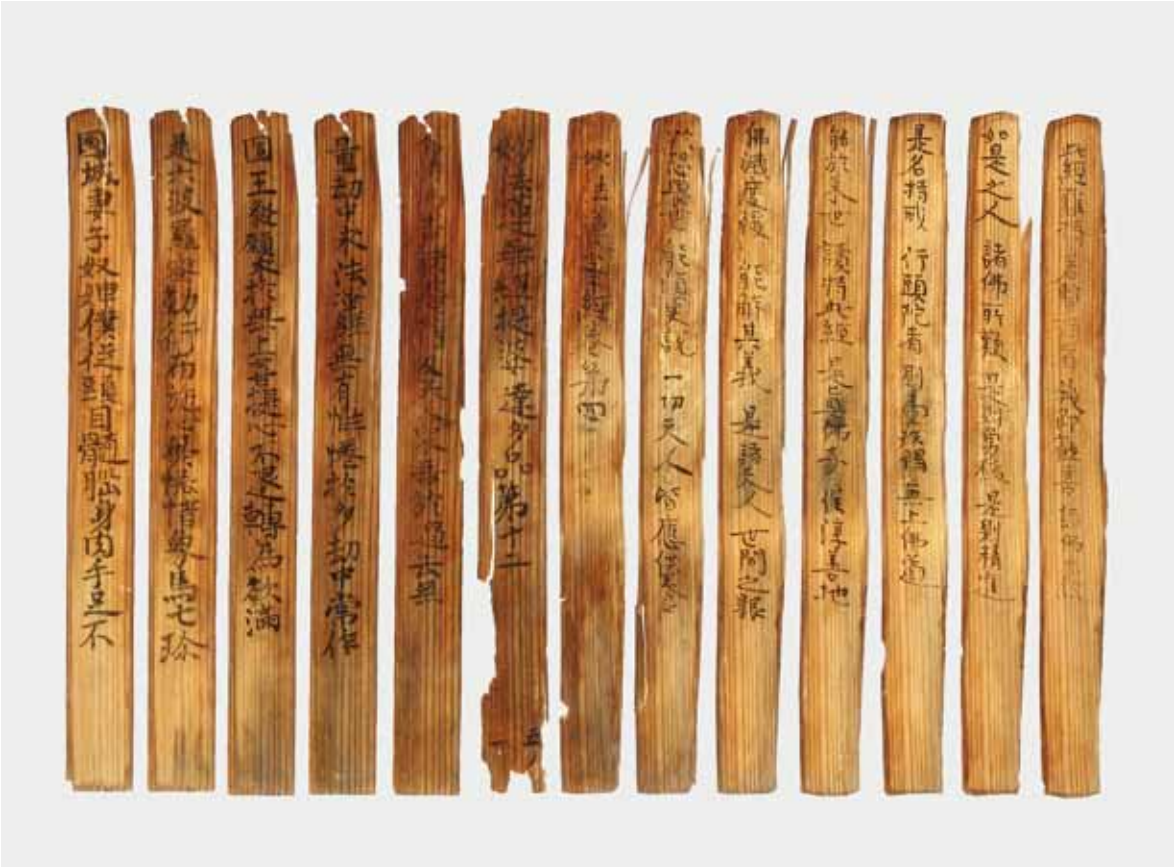
2022年

公益財団法人　京都市埋蔵文化財研究所

4区 溝1321・1322（北から）

4区 溝1002 柿経出土状況（東から）

1　柿経側面墨書



2　柿経墨書

序　　文

京都市内には、いにしえの都平安京をはじめとして、数多くの埋蔵文化財包蔵地（遺跡）が点在しています。平安京以前にさかのぼる遺跡及び平安京建都以来、今日に至るまで営々と生活が営まれ、各時代の生活跡が連綿と重なりあっています。このように地中に埋もれた埋蔵文化財（遺跡）は、過去の京都の姿をうかびあがらせてくれます。

公益財団法人京都市埋蔵文化財研究所は、遺跡の発掘調査をとおして京都の歴史の解明に取り組んでいます。その調査成果を市民の皆様に広く公開し、活用していただけるよう努めていくことが責務と考えています。現地説明会の開催、写真展や遺跡めぐり、京都市考古資料館での展示公開、小中学校での出前授業、ホームページでの情報公開などを積極的に進めているところです。

このたび、道路整備に伴う富ノ森城跡の発掘調査について調査成果を報告いたします。本報告の内容につきましてお気づきのことがございましたら、ご教示賜りますようお願い申し上げます。

末尾になりましたが、当調査に際しまして多くのご協力とご支援を賜りました関係各位に厚く感謝し、御礼を申し上げます。

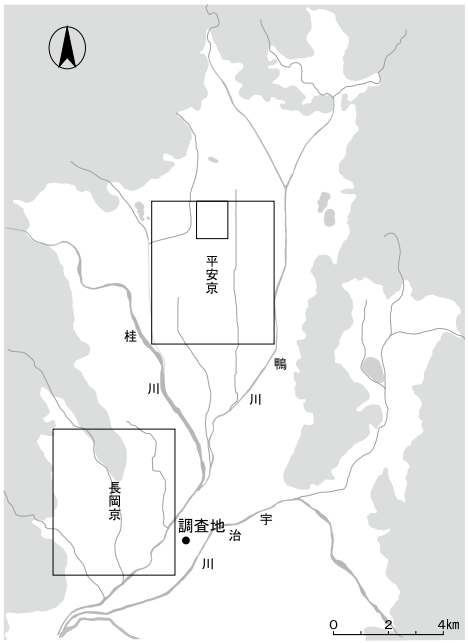
令和４年３月

公益財団法人　京都市埋蔵文化財研究所

所　長　　井　上　満　郎

例　　言

1	遺　跡　名	富ノ森城跡　（京都市番号　19 S 141・683）
2	調査所在地	京都市伏見区横大路北ノ口町他　地内
3	委　託　者	京都市　代表者　京都市長　門川大作
4	調 査 期 間	2021年１月18日～2021年11月２日
5	調 査 面 積	1,776㎡
6	調査担当者	中谷正和・伊藤　潔・南　孝雄
7	使 用 地 図	京都市発行の都市計画基本図（縮尺１：2,500）「向日町」・「久我」・「下鳥羽」・「長岡」・「羽束師」・「横大路」・「神足」・「納所」・「葭島新田」・「円明寺」・「淀」・「一口」を参考にし、作成した。
8	使用測地系	世界測地系　平面直角座標系Ⅵ（ただし、単位（m）を省略した）
9	使 用 標 高	T.P.：東京湾平均海面高度
10	使用土色名	農林水産省農林水産技術会議事務局監修『新版　標準土色帖』に準じた。
11	遺 構 番 号	通し番号を付し、遺構の種類を前に付けた。
12	遺 物 番 号	通し番号を付し、写真番号も同一とした。
13	本 書 作 成	中谷正和・伊藤　潔・南　孝雄
14	執 筆 分 担	中谷正和：１～３、４－（１）・（３）～（７）、５ 伊藤　潔・中谷正和：４－（２） 付章１：小野映介（駒澤大学） 付章２：関　晃史（当研究所）、山田卓司（龍谷大学）



（調査地点図）

付章３：黒住耐二（千葉県立中央博物館）、宮本由子（東京都埋蔵文化財センター）

付章４：丸山真史（東海大学）

付章５：関　晃史（当研究所）

付章６：北村　彩・関　晃史（当研究所）

15　備　　考　　上記以外に調査・整理ならびに本書作成には、調査業務職員及び資料業務職員があたった。

16　協　力　者　　調査および報告書作成にあたり、下記の方々のご協力を得た。記して感謝申し上げます。

上井佐紀、小野映介、海邉博史、國下多美樹、黒住耐二、佐藤亜聖、鋤柄俊夫、竹本　晃、田中　稔、辻　康男、中路敏治、西山良平、服部光真、浜中邦弘、藤間温子、丸山真史、水ノ江和同、三宅徹誠、森山由香里、山田卓司、山田哲也、山本　崇、吉野秋二（五十音順／敬称略）

目　　次

１．調査経過 …… 1
（１）調査に至る経緯 …… 1
（２）調査の経過 …… 4
２．位置と環境 …… 6
（１）環境と立地 …… 6
（２）周辺の遺跡と調査 …… 6
３．遺　　構 …… 9
（１）基本層序 …… 9
（２）遺構の概要 …… 11
（３）平安時代後期から鎌倉時代前葉の遺構 …… 12
（４）鎌倉時代中葉から後葉の遺構 …… 14
（５）鎌倉時代末から室町時代前半の遺構 …… 17
（６）室町時代後半の遺構 …… 17
（７）安土桃山時代の遺構 …… 21
（８）江戸時代の遺構 …… 24
４．遺　　物 …… 26
（１）遺物の概要 …… 26
（２）土器類 …… 27
（３）瓦類 …… 33
（４）土製品 …… 33
（５）石製品 …… 34
（６）木製品 …… 34
（７）金属製品 …… 36
５．ま と め …… 37
（１）遺構群形成以前 …… 37
（２）平安時代後期から鎌倉時代前葉 …… 37
（３）鎌倉時代中葉から後葉 …… 37
（４）鎌倉時代末から室町時代前半 …… 39
（５）室町時代後半 …… 39
（６）安土桃山時代 …… 41
（７）江戸時代 …… 43

付章１　富ノ森城跡において確認された噴砂について　…… 47
付章２　富ノ森城跡から出土した坩堝の科学分析　…… 49
付章３　富ノ森城跡の地点貝塚から得られた貝類遺体　…… 53
付章４　富ノ森城跡２次調査出土の脊椎動物遺存体　…… 65
付章５　富ノ森城跡の大型植物遺体　…… 67
付章６　富ノ森城跡出土の柿経について　…… 71

図　版　目　次

巻頭図版１　遺構　４区 溝1321・1322（北から）
巻頭図版２　遺構　４区 溝1002 柿経出土状況（東から）
巻頭図版３　遺物　１　柿経側面墨書
　　２　柿経墨書

図版１　遺構　４区 第４b面（鎌倉時代中葉から後葉）平面図（１：400）
図版２　遺構　４区 第４a面（鎌倉時代末から室町時代前半）平面図（１：400）
図版３　遺構　４区 第３面（室町時代後半〔古段階〕）平面図（１：400）
図版４　遺構　４区 第２面（室町時代後半〔新段階〕）平面図（１：400）
図版５　遺構　４区 第１b面（安土桃山時代）平面図（１：400）
図版６　遺構　４区 第１a面（江戸時代）平面図（１：400）
図版７　遺構　５区 第３面（平安時代後期から鎌倉時代前葉）平面図（１：400）
図版８　遺構　５区 第２b面（鎌倉時代中葉から後葉）平面図（１：400）
図版９　遺構　５区 第２a面（室町時代後半）平面図（１：400）
図版10　遺構　５区 第１b面（安土桃山時代）平面図（１：400）
図版11　遺構　５区 第１a面（江戸時代）平面図（１：400）
図版12　遺構　４区 北壁・東壁断面図１（１：100）
図版13　遺構　４区 北壁・東壁断面図２（土層名）
図版14　遺構　５区 東壁断面図１（１：100）
図版15　遺構　５区 東壁断面図２（土層名）
図版16　遺構　溝2029・2030・2032・2036～2038・2042、土坑2033断面図（１：30）
図版17　遺構　土坑2014実測図、土坑2018・溝2030断面図（１：20）
図版18　遺構　建物1577・1662実測図（１：100）
図版19　遺構　建物1463、柵1389・1516実測図（１：100）

図版20　遺構　柵1426、暗渠1375・1376実測図、溝1479・1518断面図（１：100、１：30）
図版21　遺構　４区 第３面Ｃ－Ｃ'ライン断面図（１：30）
図版22　遺構　４区 第３面Ｂ－Ｂ'ライン断面図（１：60）
図版23　遺構　建物1527・1554実測図（１：100）
図版24　遺構　柵1273・1409、建物1027実測図（１：100、１：50）
図版25　遺構　建物1093、柵1056・1127・1128・1130実測図（１：100）
図版26　遺物　溝2037・2036出土土器実測図（１：４）
図版27　遺物　溝2038・2030、土坑2033出土土器実測図（１：４）
図版28　遺物　土坑2033・2034・2014・2039・2018出土土器実測図（１：４）
図版29　遺物　土坑1627、４区Ⅶ層・Ⅵｂ層、土器溜1383、溝1322・256（古）・1160出土土器実測図（１：４）
図版30　遺物　溝1321、柱穴1080、溝1323・1003出土土器実測図（１：４）
図版31　遺物　溝256（新）・1002出土土器実測図（１：４）
図版32　遺物　溝1002・1320・246・1158出土土器実測図（１：４）
図版33　遺物　石製品拓影及び実測図（１：４、石８のみ１：６）
図版34　遺物　木製品実測図（１：４）
図版35　遺物　金属製品実測図（１：２）、銭貨拓影（１：１）
図版36　遺構　１　５区 第３面（平安時代後期から鎌倉時代前葉）全景（北東から）
２　５区 溝2032（北から）
３　５区 溝2037土器出土状況（北から）
図版37　遺構　１　４区 第４面（鎌倉時代中葉から室町時代前半）全景（南西から）
２　５区 第２面（鎌倉時代中葉から室町時代後半）全景（北から）
図版38　遺構　１　５区 溝2013・2023・2027（南東から）
２　５区 土坑2014（北西から）
３　５区 土坑2039（北から）
図版39　遺構　１　４区 建物1577・1662（北から）
２　４区 柱穴1582・1585（北から）
３　４区 柱穴1577（東から）
４　４区 柱穴1590（東から）
図版40　遺構　１　４区 第３面（室町時代後半〔古段階〕）全景（西から）
２　４区 建物1463（北から）
３　４区 柱穴1465（北から）
図版41　遺構　１　４区 溝256（東から）
２　４区 溝1003・1160・1168（東から）
３　４区 溝1322（南から）

4　4区 溝1322貝殻堆積状況（北から）
5　4区 暗渠1376（東から）
図版42　遺構　1　4区 第２面（室町時代後半〔新段階〕）全景（北から）
2　4区 第２面 中央部柱穴群（西から）
図版43　遺構　1　5区 溝2025（南東から）
2　5区 溝2009（南から）
3　5区 土坑群2028・2029（北から）
図版44　遺構　1　4区 第１面（安土桃山時代から江戸時代）全景（北東から）
2　4区 建物1093、柵1056（西から）
図版45　遺構　1　4区 建物1027（東から）
2　4区 柱穴1032（西から）
3　4区 柱穴1032半裁状況（西から）
図版46　遺構　1　4区 溝1001～1003・1125・1160・1168堆積状況（西から）
2　4区 溝1002柿経出土状況（北東から）
3　4区 溝1002卒塔婆出土状況（西から）
図版47　遺構　1　5区 第１面（安土桃山時代から江戸時代）全景（北東から）
2　4区 溝1009・1012～1014（北から）
3　4区 土坑1008（西から）
4　4区 土坑1004（北東から）
図版48　遺物　溝2037・2038出土土器
図版49　遺物　溝2030、土坑2018出土土器
図版50　遺物　土器溜1383、柱穴1080、溝256（新）出土土器
図版51　遺物　溝1002・1320・246・1158出土土器
図版52　遺物　瓦類、土製品、石製品
図版53　遺物　木製品
図版54　遺物　金属製品

挿　図　目　次

図１　調査位置図（１：5,000）　…… 1
図２　調査区配置図（１：800）　…… 2
図３　４区調査前全景（北西から）　…… 5
図４　５区調査前全景（南西から）　…… 5
図５　４区調査状況（北西から）　…… 5
図６　４区調査区壁崩落箇所の養生（北西から）　…… 5
図７　４区柿経取り上げ作業　…… 5
図８　４区溝1322貝殻層の調査　…… 5
図９　周辺遺跡位置図（１：25,000）　…… 7
図10　土層模式図　…… 9
図11　４区Ⅸ層（基盤層）断ち割り箇所断面図（１：50）　…… 10
図12　溝2037土器出土状況図（１：40）　…… 13
図13　建物618実測図（１：100）　…… 15
図14　建物363実測図（１：100）　…… 16
図15　溝1002柿経・卒塔婆出土状況図（１：10）　…… 23
図16　Ⅸ層（砂礫層）出土土器実測図（１：４）　…… 27
図17　墨書土器実測図（１：４）　…… 32
図18　瓦類拓影及び実測図（１：４）　…… 33
図19　土製品実測図（１：４）　…… 34
図20　卒塔婆・位牌釈文　…… 34
図21　木製杖実測図（１：６）　…… 35
図22　平安時代後期から鎌倉時代前葉の遺構（１：1,500）　…… 38
図23　鎌倉時代中葉から後葉の遺構（１：1,500）　…… 38
図24　鎌倉時代末から室町時代前半の遺構（１：1,500）　…… 40
図25　室町時代後半の遺構（１：1,500）　…… 40
図26　安土桃山時代の遺構（１：1,500）　…… 42
図27　江戸時代の遺構（１：1,500）　…… 42
図28　Ｘ線透過撮影画像（上が口縁部）　…… 49
図29　坩堝胎土（外面）蛍光Ｘ線分析結果　…… 50
図30　溶着金属低電子密度箇所（内面）蛍光Ｘ線分析結果　…… 50
図31　溶着金属高電子密度箇所（内面）蛍光Ｘ線分析結果　…… 51
図32　溶着金属高電子密度箇所（外面）蛍光Ｘ線分析結果　…… 51

図33　溝1322のタニシ層 …… 54
図34　溝1322のタニシ層拡大 …… 54
図35　溝246のマツカサガイ層 …… 54
図36　処理したマツカサガイ層の取り上げ状態 …… 54
図37　土坑1010オオタニシ出土状況（東から） …… 54
図38　土坑1010から回収されたオオタニシ胎児殻等 …… 54
図39　溝246から水洗されたマツカサガイ殻皮 …… 57
図40　合弁個体の多い溝246のマツカサガイ …… 57
図41　得られた微小貝類 …… 58
図42　溝1322から抽出されたタニシ類の胎児殻や幼貝 …… 61
図43　イシガイ片に認められた真珠 …… 61
図44　地点貝塚出土中大形貝類 …… 62
図45　富ノ森城跡２次調査出土の脊椎動物遺存体 …… 66
図46　大型植物遺体等実態顕微鏡写真 …… 69
図47　柿経の形態分類 …… 78
図48　富ノ森城跡柿経の出土状況（西から） …… 78
図49　富ノ森城跡出土柿経の側面墨書 …… 79
図50　富ノ森城跡出土柿経の墨書１ …… 81
図51　富ノ森城跡出土柿経の墨書２ …… 82

表　目　次

表１　遺構概要表 …… 11
表２　遺物概要表 …… 26
表３　富ノ森城跡の地点貝塚から得られた貝類 …… 55
表４　富ノ森城跡の地点貝塚の堆積物を中心に抽出された貝類遺体等の詳細 …… 56
表５　富ノ森城跡２次調査出土の骨同定一覧表 …… 65
表６　種実一覧表 …… 68
表７　柿経発見例一覧表 …… 72
表８　箍締め資料と有紀年資料一覧表 …… 76

付　表　目　次

付表１　土器類一覧表 …… 85
付表２　瓦類一覧表 …… 95
付表３　土製品一覧表 …… 95
付表４　石器・石製品一覧表 …… 95
付表５　木製品一覧表 …… 96
付表６　金属製品一覧表 …… 96
付表７　銭貨一覧表 …… 97

富ノ森城跡

1．調査経過

（1）調査に至る経緯

調査地は、京都市伏見区横大路北ノ口町他 地内に位置する。『京都市遺跡地図』によると、室町時代の平城跡とされる富ノ森城跡に該当する（図1）。

伏見西部第五地区土地区画整理事業にあたり、当該地に都市計画道路（横大路淀線）が整備されることとなったため、京都市文化市民局文化芸術都市推進室文化財保護課（以下「文化財保護課」という）が試掘調査を実施した。その結果、中世の遺構面が良好に遺存していることが明らかとなり、発掘調査が必要と判断されたため、公益財団法人京都市埋蔵文化財研究所（以下「当研究所」という）が委託をうけて調査を実施した。調査は、2020年度から2021年度の２箇年度にわたって実施することが計画され、今回はその第２期目にあたる。

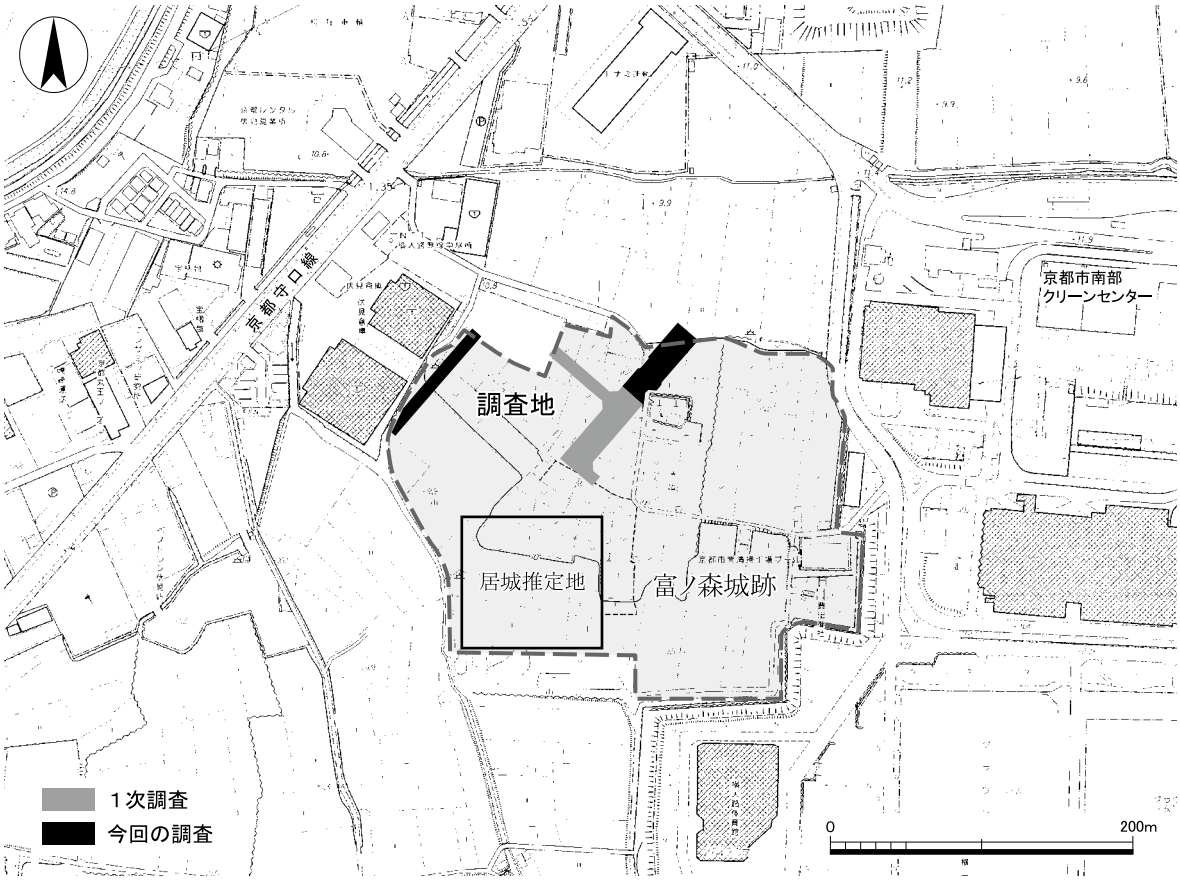


図1　調査位置図（1：5,000）

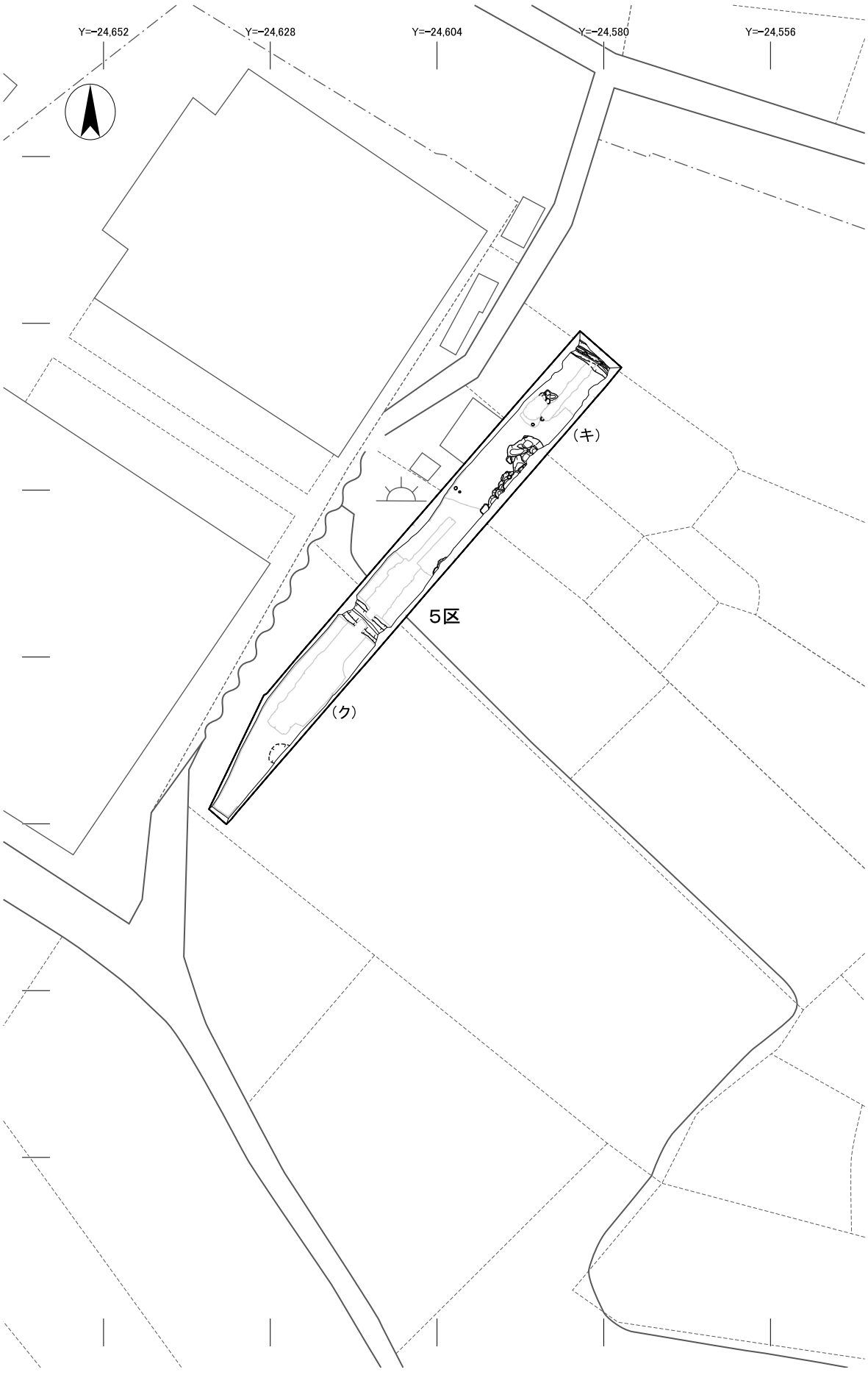


図２　調査区配置図１（１：800）

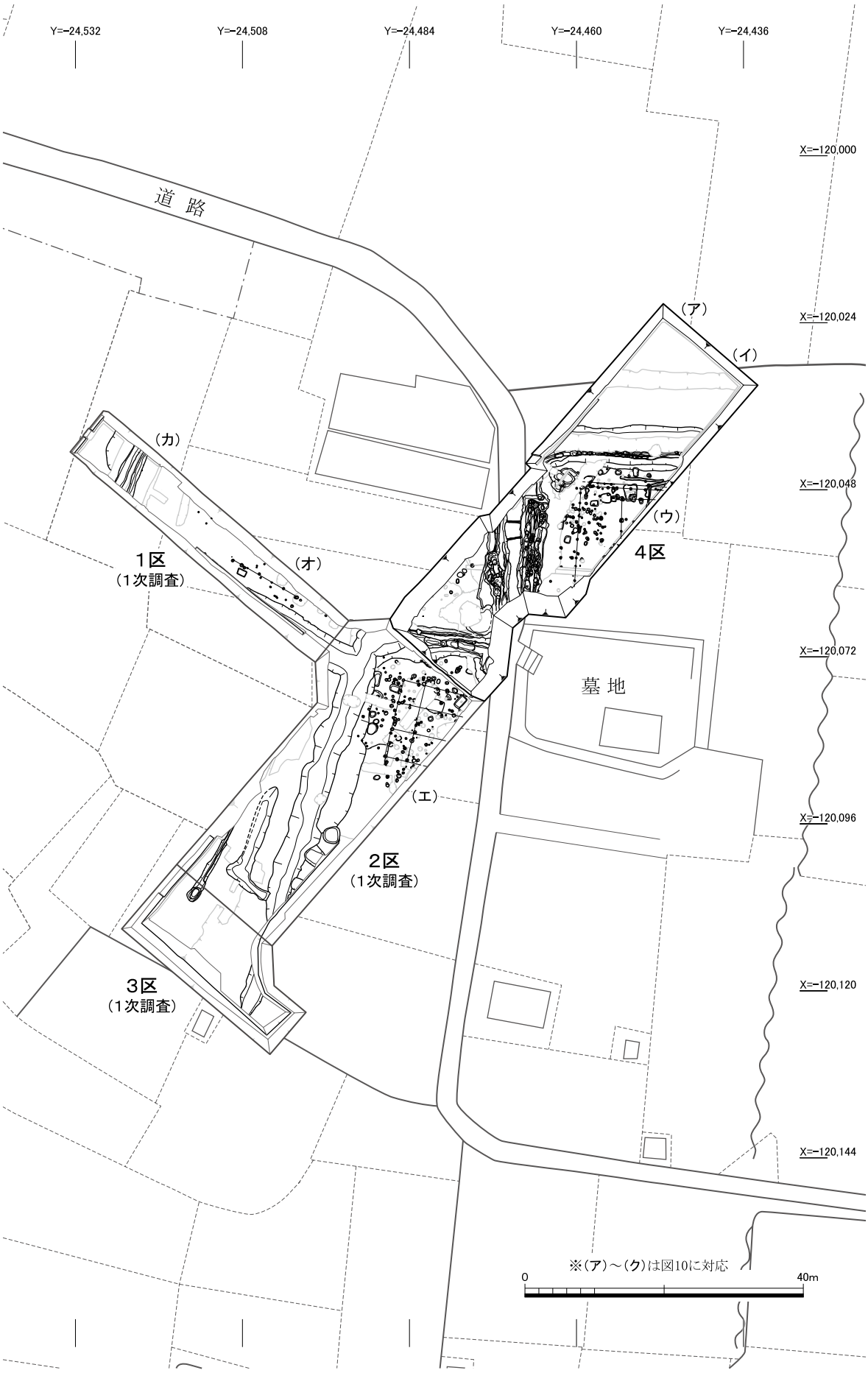


図２　調査区配置図２（１：800）

（２）調査の経過

今回の調査地は、遺跡の北限と西限にあたる１次調査区の北側と西側に位置する。調査区は、文化財保護課の指導に従い設定した。調査面積は1,776㎡である。横大路淀線側の１次調査区に北接する箇所を４区、横大路淀線に並行する支線側を５区として調査を行った（図２）。

調査は2021年１月18日から開始した。調査した遺構面数は４区が４面６時期（第１面：江戸時代・安土桃山時代、第２・３面：室町時代後半、第４面：鎌倉時代末から室町時代前半・鎌倉時代中葉から後葉）、５区が３面５時期（第１面：江戸時代・安土桃山時代、第２面：室町時代後半・鎌倉時代中葉から後葉、第３面：平安時代後期から鎌倉時代前葉）である。

各面の掘り下げは重機を用い、遺構は人力で掘削した。遺構の図化作業は、調査担当職員と作業員による手測り及び外部委託業者によるオルソ写真測量を併用した。全景写真撮影は当研究所写真担当職員と外部委託業者によるドローン撮影、個別遺構写真は当研究所写真担当職員及び調査担当職員が適宜行った。残土は耕作土とその他の掘削土を分別して調査地内に仮置きした。

また、調査地周辺では地下水位が高く、土壌が軟弱な箇所を広範囲にわたって確認したため、各調査区壁の補強・養生を随時行った（図６）。同様の環境により、有機物の遺存状態が比較的良好であったため、研究所担当職員による遺物の取り上げを行った（図７）。さらに、当該地の環境復元と生業活動を明らかにすることを目的に、専門家を交えた現地検討・分析を実施した（図８）。

調査では適宜、文化財保護課の検査、検証委員の國下多美樹（龍谷大学）、浜中邦弘（同志社大学）両氏による指導・検証を受けた。2021年９月24日の発掘調査終了を受けて、同11月２日に埋め戻し作業が完了し、撤収した。

図３　４区調査前全景（北西から）

図４　５区調査前全景（南西から）

図５　４区調査状況（北西から）

図６　４区調査区壁崩落箇所の養生（北西から）

図７　４区柿経取り上げ作業

図８　４区溝1322貝殻層の調査

２．位置と環境

（１）環境と立地

京都市南西部に所在する調査地は、南西に桂川・宇治川・木津川の三川合流地帯、南東にかつて巨椋池を擁した低平な沖積地に立地しており、富ノ森城跡の北側と西側に位置する。富ノ森城は室町幕府奉公衆のひとつである横大路被官衆が在城した平城と推定されているが、築造年代や築造者については不明である[1)]。周辺は周知の遺跡が少ないため既応の調査事例がなく、結果として調査地の周囲１㎞は遺跡の空白地にも等しい状況を呈しており、同じ後背湿地でも縄文時代中期から連綿と遺跡が形成されてきた桂川右岸域とは著しい対照をなしている（図９）。

遺跡名の由来となった富ノ森（富森）は、『山州名跡志』によると、古く富杜と呼ばれた森林がこの場所にあったことに因むとされる。『山槐記』治承４年（1180）８月22日条では、中山忠親が福原から富ノ森付近を通って京へ戻ったとあり、詳細な場所は不明であるが、鳥羽と淀を繋ぐ街道沿いに位置していたものと考えられる。また『群書類従』合戦部「明徳記」によると、明徳２年（1391）の乱の際に、山名氏清方の軍勢の一隊が京へ攻め上ろうと、「淀ノ中島」から鳥羽の秋の山を目標に「富森」を目指したが、深田にはまって身動きがとれなくなったとある。当時は街道沿いといえども富ノ森周辺には深田が広がり、周辺の地理に不慣れな集団であれば移動が難しい地勢であったと考えられる。

富ノ森という呼称が、森自体の名としてではなく、集落を指す名称として用いられるようになった時期は判然としない。ただ『管見記』（公名公記）長禄３年（1459）４月４日条に、普請にあたり「富森」から人夫を呼び寄せたことが記されていることから、室町時代後半には西園寺家が何らかの得分権を保有していたことがわかる。また『実隆公記』でもしばしば「富森」から年貢米や若菜・飯粽・芋・大根の他、庭掃除の人夫や臨時の人馬の徴発があったことが記されており、三条西家もまた何らかの得分権を保有していたと推定する。しかし、集落の正確な位置や範囲は明らかではなく、調査地が史料にある富ノ森（富森）の地に属していたのかは不明である。

その後、富ノ森（富森村）は慶長６年（1601）に豊国神社領となるが、同20年（1615）の神社破却に伴い領地は没収、江戸幕府の蔵入地となる。そして文久２年（1862）に京都守護職中の役知として会津藩が治めるところとなり、明治７年（1874）に横大路村と合併した。

（２）周辺の遺跡と調査

調査地が立地する桂川と宇治川に挟まれた低地帯における人々の活動の痕跡は、下三栖遺跡と下三栖城跡、淀城跡で確認できる。

下三栖遺跡及び下三栖城跡の調査では、弥生時代後期から近世の遺構・遺物が確認された。古墳時代後期から飛鳥時代の竪穴建物、及び平安時代後期から中世の掘立柱建物を検出している。鎌倉時代の遺構配置からは紀伊郡条里との関係が指摘されており、中世の史資料で確認できる下三栖

庄に関連する遺跡と評価された[2]。また下三栖城跡では中世末から近世初頭の大溝を検出しており、周囲を濠で囲んだ中世の居城跡と推定されている[3]。

淀城跡の調査では、江戸時代の淀城及び城下町に関係する遺構と、その下層から平安時代から鎌倉時代の整地層や遺物などが出土している。史資料から淀城跡の周辺域には、平安時代は平安京の外港としての淀津、鎌倉時代から室町時代後半にかけては京都の塩・相物の卸しを掌握した淀魚市の存在が明らかとなっており、淀城期よりも下層で出土した遺構や遺物との関連が指摘されている[4]。

調査地の対岸にあたる桂川右岸域では、縄文時代中期以降、近世に至るまでの遺跡が各所で確認されているが、富ノ森城と同時期の遺跡としては久我東町遺跡、羽束師志水町遺跡、羽束師菱川城跡などがある。

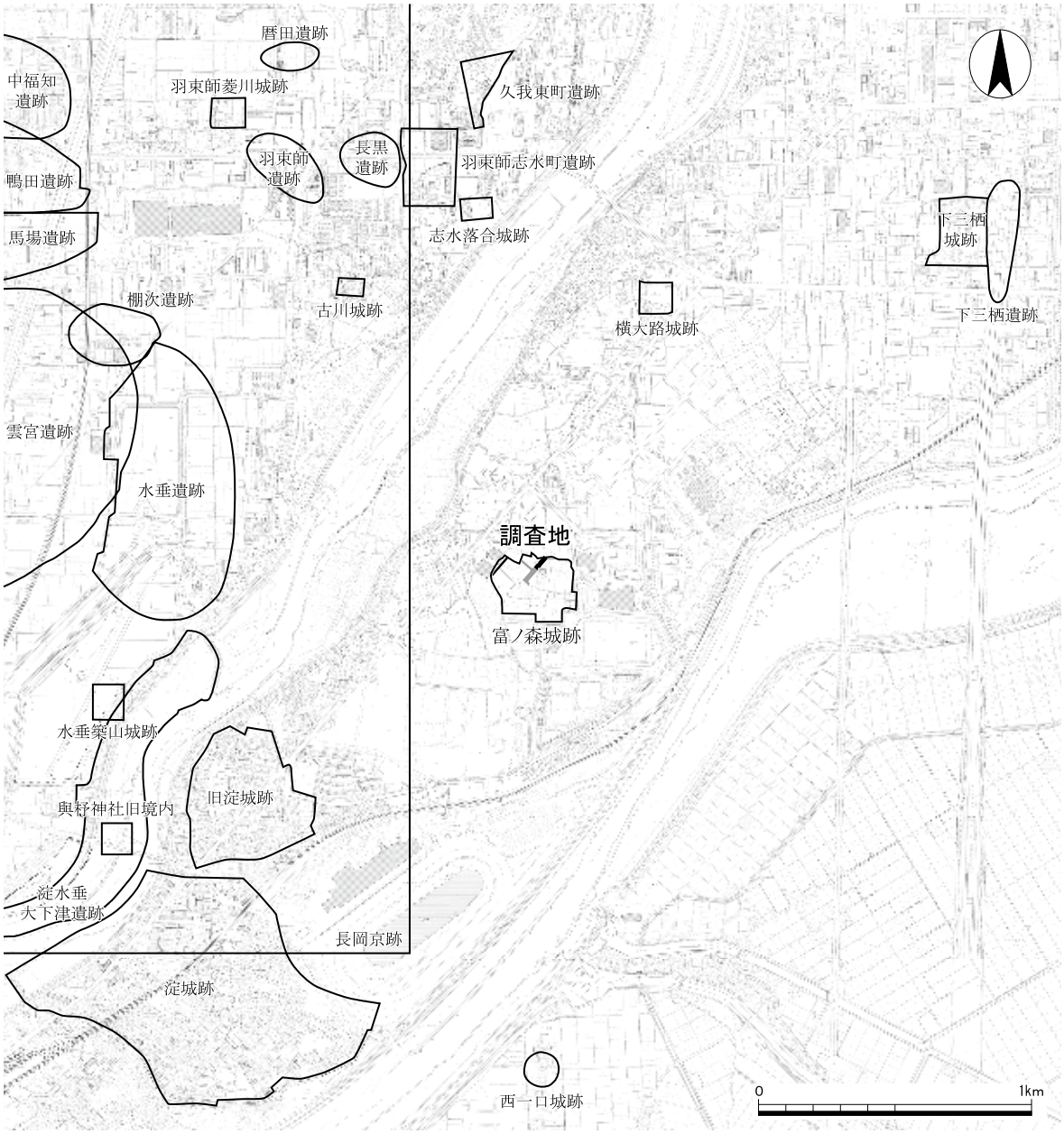


図９　周辺遺跡位置図（１：25,000）

久我東町遺跡の調査では、平安時代後期から安土桃山時代の遺構・遺物が確認された。鎌倉時代後半から室町時代の遺構は、濠や溝、複数の掘立柱建物・井戸・墓などが検出された。濠内には溝で区画された敷地内に、南北方向に建物群が計画的に配置されており、東西・南北７間の大型建物も確認された。環濠集落もしくは居館と推定されている[5)]。

羽束師志水町遺跡の調査では、古墳時代から江戸時代の遺構・遺物が確認された。平安時代末から鎌倉時代にかけては建物や井戸、溝などがあり、小規模な邸宅を備えた環濠集落の存在が指摘された。室町時代の遺構としては濠や土壙墓・火葬墓などがある。溝は乙訓郡条里阿刀里十七坪と二十坪の坪境を示すものと評価されている。安土桃山時代の遺構は濠や建物・井戸・墓などがある。墓は方形の墳丘状の高まりを持ち、蔵骨器が埋納されていた。また調査では、慶長伏見地震（1596）に伴う噴砂も確認されている[6)]。

羽束師菱川城は、城主は不明であるが、調査によって四方に濠を備えた南北110ｍ×東西120ｍの安土桃山時代から江戸時代前半頃の居城跡と推定されている。また、当該地は長岡京期以降、居住域としての土地利用がなされており、鎌倉時代から室町時代の遺構は掘立柱建物や区画溝などが検出されている。そして城跡よりも北東部の調査では、鎌倉時代・安土桃山時代から江戸時代の遺構・遺物が確認されており、洪水砂の堆積状況から室町時代頃の洪水による環境悪化が推測されている[7)]。

淀水垂大下津遺跡では、弥生時代終末期から近世の遺構・遺物が確認されている。

これら集落・居城跡の他にも各所に室町幕府被官衆の居城推定地がある[8)]。調査地北東に位置する横大路城は、富ノ森城と同じ横大路被官衆が在城した平城と推定されており、小川丹波守の居城であったとする伝承がある。未調査であり詳細は不明である。

桂川右岸に位置する志水落合城跡は西岡被官衆のひとつ志水氏の居城跡と想定されている。正確な位置は不明であるが、『辻家文書』の「老諺集（山背国乙訓郡久我里風土記）」では「落合城久我里南志水村東也 川辺今芝原年々成畑 今原岡凹凸」とあり、江戸時代頃はまだ城の痕跡が残っていたと考えられる。

桂川右岸に位置する古川城跡は西岡被官衆のひとつで羽束師神社宮司家である古川氏の居城跡と想定されている。未調査であり詳細は不明である。

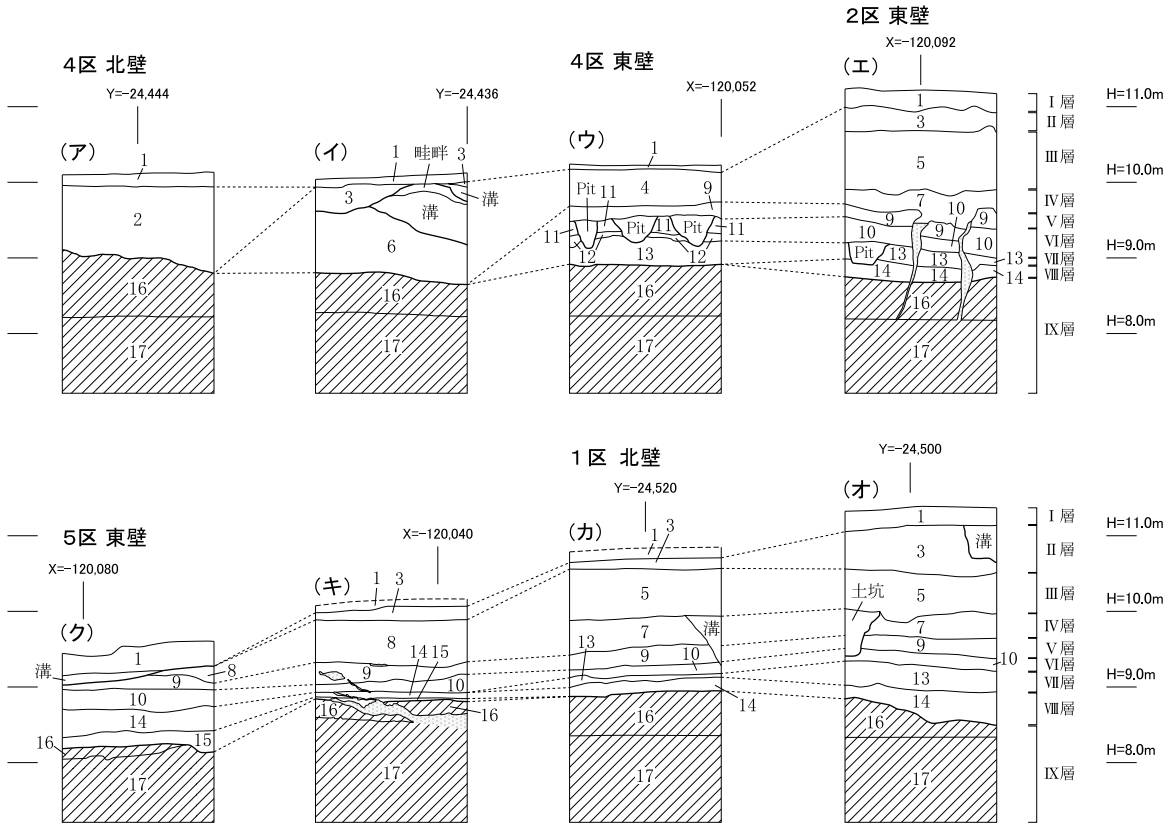
調査区対岸に位置する水垂築山城は、西岡被官衆のひとつ築山氏の居城跡と推定されている。正確な位置は不明であるが、築山氏の墓所と『細川家文書』「山城国西岡御領知之地図」をもとに推定地が比定されている。

3．遺　　構

（1）基本層序

基本層序は、１次調査（１～３区）の成果から、地表面から現代整地層（Ⅰ層）、江戸時代後期から近代の整地層（Ⅱ層）、江戸時代中期から後期の洪水堆積・整地層（Ⅲ層）、江戸時代前期の洪水堆積・整地層（Ⅳ層）、安土桃山時代の洪水堆積・整地層（Ⅴ層）、室町時代後半の洪水堆積・整地層（Ⅵ層）、鎌倉時代末から室町時代前半の整地層（Ⅶ層）、鎌倉時代の整地層（Ⅷ層）、基盤層（Ⅸ層）の順に堆積することが明らかになっている。しかし、２次調査では地点毎にいくつかの差異が認められたことから、以下概略をまとめる（図10）。

４区では、Ⅰ・Ⅱ・Ⅴ・Ⅵ・Ⅶ・Ⅸ層の堆積を確認した。Ⅵ層（室町時代後半の洪水堆積・整地層）では遺構面を２面確認したため上層をⅥa層（第２面：11層）、下層をⅥb層（第３面：12層）とした。調査区北東部ではⅡ・Ⅲ・Ⅳ層を明瞭に区別できず、Ⅷ層も確認できなかった。



1　Ⅰ層（現代 整地・耕作土層）
2　江戸時代後期～近代 湿地状堆積
3　Ⅱ層（江戸時代後期～近代 整地・耕作土層）
4　Ⅱ～Ⅳ層（江戸時代 整地・耕作土層）
5　Ⅲ層（江戸時代中期～後期 洪水堆積・整地土層）
6　江戸時代中期～後期 湿地状堆積
7　Ⅳ層（江戸時代前期 洪水堆積・整地土層）
8　Ⅲ～Ⅳ層（江戸時代前期～後期 洪水堆積・整地土層）
9　Ⅴ層（安土桃山時代 洪水堆積・整地土層）
10　Ⅵ層（室町時代後半 洪水堆積・整地土層）
11　Ⅵa層（室町時代後半 洪水堆積・整地土層）
12　Ⅵb層（室町時代後半 洪水堆積・整地土層）
13　Ⅶ層（室町時代前半 洪水堆積・整地土層）
14　Ⅷa層（鎌倉時代中葉から後葉 整地・耕作土層）
15　Ⅷb層（平安時代後期から鎌倉時代前葉 整地・耕作土層）
16　Ⅸa層（基盤層：泥砂・シルト）
17　Ⅸb層（基盤層：砂礫）

＊(ア)～(ク)は図2に対応
噴砂

図10　土層模式図

５区では、Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ～Ⅳ・Ⅴ・Ⅵ・Ⅷ・Ⅸ層の堆積を確認した。Ⅷ層は、不明瞭ながら遺構面が２面あり、一部平安時代後期に遡る遺構・遺物があると考えられたため、鎌倉時代中葉から後葉の遺構面をⅧａ層（第２ｂ面：14層）、平安時代後期から鎌倉時代前葉の遺構面をⅧｂ層（第３面：15層）とした。Ⅲ層からⅣ層を明瞭に区別できず、Ⅶ層も確認できなかった。

４区では基盤層（Ⅸ層）の断ち割り調査を行った（図11）。Ⅸａ層（泥砂・シルト層：１層）、Ⅸｂ層（砂礫層：２～５層）の順に堆積しており、泥砂・シルト層と礫層の層界で土壌化が認められた。礫層（４層）からは奈良時代の須恵器片が出土した。また、Ⅸａ層（泥砂・シルト層）から採取された炭化物の放射性炭素年代を測定したところ、772calAD - 793calAD（15.6%）・800calAD - 899calAD（65.0%）・920calAD - 956calAD（14.8%）の値を得た（付章１）。

調査地内の地形は、現地表面は２次調査地点（４・５区）から１次調査地点（２区）に向かって標高が高くなる（図10）。江戸時代の土層（Ⅱ～Ⅳ層）も、標高が高くなるにつれ層厚が増し、かつⅢ・Ⅳ層も区別が可能となる。一方、Ⅴ層以下Ⅸ層（基盤層）の地形は、５区から２区（北東側）に向かって緩やかに標高が増している。

調査は４区がⅤ層上面（安土桃山時代：標高約9.7ｍ）を第１面、Ⅵａ層上面（室町時代後半：標高約9.5ｍ）を第２面、Ⅵｂ層（室町時代後半：標高約9.3ｍ）を第３面、Ⅸ層上面（基盤層：標高約8.9ｍ）で鎌倉時代末から室町時代前半の遺構群を第４ａ面、鎌倉時代中葉から後葉の遺構群を第４ｂ面として調査を行った。５区はⅤ層上面（安土桃山時代：標高約9.3ｍ）を第１面、Ⅷａ層上面（鎌倉時代中葉から後葉：標高約8.7～8.9ｍ）で第２面、Ⅸ層上面（基盤層：標高約8.3～8.8ｍ）を第３面として調査を行った。

また、今回の調査区でも各所で噴砂を確認した。噴砂はⅨ層（基盤層）からⅤ層（安土桃山時代）上面にまで及ぶ。５区北側で検出した噴砂周辺の土壌（Ⅴ層）から採取した炭化物の放射性炭素年

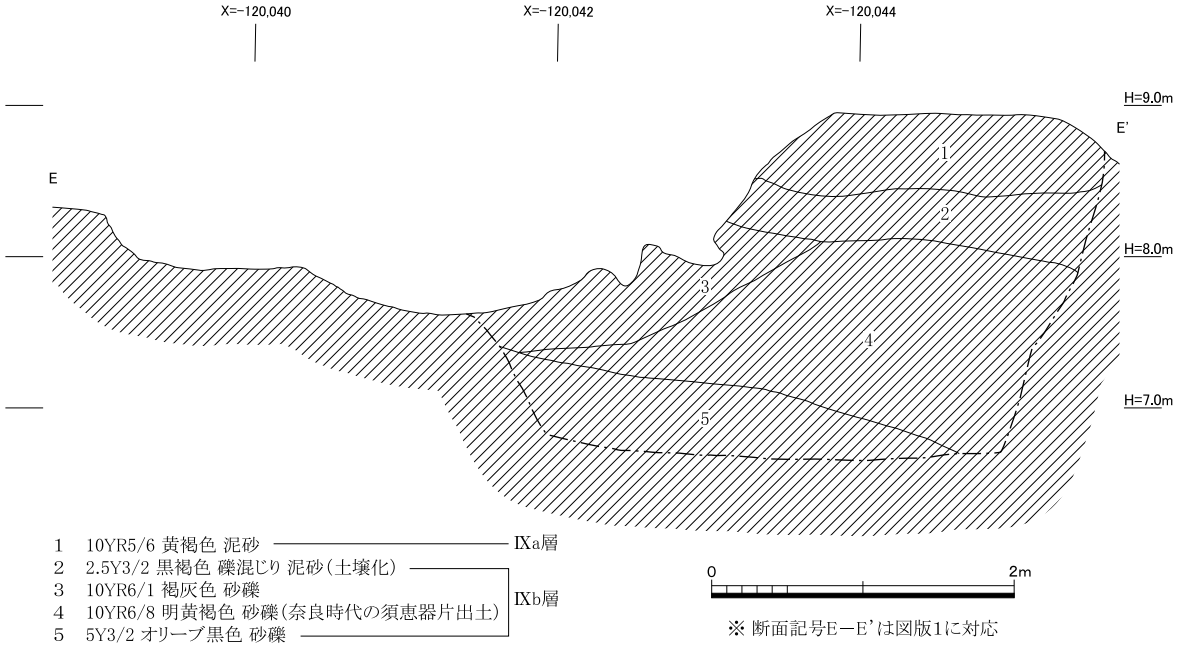


図11　４区Ⅸ層（基盤層）断ち割り箇所断面図（１：50）

代を測定したところ、1433calAD - 1478calAD（95.4%）の値を得た（付章１）。噴砂が江戸時代の土壌層に達していないことから、噴砂を生じさせた地震としては慶長伏見地震（1596）を原因とする可能性が考えられた。

（２）遺構の概要

今回検出した遺構は、鎌倉時代から江戸時代のものである。総数は853基である（表１）。ここでは遺跡を理解するうえで重要と判断した遺構を中心に、時代順に報告する。なお、平安時代以降の検出遺構及び出土遺物の時期の判定は、平尾政幸氏による編年案を適用する[9)]。

平安時代後期から鎌倉時代前葉（図版７・36） 遺構はすべて５区で検出した。溝や土坑などがある。東西溝2023（古）・2027、南北方向の溝2029・2030・2037・2038に対し、南北溝2036・2042は幅や深さが一定せず、両者の性格・機能が異なる可能性がある。

鎌倉時代中葉から後葉（図版１・８・37） 掘立柱建物・土坑・溝などがある。４区中央部以北では明確に当該期の遺構を確認できず、湿地状堆積が認められる。同南西部で確認した溝1711・1773は、敷地を画する区画溝と考えられる。５区では建物など居住域の存在を示す遺構は認められなかったが、周溝状の掘り込みを伴う性格不明の土坑2014と、坩堝や鞴羽口など鋳造関係の遺物が出土した土坑2018などを検出した。

鎌倉時代末から室町時代前半（図版２・37） 遺構はすべて４区で確認した。掘立柱建物・柱穴・溝などがある。４区南西部で確認した溝1637は敷地を画する区画溝と考えられる。

室町時代後半（図版３・４・９・40・42） 掘立柱建物や柵・土坑・溝・暗渠などがある。４区北側で確認した東西溝1160・1168は集落域の北限を画する溝と想定しており、以北には遺構の分布は確認できなかった。同中央部では少なくとも２段階の整地が確認でき、各段階で柵などで区画

表１　遺構概要表

時　　代	遺　　構
平安時代後期 ～鎌倉時代前葉	溝2023（古）・2027・2029・2030・2032・2036～2038・2042
鎌倉時代中葉 ～後葉	建物618、溝1711・1773・2013・2023（新）、 土坑1630・2014・2018・2033・2034・2039、湿地状堆積1822・1823
鎌倉時代末 ～室町時代前半	建物363・1577（柱穴1577・1582・1590）・1662（柱穴1585）、柱穴1723、溝1637、 土坑1627
室町時代後半	建物1463（柱穴1465）・1527・1554、柵1273・1389・1409・1426・1516、柱穴1080・1274・1382、溝256・1003・1160・1168・1303・1321～1323・1326・1479・1518・2009・2025（古）、暗渠1375・1376、土坑1490・1502、土坑群2028・2029、土器溜1383
安土桃山時代	建物1027（柱穴1032）・1093、柵1056・1127・1128・1130、 溝246・1002・1320・2003・2025（新）、湿地状堆積2043、噴砂
江戸時代	溝1001・1009・1012～1014・1035・1125・1158・2044～2046、井戸1124、 円形土坑群（土坑1008・1017・1121・2006）、土坑1004・1010、湿地状堆積1159・1190

された建物を検出した。南北溝1321・1322とそれを繋ぐ暗渠を確認した。南北溝は現在の道路とほぼ並行しており、道路側溝として機能していたと推察する。溝からはオオタニシの貝殻が多数出土した。５区北端部では、１次調査で検出した東西溝50の延長線上で東西溝2009を検出した。また土坑群2028・2029は、規模の異なる土坑の集積であるが、遺物はほとんど出土しておらず性格は不明である。

安土桃山時代（図版５・10・44・47） 建物・柵・溝などがある。４区では溝や柵で区画された掘立柱建物1093や、壺地業を伴う礎石建物1027を確認した。溝246からは淡水産の貝殻が多数出土した。集落北限の東西溝1002からは、柿経や卒塔婆、位牌などが出土した。５区北端部では、１次調査で検出した東西溝30の延長線上で東西溝2003を検出した。また土坑群2028・2029の直上で湿地状堆積2043を確認した。

江戸時代（図版６・11・44・47） 溝・井戸・土坑などがある。道路側溝と推定できる南北溝1014に沿って列状に並ぶ円形土坑群を確認した。また土坑1010からはオオタニシの貝殻が大量に出土した。

（３）平安時代後期から鎌倉時代前葉の遺構（図版７）

溝2023（古）（図版14・15・38） ５区北端部で検出した東西溝である。西側と東側は調査区外で、北側は後世の溝によって攪乱されている。幅1.8ｍ以上×深さ0.8ｍを測る。方位は西に対し約36度北に振れる。溝底の標高は北壁際が標高8.1ｍ、東壁際が標高8.4ｍである。埋土は灰色砂泥と灰オリーブ色・暗緑灰色・オリーブ灰色泥砂である。

溝2027（図版14・15・38） ５区北部で検出した東西溝である。西側と東側は調査区外で、北側は後世の溝によって攪乱されている。幅1.9ｍ以上×深さ0.6ｍを測る。方位は西に対し約33度北に振れる。溝底の標高は北壁際が標高8.1ｍ、東壁際が標高8.2ｍである。遺物は軒平瓦が出土した。埋土は灰色シルト・細砂である。

溝2029（図版16） ５区北部で検出した南北溝である。南側は試掘坑によって攪乱されている。全長28ｍ以上×幅0.7ｍ×深さ0.2ｍを測る。方位は北に対し約51度東に振れる。埋土は灰オリーブ色砂泥～シルトである。溝底の標高は北端部が標高8.3ｍ、南端部が標高8.2ｍである。

溝2030（図版16・17） ５区北半部で検出した南北溝である。西側が一部試掘坑によって攪乱されており、南側は溝2025以南が不明瞭である。全長79ｍ以上×幅1.2ｍ以上×深さ0.4ｍを測る。方位は北に対し約52度東に振れる。埋土は灰色・灰オリーブ色泥砂～シルトである。溝底の標高は北端部が標高8.2ｍ、南端部が標高8.0ｍである。遺物は楠葉型の瓦器や乙訓在地形[10)]の土師器皿、輸入陶磁器などが出土した。

溝2032（図版16・36） ５区中央部で検出した南北溝である。西側は溝2030に攪乱されており、南側は溝2025以南が不明瞭である。全長49ｍ以上×幅0.9ｍ以上×深さ0.4ｍを測る。方位は北に対し約50度東に振れる。埋土は灰色・オリーブ褐色・オリーブ黒色泥砂～シルトである。溝底の標高は北端部が標高8.3ｍ、南端部が標高8.1ｍである。

溝2036（図版16）　５区南半部で検出した南北溝である。北側は溝2037と試掘坑に攪乱されている。全長20ｍ以上×幅0.9ｍ以上×深さ0.3ｍを測る。方位は北に対し約48度東に振れる。埋土は灰色・灰オリーブ色・オリーブ褐色砂泥～シルトである。溝底の標高は北端部が標高8.3ｍ、南端部が標高8.2ｍである。遺物は楠葉型・和泉型瓦器や乙訓在地形の土師器皿などが出土した。

溝2037（図版16・36、図12）　５区南半部で検出した南北溝である。北側は溝2025と試掘坑に、東側は土坑2033・2034に攪乱されている。全長54ｍ以上×幅0.9ｍ以上×深さ0.3ｍを測る。方位は北に対し約53度東に振れる。埋土は灰色・灰オリーブ色砂泥～泥砂である。溝底の標高は北端部が標高8.2ｍ、南端部が標高8.1ｍである。遺物は乙訓在地形の土師器皿と京都５B段階の土師器皿、楠葉型の瓦器、東播系の須恵器などが出土した。

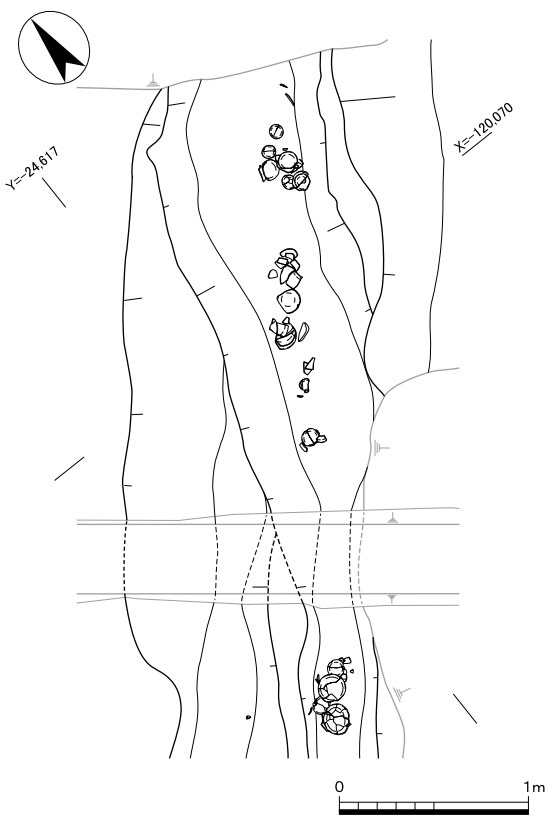


図12　溝2037土器出土状況図（１：40）

溝2038（図版16）　５区南半部で検出した南北溝である。北側・西側・南側は調査区外になる。全長94ｍ以上×幅1.4ｍ以上×深さ0.8ｍを測る。方位は北に対し約49度東に振れる。埋土は灰色砂泥～シルトである。溝底の標高は北端部が標高8.2ｍ、南端部が標高7.9ｍである。遺物は乙訓在地形の土師器皿や楠葉型の瓦器、白色土器などが出土した。

溝2042（図版16）　５区南半部で検出した南北溝である。北側は溝2025に攪乱されている。南側は調査区外になる。全長57ｍ以上×幅0.9ｍ×深さ0.3ｍを測る。方位は北に対し約55度東に振れる。埋土は灰色・オリーブ褐色・暗オリーブ灰色砂泥～シルトである。溝底の標高は北端部が標高8.3ｍ、南端部が標高8.0ｍである。

土坑2033（図版14～16）　５区南東部で検出した平面不定形の土坑である。東側は調査区外となる。長径2.6ｍ×短径2.1ｍ以上×深さ0.45ｍを測る。底面レベルは一定しない。埋土は炭を含む灰色砂泥～シルトである。遺物は乙訓在地形の土師器皿や楠葉型の瓦器などが出土した。

土坑2034（図版14・15）　５区南東部で検出した平面不定形の土坑である。東側は調査区外となり、南側は後世の掘り込みによって攪乱されている。長径4.0ｍ以上×短径1.5ｍ以上×深さ0.6ｍを測る。底面レベルは一定しない。埋土は炭を含む灰色砂泥である。遺物は乙訓在地形の土師器皿と京都６段階の土師器皿、楠葉型の瓦器などが出土した。

（４）鎌倉時代中葉から後葉の遺構（図版１・８）

建物618（図13） 掘立柱建物である。１次調査（２区）で検出した建物北東隅の柱穴を、４区南東部で確認した。建物規模は東西約9.9ｍ×南北約9.8ｍを測る。柱間は1.0～2.7ｍと不等間であり、補修か建て直しがあるものと考えられる。方位は北に対し約15度東に振れる。建物を構成する柱穴の掘形は長径0.5～0.6ｍ程度で平面楕円形や隅丸方形を呈するものが多いが、長径0.8ｍ程度の大きなものや、長径0.2～0.3ｍ程度の小さなものもある。深さは0.1～0.6ｍを測る。柱痕跡は径0.1～0.5ｍである。柱を据えるための地下式礎石が残る柱穴もある。

溝1711 ４区南部で検出した東西溝である。西側は調査区外、東側は後世の土坑によって攪乱されている。幅1.0ｍ×深さ0.3～0.5ｍを測る。方位は西に対し約11度北に振れる。溝底は西壁際が標高8.5ｍ、東壁際が標高8.6ｍであるが、底面には凹凸があり標高は一定しない。埋土はオリーブ黒色シルトである。遺物は軒平瓦や銭貨が出土した。

溝1773（図版22） ４区南部で検出した南北溝である。北側は調査区外で、南側は後世の土坑によって攪乱されている。幅0.9ｍ×深さ0.3～0.5ｍを測る。方位は西に対し約11度北に振れる。溝底は北壁際が標高8.6ｍ、南際が標高8.3ｍであるが、底面には凹凸があり標高は一定しない。埋土は明黄褐色砂泥ブロックを含む暗黄灰色シルトである。

溝2013（図版14・15・38） ５区北部で検出した東西溝である。西側と東側は調査区外となる。幅2.2ｍ×深さ1.0ｍを測る。方位は西に対し約11度北に振れる。溝底は西壁際が標高8.0ｍ、東壁際が標高8.1ｍを測る。埋土は炭を含む灰色シルトと灰色・灰オリーブ色泥砂・砂泥である。

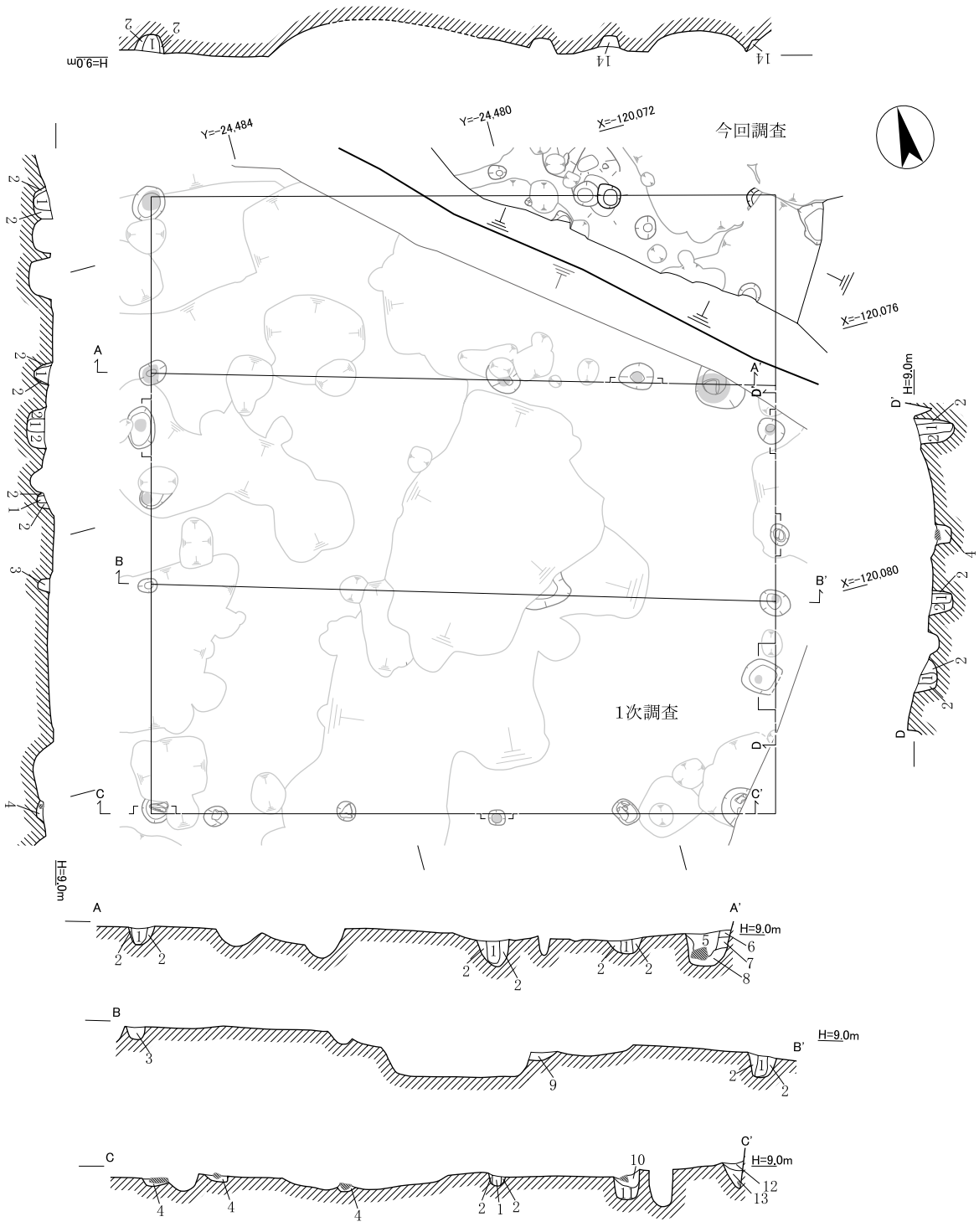
溝2023（新）（図版14・15・38） ５区北端部で検出した東西溝である。西側と東側は調査区外で、北側は後世の溝によって攪乱されている。幅1.1ｍ×深さ0.5ｍ以上を測る。方位は西に対し約36度北に振れる。溝底の標高は北壁際が標高7.9ｍ、東壁際が標高8.3ｍである。埋土は炭を含む灰色シルト・砂泥である。

土坑1630 ４区南西部で検出した平面不定形の土坑である。径1.3ｍ×深さ0.3ｍを測る。底面レベルは一定しない。埋土は黄灰色シルトである。遺物は鉄製品が出土した。

土坑2014（図版17・38） ５区北部で検出した、周溝状の掘り込みを伴う平面方形の土坑である。長径1.4ｍ×短径1.0ｍ×深さ0.2ｍを測る。埋土は炭を多量に含む黒色・オリーブ黒色シルトである。遺物は土師器皿が出土した。周溝状の掘り込みは一辺約２ｍで幅0.2ｍ×深さ0.15～0.25ｍを測る。埋土は礫を多量に含む暗灰黄色シルトである。

土坑2018（図版17） ５区北部で検出した平面楕円形の土坑である。長径5.6ｍ×短径1.5ｍ×深さ0.25ｍを測る。埋土は炭を多量に含む灰色泥砂～シルトである。遺物は乙訓在地形の土師器皿や楠葉型の瓦器、東播系の須恵器、輸入陶磁器のほか、坩堝や鞴羽口が出土した。遺構の平面形が溝2030と重なることから、溝廃絶後の凹みに炭や遺物が堆積したものと推察する。

土坑2039（図版14・15・38） ５区南部で検出した。東側は調査区外となる。南北9.2ｍ×東西３ｍ以上×深さ1.4ｍを測る。方位は西に対し約36度北に振れる。溝底の標高は北壁際が標高8.1



1 2.5Y4/2 暗灰黄色 シルト
2 2.5Y5/2 暗灰黄色 砂泥
3 2.5Y5/3 黄褐色 泥砂
4 5Y5/2 灰オリーブ色 泥砂
5 2.5Y5/1 黄灰色 シルト
6 10YR4/3 にぶい黄褐色 砂泥 炭少量含
7 10YR4/2 黄褐色 砂泥 炭少量含
8 2.5Y5/2 暗灰黄色 泥砂
9 5Y4/2 灰オリーブ色 砂泥 炭少量含
10 2.5Y5/3 黄褐色 砂泥 ＋ 2.5Y4/2 暗灰黄色 シルト含
11 5Y4/2 灰オリーブ色 泥砂
12 10YR4/2 灰黄褐色 泥砂 粗砂少量含
13 2.5Y4/3 オリーブ褐色 細砂 瓦片含
14 2.5Y4/1 黄灰色 泥砂

0 4m

図13 建物618実測図（1 ：100）

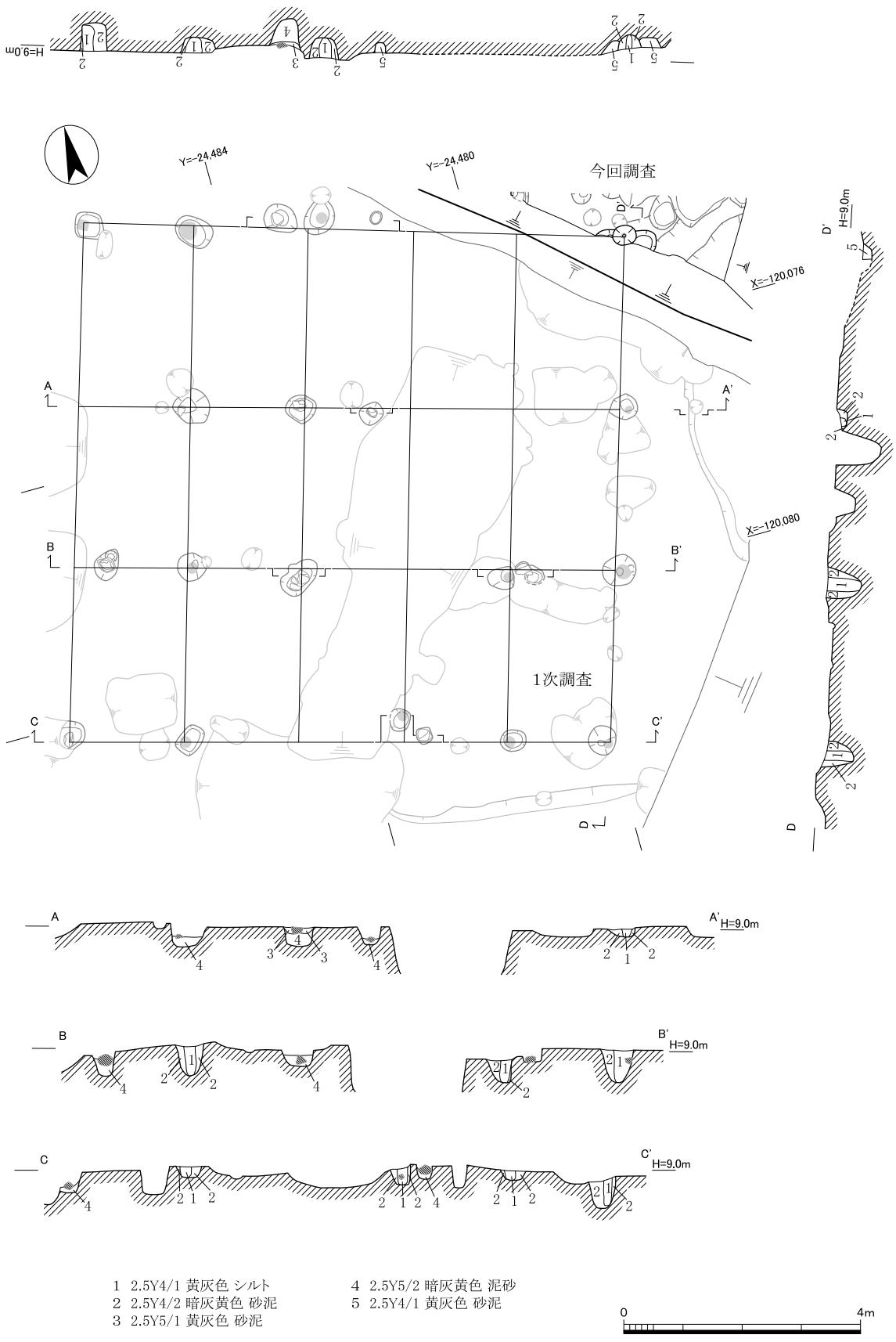


図14　建物363実測図（1 ：100）

m、東壁際が標高8.4ｍである。遺物は乙訓在地形の土師器皿や楠葉型の瓦器が出土した。

湿地状堆積1822・1823（図版12・13・22）　４区中央部で確認した。深さ0.1～0.4ｍを測る。底面レベルは一定しない。埋土は灰オリーブ色泥砂やオリーブ黒色・暗灰黄色シルトが堆積する。

（５）鎌倉時代末から室町時代前半の遺構（図版２）

建物363（図14）　掘立柱建物である。１次調査（２区）で検出した建物北東隅の柱穴を、４区南東部で確認した。建物規模は東西約9.9ｍ×南北約8.8ｍを測る。方位は北に対し約16度東に振れる。東西５間×南北３間の総柱建物となり、柱間は東西1.5～2.0ｍ×南北2.7～3.0ｍを測る。建物を構成する柱穴の掘形は長径0.4～0.5ｍ程度で平面楕円形や隅丸方形を呈するものが多いが、長径0.2ｍ程度の小さなものもある。深さは0.1～0.6ｍを測る。柱痕跡は径0.1～0.2ｍである。柱を据えるための地下式礎石が残る柱穴もある。

建物1577（図版18・39）　４区中央部で検出した掘立柱建物である。建物の南東側は調査区外となる。建物規模は東西6.9ｍ×南北約5.8ｍを測る。柱間は0.7～2.0ｍと不等間であり、補修か建て直しがあるものと考えられる。方位は北に対し約10度東に振れる。建物を構成する柱穴の掘形は長径0.2～0.3ｍ程度で平面円形を呈するものが多い。深さは0.1～0.4ｍを測る。柱痕跡は径0.1～0.2ｍである。柱を据えるための地下式礎石が残る柱穴もある。

建物1662（図版18・39）　４区中央部で検出した掘立柱建物である。建物規模は東西5.1ｍ×南北約6.2ｍを測る。柱間は0.7～2.3ｍと不等間であり、補修か建て直しがあるものと考えられる。方位は北に対し約９度東に振れる。建物を構成する柱穴の掘形は長径0.2～0.5ｍ程度で平面円形と方形のものがある。深さは0.1～0.4ｍを測る。柱痕跡は径0.1～0.2ｍである。

柱穴1723　４区中央部で検出した平面不定形の柱穴である。長径0.6ｍ×短径0.4ｍ×深さ0.1ｍを測る。埋土は炭を含む灰色シルトである。遺物は銭貨が出土した。

溝1637　４区南部で検出した東西溝である。西側は調査区外で、東側と南側は後世の溝によって攪乱されている。幅0.8ｍ以上×深さ0.2ｍ以上を測る。方位は西に対し約９度北に振れる。溝底は西端・東端ともに標高8.9ｍを測る。埋土は暗オリーブ色砂泥である。

土坑1627　４区南西部で検出した平面不定形の土坑である。長径1.1ｍ×短径0.7ｍ×深さ0.2ｍを測る。埋土は炭を含む黄灰色シルトである。遺物は乙訓在地形の土師器皿や楠葉型の瓦器が出土した。

（６）室町時代後半の遺構（図版３・４・９）

４区では当該期の遺構面を２面確認した。以下、Ⅵａ層上面で確認した遺構を新段階、Ⅵｂ層上面で確認した遺構を古段階として、各段階毎に遺構の概略を示す。なお、５区の遺構については層位や遺物から古段階・新段階の区別ができなかったので、一括して報告する。

〔４区：古段階〕（図版３）

建物1463（図版19・40）　４区中央部で検出した掘立柱建物である。建物の南東側は調査区外

となる。建物規模は東西4.5ｍ以上×南北約5.5ｍ以上を測る。柱間は2.8～3.1ｍである。方位は北に対し約１度東に振れる。建物を構成する柱穴の掘形は長径0.5～0.9ｍ程度で、深さは0.3～0.5ｍを測る。径0.3～0.4ｍの柱を据えるための地下式礎石が残る。北東隅の柱穴から銭貨が出土した。

柵1389（図版19）　４区中央部で検出した東西柵である。西側は試掘坑や後世の遺構によって攪乱されており、東側は調査区外となる。規模は東西10ｍ以上を測る。方位は西に対し約３度北に振れる。柵を構成する柱穴の掘形は長径0.3～0.5ｍ程度で平面円形や楕円形を呈するものが多い。深さは0.1～0.5ｍを測る。柱痕跡は径0.1～0.2ｍである。柱を据えるための地下式礎石が残る柱穴もある。

柵1516（図版19）　４区中央部で検出した東西柵である。西側は試掘坑や後世の遺構によって攪乱されており、東側は調査区外となる。規模は東西10.4ｍ以上を測る。方位は西に対し約４度北に振れる。柵を構成する柱穴の掘形は長径0.2～0.5ｍ程度で平面円形や楕円形を呈するものが多い。深さは0.1～0.3ｍを測る。柱痕跡は径0.1～0.2ｍである。

柵1426（図版20）　４区中央部で検出した南北柵である。北側は試掘坑によって攪乱されており、南側は調査区外となる。規模は南北12.8ｍ以上を測る。方位は北に対し約３度東に振れる。柵を構成する柱穴の掘形は長径0.2～0.5ｍ程度で平面円形や楕円形を呈するものが多い。深さは0.2～0.5ｍを測る。柱痕跡は径0.1～0.2ｍである。柱を据えるための地下式礎石が残る柱穴もある。

溝256（古）（図版21・41）　４区南端部で検出した東西溝である。西側は１次調査（２区）で検出しており、溝255と合流する。上部は後世の溝によって攪乱されており、東側は調査区外となる。幅3.8ｍ×深さ1.1ｍを測る。方位は西に対し約10度北に振れる。溝底の標高は北壁際・南端部ともに標高8.0ｍであるが、底面には小穴が連接したような凹凸があり、標高は一定しない。埋土は植物遺体を含むオリーブ黒色シルトと礫を含む灰オリーブ色・暗オリーブ色砂泥である。遺物は瓦器、下駄などの木製品が出土した。

溝1160（図版12・13・41・46）　４区北部で検出した東西溝である。上部と北肩部は後世の溝によって攪乱されており、西側と東側は調査区外となる。方位は西に対し約１度南に振れており、調査区西側では緩やかな弧を描きつつ南側に向かって方向を変えている。幅2.5ｍ以上×深さ1.5ｍを測る。底部南側には幅0.4～0.6ｍの小溝が２条掘削されている。底面は深さが0.1～0.3ｍ程度の小穴が連接した様態を呈し、標高は7.8ｍから8.3ｍと一定しない。埋土はオリーブ黒色シルトで、小溝内は礫を含むオリーブ黒色・黒色泥砂である。遺物は土師器皿や瓦器などが出土した。

溝1168（図版12・13・41・46）　４区北部で検出した東西溝である。上部は後世の溝によって攪乱されており、西側と東側は調査区外となる。ほぼ正方位である。幅1.5ｍ×深さ0.3ｍを測る。埋土は黄灰色シルトと礫を含む黒褐色泥砂である。

溝1479（図版12・13・20）　４区北部で検出したＬ字状に屈曲する溝である。方位は東西部分が西に対し約11度南、南北部分が北に対し約６度東に振れる。幅0.2～0.4ｍ×深さ0.2～0.3ｍを測る。埋土は暗褐色シルトブロックを含むにぶい黄褐色泥砂である。

溝1518（図版20）　４区北部で検出した東西溝である。方位は西に対し約６度北に振れる。全

長6.2ｍ×幅0.3ｍ×深さ0.1ｍを測る。埋土はにぶい黄褐色泥砂である。

溝1321（巻頭図版１、図版22）　４区中央部で検出した南北溝である。上部は後世の溝によって攪乱されており、北側と南側は調査区外となる。方位は北に対し約１度西に振れる。幅3.5～4.3ｍ×深さ1.4ｍを測る。底面の標高は北壁際が8.2ｍ、南壁際が8.0ｍであるが、部分的に深さ0.1～0.4ｍ程度の穴が連接した箇所があり、レベルは一定しない。埋土はオリーブ黒色シルトと灰色シルトが互層をなし、貝殻片を含む層（57層）も認められる。堆積状況から判断する限り、最低２回は掘り直しが行われた可能性が高い。遺物は土師器皿や瓦器、瀬戸美濃系の施釉陶器、軒平瓦、石鍋、椀などの木製品、銭貨、貝殻などの動物遺存体などが出土した。

溝1322（巻頭図版１、図版22・41）　４区中央部で検出した南北溝である。上部は後世の溝によって攪乱されており、北側と南側は調査区外となる。方位は北に対し約４度東に振れる。幅3.5～4.0ｍ×深さ1.0ｍを測る。底面の標高は北壁際が8.3ｍ、南壁際が8.1ｍであるが、部分的に深さ0.1～0.3ｍ程度の穴が連接した箇所があり、レベルは一定しない。埋土はオリーブ黒色シルトと灰色シルトが互層をなす。全長約５ｍ×幅約２ｍ、厚さ0.2～0.3ｍにわたってオオタニシの貝殻が厚く堆積する箇所が認められる（図版22－64層）。堆積状況から判断する限り、最低２回は掘り直しが行われた可能性が高く、それに合わせて、西肩部の路面・路盤を砂礫で修復している。遺物は土師器皿や瀬戸美濃系の施釉陶器、魚形木製品や銭貨、貝殻などの動物遺存体が出土した。

暗渠1375（図版20）　４区中央部で検出した。西端部は溝1321に、東端部は溝1322と接続する。全長2.1ｍ×幅0.2～0.3ｍ×深さ0.2ｍを測る。埋土から径0.1ｍの有機質で中空の管を導管として敷設していたことがわかるが、本体は腐食しており残存していなかった。溝1321と溝1322の間に盛られた砂礫層（図版22－71層）下層で検出した。

暗渠1376（図版20・41）　４区中央部で検出した。西端部は溝1321に、東端部は溝1322と接続する。全長2.1ｍ×幅0.25ｍ×深さ0.25ｍを測る。導管と考えられる径0.1ｍの竹が残存していた。溝1321と溝1322の間に盛られた砂礫層（図版22－71層）下層で検出した。

土坑1490　５区中央部で検出した平面方形の土坑である。長径1.1ｍ×短径0.85ｍ×深さ0.3ｍを測る。埋土は炭を含む灰色・灰白色泥砂である。遺物は銭貨が出土した。

土坑1502　５区中央部で検出した平面楕円形の土坑である。長径0.9ｍ×短径0.3ｍ×深さ0.1ｍを測る。埋土は炭を含む暗灰黄色砂泥である。遺物は銭貨が出土した。

〔４区：新段階〕（図版４）

建物1527（図版23）　４区中央部で検出した掘立柱建物である。建物北西部は試掘坑によって部分的に削平されている。建物規模は東西5.8ｍ×南北4.4ｍを測る。柱間は1.1～2.4ｍである。方位はほぼ正方位である。建物を構成する柱穴の掘形は長径0.3～0.5ｍ程度で深さは0.2～0.9ｍを測る。柱痕跡は径0.1～0.2ｍである。柱を据えるための地下式礎石が残る柱穴もある。

建物1554（図版23）　４区中央部で検出した掘立柱建物である。建物北西部は試掘坑によって部分的に削平されている。建物規模は東西4.6ｍ×南北4.1ｍを測る。柱間は0.6～2.0ｍと不等間であり、補修か建て直しがあるものと考えられる。方位は北に対し約３度から５度東に振れる。建物

を構成する柱穴の掘形は長径0.2～0.5ｍ程度で平面円形や楕円形を呈するものが多い。深さは0.1～1.0ｍを測る。柱痕跡は径0.1～0.2ｍである。柱を据えるための地下式礎石が残る柱穴もある。

柵1273（図版24）　４区中央部で検出した東西柵である。規模は東西5.0ｍを測る。方位はほぼ正方位である。柵を構成する柱穴の掘形は長径0.3～0.5ｍ程度で平面円形や楕円形を呈するものが多い。深さは0.1～0.3ｍを測る。柱痕跡は径0.1～0.2ｍである。柱を据えるための地下式礎石が残る柱穴もある。

柵1409（図版24）　４区中央部で検出した東西柵である。西側は試掘坑や後世の遺構によって攪乱されており、東側は調査区外となる。規模は東西10.4ｍ以上を測る。方位は西に対し約１度南に振れる。柵を構成する柱穴の掘形は長径0.3～0.5ｍ程度で平面円形や楕円形を呈するものが多い。深さは0.2～0.5ｍを測る。柱痕跡は径0.1～0.2ｍである。柱を据えるための地下式礎石が残る柱穴もある。

柱穴1080　４区中央部で検出した平面円形の柱穴である。径0.4ｍ×深さ0.3ｍを測る。埋土は炭を含む暗灰黄色砂泥である。遺物は土師器皿が出土した。

柱穴1274　４区中央部で検出した平面楕円形の柱穴である。南側を後世の柱穴によって攪乱されている。長径0.5ｍ×短径0.4ｍ×深さ0.3ｍを測る。埋土は炭を含む暗灰黄色砂泥である。遺物は地下式礎石に転用された石臼が出土した。

柱穴1382　４区南端部で検出した平面円形の柱穴である。径0.4ｍ×深さ0.2ｍを測る。埋土は炭を含むにぶい黄褐色砂泥である。遺物は小柄が出土した。

土器溜1383　４区中央部で検出した。南北1.2ｍ×東西0.9ｍの範囲で多数の土器が出土した。埋土は黄灰色砂泥である。遺物は土師器皿と瀬戸美濃系の施釉陶器が出土した。Ⅵｂ層掘り下げ時の遺物と様相が類似することから、整地土に含まれた土器群である可能性がある。

溝256（新）（図版21・41）　４区南端部で検出した東西溝である。溝256（古）完掘後の断面観察によって確認した。西側は１次調査（２区）で検出しており、溝255と合流する。上部は後世の溝によって攪乱されており、東側は調査区外となる。幅4.0ｍ×深さ1.2ｍを測る。方位は西に対し約９度北に振れる。溝底の標高は西壁際・東端部ともに標高8.3ｍである。埋土はオリーブ黒色シルトや褐色砂泥で炭や焼土、植物遺体を含む。遺物は土師器や瓦器、焼締陶器が出土した。

溝1003（図版12・13・41・46）　４区北部で検出した東西溝である。上部と北肩部は後世の溝によって攪乱されており、西側と東側は調査区外となる。方位は西に対し約１度南に振れる。幅4.3ｍ以上×深さ1.9ｍ以上を測る。埋土は植物遺体を含む黒褐色シルトの下層に礫を含むオリーブ黒色シルトや黒褐色泥砂が堆積する。遺物は土師器や瓦器、輸入陶磁器、石鍋などの石製品、下駄などの木製品が出土した。

溝1303（図版22）　４区中央部で検出した南北溝である。溝1321完掘後の断面観察によって確認・復元した。上部は後世の溝によって攪乱されており、北側は調査区外となる。南端側は溝256（新）の手前で東へ向きを変える。方位は北に対し約３度西に振れる。幅約４ｍ×深さ約１ｍを測る。底面の標高は北壁際が8.4ｍ、南端側が8.5ｍである。埋土は暗オリーブ色砂泥・泥砂である。

東肩部には礫による整地層（49・50層）が認められることから、溝1323との間に路面・路盤が整備されていたと考える。遺物は木球が出土した。

溝1323（図版22）　４区中央部で検出した南北溝である。溝1322完掘後の断面観察によって確認・復元した。北側と南側は調査区外となる。方位は北に対し約４度東に振れる。幅約5.4ｍ×深さ約1.1ｍを測る。底面の標高は北壁際が8.4ｍ、南端側が8.5ｍである。埋土は炭や植物遺体を含むオリーブ黒色・黒色シルトであり、一部層位の変形が認められる（40～42層）。堆積状況から判断する限り、最低２回は掘り直しが行われた可能性が高い。遺物は土師器や瓦器、小柄が出土した。

溝1326（図版22）　４区中央部西側で検出した南北溝である。断面観察によって確認・復元した。北側は調査区外となり、南側は溝1303と交わる。方位は北に対し約30度西に振れる。幅約３ｍ×深さ約１ｍを測る。底面の標高は北壁際が8.5ｍ、南端側が8.6ｍである。埋土は炭を含む褐色砂泥シルトとオリーブ褐色泥砂である。

〔５区〕（図版９）

溝2009（図版14・15・43）　５区北端部で検出した東西溝である。上部と北肩部は後世の溝によって攪乱されており、西側・東側は調査区外となる。堆積状況から（古）・（新）に分けることができる。（古）は幅1.3ｍ以上×深さ1.1ｍを測る。方位は西に対し約35度北に振れる。溝底は西壁際が標高8.1ｍ、東壁際が標高8.2ｍを測る。埋土は礫を含む暗緑灰色・緑灰色砂泥である。（新）は幅1.7ｍ以上×深さ1.0ｍを測る。方位は西に対し約34度北に振れる。溝底は西壁際が標高7.9ｍ、東壁際が標高8.0ｍを測る。埋土は緑灰色シルトと礫を含むオリーブ黒色泥砂である。

溝2025（古）（図版14・15・43）　５区中央で検出した東西溝である。西側と東側は調査区外となる。幅2.9ｍ×深さ1.2ｍを測る。方位は西に対し約44度北に振れる。溝底は西壁際が標高7.75ｍ、東壁際が標高7.8ｍを測る。埋土は炭と砂を含む灰色シルトと灰オリーブ色砂の互層である。

土坑群2028・2029（図版14・15・43）　５区北部で検出した。東側と南側は調査区外となる。径0.4ｍから2.9ｍの土坑が集積している。北側の南北5.4ｍ×東西2.9ｍ以上×深さ0.8～1.6ｍの箇所を土坑群2029、南側の南北8.1ｍ×東西1.5ｍ以上×深さ1.0～1.5ｍの箇所を土坑群2028としたが、一連の遺構と考えられる。埋土はいずれの土坑も礫を多量に含む砂泥とシルトが堆積する。時期を明らかにし得る遺物は出土していない。

（７）安土桃山時代の遺構（図版５・10）

建物1027（図版24・45）　４区南端部で検出した壺地業を施した礎石建物である。建物南西部は１次・２次調査壁中にあたり、確認できていない。建物規模は東西2.8ｍ×南北4.0ｍを測る。柱間は東西2.8ｍ×南北1.2～1.4ｍである。方位は北に対し約７度東に振れる。壺地業の掘形は長径0.4～0.7ｍ程度で平面隅丸方形を呈する。深さは0.3～0.4ｍを測る。内部に0.1ｍ以下の円礫を充填している。礎石自体は遺存していない。

建物1093（図版25・44）　４区中央部で検出した掘立柱建物である。東側は調査区外となる。建

物規模は東西8.7ｍ以上×南北6.8ｍを測る。柱間は1.0～2.7ｍと不等間である。方位は北に対し約５度東に振れる。建物を構成する柱穴の掘形は長径0.2～0.6ｍが主体をなすが、一部0.1ｍ程度のものも認められる。平面円形もしくは隅丸方形を呈するものが多い。深さは0.1～0.6ｍを測る。柱痕跡は径0.1～0.2ｍである。

柵1056（図版25・44）　４区中央部で検出した東西柵である。東側は調査区外となる。規模は東西5.0ｍ以上を測る。方位は北に対し約８度東に振れる。柱間は1.2～1.6ｍと不等間である。柵を構成する柱穴の掘形は長径0.2～0.6ｍ程度で平面楕円形や隅丸方形を呈するものが多い。深さは0.1～0.2ｍを測る。柱痕跡は径0.2～0.3ｍである。柱を据えるための地下式礎石が残る柱穴もある。

柵1127（図版25・44）　４区中央部で検出した東西柵である。東側は調査区外となる。規模は東西4.5ｍを測る。方位は北に対し約４度東に振れる。柱間は0.7～1.5ｍと不等間である。柵を構成する柱穴の掘形は長径0.4～0.5ｍ程度で平面楕円形や隅丸方形を呈するものが多い。深さは0.2～0.5ｍを測る。柱痕跡は径0.1～0.2ｍである。柱を据えるための地下式礎石が残る柱穴もある。

柵1128（図版25）　４区中央部で検出した東西柵である。西側は試掘坑によって攪乱されており、東側は調査区外となる。規模は東西9.5ｍ以上を測る。方位は北に対し約２度東に振れる。柱間は0.8～3.3ｍと不等間である。柵を構成する柱穴の掘形は長径0.3～0.5ｍ程度で平面楕円形や隅丸方形を呈するものが多い。深さは0.3～0.6ｍを測る。柱痕跡は径0.1～0.2ｍである。柱を据えるための地下式礎石が残る柱穴もある。

柵1130（図版25）　４区中央部で検出した東西柵である。西側は試掘坑によって攪乱されており、東側は調査区外となる。規模は東西9.5ｍ以上を測る。方位は北に対し約５度東に振れる。柱間は0.5～2.7ｍと不等間である。柵を構成する柱穴の掘形は長径0.3～0.6ｍ程度で平面楕円形や隅丸方形を呈するものが多い。深さは0.3～0.7ｍを測る。柱痕跡は径0.2ｍである。

溝246（図版21）　４区南端部で検出した東西溝である。溝256完掘後の断面観察によって確認した。西側は１次調査（２区）で検出しており、溝230と合流する。上部は後世の溝によって攪乱されており、東側は溝1320と合流する。幅3.2ｍ×深さ1.0ｍを測る。方位は西に対し約５度北に振れる。溝底の標高は西壁際・東端部ともに標高8.2ｍである。埋土は炭や植物遺体を含む灰オリーブ色・オリーブ黒色シルトである。貝殻が多数堆積する箇所も認められた（図版21－13層）。遺物は土師器や輸入陶磁器のほか、貝殻などの動物遺存体が出土した。

溝1002（巻頭図版２、図版12・13・46）　４区北部で検出した東西溝である。上部と北肩部は後世の溝によって攪乱されており、西側と東側は調査区外となる。方位は西に対し約２度南に振れる。幅4.9ｍ以上×深さ1.6ｍを測る。埋土は灰色・灰オリーブ色シルトの下層に礫と植物遺体を含む黒褐色シルトが堆積する。南肩部は礫を含む黄灰色・黄褐色砂泥が堆積する。遺物は土師器や瓦器、焼締陶器、瀬戸美濃系の施釉陶器、輸入陶磁器が出土した。また、礫と植物遺体を含む黒褐色シルト層（図版12・13－48層）からは、柿経の下から卒塔婆が出土した（図15）。また、柿経が出土した場所から西５ｍ地点で位牌が出土した。他にも木製杖や銭貨が出土した。

溝1320（図版22）　４区中央部で検出した南北溝である。溝1321完掘後の断面観察によって確

認した。上部は後世の溝によって攪乱されており、北側と南側は調査区外となる。溝の北側が西に向かって緩く曲がり、方位は北に対し約１度西に振れる。幅5.1ｍ×深さ1.0ｍを測る。底面の標高は北壁際が8.6ｍ、南壁際が8.5ｍである。埋土は植物遺体や貝殻など動物遺体を含むオリーブ黒色シルトである。堆積状況から判断する限り、最低１回は掘り直しが行われたと考えられる。東肩部には礫による整地層（図版22－29層）が認められる。遺物は土師器や瓦器、輸入陶磁器のほか、軒平瓦、銅製菊花形紅皿が出土した。

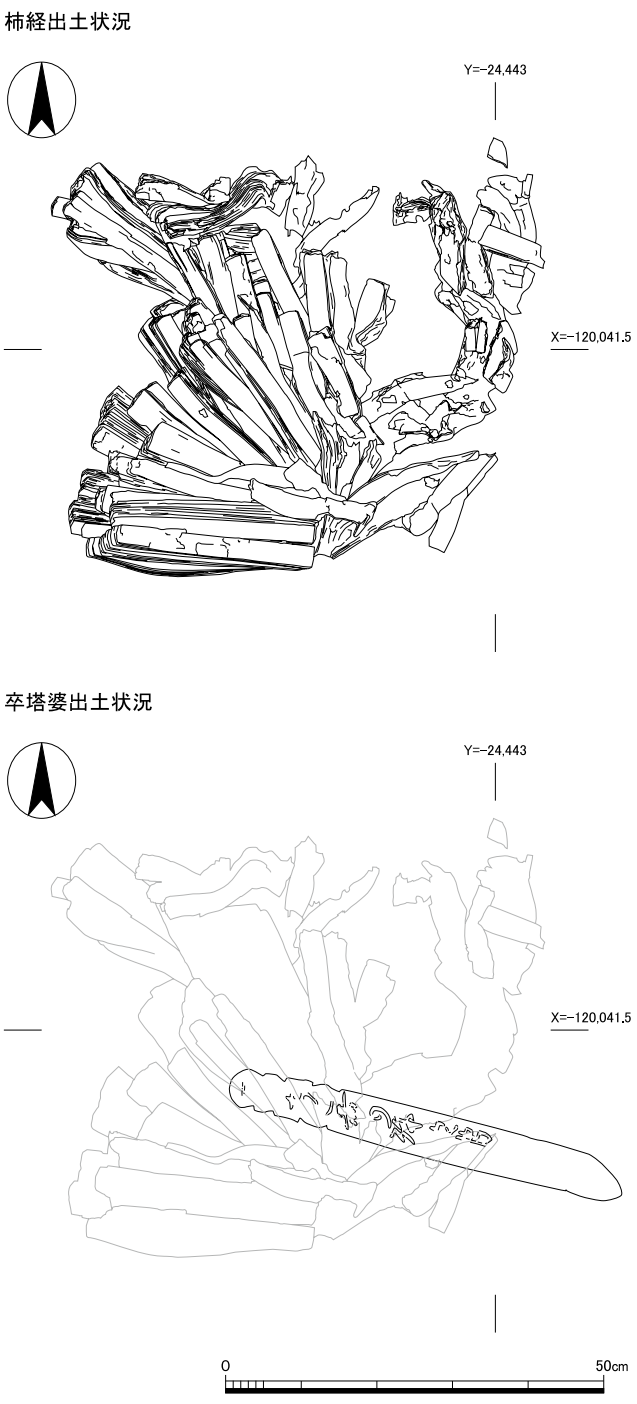


図15　溝1002柿経・卒塔婆出土状況図（１：10）

溝2003（図版14・15）　５区北端部で検出した東西溝である。北側と西側、東側は調査区外となる。溝2009完掘後の断面観察によって確認・復元した。幅1.1ｍ以上×深さ0.8ｍを測る。方位は西に対し約25度北に振れる。溝底は西壁際・北壁際共に標高8.3ｍを測る。埋土はオリーブ黒色シルトである。

溝2025（新）（図版14・15・43）　５区中央で検出した東西溝である。西側と東側は調査区外となる。完掘後の断面観察によって確認・復元した。幅3.4～4.0ｍ×深さ0.7ｍを測る。方位は西に対し約44度北に振れる。溝底は西壁際・東壁際共に標高8.2ｍを測る。埋土は炭と植物遺体を含む灰色シルトである。

湿地状堆積2043（図版14・15）　５区北部で確認した。東側は調査区外となる。南北14ｍ×東西５ｍ以上の範囲にオリーブ灰色・灰色シルトが最大0.7ｍの厚さで堆積している。土坑群2028・2029埋没後の凹みに堆積したものと推察する。明確に所属時期を示す遺物は出土していないが、五輪塔の空風輪が出土した。

（8）江戸時代の遺構（図版６・11）

溝1001（図版12・13・46）　４区北部で検出した東西溝である。西側と東側は調査区外となる。南から北へと溝の位置が遷移している。方位は西に対し約１～５度北に振れる。幅約12ｍ×深さ1.3～1.5ｍを測る。溝底の標高は西壁際・東壁際ともに標高8.5ｍである。埋土は上層に砂礫と砂の互層、下層にシルトが堆積する。遺物は染付や焼締陶器などが出土した。

溝1125（図版12・13・46）　４区北部で検出した東西溝である。上部が溝1001に攪乱されており、西側と東側は調査区外となる。堆積状況から最低４回は溝の位置が遷移したと考えられる。方位は西に対し約１～４度北に振れる。幅約13ｍ×深さ1.8ｍを測る。埋土は灰色シルトやオリーブ黒色シルト、灰黄褐色シルトや黒褐色シルトなどの互層である。遺物は染付や焼締陶器などが出土した。

溝1009（図版22・47）　４区中央部で検出した南北溝である。南側は江戸時代の土坑とつながり、北側は調査区外となる。方位は北に対し約５度東に振れる。幅1.4ｍ×深さ0.3ｍを測る。底面の標高は北壁際が9.9ｍ、南端部が9.7ｍである。埋土は礫や炭を含む褐色泥砂や灰黄褐色砂泥である。遺物は染付などが出土した。

溝1012（図版22・47）　４区中央部で検出した南北溝である。北側と南側は調査区外となる。方位は北に対し約４度東に振れる。幅0.6ｍ×深さ0.3ｍを測る。底面の標高は北壁際・南壁際ともに9.9ｍである。埋土は暗灰黄色砂泥である。

溝1013（図版22・47）　４区中央部で検出した南北溝である。北側は調査区半ばで収束しており、南側は調査区外となる。方位は北に対し約５度東に振れる。幅0.9ｍ×深さ0.3ｍを測る。底面の標高は北端部・南壁際ともに9.8ｍである。埋土は灰色砂泥・シルトである。

溝1014（図版22・47）　４区中央部で検出した南北溝である。北側と南側は調査区外となる。方位は北に対し約２度西に振れる。幅0.8ｍ×深さ0.3ｍを測る。底面の標高は北端部・南壁際ともに9.7ｍである。埋土は黄灰色砂泥・シルトである。

溝1035（図版21）　４区南端部で検出した東西溝である。幅1.1ｍ×深さ0.5ｍを測る。方位は西に対し約５度北に振れる。溝底の標高は南壁際・東端部ともに標高9.5ｍである。埋土は明褐色・橙色砂泥やにぶい褐色泥砂である。１次調査（１区）で検出した溝４の延長線上にあたる。

溝1158（図版21）　４区南端部で検出した東西溝である。溝256完掘後の断面観察によって確認した。北肩部は後世の溝によって攪乱されている。幅2.3ｍ以上×深さ0.9ｍを測る。方位は西に対し約６度北に振れる。溝底の標高は南壁際・東端部ともに標高9.1ｍである。埋土は明灰黄色・灰オリーブ色砂泥・シルトである。遺物は瓦器や施釉陶器が出土した。

溝2044（図版14・15）　５区北端部で検出した東西溝である。断面観察によって確認・復元した。北側と西側、東側は調査区外となる。南肩部は後世の溝によって攪乱されている。幅2.3ｍ以上×深さ0.7ｍを測る。方位は西に対し約39度北に振れる。溝底は西壁際・東壁際ともに標高9.0ｍを測る。埋土は灰色シルトである。

溝2045（図版14・15）　５区北端部で検出した東西溝である。断面観察によって確認・復元した。西側と東側は調査区外となる。北肩部は後世の溝によって攪乱されている。幅1.4ｍ以上×深さ0.6ｍ以上を測る。方位は西に対し約39度北に振れる。溝底は西壁際・東壁際ともに標高9.1ｍを測る。埋土は炭を含む灰色シルトである。

溝2046（図版14・15）　５区中央で検出した東西溝である。断面観察によって確認・復元した。西側と東側は調査区外となる。南肩部は後世の溝によって攪乱されている。幅1.5ｍ以上×深さ0.8ｍを測る。方位は西に対し約38度北に振れる。溝底は西壁際・東壁際共に標高8.9ｍを測る。埋土は暗褐色泥砂ブロックを含む灰色砂泥である。

円形土坑群（図版47）　土坑1008・1017・1121・2006など、調査区の各所で円形土坑を検出した。４区では溝1014の東側に沿うように並んで検出している。規模は直径1.5～2.5ｍ×深さ0.6～1.3ｍを測る。一部では円柱形の壁面に沿って薄く木質が残存していた。

土坑1004（図版47）　４区中央部で検出した平面長方形の土坑である。長径1.5ｍ×短径1.1ｍ×深さ1.3ｍを測る。埋土は炭を含む灰黄褐色泥砂である。

土坑1010　４区中央部で検出した平面長方形の土坑である。長径2.6ｍ×短径1.2ｍ×深さ1.1ｍを測る。埋土は炭を含む灰黄褐色泥砂である。内部にはオオタニシの貝殻が厚さ約0.7ｍ堆積していた（付章３－図37）。遺物は染付や漆器椀のほか、貝殻など動物遺体が出土した。

井戸1124　４区北部で検出した井戸である。掘形は平面不正楕円形を呈し、井戸枠や水溜などは確認していない。長径2.1ｍ×短径1.9ｍ×深さ1.5ｍを測る。底面は標高7.3ｍを測る。埋土は灰黄褐色泥砂である。遺物は軒平瓦が出土した。

湿地状堆積1159（図版12・13）　４区北西端部で確認した。南北約３ｍ×東西約10ｍ以上の範囲に、褐色・灰色シルトと、その下層にオリーブ黒色シルトが堆積している。遺物は出土していないが、層位から溝1001と同じかそれよりも新しい時期と考えられる。

湿地状堆積1190（図版12・13）　４区北端部で確認した。南北約６ｍ×東西約10ｍ以上の範囲に、明黄褐色・黄褐色砂泥が堆積している。遺物は出土していない。

４．遺　　物

（１）遺物の概要

出土遺物は整理コンテナに138箱出土した。出土遺物には土器類、瓦類、土製品、石製品、木製品、金属製品、動植物遺存体などがある（表２）。出土遺物のうち土器類が９割を占め、その他の種類の遺物はわずかである。

奈良時代以前　土師器・須恵器がある。基盤層であるⅨ層（砂礫層）から出土した。

平安時代後期　土師器・瓦器・須恵器・白色土器、瓦類などがある。土師器は乙訓在地形の皿と京域主流形の皿がある。瓦器は楠葉型の椀が主体を占めるが、和泉型の椀も少数ある。瓦類は播磨産の軒平瓦がある。

鎌倉時代前葉　土師器・瓦器・輸入陶磁器、瓦類などがある。土師器は乙訓在地形の皿と京域主流形の皿がある。瓦器は楠葉型の椀がある。

鎌倉時代中葉から後葉　土師器・瓦器・須恵器・輸入陶磁器、瓦類、土製品、金属製品、銭貨な

表２　遺物概要表

時　代	内　　容	コンテナ箱数	Ａランク点数	Ｂランク箱数	Ｃランク箱数
奈良時代以前	土師器、須恵器		須恵器１点		
平安時代後期	土師器、瓦器、須恵器、白色土器、瓦類		土師器45点、瓦器17点、須恵器１点、白色土器１点、瓦類１点		
鎌倉時代前葉	土師器、瓦器、輸入陶磁器、瓦類		土師器34点、瓦器22点、輸入陶磁器１点		
鎌倉時代中葉～後葉	土師器、瓦器、須恵器、輸入陶磁器、瓦類、土製品、金属製品、銭貨		土師器25点、瓦器14点、須恵器１点、輸入陶磁器２点、瓦類２点、土製品３点、金属製品１点、銭貨５点		
鎌倉時代末～室町時代前半	土師器、瓦器、瓦類、銭貨		土師器29点、瓦器２点、瓦類１点、銭貨１点		
室町時代後半	土師器、瓦器、焼締陶器、施釉陶器、輸入陶磁器、石製品、木製品、金属製品、銭貨、動物遺存体		土師器68点、瓦器18点、焼締陶器１点、施釉陶器４点、輸入陶磁器３点、石製品５点、木製品８点、金属製品４点、銭貨７点		
安土桃山時代	土師器、瓦器、焼締陶器、施釉陶器、輸入陶磁器、瓦類、石製品、木製品、金属製品、銭貨、動物遺存体		土師器14点、瓦器３点、焼締陶器１点、施釉陶器３点、輸入陶磁器３点、瓦類１点、石製品３点、木製品４点、金属製品１点、銭貨４点		
江戸時代	瓦器、施釉陶器、瓦類、石製品、木製品、金属製品、銭貨、動物遺存体		瓦器２点、施釉陶器２点、瓦類１点、石製品１点、木製品１点、金属製品２点、銭貨１点		
合　計		188箱	374点（38箱）	12箱	138箱

※　コンテナ箱数の合計は、整理後、遺物を抽出したため、出土時より50箱多くなっている。

どがある。土師器は乙訓在地形の皿がある。瓦器は楠葉型の椀がある。輸入陶磁器は青磁皿が出土しており、墨書したものもある。瓦類は軒平瓦がある。土製品は、土坑2018から坩堝や鞴羽口などの鋳造関連遺物が出土している。

鎌倉時代末から室町時代前半　土師器・瓦器、瓦類、銭貨などがある。土師器は乙訓在地形の皿がある。瓦器は楠葉型の椀がある。瓦類は軒平瓦がある。

室町時代後半　土師器・瓦器・焼締陶器・施釉陶器・輸入陶磁器、石製品、木製品、金属製品、銭貨、動植物遺存体などがある。土師器は乙訓在地形の皿と京域主流形の皿がある。施釉陶器は瀬戸美濃系の椀や皿がある。古瀬戸後期のものである。土器の様相から古段階・新段階に区分できる。石製品は石硯や石鍋、砥石、石臼がある。木製品は漆器椀や下駄、魚形、木球などがある。金属製品は鉄製刀子や小柄などがある。動物遺存体はウシ・ウマ・ハクチョウ属の骨やイシガメ、オオタニシなど淡水産の貝殻がある。

安土桃山時代　土師器・瓦器・焼締陶器・施釉陶器・輸入陶磁器、瓦類、石製品、木製品、金属製品、銭貨、動植物遺存体などがある。土師器は乙訓在地形の皿と京域主流形の皿がある。施釉陶器は瀬戸美濃系の椀や皿がある。大窯期のものである。瓦類は軒平瓦がある。石製品は別石五輪塔の空風輪や砥石が出土した。木製品は、溝1002から柿経や卒塔婆、位牌などの祭祀具とともに、杖が出土している。金属製品は菊花形紅皿がある。動物遺存体はヒトやウシ・ウマの骨のほかに、淡水産二枚貝の貝殻がある。

江戸時代　瓦器・施釉陶器、瓦類、石製品、木製品、金属製品、銭貨、動物遺存体などがある。瓦類は軒平瓦がある。石製品は石硯がある。木製品は漆器椀がある。金属製品は銅椀や釘隠がある。動物遺存体はオオタニシなど淡水産の貝殻がある。

以下では種類ごとに出土遺物の概要を報告する[11)]。

（2）土器類（図版26～32、図16、付表１）

奈良時代以前の土器

Ⅸ層（砂礫層）出土土器（図16　１）　土師器・須恵器がある。土師器は摩滅しているものが多い。１は須恵器の杯Ｂである。焼成は良好で、底部外面に箆切り痕を残す。奈良時代に属する。４区Ⅸ層（基盤層）の断ち割り調査を実施した際に、砂礫層（図11－４層）から出土した。

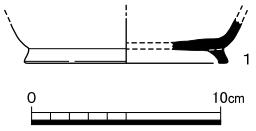


図16　Ⅸ層（砂礫層）出土土器実測図（１：４）

平安時代後期の土器

乙訓在地形の土師器皿は、口径７㎝台の極小皿と口径８㎝後半～９㎝前半の小皿、口径10㎝前半台の中皿、口径13㎝後半～14㎝前半の大皿で構成される。京都５Ｂ段階の皿Ｎを伴う。楠葉型瓦器椀の口径は14㎝後半～15㎝台が主体であるが、口径13㎝後半～14㎝前半のものも認められる。内外面にミガキを施すものが主体をなし、ミガキの幅が１㎜以下の細く鋭いものも確認できる。見込みの暗文は連結輪状と連続長楕円状が主体をなす。すべての個体が口縁部内端に沈線を施

す。高台は高く断面三角形もしくは接地部がつぶれて台形状を呈する。底径（高台径）は５㎝後半台である。

溝2037出土土器（図版26・48　２～46）　土師器・瓦器・須恵器がある。表面が摩滅した個体が多く、一部調整が不明瞭なものがある。土師器は乙訓在地形の皿と皿N、系統不明の皿、台付皿がある。乙訓在地形の皿は、口径7.3～7.9㎝の極小皿（２～７）と、口径8.6～9.3㎝の小皿（８～15）、口径9.8～10.8㎝の中皿（16～24）、口径13.4～14.2㎝の大皿（25～30）がある。皿Nは口径8.7～9.2㎝の小皿（31・32）と口径13.8～14.3㎝の大皿（33・34）がある。いずれも色調・胎土の特徴から搬入品の可能性がある。京都５B段階。35は系統不明の皿である。ロクロ成形で底面に回転糸切り痕を残す。36は台付皿の底部である。瓦器は楠葉型の椀と皿がある。椀（37～43）は口径13.6～15.2㎝×底径5.2～6.2㎝の大椀がある。皿（44・45）は口径9.4～9.8㎝のものがある。見込みの暗文はジグザグ状を呈する。須恵器は東播系の片口鉢（46）がある。

溝2036出土土器（図版26　47～54）　土師器・瓦器がある。土師器は乙訓在地形の皿（47～49）と皿Ac（50）がある。口径がわかる資料はない。楠葉型の椀と和泉型の椀がある。楠葉型の椀は小椀（51）と大椀（52・53）がある。底径は51・52が3.6～3.8㎝、53が5.5㎝である。52は調整や器形が新しい様相を示すことから混入品の可能性がある。和泉型の椀（54）は口径15.0㎝を測る。表面の摩耗により不明瞭であるが、内面に楠葉型の椀よりも幅の広いミガキが施されている。

溝2038出土土器（図版27・48　55～65）　土師器・白色土器・瓦器がある。表面が摩滅した個体が多く、一部調整が不明瞭なものがある。土師器は乙訓在地形の皿と台付皿がある。乙訓在地形の皿は、口径9.0㎝の小皿（55）、口径10.4～11.2㎝の中皿（56・57）、口径13.4㎝の大皿（58）がある。59は台付皿である。口径8.6㎝である。白色土器は皿（60）がある。瓦器は楠葉型の椀・皿・鍋（63）・羽釜（64・65）がある。椀（62）は口径14.6㎝×底径6.1㎝の大椀がある。皿（61）は口径9.6㎝を測る。見込みの暗文はジグザグ状を呈する。

鎌倉時代前葉の土器

乙訓在地形の土師器皿は、口径８㎝後半～９㎝前半の小皿、口径11㎝後半～13㎝前半の中皿、口径13㎝後半～14㎝前半の大皿で構成される。京都６段階の皿Nを伴う。楠葉型瓦器椀の口径は13㎝後半～14㎝前半が主体であるが、12㎝台と14㎝後半～15㎝のものも認められる。外面のミガキを欠き、内面のみミガキを施す。見込みの暗文は連続長楕円状が多く、連結輪状のほかに同心円状・ジグザグ状を確認できる。口径が口部内端に沈線を施すものが主体を占めるが、口径が小さいものに口縁端部を丸くおさめるものがある。高台は断面三角形を呈するが、口径が小さいものは若干高さが低い傾向がある。底径（高台径）は４～５㎝前半台である。

溝2030出土土器（図版27・49　66～84）　土師器・瓦器・輸入陶磁器がある。表面が摩滅した個体が多く、一部調整が不明瞭なものがある。土師器は乙訓在地形の皿がある。口径8.2～9.0㎝の小皿（66～69）、口径11.6～13.0㎝の中皿（70～73）、口径13.8～14.6㎝の大皿（74・75）がある。瓦器は楠葉型の椀がある。椀は口径13.6～15.2㎝×底径4.7～6.2㎝の大椀（76～83）がある。輸入陶磁器は白磁の合子蓋（84）がある。

土坑2033出土土器（図版27・28　85～109）　土師器・瓦器がある。また、図化していないが輸入陶磁器も出土している。表面が摩滅した個体が多く、一部調整が不明瞭なものがある。土師器は乙訓在地形の皿がある。口径8.3～9.2cmの小皿（85～94）、口径12.6～13.2cmの中皿（95～98）がある。瓦器は楠葉型の椀と皿がある。椀は口径12.2～13.2cm×底径4.0～4.6cmのもの（102～104）と、口径13.6～14.6cm×底径4.9～5.9cmのもの（105～109）がある。103・104は口縁端部を丸くおさめる。皿（99～101）は口径9.3～9.8cmを測る。見込みの暗文はジグザグ状を呈する。輸入陶磁器は耳壺の口縁部がある。口縁部は玉縁状に肥厚し、頸部と胴部の境は明瞭に段をつくる。胎土は暗褐色を呈し、白色粒を含む。釉は薄い茶褐色釉の上に暗褐色釉を施す。

土坑2034出土土器（図版28　110～122）　土師器・瓦器がある。土師器は乙訓在地形の皿と皿Nがある。乙訓在地形の皿は、口径8.0～9.4cmの小皿（110～113）、口径12.0～13.4cmの中皿（114～117）、口径13.8cmの大皿（118）がある。皿N（119）は口径13.8cmを測る。色調・胎土の特徴から搬入品の可能性がある。京都６段階。瓦器は楠葉型の椀がある。口径12.0cm×底径5.0cmのもの（120）と、口径13.6～14.0cm×底径4.4～4.6cmのもの（121・122）がある。

鎌倉時代中葉から後葉の土器

乙訓在地形の土師器皿は、口径８cm台の小皿、口径12～13cm台の中皿、口径14～15cm台の大皿で構成される。楠葉型瓦器椀は口径13cm台～14cm前半の大椀が主体をなし、口径７cm台の小椀が出現する。外面のミガキを欠き、内面のみミガキを施す。見込みの暗文は連続長楕円状・同心円状である。口縁部内端に沈線を施すものが主体を占めるが、口径13cm以上の大椀にも口縁端部を丸くおさめるものがある。高台は簡略化した断面三角形状を呈する。底径（高台径）は４cm台である。

土坑2014出土土器（図版28　123～128）　土師器がある。土師器は乙訓在地形の皿がある。口径8.9～9.4cmの小皿（123～126）と、口径14.4～15.2cmの大皿（127・128）がある。

土坑2039出土土器（図版28　129～137）　土師器・瓦器がある。表面が摩滅した個体が多く、一部調整が不明瞭なものがある。土師器は乙訓在地形の皿がある。口径7.6～9.3cmの小皿（129～132）と口径15.0cmの大皿（133）がある。瓦器は楠葉型の椀と皿がある。椀は口径13.2～13.8cm×底径4.9～5.4cmの大椀（135～137）がある。137は口縁端部を丸くおさめる。皿（134）は口径9.0cmのものがある。見込みの暗文はジグザグ状を呈する。

土坑2018出土土器（図版28・49　138～163）　土師器・瓦器・須恵器・輸入陶磁器がある。表面が摩滅した個体が多く、一部調整が不明瞭なものがある。土師器は乙訓在地形の皿がある。口径8.2～8.8cmの小皿（138～147）、口径12.6～13.0cmの中皿（148～150）、口径14.4cmの大皿（151）がある。瓦器は楠葉型の椀と皿がある。椀は口径7.8cm×底径5.6cmの小椀（152）と、口径13.1～14.4cm×底径4.6～5.9cmの大椀（153～160）がある。皿（161）は口径8.8cmを測る。見込みの暗文はジグザグ状を呈する。須恵器は東播系の鉢（162）がある。口縁端部がわずかに上方に拡張している。輸入陶磁器は同安窯系の皿（163）がある。内面に篦と櫛状工具による施文がある。体部外面下半は露胎している。

鎌倉時代末から室町時代前半の土器

土坑1627出土土器（図版29　164～180）　土師器・瓦器がある。表面が摩滅した個体が多く、一部調整が不明瞭なものがある。土師器は乙訓在地形の皿がある。口径6.8～8.1㎝の小皿（164～177）と口径10.0㎝の中皿（178）がある。瓦器は楠葉型の椀と壷（180）がある。椀（179）は口径10.6㎝を測る。

４区Ⅶ層出土土器（図版29　181～194）　土師器がある。土師器は乙訓在地形の皿と皿Ｓがある。乙訓在地形の皿は、口径7.1～8.0㎝の小皿（181～188）と口径9.0～10.0㎝の中皿（189～192）がある。皿Ｓは口径12.0～12.6㎝の大皿（193・194）がある。胎土はやや橙色味を帯びている。京都８段階の特徴を持つ。

室町時代後半の土器

室町時代後半の土器を、土器群の様相から古段階・新段階に分けて報告する[12)]。

〔古段階〕

乙訓在地形の土師器皿は、口径７㎝台の小皿、口径９～10㎝台の中皿で構成される。中皿は皿Ｓと類似した杯状を呈する器形が認められる。京都９段階の皿Ｎ・皿Ｓ・皿Shを伴う。皿Ｓは口径13～15㎝台の大皿がある。瓦器椀は確認できない。

４区Ⅵｂ層出土土器（図版29　195～212）　土師器がある。土師器は乙訓在地形の皿と皿Ｎ・皿Ｓ・皿Shがある。乙訓在地形の皿は、口径7.2～8.2㎝の小皿（198～205）と口径9.0～10.4㎝の中皿（206～211）がある。皿Ｎ（195）は口径7.5㎝を測る。皿Sh（196・197）は口径7.0～7.5㎝のものがある。皿Ｓ（212）は口径15.2㎝の大皿がある。胎土に赤色粒を含む。

土器溜1383出土土器（図版29・50　213～228）　土師器・施釉陶器がある。土師器は乙訓在地形の皿と皿Ｎ・皿Ｓがある。乙訓在地形の皿は、口径7.2～7.8㎝の小皿（213～221）と口径9.8～10.2㎝の中皿（222・223）がある。皿Ｎ（224）は口径7.6㎝を測る。皿Ｓ（225・226）は口径14.4～15.2㎝の大皿がある。施釉陶器は瀬戸美濃系の平椀（227）と大型の卸皿（228）がある。いずれも灰釉を施す。古瀬戸後期の特徴を持つ。

溝1322出土土器（図版29　229～231）　土師器・施釉陶器がある。土師器は乙訓在地形の皿と皿Ｓがある。乙訓在地形の皿（229）は口径10.2㎝の中皿がある。皿Ｓ（230）は口径13.2㎝の大皿がある。施釉陶器は瀬戸美濃系の花瓶（231）がある。灰釉を施す。古瀬戸後期の特徴を持つ。

溝256（古）出土土器（図版29　232）　瓦器の深鉢（232）がある。口縁部の凸帯を２条巡らせ、その間に花文のスタンプを押捺している。

〔新段階〕

乙訓在地形の土師器皿は、口径７㎝台の小皿、口径10㎝台の中皿で構成される。小皿は、従来の口縁部が強く外反する皿状の器形に対し、口径に比べ器高が高く、口縁部の外反が弱いタイプで杯もしくは椀状を呈する器形が定量を占める。一方、中皿は器高を減じて皿状を呈するものが多い。京都９～10段階の皿Ｓを伴う。皿Ｓは口径12㎝台の大皿がある。

溝1160出土土器（図版29　233～246）　土師器・瓦器がある。土師器は乙訓在地形の皿がある。

口径5.7㎝の極小皿（233）と口径7.2～8.4㎝の小皿（234～240）、口径11.4㎝の中皿（241）がある。瓦器は羽釜がある。口縁部・頸部・鍔が長いもの（242・243）と短いもの（244～246）がある。

溝1321出土土器（図版30　247～260）　土師器・瓦器・施釉陶器がある。古段階の土器と混在している可能性がある。土師器は乙訓在地形の皿がある。口径6.4～8.0㎝の小皿（247～252）がある。瓦器は羽釜と火鉢がある。羽釜は鍔を持つもの（253～255）とミニチュア（256）、口縁部直下に耳がつくもの（257・258）がある。火鉢（259）は脚を付す可能性がある。施釉陶器は瀬戸美濃系の浅椀（260）がある。灰釉を施す。古瀬戸後期の特徴を持つ。

柱穴1080出土土器（図版30・50　261～269）　土師器がある。土師器は乙訓在地形の皿がある。口径6.8～7.8㎝の小皿（261～266）と口径10.6～11.0㎝の中皿（267・268）、口径13.8㎝の大皿（269）がある。

溝1323出土土器（図版30　270～274）　土師器・瓦器がある。土師器は乙訓在地形の皿がある。口径7.0～7.6㎝の小皿（270～273）がある。瓦器は無頸壷（274）がある。口縁部直下に蓋の受部を持ち、小穴を穿つ。

溝1003出土土器（図版30　275～279）　土師器・瓦器・輸入陶磁器がある。土師器は乙訓在地形の皿と羽釜がある。乙訓在地形の皿は、口径6.9～7.0㎝の小皿（275・276）がある。羽釜（277）は胴部最大径よりも上位に鍔を持つ。瓦器は茶釜（278）がある。輸入陶磁器は青磁椀（279）がある。内外面に篦状工具で陰刻された劃花文を施す。産地は不明である。

溝256（新）出土土器（図版31・50　280～286）　土師器・瓦器・焼締陶器がある。土師器は乙訓在地形の皿と皿Sがある。乙訓在地形の皿は口径8.0㎝の小皿（280）がある。皿Sは口径12.4～13.0㎝の大皿（281・282）がある。瓦器は羽釜（283）・茶釜（284）・風炉（285）がある。茶釜は肩部に耳を付し、胴部最大径に鍔を持つ。耳には鉄製の釜鐶が残存している。焼締陶器は信楽産の壷（286）がある。

安土桃山時代の土器

溝1002出土土器（図版31・32・51　287～299）　土師器・瓦器・焼締陶器・施釉陶器・輸入陶磁器がある。土師器は乙訓在地形の皿と皿N・皿Sb、羽釜（292）がある。乙訓在地形の皿は口径6.8～7.3㎝の小皿（287・288）がある。皿N（289）は口径6.7㎝を測る。皿Sb（290・291）は口径8.6～9.3㎝を測る。瓦器は擂鉢（293）と深鉢（294）がある。焼締陶器は備前産の壷（295）がある。肩部に櫛状工具で波状文を施す。施釉陶器は瀬戸美濃系の筒型椀（296）と丸皿（297）、天目椀（298）がある。296・297は灰釉、298は鉄釉を施す。大窯期の特徴を持つ。輸入陶磁器は丸椀（299）がある。鉄釉を施す。産地は不明である。

溝1320出土土器（図版32・51　300～307）　土師器・瓦器・輸入陶磁器が出土した。土師器は乙訓在地形の皿と皿S、羽釜がある。乙訓在地形の皿は口径7.0㎝の小皿（300・301）がある。皿Sは口径12.0～13.2㎝の大皿（302～304）がある。羽釜（305）は胴部最大径が下位に位置し、やや下膨れ状の器形を呈する。瓦器は香炉（306）がある。口縁部が外反し、外面にスタンプを押捺す

る。脚を持つ可能性が高い。輸入陶磁器は白磁皿（307）がある。産地は不明である。

溝246出土土器（図版32・51　308～310）　土師器・輸入陶磁器が出土した。土師器は皿Sと小壺（309）がある。皿Sは口径12.4㎝の大皿（308）がある。輸入陶磁器は青磁椀（310）がある。産地は不明である。

江戸時代の土器

溝1158出土土器（図版32・51　311～313）　瓦器・施釉陶器が出土した。瓦器は香炉（311・312）がある。三方に脚を付し、外面に花文のスタンプを押捺する。施釉陶器は唐津産の丸皿（313）がある。灰釉を漬け掛けしており、外面下方は露胎する。兜巾高台である。見込みに窯道具による４つの目跡を残す。

墨書土器

墨書土器は４点（314～317）出土している。

314は輸入陶磁器の同安窯系青磁皿である。露胎した底部外面に「大」を墨書している。土坑2018から出土した。

315は輸入陶磁器の龍泉窯系青磁椀である。露胎した底部外面に「上」を墨書している。溝1322から出土した。

316は輸入陶磁器の白磁皿である。産地は不明。露胎した底部外面に「十」を墨書している。４区Ⅵ層から出土した。

317は施釉陶器の唐津産灰釉皿である。露胎した底部外面に「大」を墨書している。４区Ⅱ～Ⅳ層から出土した。

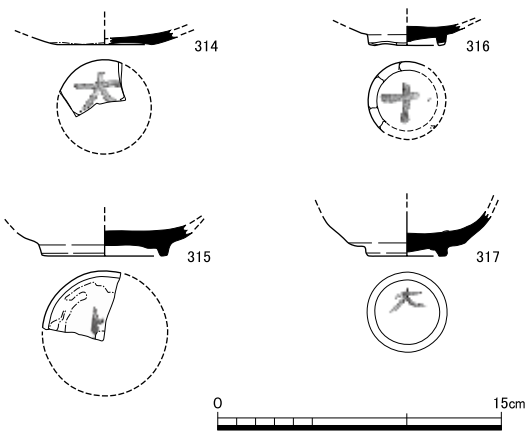


図17　墨書土器実測図（１：４）

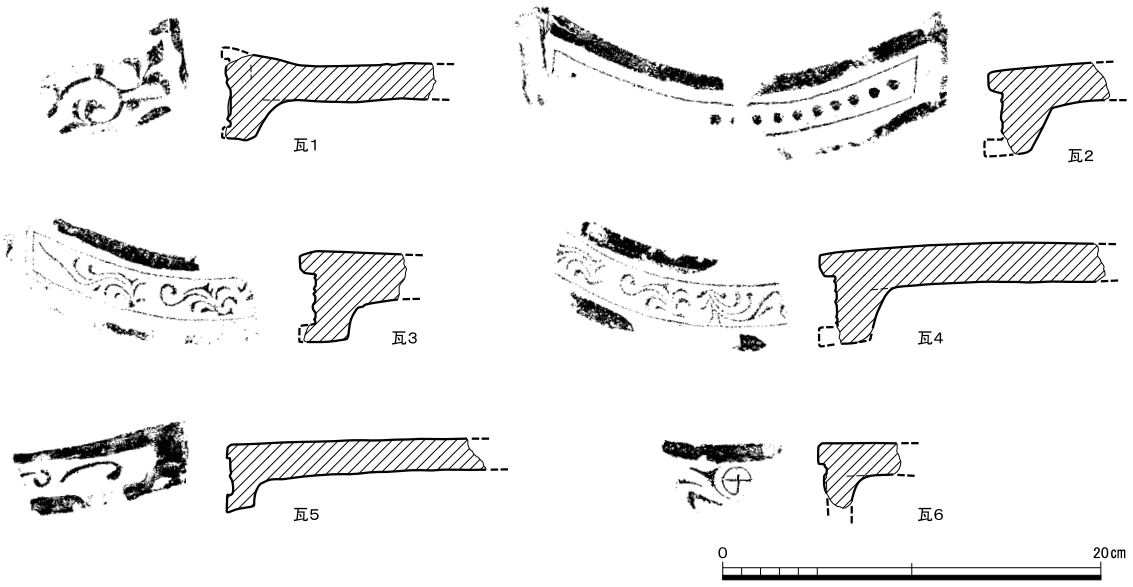


図18　瓦類拓影及び実測図（１：４）

（３）瓦類（図18、図版52、付表２）

軒平瓦（瓦１～６）　瓦１は唐草文軒平瓦である。平安時代後期の兵庫県明石市林崎三本松瓦窯に同文瓦がある。播磨産。溝2027から出土した。

瓦２は連珠文軒平瓦である。外区に界線を巡らす。瓦当の顎部に凹型台の痕跡が認められる。４区Ⅶ層から出土した。

瓦３・４は同文の唐草文軒平瓦である。外区に界線を巡らす。瓦当の顎部に凹型台の痕跡が認められる。瓦３が溝1711、瓦４が溝1321から出土した。京都市東山区東福寺の創建時（嘉禎２年：1236）の瓦に類品がある。

瓦５は唐草文軒平瓦である。唐草は下方にのみ巻き込む。２次被熱痕が認められる。京都府長岡京市勝龍寺城に同文の瓦がある。溝1320から出土した。

瓦６は唐草文軒平瓦である。井戸1124から出土した。

（４）土製品（図19、図版52、付表３）

土製品は鋳造に関わる遺物（坩堝・鞴羽口）がある。すべて土坑2018から出土した。

坩堝（土１）　胎土は砂や小石を含み粗い。付着物を蛍光Ｘ線分析を実施した結果、銅（Cu）・鉛（Pb）・錫（Sn）を検出した（付章２）。青銅製品の鋳造に関わる可能性が高いと考えられる。

鞴羽口（土２・３）　すべて心棒作りで、外面はナデで仕上げる。いずれも先端部に溶解した金属が付着している。

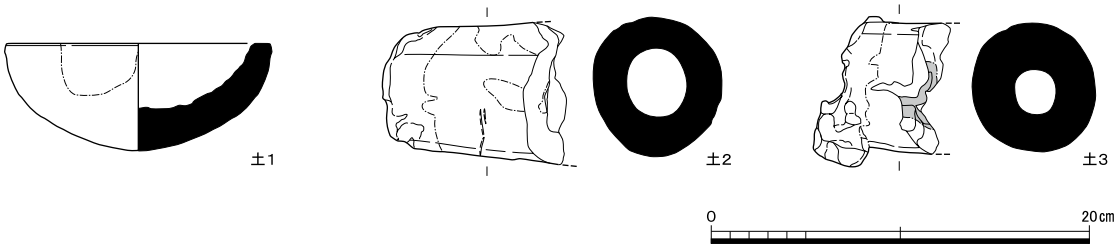


図19　土製品実測図（１：４）

（５）石製品（図版33・52、付表４）

石硯（石１・２）　いずれも硯縁を造り出すもので、石材は粘板岩である。石１は平面長方形を呈し、裏面に陸側から抉りを入れ両側を脚状に残す。硯面と硯陰の両側に使用痕がある。溝1158から出土した。石２は墨池部分が欠損している。溝1160から出土した。

石鍋（石３・４）　滑石製石鍋である。いずれも口縁部直下に断面台形の鍔を削り出している。石３は溝1003、石４は溝1321から出土した。

砥石（石５～７）　石５の石材は粘板岩である。４区Ⅴ層から出土した。石６は河原石を利用した砥石である。石材は堆積岩。溝1003から出土した。河原石を利用した砥石は当該遺跡では定量確認できる。石７は砂岩を利用したやや大型の砥石である。４区Ⅴ層から出土した。

石臼（石８）　石臼の上石である。軸受部の穴は、目安として穿たれた凹みとは別の場所に穿孔している。石材は深成岩である。柱穴1274の地下式礎石に転用されたものである。

石塔（石９）　別石五輪塔の空風輪である。石材は深成岩（花崗岩）である。空輪が縦長気味の宝珠形状、風輪は側面がやや面をなし断面台形状を呈する。風化が進行しており、表面の剥離が著しい。湿地状堆積2043から出土した。

（６）木製品（図版34・53、図20・21、付表５）

柿経（木１）　柿の法量は、長さ約27㎝×幅約2.5㎝×厚さ約0.5㎜を測る。頭部の形状は山形に造り出した圭頭状、下端部が方形状を呈する。確認できた柿は約2,200枚を数える。墨書された経典は妙法蓮華経（法華経）である。側面に永禄12年（1569）の紀年銘が墨書されている（付章６）。溝1002最下層（図版12・13－48層）から出土した[13)]。

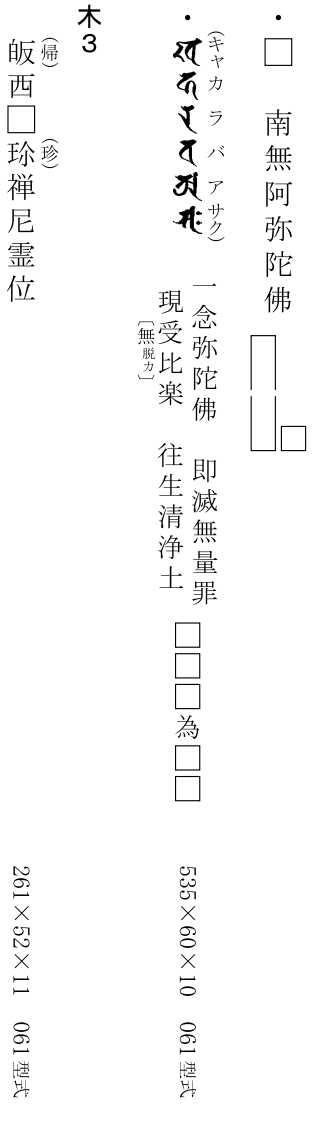


図20　卒塔婆・位牌釈文

卒塔婆（木２） 長さ53.5㎝×幅6.0㎝×厚さ1.0㎝を測る。頭部に五輪塔状の切り込みを入れ、下端部を鋭く尖らせている。A・B両面の墨書は、墨自体は流出しているが、墨書部分が浮き上がって残存している。B面左列上段は「現受比楽」と判読できるが、「現受無比楽」から「無」が脱字していると考えられる。溝1002最下層（図版12・13－48層）で確認した柿経（木１）の下から出土した。

位牌（木３） 位牌の札板である。長さ26.1㎝×幅5.2㎝×厚さ1.1㎝を測る。頭部と下部に枘を造り出している。表裏面に黒漆を塗装し、表側に戒名を文字彫りしている。溝1002から出土した。

魚形（木４） 魚形か。長さ6.0㎝×幅1.6㎝×厚さ0.9㎝を測る。頭部を菱形、尾部に尾びれを造り出している。溝1322貝殻層（図版22－64層）から出土した。

木球（木５） 径3.7～3.9㎝×厚さ2.7㎝を測る。溝1303から出土した。

漆器椀（木６～８） 挽物の漆器椀である。いずれも黒漆塗りで、木８は内面にも朱漆を施す。木７・８は朱漆で文様を描いている。木６は土坑1010、木７・８は溝1321から出土した。

組合せ箱（木９） 組合せ箱の側板である。長方形の板の両端にL字形の切欠きを入れ、枘を造り出す。組合の部では枘の上面に釘穴が残る。底板との接合部には木釘の一部が残存する。溝256（古）から出土した。

用途不明部材（木10） 用途不明の横木部材である。残存長27.6㎝×幅1.9㎝×厚さ2.7㎝を測る。欠失側に方形の枘穴が加工されている。溝1321から出土した。

下駄（木11・12） 一木作りの連歯下駄である。木11は歯の幅が台の幅よりも広くしている。いずれも台上面の後壷側に線刻がある。木11は溝1003、木12は溝256（古）から出土した。

杖（木13） 長さ117.8㎝×厚さ2.1～2.3㎝を測る。握りに滑り止めの刻目を入れ、頭頂部と石突部を丸く加工している。溝1002から出土した。

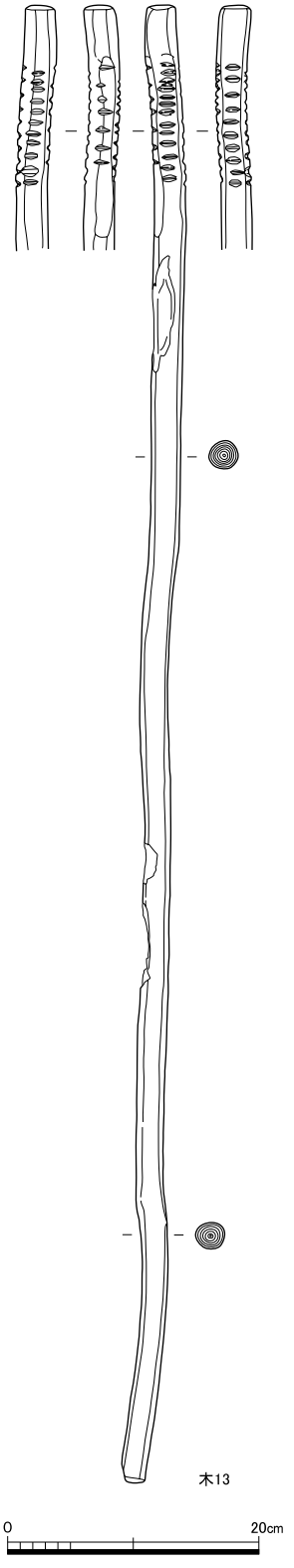


図21 木製杖実測図（１：６）

（７）金属製品（図版35・54、付表６・７）

刀子（金１） 鉄製の刀子である。平造りで切先が欠損する。溝246から出土した。

小柄（金２・３） 銅製の小柄の柄である。金２は片面の３箇所に花文を配する。文様と地文は鏨による打刻で施される。溝1323から出土した。金３は無文。柱穴1382から出土した。

供膳具（金４・５） 金４は菊花形紅皿である。銅製で内外面に鍍金している。菊花形につくった皿の体部に別作りの高台を結合させている。見込中央の突出部分に格子状の線刻を施す。福井県福井市一乗谷朝倉氏遺跡第50次調査で類品が出土している。溝1320から出土した。金５は銅製の椀である。４区Ⅱ～Ⅳ層から出土した。

鎌（金６） 鉄製の鎌の柄込みである。４区Ⅵａ層から出土した。

釘隠（金７） 銅製の巴文釘隠である。４区Ⅱ～Ⅳ層から出土した。

用途不明品（金８） 用途不明の棒状の鉄製品である。両端は尖り、断面方形を呈する。鉄釘の可能性がある。土坑1630から出土した。

銭貨（銭１～18） 銭貨は19種類60枚が出土した。北宋銭が49枚（約82％）、唐銭４枚（約７％）、明銭３枚（約５％）、国産銭貨（寛永通寶のみ）２枚（約３％）、不明２枚（約３％）である。このうち比較的状態の良い各銭種18枚を図示した。他に溝1711から景祐元寶が出土しているが、遺存状態が不良であったため拓影を掲載できなかった。

5．まとめ

今回の調査では平安時代後期から江戸時代の遺構・遺物を検出した。以下、１次調査の成果を踏まえ、今回調査の成果を段階ごとにまとめる。

（１）遺構群形成以前

１次調査では、層相観察に基づく分析から、当該地が河床から氾濫原へ推移したと結論され、その時期はⅨ層（基盤層）出土土器から古墳時代後期から鎌倉時代後半までの間と推定した。

今回の調査では、４区Ⅸ層（基盤層）上層の砂泥・シルトから得られた炭化物の放射性炭素年代を測定した結果、下層の砂礫が8世紀末から10世紀半ば、おそらく９世紀以前に堆積したと推定された（付章１）。同層からは奈良時代の須恵器が出土しており、測定値との矛盾はない。以上のことから、少なくとも平安時代前半頃には調査地にあった河道が埋積して微高地が形成されたことが明らかとなった。

（２）平安時代後期から鎌倉時代前葉（図22）

今回の調査では、５区第３面の遺構・遺物群が該当する。主な遺構は５区で検出した。１次調査では当該期の遺構は確認していない。検出した遺構は溝が主体であり、ほかに性格不明の土坑がある。確認できた南北溝は幅や深さが一定せず、遺物の出土量が少なく比較的浅い南北溝2036・2042などは耕作溝の可能性がある。一方、溝2038では土師器皿や瓦器椀のほかに、鍋や釜などの煮炊き具が出土している。今回は住居や井戸などの生活に関わる遺構は確認できなかったが、遺跡南西部周辺に居住域の存在を想定しておきたい[14)]。

当該期の土器は楠葉型瓦器が主体を占め、ほかに乙訓在地形・京域主流形土師器皿と少数の輸入陶磁器によって構成されている。また播磨産の軒平瓦が１区と５区で出土している。

（３）鎌倉時代中葉から後葉（図23）

１次調査では、１・２区において、小規模な溝で区画された敷地内に掘立柱建物や井戸、墓などを検出した。井戸から推定した地下水位や、井戸埋土内産出の植物遺存体から、当該期は調査地周辺の地下水位が現況より低く、比較的乾燥した環境下にあったと推定された。

今回調査では、４区４ｂ面と５区２ｂ面の遺構・遺物群が該当する。主な遺構は４区南部と５区北部で確認した。検出した遺構は柱穴や溝、土坑である。柱穴は屋敷地の存在を示し、溝は屋敷地の区画と考える。一方、４区北半と５区南部では遺構・遺物は希薄であり、特に４区中央部では整地層（Ⅷ層）を認識することができず、湿地状堆積の広がりを確認した。１区から２区北部を中心に屋敷地が形成されたと想定する。

屋敷地外縁部の遺構としては、土坑2014・2018などがある。土坑2014は炭が充填された径約１

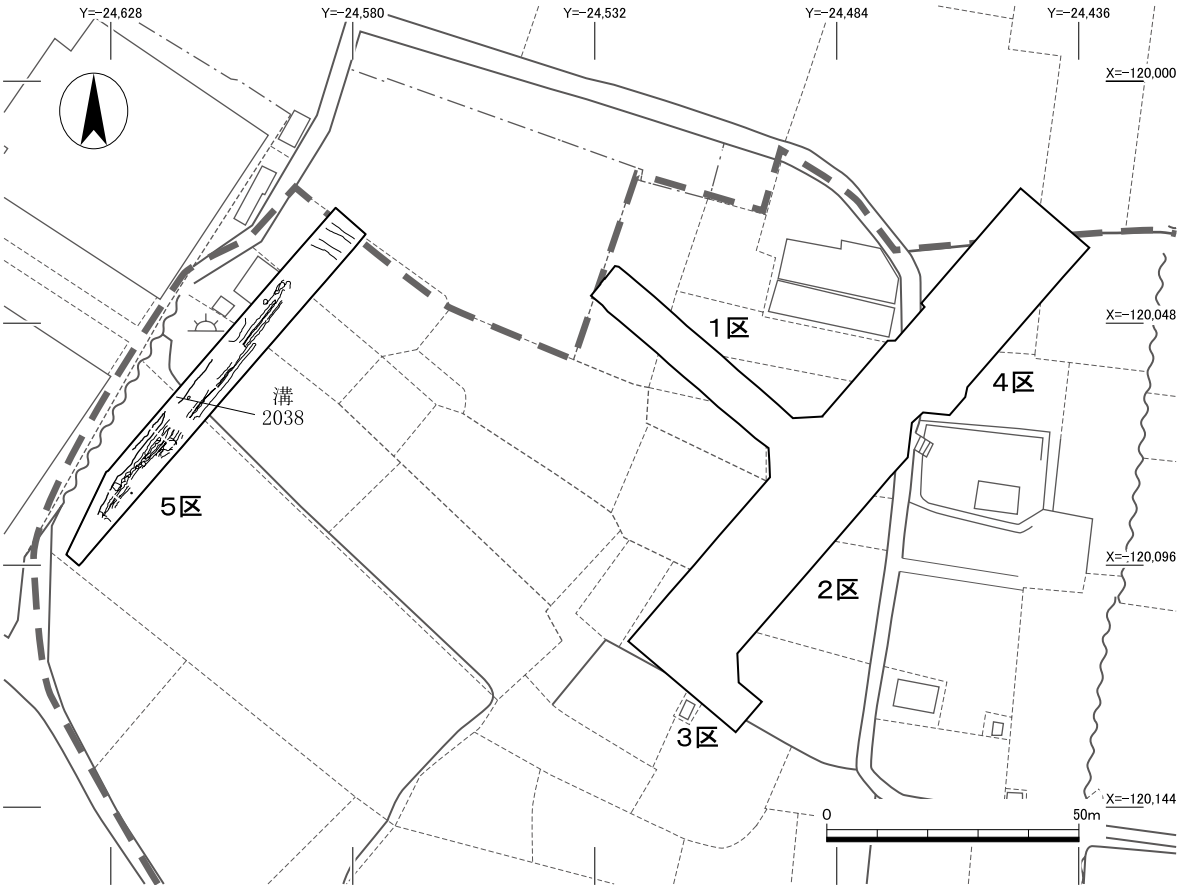


図22　平安時代後期から鎌倉時代前葉の遺構（1 ：1,500）

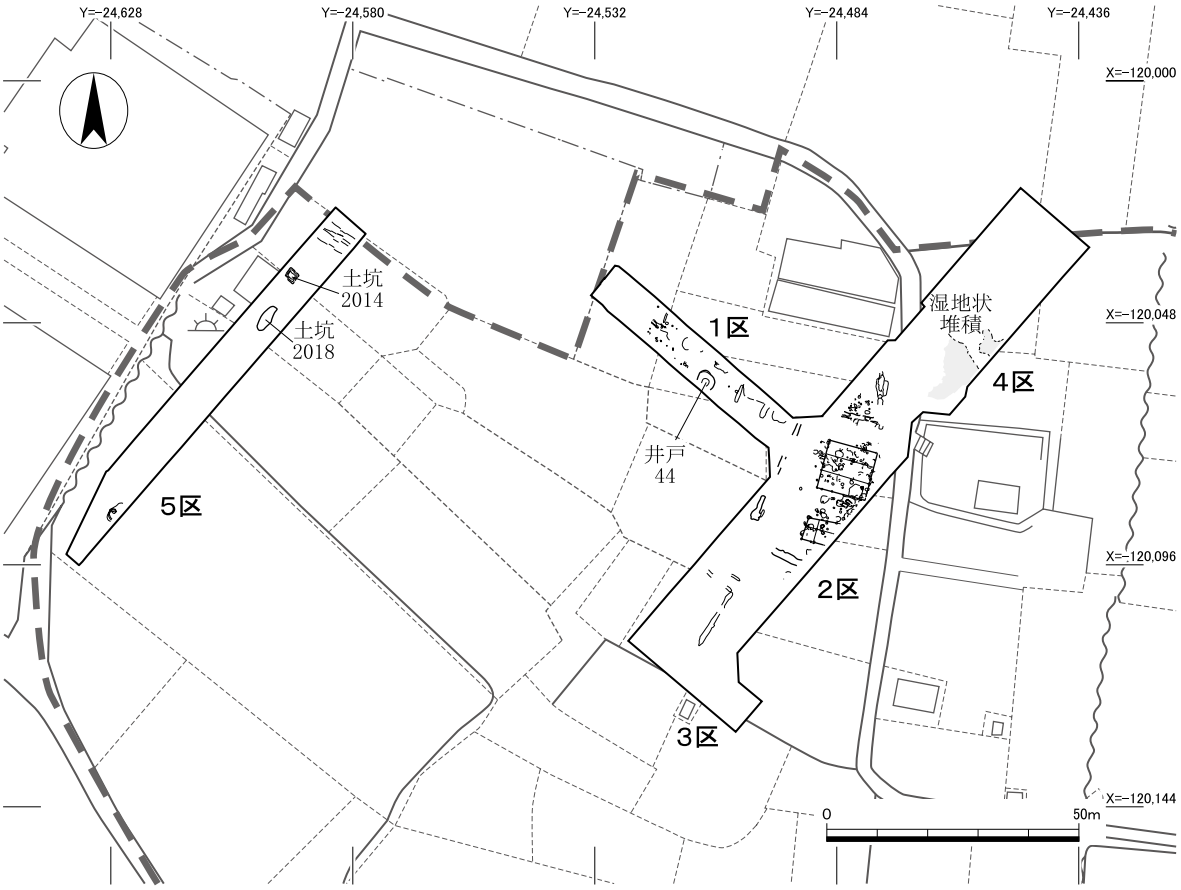


図23　鎌倉時代中葉から後葉の遺構（1 ：1,500）

mの方形土坑の周囲を周溝状の掘り込みが巡るもので、土坑内からは土師器皿が出土した。遺構の性格については、墓の可能性が指摘されている[15)]。墓であれば、１次調査（２区北側）で確認された屋敷地内の墓とは異なる立地・構造である。また、至近で検出した土坑2018の炭を含む埋土からは、多量の土器類とともに坩堝や鞴羽口などの鋳造関係遺物が出土した。坩堝の付着物を蛍光Ｘ線分析で測定したところ、青銅の成分が検出された（付章２）。当該期の集落における生産活動の一端を示すものと評価する。

土器類は乙訓在地形土師器や楠葉型瓦器と少数の輸入陶磁器があり、比較的在地色の強い構成を示す。また今回調査の４区でも少数ながら軒平瓦が出土しており、京都市東山区東福寺（嘉禎２年（1236）創建）の創建瓦の類品を確認した。小規模な瓦葺きの建物が存在したと考えられる。

（４）鎌倉時代末から室町時代前半（図24）

１次調査では、２区北部を中心に小規模な溝で区画された敷地内に掘立柱建物や水溜、墓などを検出した。敷地内は遺構の重複が激しく、さらに地面の凹みを埋める整地が幾重にも施されていることから、継続した土地利用があったと推定した。

今回調査では、４区４a面の遺構・遺物群が該当する。４区中央部では掘立柱建物を確認した。主軸方位は１次調査（２区北部）で検出した建物と同様、北に対し東に振る。一方、当該建物を画する溝や柵などは確認できなかったが、後世の溝によって攪乱されている可能性が高い。５区では明確な遺構を確認しておらず、屋敷地は遺跡中央部から東部の範囲で形成されたと考える。

当該期の土器類は、乙訓在地形土師器に加え京域主流形の土師器皿が一定の割合を占める。

（５）室町時代後半（図25）

１次調査では、２区を中心に集落域や屋敷地を画する大溝が掘削され、溝による区画内に掘立柱建物や柵などを確認した。層相観察からは洪水による冠水頻度が急増し、氾濫原が急激に埋積される環境下にあったことが指摘されており、大溝が水はけの悪化や洪水など低湿地型の災害が頻繁に発生し得る環境と関連する可能性を考えた。

今回調査では、４区２・３面と５区２a面の遺構・遺物群が該当する。主な遺構は４区中央部で確認した。集落域や屋敷地を画する溝や掘立柱建物、柵などがある。東西溝1003・1160・1168以北では目立った遺構・遺物を確認できず、当該箇所が集落北限と推察した。４区中央部で検出した南北溝1321・1322は暗渠が両溝を繋いでおり、同時に機能したと考える。溝1321・1322の溝底は小穴状の凹みが連接し、水流を意識した傾斜がほとんど認められないこと、また溝1322埋土からはミジンコの耐久卵が多数出土しており、常時流水がある状態ではないと推定されたこと（付章５）は、これら南北溝が用水路として機能したものではないことを示すと考える。両溝に挟まれた空間地は砂礫層が盛土されており（図版22－71層）、これが道路の構築土である可能性が高く、溝1321・1322は南北道路の東西側溝となる可能性が高い。位置を踏襲して掘削された南北溝1303・1323も両溝間に砂礫層（図版22－49・50層）があることから、同様の機能を持つと推察する。溝

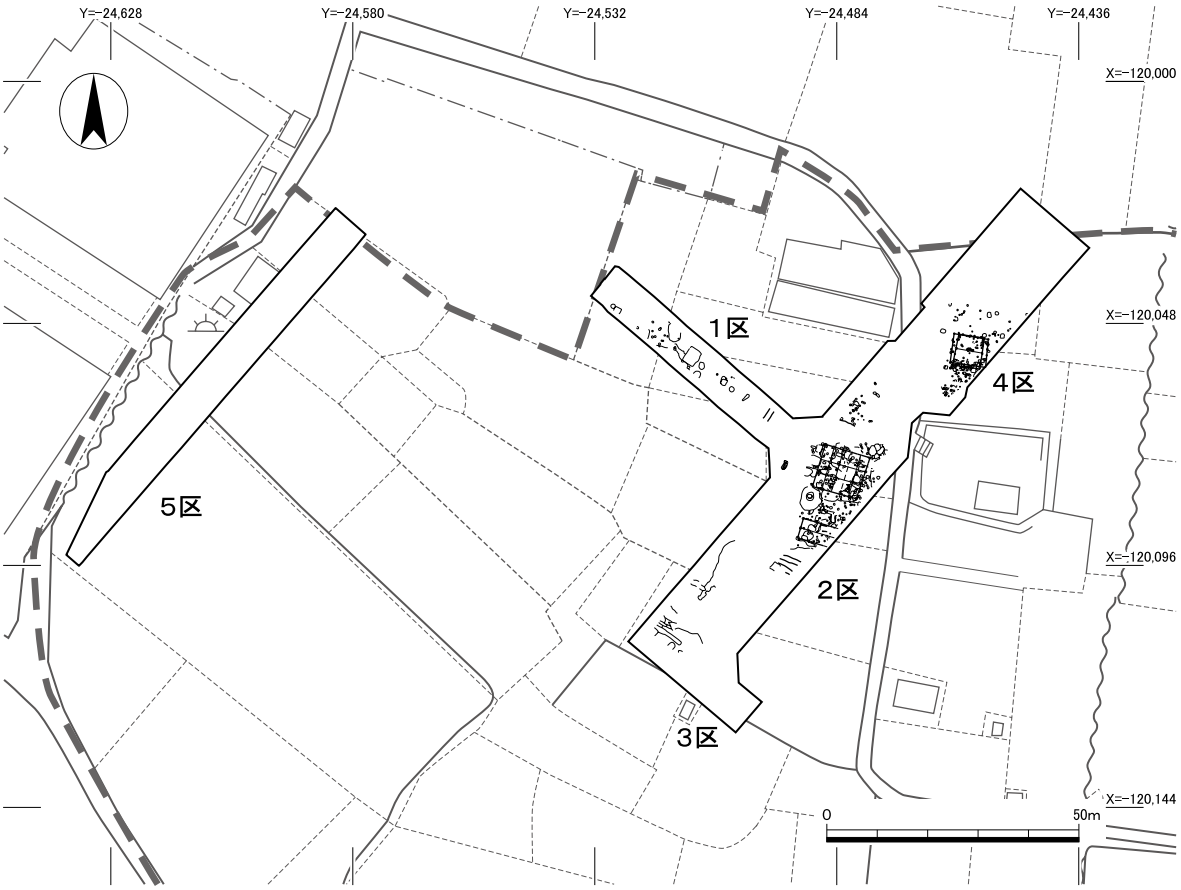


図24　鎌倉時代末から室町時代前半の遺構（1 ：1,500）

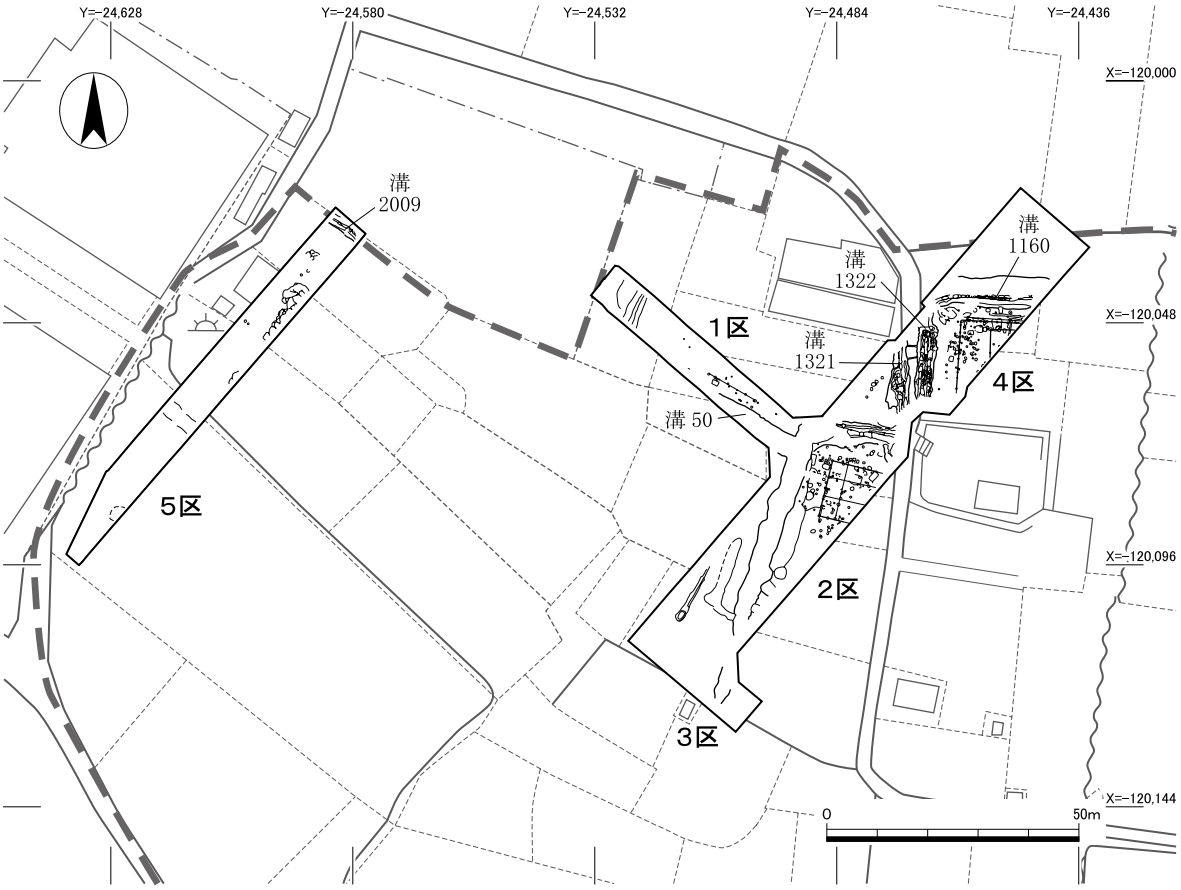


図25　室町時代後半の遺構（1 ：1,500）

や道路側溝によって区画された敷地内では遺構面が２面確認されており、繰り返しこの場所が活動の場として機能していた状況を復元できる。各遺構の主軸方位は正方位を指向するものが確認でき、従来の遺構群とは異なる様相を示す[16)]。

また、５区で確認された東西溝2009は、１次調査（１・２区）で確認された東西溝50の延長線上にあたる。用排水の広域整備が進んだものと推察する。現状の成果では居住域の範囲は遺跡東側にあるが、生産域も含めた遺跡内全体の土地利用の様相については、鎌倉時代中葉から室町時代前半の頃よりも広域かつ集約的であった可能性も想定している。

１次調査と同様に、今回調査でも南北溝1321・1322など、溝埋土から多量の淡水産の貝殻や大型哺乳類の骨が出土した。自然科学的な手法を用いた分析から、出土した淡水産の貝類はほぼオオタニシに限定できること、これらが食用加工されていたことが明らかになった。また１次・２次調査で観察できた、同一貝種が特定の箇所に集中し、短期間のうちに廃棄されている様態を地点貝塚として評価された[17)]（付章３）。哺乳類についても解体痕の存在から食用や加工が指摘され、中世の集落における動物利用の一端を明らかにした意義が強調された（付章４）。

（６）安土桃山時代（図26）

１次調査では、室町時代後半と同様、集落域を画する大溝と２区北東部に掘立柱建物や柵などを検出した。溝からは石塔類や人骨が出土したことから、至近に墓地が存在した可能性を考えた。また調査区の各所で検出した噴砂が慶長伏見地震（1596年）によって発生したものと考えた。

今回の調査では、４・５区１ｂ面の遺構・遺物群が該当する。主な遺構は４区で確認した。集落域や屋敷地を画する溝と掘立柱建物、柵などを検出した。空間構成は室町時代後半と類似しており、集落北限を画する東西溝1002や、南北溝1320に囲まれた敷地内に掘立柱建物や礎石建物、柵を配置している。南北溝1320の東肩部には礫による整地があり（図版22－29層）、当該箇所が道路として機能していたと考えられる。各遺構の主軸方位は若干北に向かって東もしくは西に向かって北に降る傾向がある。１次調査（２区）と同様に、建物の南北に東西柵が付属する。５区で確認された東西溝2003は、１次調査（１・２区）で確認された東西溝30の延長線上にあたる。

溝1002からは、柿経や卒塔婆、位牌などが出土した。少量ではあるが人骨も出土している。１次調査では調査区周辺に埋葬施設の存在を想定したが、ここでもそれらを伴う宗教施設の存在を想定できる。柿経は妙法蓮華経の経文を書写しており、側面に永禄12年（1569）の紀年銘が墨書されていた。本資料では2000枚を超える柿が出土しており、墨書された文字の筆跡や修正を丹念に分析することによって、写経作業の行程や作業単位の復元が可能な貴重な資料と評価している（付章６）。

東西溝246からは、多量の淡水産の貝殻が出土した。分析の結果、出土した淡水産の貝類が、ほぼマツカサガイに限定できること、これらが食用加工されていたことが明らかになった。現在あまり食用とされないマツカサガイの利用は、関東地方では中世から近世初頭にかけて確認されており、今回の事例も室町時代末頃に特徴的な事例である可能性が示された（付章３）。

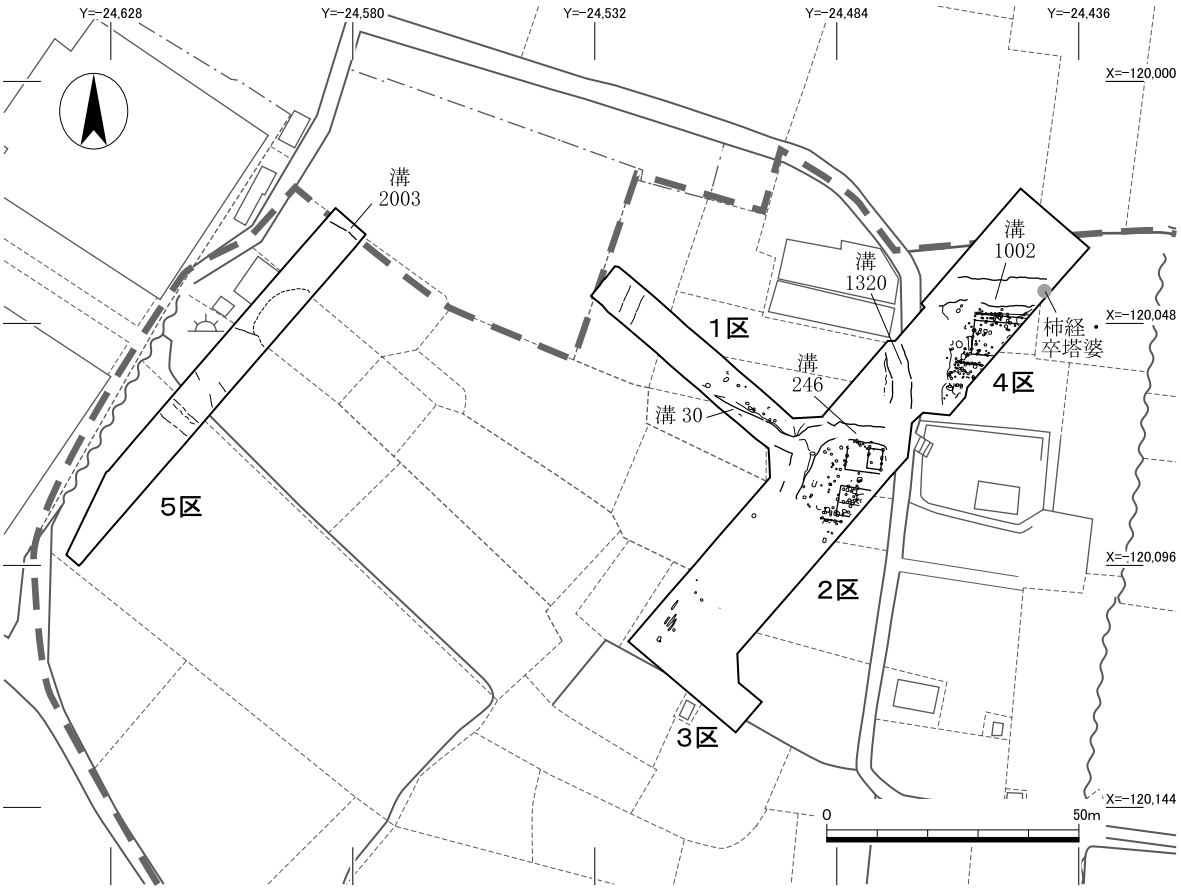


図26　安土桃山時代の遺構（1 ：1,500）

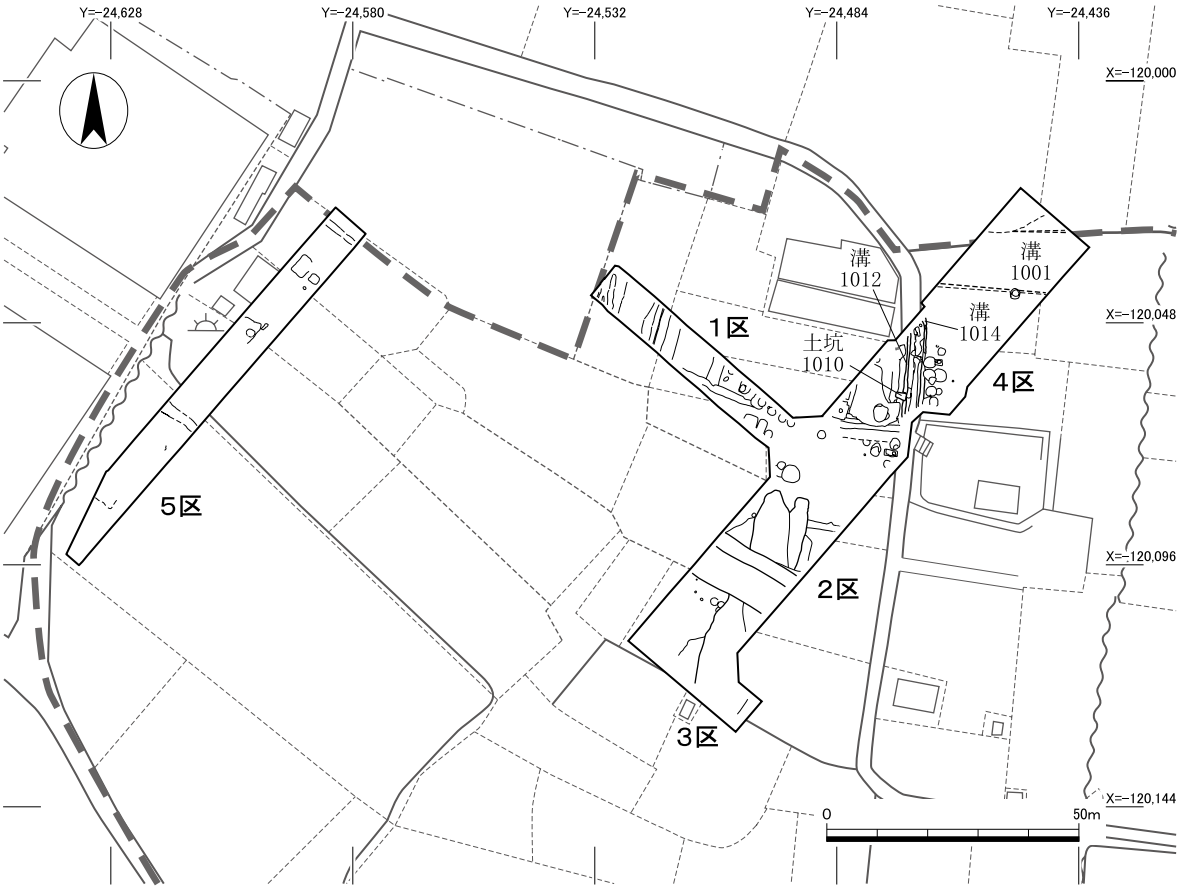


図27　江戸時代の遺構（1 ：1,500）

今回の調査でも噴砂が顕著に確認できたため、その発生年代を明らかにする目的で放射性炭素年代測定を実施した。その結果、噴砂の発生年代は15世紀以降であることが明らかになった。噴砂が安土桃山時代のⅤ層に貫入しており、江戸時代の土層に達していないことから、噴砂を生じさせた地震としては慶長伏見地震（1596年）が想定された（付章１）。

（７）江戸時代（図27）

１次調査では、溝や野壺と考えられる円形土坑群などを検出した。層相観察から、江戸時代中期から後期にかけて洪水堆積物の堆積が大きくなるとともに、地下水位の上昇があったと推定されており、検出された溝は、地下水位の上昇とともに水はけの悪化や洪水などの低湿地型災害が増加していく環境下に成立したものと考えた。また野壺の存在から調査地内における農業活動が推測された。

今回調査では、４・５区１a面の遺構・遺物群が該当する。主な遺構は４区で確認しており、溝や円形土坑、淡水産の貝殻が多量に出土する方形土坑を検出した。４区北側の東西溝1001・1125は南から北へと徐々に遷移しつつも、ほぼ同じ箇所で掘り直されている。今回の調査区では調査区西壁際と東壁際の溝底の標高が大きく変わらなかったが、１次調査（２・３区）で確認した溝と同様に、横大路沼や桂川と結ぶ排水路的な機能を持っていたと推察する。２・３区周辺の造成土の厚さも、水はけの悪化など低湿地型災害への対応と考えられる。４区中央部で検出した南北溝1009・1012～1014は、調査地内を縦断する現在の南北道路の位置や主軸方位がほぼ一致しており、南北道路の東西側溝となる可能性が高い。溝1014東側に沿って、野壺と推定する円形土坑が南北方向の列状に並んで検出した。道路脇に耕作地が広がる景観を復元できる。

また土坑1010からは、多量の淡水産の貝殻が出土した。出土した貝類はほぼ全てがオオタニシであり、室町時代後半と同様に、オオタニシを選択的に採取して食用加工したことが明らかになった（付章３）。

註

1） 歴史的環境については、下記文献を参照した。また、『管見記』の釈読にあたっては、竹本 晃氏（大阪大谷大学文学部歴史文化学科）のご教示をいただいた。

田良島 哲「中世淀津と石清水神人」『史林』68巻４号　史学研究会　1985年

芳賀幸四郎「中世末期における三条西家の経済的基盤とその崩壊」『日本学士院紀要』第13巻第１号　日本学士院　1955年

「伏見区 富森村」『京都市の地名』日本歴史地名大系第27巻　平凡社　1976年

新田美香「京都守護職に対する幕府の財政援助」『お茶の水史学』45号　お茶の水女子大学史学科読史会　2001年

山下正男「京都市内およびその近辺の中世城郭 復原図と関連資料」『京都大学人文科学研究所調査報告』第35号　京都大学人文科学研究所　1986年

なお、網野善彦は、西園寺家の所領が宇治川・巨椋池・淀川沿いに点在すること、淀魚市など鳥羽殿領も西園寺家の管理下にあったことを指摘している。そして乾奈保子と小野博司は、室町時代後期のある段階から西園寺家と三条西家との間に共有領が形成されたことを明らかにしている。

網野善彦「西園寺家とその所領」『国史学』146号　国史学会　1992年

乾奈保子「室町後期公家経済の一考察 －三條西家の所領支配を中心に－」『年報 中世史研究』５　中世史研究会　1980年

小野博司「室町後期における三條西家領の伝領と支配」『法政史学』第35号　法政大学史学会　1983年

2） 下三栖遺跡については下記文献を参照した。

「下三栖遺跡（96TB183）」『京都市内遺跡立会調査概報』平成８年度　京都市文化市民局　1996年

「下三栖遺跡（97TB63）」『京都市内遺跡立会調査概報』平成９年度　京都市文化市民局　1997年

「下三栖遺跡」『平成８年度　京都市埋蔵文化財調査概要』 財団法人京都市埋蔵文化財研究所　1998年

「下三栖遺跡」『平成９年度　京都市埋蔵文化財調査概要』 財団法人京都市埋蔵文化財研究所　1999年

「下三栖遺跡」『平成10年度　京都市埋蔵文化財調査概要』 財団法人京都市埋蔵文化財研究所　2000年

「下三栖遺跡」『平成11年度　京都市埋蔵文化財調査概要』 財団法人京都市埋蔵文化財研究所　2002年

3） 下三栖城跡については下記文献を参照した。

「下三栖城跡 №106」『京都市内遺跡試掘調査報告』平成19年度　京都市文化市民局　2008年

「下三栖城跡」『京都市内遺跡発掘調査報告』平成29年度　京都市文化市民局　2018年

4） 淀城跡については下記文献を参照した。

『長岡京跡・淀城跡』京都市埋蔵文化財研究所発掘調査概報2003－13　財団法人京都市埋蔵文化財研究所　2004年

『長岡京跡・淀城跡』京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告2006－3　財団法人京都市埋蔵文化財研究所　2006年

『長岡京跡・淀城跡』京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告2006－23　財団法人京都市埋蔵文化財研究所　2007年

『長岡京跡・淀城跡』京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告2010－7　財団法人京都市埋蔵文化財研究所　2010年

『長岡京跡・淀城跡』京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告2011－7　財団法人京都市埋蔵文化財研究所　2012年

5） 久我東町遺跡については下記文献を参照した。

「久我東町遺跡」『昭和59年度　京都市埋蔵文化財調査概要』 財団法人京都市埋蔵文化財研究所　1987年

「久我東町遺跡」『昭和61年度　京都市埋蔵文化財調査概要』 財団法人京都市埋蔵文化財研究所　1989年

百瀬正恒「中世後期の集落から近世集落へ －向日市域における中世遺跡の動向－」『中世土器研究論集』 中世土器研究会　2001年

6） 羽束師志水町遺跡・長岡京跡については下記文献を参照した。

「長岡京左京四条三・四坊」『昭和62年度　京都市埋蔵文化財調査概要』 財団法人京都市埋蔵文化財研究所　1991年

「長岡京左京四条三・四坊、羽束師志水町遺跡」『昭和63年度　京都市埋蔵文化財調査概要』 財団法人京都市埋蔵文化財研究所　1993年

「羽束師志水町遺跡」『平成元年度　京都市埋蔵文化財調査概要』 財団法人京都市埋蔵文化財研究所　1994年

7） 羽束師菱川城については下記文献を参照した。

「長岡京跡左京四条四坊三町跡 №18」『京都市内遺跡試掘調査報告』平成21年度　京都市文化市民局　2010年

「長岡京跡左京四条三坊十三・十四町・四坊三・四町跡・羽束師菱川城跡 №34,№138」『京都市内遺跡試掘調査報告』平成25年度　京都市文化市民局　2014年

「長岡京跡左京第585次（四条三坊十三町跡）・菱川城跡（１）」『京都市内遺跡発掘調査報告』平成28年度　京都市文化市民局　2017年

「長岡京跡左京第586次（四条三坊十三町跡）・菱川城跡（２）」『京都市内遺跡発掘調査報告』平成28年度　京都市文化市民局　2017年

8） 各城跡については註１山下文献を参照した。

9） 平尾政幸「土師器再考」『洛史　研究紀要　第12号』 公益財団法人京都市埋蔵文化財研究所　2019年

なお、平尾編年の１～13段階は、本文中では京都１～13段階と表記している。

750年			840年			930年			1020年			1110年	1170年		1260年			1350年	1410年		1500年			1590年			1680年			1740年	1800年		1860年
1			2			3			4			5	6					7			8		9			10			11			12		13		14	
A	B	C	A	B	C	A	B	C	A	B	C	A	B	A	B	C	A	B	C	A	B	A	B	C	A	B	C	A	B	C	A	B	A	B	A	B

10） 乙訓在地形土師器皿の基準は、加納・小森・原文献をもとに次のように設定した。

① 製作技法は手づくねであり、器面にナデ仕上げ前のハケメを残すものがある。

② 器壁は厚手で胎土に雲母や赤色粒を含む。

③ 鎌倉時代から室町時代前半の器形は、底部からの立ち上がりは厚手で口縁部に向かって外反気味に薄く仕上げる。口縁端部を丸く収め、面取りは施さない。

④ 室町時代後半以降は上記①・②の特徴を備えた皿S模倣形が存在する。器形は口縁端部がわずかに内彎する傾向がある。③の系統と考えられる土師器皿は、口径６～７㎝台の小皿を中心とする。

加納敬二「乙訓在地形の土師器皿について」『平安京左京北辺四坊 第１分冊（公家町形成前）』京都市埋葬文化財研究所調査報告第22冊　財団法人京都市埋蔵文化財研究所　2004年

小森俊寛「概説」『都城の土器集成Ⅲ』古代の土器３　古代の土器研究会　1994年

原　秀樹「第１章」『勝龍寺城跡 外郭土塁・空堀の調査』長岡京市文化財調査報告第73冊　公益財団法人長岡京市埋蔵文化財センター　2019年

山口 均「乙訓地域の中世土器（土師器皿）編年について」『長岡京跡　修理式遺跡・中海道遺跡』向日市埋蔵文化財調査報告書第71集　財団法人向日市埋蔵文化財センター　2006年

なお、土師器皿における乙訓在地形・京域主流形という用語は伊藤文献に基づいている。

伊藤淳史「所謂“乙訓在地形土師器”と呼称される中世土師器皿類について」『京都大学構内遺跡調査研究年報』2014年度　京都大学文化財総合研究センター　2016年

11）検出遺構および出土遺物の時期の判定は、平尾政幸氏による中近世の土師器皿編年とその年代観を基準とし、その他の遺物については下記文献を参照した。

九州近世陶磁学会事務局編『九州陶磁の編年』九州近世陶磁学会10周年記念　九州近世陶磁学会　2000年

櫻木晋一『貨幣考古学の世界』考古調査ハンドブック15　ニューサイエンス社　2016年

田辺昭三『須恵器大成』 角川書店　1981年

『概説 中世の土器・陶磁器』 真陽社　1995年

橋本久和『概論 瓦器椀研究と中世社会』 真陽社　2018年

藤澤典彦・狭川真一『石塔調べのコツとツボ－図説 採る 撮る 測るの三種の実技－』高志書院　2017年

藤澤良祐「瀬戸・美濃大窯製品の生産と流通 －研究の現状と課題－」『財団法人 瀬戸市埋蔵文化財設立10周年記念「瀬戸大窯とその時代」シンポジウム・講演会　戦国・織豊期の陶磁器流通と瀬戸・美濃大窯製品 －東アジア的視野から－』資料集　財団法人瀬戸市埋蔵文化財センター　2001年

藤澤良祐『中世瀬戸窯の研究』 高志書院　2008年

山本信夫・森田レイ子・宮崎亮一『大宰府条坊跡ＸＶ－陶磁器分類編－』太宰府市の文化財第49集　太宰府市教育委員会　2000年

12）今回基準とした資料は、整地層や溝埋土から出土した集合資料が主であり、一括性を保証できる資料は限定的である。今後の一括資料の増加を踏まえて、再評価する必要があると考える。

13）詳細な事実報告は別途予定している。

14）平安時代後期から室町時代前半までに成立した区画溝を始めとする各遺構は、主軸方位が北に向かって東もしくは西に向かって北に振ることを基本としている。主軸方位を規制した要因については今後の課題である。

15）鋤柄俊夫氏（同志社大学）、赤松佳奈氏（京都市文化財保護課）からご教示を得た。

16）吉田敬市氏によると、調査地東南側に所在する豊田神社は、もと富ノ森の旧地であり、その周辺には条里地割が残ることを指摘している。今回の調査成果の中でも、とりわけ正方位を指向する遺構群と上記地割との関連については、本調査事例だけでなく今後の周辺調査事例を踏まえて評価・考察する必要があると考える。

吉田敬市「第２章 巨椋池の文化」『巨椋池干拓誌』 巨椋池土地改良区　1962年

17）今回の分析では、オオタニシの採取場所が遺跡周辺の水田ではなく池沼であった可能性が高く、その候補地として巨椋池が示され、かつ漁業権の問題についても言及された。巨椋池があったとされる地域一帯の歴史的な環境の復元は勿論のことであるが、当該期の京都市南部域における低湿地帯の生活圏（日常的な生業活動・交易物流）を考える上で重要な指摘であり、今後も上記の視野を持った調査と検証が必要と考える。

付章１　富ノ森城跡において確認された噴砂について

小野映介（駒澤大学）

１．はじめに

富ノ森城跡（京都市伏見区横大路六反畑地内）は、京都盆地南部を流れる桂川と宇治川に挟まれた氾濫原に位置する。2020年より公益財団法人京都市埋蔵文化財研究所が発掘調査を行っており、おもに鎌倉時代・室町時代・安土桃山時代・江戸時代の遺構や遺物が検出されている。

本遺跡では噴砂の痕跡が確認されているが、噴砂の生じた時期についての検討は十分に行われていない。本調査では、層相・層序と遺物の包含状況、遺物を包含する土壌層中から採取した炭化物を対象とした放射性炭素年代測定を実施して、噴砂の発生年代を明らかにした。また、噴砂を生じさせた地震についての考察を行った。

２．層相・層序

発掘調査区のトレンチで確認できるのは、砂礫層とそれを覆う砂～泥層、盛り土である。砂礫層は河道を充填するかたちで堆積したもので、縄文時代晩期の深鉢の破片や古墳時代後期の須恵器杯身・甕の破片が出土している。また、８世紀または９世紀の須恵器杯も包含されるとの情報もある。

砂～泥層には、２枚の明瞭な土壌層が認められ、下位からはおもに室町時代、上位からはおもに安土桃山時代の遺物が検出されている。なお、室町時代の遺物を包含する土壌層は、有機物を多く含む細粒砂～泥によって覆われていることから、当地の湿地化はこの頃から生じたと考えられる。

３．噴砂の概要

噴砂は砂礫層を供給源として、それを覆う砂～泥層に貫入している。噴砂を構成するのは中粒砂で、所々に泥の塊が包含されている。また、噴砂は垂直方向のみならず、分岐しながら水平方向にものびていることが分かる。トレンチ断面からは、噴砂が旧地表面に広がった状態を明確に確認することはできなかったが、噴砂は安土桃山時代の遺物を包含する土壌層を切って発達しており、江戸時代の遺物包含層にまでは達していない。

４．噴砂の供給源となる砂礫層の堆積年代

砂礫層を覆う砂～泥層の最下部から炭化物を採取して放射性炭素年代測定を実施した。測定は、加速器分析研究所に依頼した。その結果、２σ暦年代として、772calAD - 793calAD（15.6%）・800calAD - 899calAD（65.0%）・920calAD - 956calAD（14.8%）の値が得られた。したがって、砂礫層は８世紀末～10世紀半ば、おそらく９世紀以前に堆積したと考えられる。その後、砂～泥層が堆積する環境で人々の居住が始まった。

５．噴砂の生じた年代と要因

噴砂によって切られており、安土桃山時代の遺物を包含する土壌層で炭化物を採取した。この炭化物からは1433calAD - 1478calAD（95.4%）の値が得られた。炭化物の放射性炭素年代は、遺物の年代観とはやや異なるが、安土桃山時代の包含層に含まれた炭化物として異常な値ではない。

以上のように放射性炭素年代からは、噴砂が生じたのは1433calAD - 1478calAD以降とまでしか絞ることができない。しかし、噴砂が安土桃山時代の土壌層に貫入しており、江戸時代の土壌層に達していないことを考慮すると、噴砂を生じさせた地震としては慶長伏見地震（1596年）が想定される。

６．おわりに

富ノ森城跡は、歴史時代における地震にともなう噴砂痕が残されているという点において、自然科学的にも重要な遺跡である。また、桂川と宇治川に挟まれた低湿地の下から、かつての人々の居住の痕跡が見つかったことは、非常に興味深い。今後、当地域の考古学的発掘調査と合わせて、地形環境研究が進むことが望まれる。

本稿は、「2021年歴史地震史料研究会講演要旨集」の内容に加筆修正したものである。

付章２　富ノ森城跡から出土した坩堝の科学分析

関　晃史（公益財団法人京都市埋蔵文化財研究所）
山田卓司（龍谷大学）

１．はじめに

ここでは土坑2018から出土した坩堝（図19－土１）に行った科学分析について報告する。坩堝が出土した土坑2018は、５区で検出した楕円形土坑で鎌倉時代中葉に位置付けられ、対象試料の坩堝のほか、鞴羽口や炭化材も共に出土している。富ノ森城跡において明らかな金属生産を示す遺構、遺物の検出は初めてであり、試料に溶着して残る金属について分析結果を述べる。

２．分析方法

試料内外面に溶着した金属の分布を確認するため、Ｘ線透過撮影による観察を実施した。撮影条件は管電圧70kv、管電流5mA、照射時間15secである。また、溶着金属の構成元素を同定するため、蛍光Ｘ線分析装置（(株）日立ハイテクサイエンス製EA1000VX）を用いて計４箇所の無機元素定性分析を実施した。蛍光Ｘ線の測定条件はロジウム管球、管電圧120kv、測定時間120秒、コリメータ径φ3.0㎜、フィルターなしである。これらの分析には龍谷大学文学部文化財科学室設置の装置を用いた。

３．分析結果

Ｘ線透過撮影によって得られた像を図28に、蛍光Ｘ線分析による結果を図29～32に示し、以下に概要を述べる。

Ｘ線透過撮影では、口縁部に近い箇所に分布する電子密度の高い箇所が認められた（図28の白色を呈する箇所)。蛍光Ｘ線分析では、試料外面で胎土が露出した箇所（図29）と溶着する金属で高密度でない箇所（図30)、そして高密度な箇所の内面（図31）と外面（図32）の分析結果を示した。検出した元素はケイ素（Si)、カルシウム（Ca)、チタン（Ti)、マンガン（Mn)、鉄（Fe)、銅（Cu)、スズ（Sn)、鉛（Pb）である。胎土の分析結果と金属溶着箇所の分析結果を比較してケイ素、カルシウム、チタン、マンガン、鉄は胎土に由来する元素と考えられる。したがって

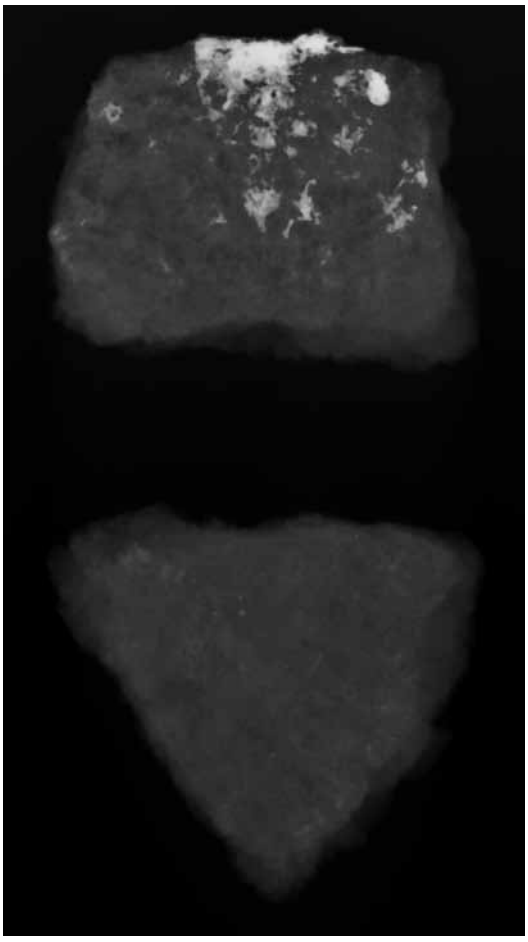
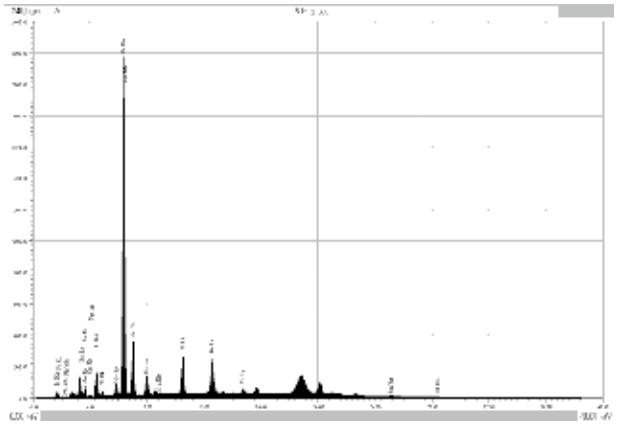


図28　Ｘ線透過撮影画像（上が口縁部）

［スペクトル］

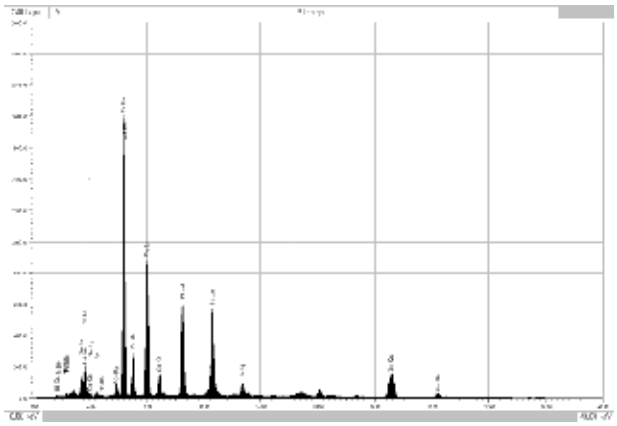


［結果］

Z	元素	元素名	ライン	A(cps)	ＲＯＩ(keV)
14	Si	ケイ素	Ｋα	754.767	1.59－ 1.89
20	Ca	カルシウム	Ｋα	1585.239	3.52－ 3.85
22	Ti	チタン	Ｋα	2964.019	4.33－ 4.68
25	Mn	マンガン	Ｋα	1897.087	5.71－ 6.08
26	Fe	鉄	Ｋα	41112.796	6.21－ 6.59
29	Cu	銅	Ｋα	3193.909	7.83－ 8.24
50	Sn	スズ	Ｋα	971.528	24.76－25.56
82	Pb	鉛	Ｌβ	6734.897	12.40－12.85

図29　坩堝胎土（外面）蛍光Ｘ線分析結果

［スペクトル］

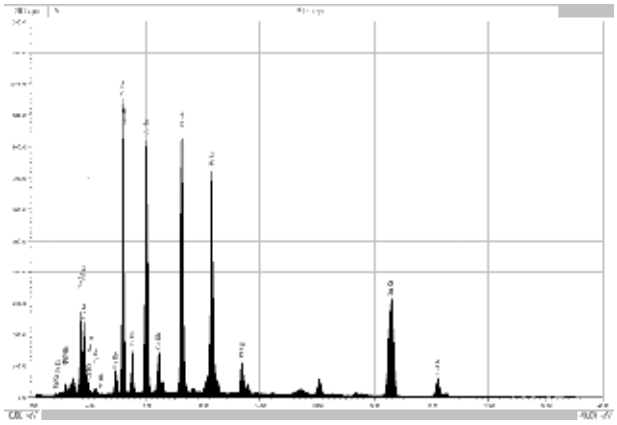


［結果］

Z	元素	元素名	ライン	A(cps)	ＲＯＩ(keV)
14	Si	ケイ素	Ｋα	272.176	1.59－ 1.89
20	Ca	カルシウム	Ｋα	4162.429	3.52－ 3.85
22	Ti	チタン	Ｋα	924.181	4.33－ 4.68
25	Mn	マンガン	Ｋα	1827.285	5.71－ 6.08
26	Fe	鉄	Ｋα	33932.804	6.21－ 6.59
29	Cu	銅	Ｋα	18078.001	7.83－ 8.24
50	Sn	スズ	Ｋα	6621.496	24.76－25.56
82	Pb	鉛	Ｌβ	14191.912	12.40－12.85

図30　溶着金属低電子密度箇所（内面）蛍光Ｘ線分析結果

［スペクトル］

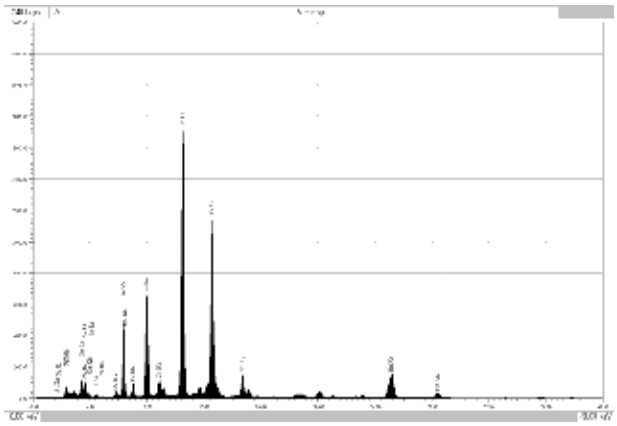


［結果］

Z	元素	元素名	ライン	A(cps)	ＲＯＩ(keV)
14	Si	ケイ素	Ｋα	264.472	1.59－ 1.89
20	Ca	カルシウム	Ｋα	5436.502	3.52－ 3.85
22	Ti	チタン	Ｋα	760.708	4.33－ 4.68
25	Mn	マンガン	Ｋα	1801.660	5.71－ 6.08
26	Fe	鉄	Ｋα	17964.511	6.21－ 6.59
29	Cu	銅	Ｋα	16875.717	7.83－ 8.24
50	Sn	スズ	Ｋα	13246.547	24.76－25.56
82	Pb	鉛	Ｌβ	17889.601	12.40－12.85

図31　溶着金属高電子密度箇所（内面）蛍光Ｘ線分析結果

［スペクトル］



［結果］

Z	元素	元素名	ライン	A(cps)	ＲＯＩ(keV)
14	Si	ケイ素	Ｋα	195.389	1.59－ 1.89
20	Ca	カルシウム	Ｋα	2431.070	3.52－ 3.85
22	Ti	チタン	Ｋα	518.588	4.33－ 4.68
25	Mn	マンガン	Ｋα	943.716	5.71－ 6.08
26	Fe	鉄	Ｋα	9491.509	6.21－ 6.59
29	Cu	銅	Ｋα	13260.767	7.83－ 8.24
50	Sn	スズ	Ｋα	6454.274	24.76－25.56
82	Pb	鉛	Ｌβ	27964.797	12.40－12.85

図32　溶着金属高電子密度箇所（外面）蛍光Ｘ線分析結果

溶着する金属の構成元素は銅、スズ、鉛と考えられ、試料が青銅製品の鋳造に用いられていた可能性は高い。また、X線透過撮影で確認できた高密度な箇所の分析結果では、高密度ではない箇所の結果と比較すると、外面で特に鉛を強く検出しており、高密度な箇所では鉛が偏在的に分布しているものと推定した。

付章３　富ノ森城跡の地点貝塚から得られた貝類遺体

黒住耐二（千葉県立中央博物館）
宮本由子（東京都埋蔵文化財センター）

１．はじめに

富ノ森城跡は、京都市伏見区の淀川左岸に位置する平安時代後期から江戸時代にかけての遺跡であり、今回、室町時代後半から安土桃山時代の溝と江戸時代の土坑から淡水貝類からなる地点貝塚が発見された。ここでは、両貝塚から堆積物の水洗選別を含め、得られた貝類遺体について報告する。

２．サンプル採取地点と処理方法

今回地点貝塚が認められたのは、以下の４地点であった。各地点の詳細は本報告３章を参照されたい。

溝1321/1322　４区第３面で認められた室町時代後半の南北溝で、タニシ類の堆積が認められた（図版22－64層、図33）。溝1322の方が溝1321よりもはるかに貝層の広がりが大きい。これらの溝の東西方向の断面から堆積物を採取した。溝1322ではタニシ類の堆積（以下、タニシ層）は、上部では破損した殻が目立った印象であったので（図34、スケールは15㎝。他も同様）、上下の２つの層に分けて採取を行った。

溝246　同じく４区第１面の安土桃山時代の東西溝で、二枚貝のイシガイ類（同定の結果、ほとんど全てマツカサガイであった）の堆積（以下、マツカサガイ層）が認められた（図版21－13層、図35）。断面から採取された２サンプルを対象とした（図36）。

東壁溝合流部　調査区の東壁で溝1320と溝246の合流部で、断面に上記の２つの溝では見られなかったドブガイ類が認められたので、別途のサンプルとした。いずれも、壁面からブロックとして堆積物を採取した。

土坑1010　４区第１面で認められた江戸時代の土坑で、タニシ類が大量に含まれていた（図37）。発掘時にタニシ類が取り上げられ、さらに水洗中に浮かんだ胎児殻等を別途回収されていたもので（図38）、約２リットルの水洗済みのタニシ類と浮遊部分の胎児殻をサンプルとして、微小貝類の検討のため再度水洗処理を行った。

溝1322のタニシ層上下層と採取されていた溝246の１サンプルの合計３サンプルについては、黒住のこれまでの方法（黒住, 1996：堆積物を9.5・4.0・2.0・1.0㎜のメッシュで水洗選別し、浮遊部分を0.5㎜未満のメッシュネットで回収）に準じて処理し、それぞれの残滓から貝類等を抽出した。このうちの溝246では僅かに貝殻が残存し、殻皮の残存状況は比較的良好であったので、アルコールに浸けて保存した。土坑1010のタニシ類に関しては、浮遊部分の胎児殻を含め再度水洗し、上記と同じメッシュネットで回収した。前述の３サンプル以外のものについては、５㎜メッシュで

図33　溝1322のタニシ層

図34　溝1322のタニシ層拡大

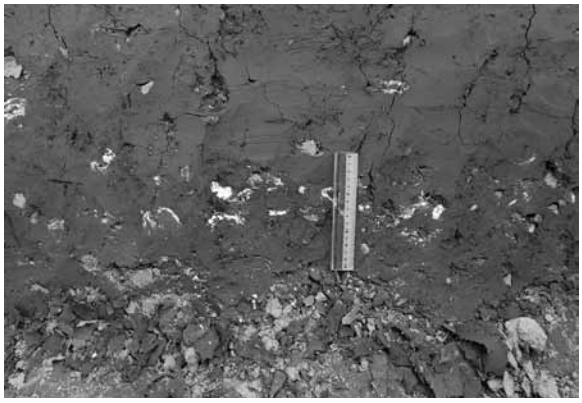


図35　溝246のマツカサガイ層

図36　処理したマツカサガイ層の取り上げ状態

図37　土坑1010オオタニシ出土状況（東から）

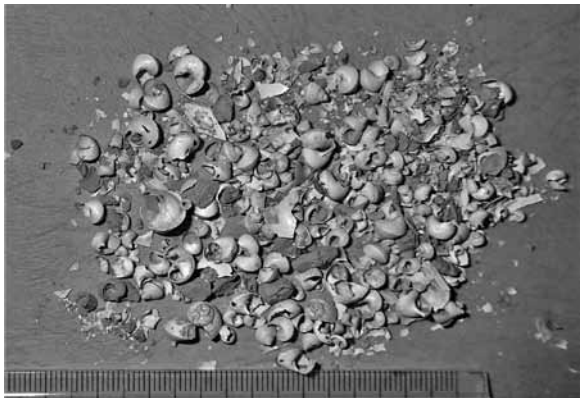


図38　土坑1010から回収されたオオタニシ胎児殻等

水洗し、残渣中から貝類遺体の抽出を行って頂き、乾燥および水漬けのものを対象とした。これらの全サンプルについて、種の同定・部位の確認・カウント・計測・焼けているかどうか等の観察を行った。

３．結果

今回の地点貝塚からは、タニシ類等の淡水巻貝類２科３種、陸産貝類２科２種、マツカサガイ等の淡水産二枚貝類２科６種、海産二枚貝類１科１種の12種が確認された（表３）。堆積物の水洗処理を中心とした結果の詳細を表４に示した。以下に、まず１．分類学的な取り扱いを記述し、２．遺構ごとの記載を行う。

（1）分類学的な取り扱い

A　タニシ類（図44）

今回得られたものは、室町時代の溝1321/1322と江戸時代の土坑1010ともに大形で、縫合のくびれはやや弱く、マルタニシに特徴的な成長休止線の縦肋（例えば宮本ほか, 2019）を持たないものであり、オオタニシに同定した。ただ、室町時代のものは縫合下がやや平坦で螺層が細く、一方江戸時代の群では全体に丸く、殻頂部は尖っており、殻形態に少し相違が認められた。室町時代のサンプル中には、小形で縫合がくびれないものが含まれており、このタイプのものはヒメタニシとした。両サンプル中に、確実にマルタニシに同定できるものは認められなかった。

B　ビワカワニナ類（図44）

体層下半の肋数が５本程度と少なく、ビワカワニナ類であることは確実だが、種分化の著しいこの仲間の同定に関しては、研究者の間でも見解が一致している訳ではないと考えられる。今回得られたものは、殻が短く、殻表の縦肋が不明瞭なことから、ハベカワニナとした。なお、２㎜と大形のビワカワニナ類の胎児殻も抽出されている（図41）。

C　イシガイ（図44）

１個体のみ鉸歯が確認できる個体が得られ、左殻の擬主歯は薄く板状で、従来タテボシと呼ばれていた琵琶湖水系に特徴的な三角形の擬主歯を持つものとは異なっていた。

D　マツカサガイ・オトコタテボシ・オバエボシ（図44）

マツカサガイ層から、この仲間の大量の殻皮が抽出された。現生個体では、この３種の識別は殻形と鉸歯の形態から比較的容易に識別できるものの、今回のサンプルでは石灰質の殻はほとんど

表３　富ノ森城跡の地点貝塚から得られた貝類

	生息域	由来	備考
腹足綱 Gastropoda			
タニシ科 Viviparidae			
オオタニシ *Cipangopaludina ussuriensis japonica*	淡水域	食用	
ヒメタニシ *Sinotaia qudarata*	淡水域	食用	
カワニナ科 Semisulcospiridae			
ハベカワニナ *Biwamelania habei*	淡水域	混獲	
ベッコウマイマイ科 Helicarionidae			
ハクサンベッコウ類似属 *Nipponochlamys*? sp.	陸域	混入	微小種
エゾエンザ科 Pristilomatidae			
ヒメコハクガイ類 *Hawaiia* sp. cf. *minuscula*	陸域	混入	微小種
二枚貝綱 Bivalvia			
イシガイ科 Unionidae			
イシガイ *Nadularia nipponensis*	淡水域	食用	
マツカサガイ *Pronodularia japanensis*	淡水域	食用	
オトコタテボシ *Inversiunio reiniana*	淡水域	食用	
オバエボシ *Inversidens brandti*	淡水域	食用	
ドブガイ類 *Sinanodonta* sp.	淡水域	食用？	
シジミ科 Cyreneidae			
セタシジミ *Corbicula sandai*	淡水域	食用	
マルスダレガイ科 Veneridae			
ハマグリ *Meretrix lusoria*	海域	食用	

表４　富ノ森城跡の地点貝塚の堆積物を中心に抽出された貝類遺体等の詳細

	タニシ層											マツカサガイ層						東壁溝合流部	近世土坑
遺構等	溝1321	溝1322*										溝246*					溝246		土坑1010*
考古年代	室町時代後半											安土桃山時代						安土桃山時代	江戸時代後半
処理量等	13352cc/14443g	下層＊:3000cc/1148g					上層＊:2600cc/958g					1300cc/ND					14688cc/13899g	11371cc/11521g	2000cc/ND**
メッシュサイズ等		9.5mm	4.0mm	2.0mm	1.0mm	LF	9.5mm	4.0mm	2.0mm	1.0mm	LF	9.5mm	4.0mm	2.0mm	1.0mm	LF			
残存量		2000cc/554g	50cc/28g	55cc/36g	45cc/30g		1100cc/284g	140cc/67g	60cc/38g	40cc/28g		ND	500cc/262g	90cc/64g	28cc/25g				
オオタニシ	209	115					151												92,ca.120u
ヒメタニシ		10					2												
タニシ類	ca.60f		5u	5u				4b,9u	4u	7u									
タニシ類／胎児殻等				1u		ca.220				2u	ca.80								ca.250
ハベカワニナ			1	?1w				1a											
ハベカワニナ？/胎児殻					1,1u														
科名																			
ハクサンベッコウ類似属																			1a
ヒメコハクガイ類																			1a
イシガイ		0/1u	1f	?5f	?5f				?1f	?3f									
マツカサガイ												38cv,6,2u,13pp/5,1u,22pp,15p					26cv,5,46u,86pp/9,35u,65pp,ca.400fp		
オトコタテボシ												1pp/1							
オバエボシ												1/0							
ドブガイ類																		ca.10f	6f
セタシジミ																		9,3u/7,1f	
ハマグリ							1f												
魚骨				1	1	1B/椎骨													
瓦器													1f						
漆喰？													1f						
”焼け土”													5f	3f/1圧痕					
炭化物 >3mm						10f					5f					36f			
炭化穀類																1,?1f			
イネ?/籾殻						1f													
種子						22					18					16			
植物片(材を含む) >5mm						30f					ca.10f		3(2B)f			87f			
礫		1						2					4						
昆虫					1f											7f			
蛹殻(ハエ類)						1													

＊黒住による水洗処理，　詳細　B:焼け, ca.:約, cv:合弁, f:破片, ND:データなし, p:殻皮, pp:後端部殻皮, u:殻頂, w:螺層

図39　溝246から水洗されたマツカサガイ殻皮

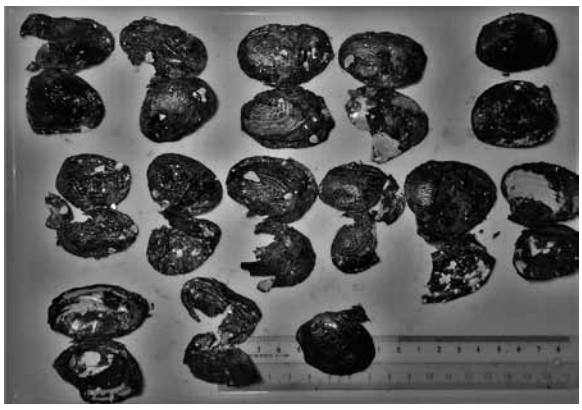


図40　合弁個体の多い溝246のマツカサガイ

溶けており（図39・40）、鋏歯の形態は不明であった。状態が悪い殻皮を含め、検討したほとんど全てのものでは、殻長は４㎝程度で、後部はそれ程伸びず、大多数のものに松毬彫刻が認められた。このことからマツカサガイに同定した。ただ、ごく僅かに存在していた大形で後部が伸長し松毬彫刻の弱いものをオトコタテボシに、小形で松毬彫刻を持たないものをオバエボシと同定した。

E　ドブガイ類（図44）

東壁溝合流部と土坑1010のそれぞれから、破片がまとまって得られた。土坑1010では、鋏歯のない右殻後背縁が得られており、カラスガイ類ではないことがわかる。他の破片も、およそこの破片と同様にやや膨らみを持っていることから、マルドブガイか、ヌマガイの可能性が高いと思われる。土坑1010では、推定殻長14㎝と10㎝程度の別個体の右殻が含まれており、最少個体数（MNI）は２個体となった。東壁溝合流部のものは推定殻長10㎝程度であった。

（2）遺構ごとの状況

A　溝1321/1322：タニシ層

オオタニシが大量に含まれており、ヒメタニシが僅かに混じるという組成であった。オオタニシでは殻頂が欠損している個体も認められたが、ほとんどが採取時や処理時の新しい破損であり、人為的に殻頂部を割った痕跡は認められなかった。タニシ以外では、僅かにハベカワニナとイシガイが抽出された。これらのタニシを含む淡水貝類では、殻皮が良好な状態で残存していた。

タニシ類の大きさとして、殻頂部が破損している個体で推定が可能なものを含め、ここでは殻高で表した。オオタニシでは、溝1321は平均37.07㎜（標準偏差SD=5.17、N=43、範囲26.9-49.0㎜）、溝1322は下層で平均45.39㎜（標準偏差SD=6.36、N=87、範囲31.5-62.7㎜）、上層で平均42.40㎜（標準偏差SD=8.58、N=56、範囲26.9-62.0㎜）、土坑1010では平均47.40㎜（標準偏差SD=5.97、N=67、範囲36.0-60.5㎜）であった。土坑1010＞溝1322下層＞溝1322上層＞溝1321の順に割と明確に小形化していることがわかる。ヒメタニシは溝1322からのみ確認されており、下層で平均25.89㎜（N=10）、上層で平均25.1㎜（N=2）と、少数ではあったが、上下でサイズに違いはないようであった。

海産種のハマグリの小破片が上層から１点得られた。また、下層からのみ、焼けた椎骨を含む小さな魚骨がごく少数抽出された。上下層の間では、ハマグリと魚骨の抽出状況が異なっていたが、

図41　得られた微小貝類
左からハベカワニナ（胎児殻）、ハクサンベッコウ類似属、ヒメコハクガイ類

いずれもごく少数であり、大きな意味はないと思われる。ただ、少し上層でタニシ類の密度が下層よりも低い様であった。

B　溝246：マツカサガイ層

貝類はイシガイ科の二枚貝だけが確認され、そのほとんどがマツカサガイであった（図39）。マツカサガイは二枚の殻が合わさった合弁の状態（cv）で（図40、表４）、殻皮だけのものでも左右が離れていないものも多かった。また、個体の確認がある程度可能な後端部の殻皮片（表４のpp）を識別して最少個体数殻を求めた結果、破損した殻皮が多いので精度は落ちるものの1.3リットルから65個体、14.7リットルから117個体と数十から百個体以上が処理した堆積物に含まれていた訳である。合弁個体を中心に計測できたマツカサガイの殻長は、平均40.18㎜（標準偏差SD=4.31、N=50、範囲32-48㎜）とマツカサガイとしては比較的大きなサイズに揃っていた。

ごく少数ではあったが、瓦器や“圧痕を有するものを含む焼け土”がタニシ層と異なって抽出されており、炭化穀類と思われるものも得られた。

C　東壁溝合流部

方法で述べたように、５㎜のメッシュで水洗された資料で、11リットルの堆積物中から、僅かにドブガイ類片と少数のセタシジミが抽出された。セタシジミの殻長は、平均25.94㎜（標準偏差SD=4.11、N=19、範囲19-32㎜）とかなり大きさの変異は大きかった。

ここは、溝1320と溝246が合流している部分であるが、タニシ類もマツカサガイも全く確認されなかった訳であり、今回の貝層が人為による地点貝塚であるということを明らかにできた点でもこの地点のサンプルの意義は大きいと考える。

D　土坑1010：近世のタニシ土坑

確認できたものは全てオオタニシのみであり、ヒメタニシ等の他のタニシ類は含まれていなかった。ただ他個体よりも膨らみの強いものがごく少数存在したが（図44－５）、マルタニシではないと考えた。なお、オオタニシには殻皮は全く残っていなかった。

浮遊部分も一度水洗されていたために、貝以外は炭化物を含め確認できなかった。ただ、殻内に残っていた胎児殻等は極めて多く、また２種の微小陸産貝類が抽出された。

表４に示したこの土坑から得られたドブガイ類は発掘時に確認されたもので、タニシ類に含まれていたものではない。このドブガイ類では、タニシ類とは異なり、殻皮が残存していた。

４．考察

（1）堆積環境と廃棄の場としての地点貝塚

溝1321/1322・溝246・東壁溝合流部は、発掘調査により、溝であることがわかっている。しかし、それぞれの地点貝塚が形成された時点での実際の水の存在や流量等は不明である。

溝1322の断面観察では、タニシ層は下方へ少し膨らむ凸レンズ状を呈しており（図版41－４、図33)、浅い溝状の地形に堆積したことは確実である。表４に詳細に示したように、ほとんどが大形のタニシ類からなっており、他の貝は極めて少ないことから、選択的にタニシ類を廃棄したことによって人為的に形成された貝層であることは確実だと考えられる。極めて薄質のタニシ類の胎児殻が大量に抽出されたにもかかわらず、他の微小貝類は淡水産・陸産種とも得られなかった。また、前述のようにタニシ等では殻皮が分解されておらず、良好な状態で残存していた。そして、殻の向きは様々で、その後の水流による影響はなく、廃棄時の状況を示していると考えられた。また、ごく少数であったがハエ類の蛹殻や昆虫片が認められた。これらのことから、タニシ層は水中でも、陸上でもない水に浸かる湿地の還元的な環境で形成されたと考えられる。同時に、タニシ層は比較的短い期間で、層の上に泥が堆積し、還元環境が維持されたことも推測される。ただ、断面観察により、タニシ層の上部では破損した殻が多く存在したことから、堆積した泥の上を人が歩いていたことも示していよう。

溝246の断面観察では、残存したマツカサガイの白い貝殻がおよそ水平に堆積していることがわかる（図35)。貝殻はかなり溶けてしまっているが、殻皮はよく残っていた。このことから、流れの緩やかな水底で堆積したものと推測される。マツカサガイ等の二枚貝しか確認できず、周辺に生息していたと考えられる淡水貝は全く得られなかったことから、上述の溝1322と同様に、人為的な短期間の廃棄により形成されたものと考えられる。ただ、ごく少数の小片ながら、瓦器等の人工遺物も抽出されており、溝1322よりも居住空間に近かったのかもしれない。

東壁溝合流部でも、他の２つの溝では認められなかったセタシジミとドブガイ類が確認されており、やはり人為的な廃棄だと想定されよう。

近世土坑1010からは、２種の陸産微小貝類が抽出され、オオタニシの殻皮は残存していなかったことから、この土坑は陸上に存在していたことがわかる。ただ、大形のドブガイ類には殻皮が残っており、ドブガイ類はオオタニシよりも後の時代に廃棄された可能性が高いと思われる。

堆積環境から想定してきたように、室町時代後半の溝1321/1322、安土桃山時代の溝246、東壁溝合流部は、湿地や浅い水底に、短期間のうちに特定の貝を利用した後に貝殻が廃棄されたものということが出来よう。京都盆地南西部の室町時代後期～江戸時代初期の大藪遺跡・大藪城跡の堀や溝から、マルタニシ・イシガイ・ドブガイ・マツカサガイ・カワニナ２種が報告されており（京都市埋蔵文化財研究所, 2011)、胎児殻を含めマルタニシは複数個体得られていることはわかるが、他の種の出土数は不明である。そのため、タニシ類の再同定が必要であるが、もしかすると富ノ森城跡と同様な廃棄の可能性も残る。ただ、複数の種が生息していたという自然遺体の組成を示して

おり、本遺跡の優占貝類の在り方とは異なっていると考えられる。また、今回のサンプルには貝以外に人工遺物が極めて少なかったことから、地点貝塚は一般的なゴミ捨て場とは異なり、作業後の廃棄場所と捉えられる。同時に、溝1321/1322のタニシと溝246のマツカサガイと組成が全く異なっており、この相違は考古年代が示す僅かな時間差か、何らかの意図で廃棄場所を違えたことによるものであろう。

（2）貝類の採集方法と採集場所の環境等

今回確認できた優占貝類は、オオタニシ・マツカサガイ・セタシジミの３種であり、オオタニシでは殻高４㎝程度、マツカサガイでは殻長４㎝程度、セタシジミでは殻長2.5㎝程度であった。いずれも比較的大きく、素手で採集することも可能であるが、僅かに混獲と考えられるカワニナ類が見られたことと大形のオオタニシは数十㎝程度の少し水深のある池沼に多いことから、採集は鋤簾のような道具を用いていたと考えられる。そして、その目合は最小でもセタシジミの小形個体の殻長19㎜から５㎜程度の粗いものだった可能性が高い。採集後、現場で種分けされ、遺跡へ運ばれたのであろう。

採集場所としては、マツカサガイは遺跡周辺の小河川で得られる可能性があるものの、僅かながら混じっていたオトコタテボシ・オバエボシは近隣の巨椋池からは知られているものの（黒田, 1963：この報告のセタイシガイは現在ではオトコタテボシと同種とされる）、小河川には生息していなかったと考えられる。オオタニシ・セタシジミも巨椋池から報告されており、特にオオタニシは水田ではなく池沼に多く生息する種であり（例えば波部, 1975；黒住, 2001）、巨椋池が採集地であった可能性が高いと推測される。近世期のオオタニシも、巨椋池で採集されたとして矛盾はないと考えている。

溝1321/1322のタニシ層において、上層と下層での採集された個体や胎児殻のサイズから、採集季節や採集期間の推定を検討したが（図42）、現時点では明確な結論を出すことができなかった。オオタニシの産下幼貝（≒大形の胎児殻）のサイズに関しては、京都盆地北部の深泥池での詳細な研究があり（滝, 1981：産下仔貝と表記）、親の殻サイズにより産下稚貝のサイズに違いが認められるものの、およそ9.5㎜で産みだされている。ただ、産下幼貝の季節変化は示されていないので、採集季節推定には直接関連させることはできない。ただ、得られた胎児殻には、上述の9.5㎜よりも小さな個体も多く、まだ胎児殻として親の体内に存在していたものがかなり含まれていることは明らかであった。このことは、採集した殻と共に、胎児殻のある“内臓”も同じ場所に廃棄されたことと、食用には、腹足を中心とした“筋肉”が利用されていたことを示している。

（3）貝類の利用方法

オオタニシ・マツカサガイ・セタシジミの３種の淡水産貝類は、当然、食用になったものである。ただ、溝1321/1322のタニシ層と溝246のマツカサガイ層の表４に示した少量の堆積物から数十から百個体程度が得られており、遺構全体としては少なく見積もっても数百個、多ければ数千個

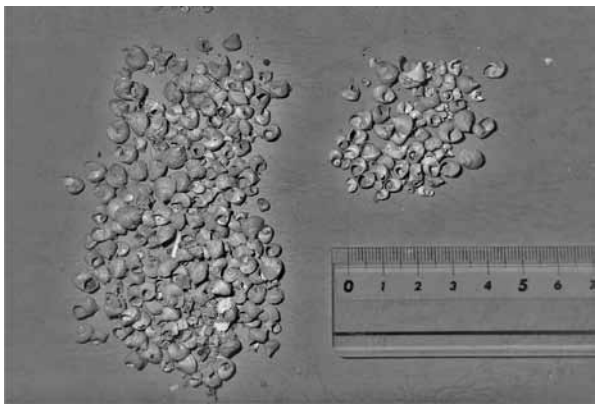


図42　溝1322から抽出されたタニシ類の胎児殻や幼貝

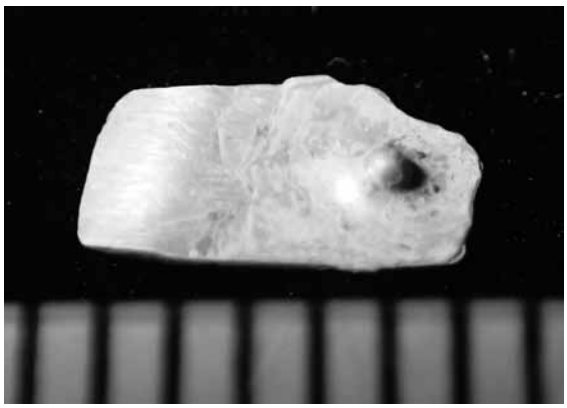


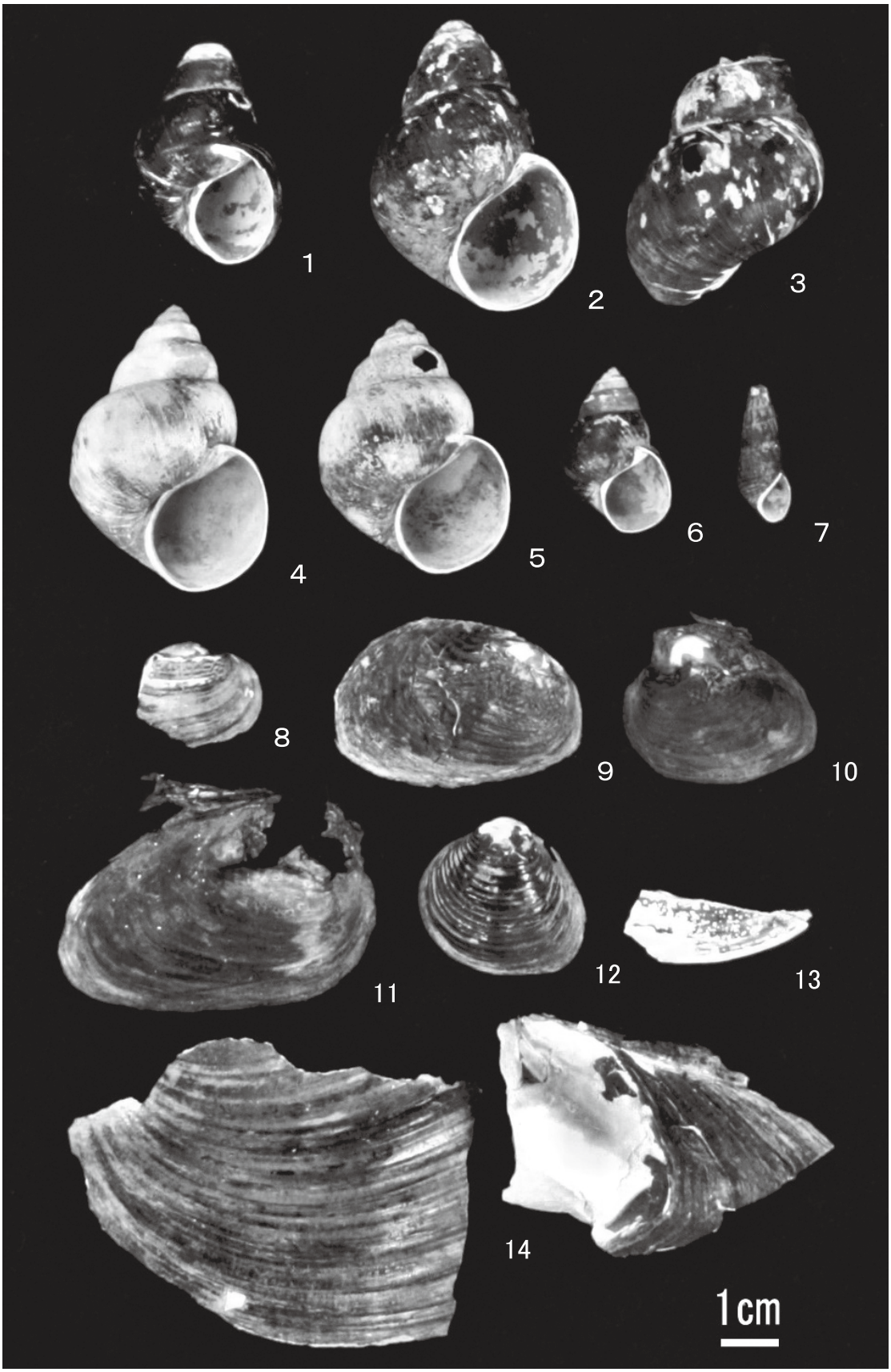
図43　イシガイ片に認められた真珠

もの単一種の利用は、当然、日常的な食用残滓とは考えられない。東壁溝合流部で確認された10個体程度のセタシジミは、逆に一般的な利用の残滓であるように思われる。

タニシ類は内陸部で縄文時代から食用とされている貝であり、本遺跡では、茹でて身を取り出し、内臓を取り除き、筋肉部をまとめて他集団に“売られていた”と想定できる。そして、タニシ類の食用方法としては、味噌和え・煮つけ等が知られており（例えば波部, 1975；新宿区若宮町遺跡調査団, 1998）、乾燥させる用法（≒干し貝）は少ない。つまり、身を取り出したのち、短期間に販売を行ったと考えられる。一方で、“暫く容器中で活動させて、殻内に取り込んだ泥をはかせてから身を取り出す”というのが通常の前処理方法である。単純なことであるが、採集－前処理－処理－販売という過程およびその期間を想定した訳である。近世でも、状況に変化はなかったと考えられる。ただ、殻高は近世土坑1010＞溝1322下層＞溝1322上層＞溝1321の順に小形化していたことから、かなり集中して採集したことにより、溝1321では小形個体しか得られなかったことも十分に想定される。溝1321の貝層が溝1322よりもかなり小さいことも、オオタニシの減少に起因するとも考えられる。そして、個体数はごく僅かであったものの、ヒメタニシでは小形化しておらず、ヒメタニシは基本的に採集・利用対象外だった可能性が高い。ヒメタニシの密度が低かったことも考えられるが、タニシ類でも種を選択する余裕があったように捉えられるのではないだろうか。

イシガイ類（以下、マツカサガイを含めて記述する）は、縄文時代の遺跡から真珠採集も想定され（黒住, 2004）、優占することはなく出土している。過去には食用としても記録されることもあるが（稲葉, 1974）、大形のドブガイ類と区別されず、あるいは混同されて報告されている。現時点で、イシガイ類を食用に利用しているのは、黒住の知る限り、琵琶湖で佃煮として用いられている例のみである。なお、当然、真珠採集とは考えられないものの、本遺跡でもタニシ層下層からイシガイ片に付いていた微小な真珠が確認できた（図43）。

このようなイシガイ類が大量に出土する状況は、本遺跡の溝246では安土桃山時代と時代が特定されたが、関東地方では中世～近世としていくつかの報告がある。栃木県宇都宮市の北の前遺跡では土坑覆土から500個体以上のマツカサガイ類と10個体程度のマルタニシ・カワニナの出土例（金子, 2002）、千葉県印旛村の松虫陣屋跡では600個体以上のイシガイ類と35個体のタニシ類（マルタニシ・オオタニシ）および数点のアワビ類とアカニシの出土例（西野, 2010）および千葉県柏市の



1.オオタニシ(溝1321) 2･3.オオタニシ(溝1322) 4･5.オオタニシ(土坑1010) 6.ヒメタニシ(溝1322) 7.ハベカワニナ(溝1322) 8.イシガイ(溝1322) 9.マツカサガイ(溝246) 10.オバエボシ(溝246) 11.オトコタテボシ(溝246) 12.セタシジミ(東壁溝合流部) 13.ハマグリ(溝1322) 14.ドブガイ類(土坑1010)

図44　地点貝塚出土中大形貝類

須賀井遺跡から約１万個体のイシガイ類と７個体のオオタニシ・合計４個体の海産貝類３種（黒住, 2017）が知られている。この中で、日本全国の遺跡出土動物遺体を長年に渡り詳細に研究されてこられた金子浩昌先生は北の前遺跡の報告中で、「内陸の遺跡でこのように大量の貝類［マツカサガイ］が検出されたのは珍しく、当時の貝の食用としの利用法を示していて興味深い」（金子, 2002）と記し、同様に千葉県内の遺跡出土動物遺体を熟知されている西野雅人氏は松虫陣屋遺跡で、「食材としての利用は中世以降に拡大したものとみられ」（西野, 2010）と述べ、中世から近世初期に特徴的な状況だということが再確認でき、類似例が、時代を特定して関西地方でも確認された訳である。

これらのイシガイ類の大量利用に関して、黒住（2017）は、「一つの考え方として、茹でて身（＝軟体／肉）を取り出し、干す等して（未だ佃煮は広まっていなかったと考えている）戦国期の保存食として利用されたということもあるのではないだろうか」と考えた。同時に、大形で体内に泥を多く採り込んでいるドブガイ類と小形のカワニナ類の未利用等や比較的短期間に一挙に処理・廃棄された可能性の高いことを傍証とし、さらに海産の貝類や魚類の流通・利用状況と正確な廃棄の歴年代の明示を検証する項目として挙げた。

本例は室町時代後半から安土桃山時代と年代がかなり絞り込まれ、江戸時代前期の京の都での貝類利用も明らかになっており、上述の項目を検証できる例と考えられる。京の都では、当然、遺跡の性格によって組成は異なるものの、ハマグリを中心にサザエ・アカガイ・アワビ類・バイといった海産貝類が優占するようになり、タニシ類・イシガイ類は含まれていない（丸山ほか, 2005, 2007）。タニシ類は前述のとおりオオタニシを選択して、本遺跡のように別な場所で処理され、身だけが持ち込まれた可能性が高いものの、やはりイシガイ類は欠落している。つまり、本遺跡では大阪湾からの海産魚介類の供給がかなり少なかった可能性も十分に想定される。ただ、今回の地点貝塚は、特殊化した廃棄と考えており、日常的な残滓とは異なる点にも注意は必要である。また、富ノ森城跡のマツカサガイは、その多くが合弁個体であった。これは廃棄場所から殻が動かなかった結果であるが、1個ずつ剥いて身を外した時には両殻が離れることも多いと想定されるが、大量の貝を茹でて、硬くなっても良いので身だけを短時間で外した結果、両方の殻は離れにくいという処理方法も示していると考えられる。これらのことから、“戦国期の保存食としてのイシガイ類干し貝利用”という想定を少し補強できたのではないかと考えている。

一方、現代に食用とされているタニシはマルタニシであり（波部, 1975）、オオタニシの利用例はない訳ではないが少ない。マルタニシは水田に多く生息する種である（波部, 1975；黒住, 2001）。今回のサンプル中には、マルタニシに同定できる個体は含まれておらず、タニシ層を残した集団は水田でタニシ採集を行っていなかった可能性が高い。当然、当時は周辺に水田が広がっていたはずであり、マルタニシも生息していたであろうが、水田での“漁業権”等によりマルタニシを採集出来なかったのかもしれない。同様に、中近世の江戸周辺でも、遺跡からまとまって出土しているタニシ類は、本遺跡と同じオオタニシであり（江上・大石, 1996；新宿区若宮町遺跡調査団, 1998）、やはり何らかの水田での農民との間に採集規制が存在していたのではないかと思われる。

黒住は淡水産のマシジミは近世期に国外から持ち込まれた移入種（≒外来種）だろうという想定をいくつかの遺跡出土貝類例から示してきたが（黒住, 2014）、西日本で物流の中心地であった京の都に隣接する本遺跡でも、混獲を含めマシジミは確認されなかった。この点でも、今回の地点貝塚のデータは、マシジミが未だ生息していなかった可能性を強める興味深いものである。

謝辞　東海大学の丸山真史先生には旅費を含む遺跡調査の機会を与えて頂き、公益財団法人京都市埋蔵文化財研究所の柏田有香氏・中谷正和氏には発掘現場でのアドバイスを、関　晃史氏にはサンプルの水洗処理や編集等でお世話になった。記して、感謝したい。また本報告には、科学研究費補助金（21K01007：代表黒住）を用いた。

参考文献

稲葉 亨, 1974. 郷土の味. ちりぼたん, 8 (3) : 54-62.

江上智恵・大石精一. 1996. 柴又帝釈天遺跡出土の貝類について. 柴又帝釈天遺跡Ⅶ, 葛飾区遺跡調査会調査報告書, (36) : 404-408.

金子浩昌. 2002. 北の前遺跡出土の貝類・獣骨. 北の前遺跡, 栃木県埋蔵文化財調査報告, (252) : 460-462.

京都市埋蔵文化財研究所（編）. 2011. 大藪遺跡・大藪城跡, 京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告, (2010-13) : 1-40.

黒住耐二. 1996.用見崎遺跡調査でコラムサンプルから得られた貝類遺存体（予報）. 用見崎遺跡, 研究室報告, (31) : 31-37. 熊本大学考古学研究室.

黒住耐二. 2001. トキとタニシ－水田の変遷を示す動物たち, BERDER, 15 (4) : 30-33.

黒住耐二. 2004. 千葉県井野長割遺跡の盛土部貝塚から出土した微小貝類. In 小倉和重（編）, 井野長割遺跡（第５次調査）, pp. 5-8, pl. 37. 佐倉市教育委員会.

黒住耐二. 2014. 淡水二枚貝マシジミは近世期の外来種か－遺跡出土貝類からの証明. In 公益財団法人髙梨学術奨励基金（編）, 髙梨学術研究基金年報（平成25年度）, pp. 67-73. 公益財団法人髙梨学術奨励基金.

黒住耐二. 2017. 須賀井遺跡から得られた貝類遺体. 須賀井遺跡, 縄文時代以降編, 千葉県教育委員会埋蔵文化財調査報告, (18) : 102-109.

黒田徳米. 1963. 巨椋池の貝類. Venus, 22 (3) : 295-297, 5 pls.

新宿区若宮町遺跡調査団（編）. 1998. 東京都新宿区若宮町遺跡. 巻頭4 pls. + 105 pp. + 2pls. 新宿区若宮町遺跡調査団.

滝 明夫. 1981. 深泥池のオオタニシ繁殖状況. In 深泥池学術調査団（編）, 深泥池の自然と人, 学術調査報告書, pp. 232-237. 京都市文化観光局文化財保護課.

西野雅人. 2010. 貝類. 印旛村松虫陣屋跡, 千葉県教育振興財団調査報告書, (636) : 123-124, pl. 40.

波部忠重. 1975. 貝の博物誌.カラー自然ガイド25. 151 pp. 保育社.

丸山真史・北野信彦・竜子正彦. 2005. 出土した軟体動物遺存体. 平安京左京六条三坊五町跡, 京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告, (2005－8) : 123-128.

丸山真史・富岡直人・平尾政幸. 2007. 本多甲斐守京邸出土の動物遺存体. 研究紀要, (10) : 227-244. 京都市埋蔵文化財研究所.

宮本由子・松本建速・北条芳隆. 2019. 西表島網取遺跡から出土したマルタニシの考古学的考察－神奈川県産現生資料との比較から－. 海と考古学, (12) : 1-31.

付章４　富ノ森城跡２次調査出土の脊椎動物遺存体

丸山真史（東海大学）

脊椎動物遺存体は15点が出土しており、それらのうち種類や部位などが判明したものは12点である（表５）。13点は調査中に肉眼で確認して取り上げ、魚骨２点は貝層の水洗篩別で採取した。

魚類は種類が判明しない椎骨と鰭棘が１点ずつ、計２点である。爬虫類はイシガメ１個体分の背甲板４分の３程度が出土しており、右後方の肋骨板や縁骨板が欠損している。鳥類は、ハクチョウ属の橈骨（右）、脛足根骨（右）１点ずつ、計２点が出土している。哺乳類は、最も多く９点を同定した。ウシは顎骨から遊離した臼歯１点、橈骨（左）、踵骨（右）中足骨（右）が１点ずつ、計４点が出土している。橈骨の遠位端最大幅（Bd）80.2㎜、中足骨の近位端最大幅（Bp）51.7㎜を測り、それぞれ体高125～130㎝、120～125㎝と推定される[1)]。橈骨は、遠位部で切断されており、切断面は平坦であり、鋸を使用したと推測される。ウマは顎骨から遊離した切歯、寛骨（右）、脛骨（左）が１点ずつ、計３点が出土している。脛骨の遠位端最大幅（Bd）66.5㎜を測り、体高125～130㎝と推定される[2)]。これらのほかに、シカの枝角１点、ヒトの脛骨（右？）１点が出土している。鹿角は、外面が青灰色ないし白色を、内面が黒色を呈し、長時間あるいは高温の被熱が考えられる。

１次調査ではヒト、ウシ、シカが出土しており、ウシやシカの四肢骨には多数の解体痕がみられ、使役以外にも皮革や食肉として資源を利用した可能性が指摘される（丸山・関2021）。ウマの脛骨には解体痕がみられ、ウシも含めて散乱状態で出土しており、解体されたと考えられる。また、ウシの橈骨は遠位端が切断されており、骨角器の製作や骨髄の抽出が想定される。鳥類では、ハクチョウ属が出土しており、脛足根骨の骨幹部には刃物による浅い傷が見られる。解体時の直線

表５　富ノ森城跡２次調査出土の骨同定一覧表

地区	遺構	時期	大分類	小分類	部位	左右	備考
4区	溝1002	安土桃山時代	哺乳綱	ウマ	脛骨	左	Bd66.5㎜、切傷
4区	溝1002	安土桃山時代	哺乳綱	ウシ	橈骨	左	Bd80.2㎜、切断
4区	溝1002 ＊1	安土桃山時代	哺乳綱	ヒト	脛骨	右？	
4区	溝1003	室町時代後半	哺乳綱	ウシ	中足骨	右	Bp51.7㎜
4区	溝1003	室町時代後半	哺乳綱	ウシ	踵骨	右	
4区	溝246	安土桃山時代	哺乳綱	ウマ/ウシ？	不明	－	
4区	溝1321	室町時代後半	哺乳綱	ウマ	寛骨	右	
4区	溝1320	室町時代後半	爬虫綱	イシガメ	背甲板	－	
4区	溝1320	室町時代後半	鳥綱	ハクチョウ属	橈骨	右	Bd17.0㎜
4区	溝1320	室町時代後半	鳥綱	ハクチョウ属	脛足根骨	右	切傷
4区	溝1323	室町時代後半	哺乳綱	ウマ	遊離歯(切歯)	－	若齢/壮齢
4区	溝1322 ＊2	室町時代後半	硬骨魚綱	不明	鰭棘	－	
4区	溝1322 ＊2	室町時代後半	硬骨魚綱	不明	椎骨	－	
4区	溝1711	鎌倉時代後葉	哺乳綱	シカ	枝角	－	被熱
5区	溝2025(古)	室町時代後半	哺乳綱	ウシ	遊離歯(臼歯)	－	小片

＊1 図版12:48層、＊2 図版22:67層

1.ハクチョウ属 脛足根骨(右) 2.ハクチョウ属 橈骨(右) 3.ヒト 脛骨(右？) 4.イシガメ 背甲板
5.ウシ 中足骨(右) 6.ウシ 踵骨(右) 7.ウシ 橈骨(左)遠位部(上:関節面、下:後面)
8.ウマ 寛骨(右) 9.ウマ 脛骨(左)

図45　富ノ森城跡２次調査出土の脊椎動物遺存体

的な切傷とは異なり、浅く湾曲する傷もみられることから、肉を削いだ痕跡と推測される。イシガメは背甲板の約４分の３が保存されているが、頭部や四肢の骨格部位の出土はない。冬眠などで土中にそのまま取り残されたものではなく、人為による廃棄物とみられる。寛永20年（1643）に成立した『料理物語』には、「真亀　すひ物、刺身、いしがめも同」と記載され（吉井1978）イシガメが食用とされた可能性もある。

従来、中世の動物利用は都市、城郭、武家屋敷跡などの出土資料から明らかにされてきたが、本資料によって中世の集落における動物利用の一端を明らかにできたことは有意義である。

註

１）　西中川ほか（1991）に基づく久保・松井（1999）に倣う。

２）　註１に同じ。

参考文献

久保和士・松井　章「家畜その２－ウマ・ウシ」『考古学と動物学』同成社　1999年

西中川　駿編『古代遺跡出土骨から見たわが国の牛、馬の渡来時期とその経路に関する研究』平成２年度文部省科学研究費補助金（一般研究Ｂ）研究成果報告　1991年

丸山真史・関　晃史「自然科学分析２」『富ノ森城跡』京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告2020－６　公益財団法人京都市埋蔵文化財研究所　2021年

吉井始子「翻刻　料理物語」『江戸時代料理本集成』臨川書店　1978

付章５　富ノ森城跡の大型植物遺体

関　晃史（公益財団法人京都市埋蔵文化財研究所）

１．はじめに

ここでは富ノ森城跡２次調査において実施した土壌分析から、大型植物遺体について調査した結果について報告する。本遺跡は昨年度の１次調査によって初めて確認された中世から近世の遺跡であり、その際の土壌分析では、鎌倉時代後半の井戸と鎌倉時代末から室町時代前半の土坑被熱土から得られた大型植物遺体について報告を行っている。今回の調査では室町時代後半、安土桃山時代、近世の３時期の地点貝塚が確認され、その性格を考える一助とすることを目的とし、主に溝1322の最下層（タニシ層直下、図版22－67層）を紹介する。なお、同溝のタニシ層と安土桃山時代の溝246の二枚貝層については、全ての同定作業を終えておらず、途中経過を述べるに留める。

２．土壌分析試料と分析方法

試料としたのは上述の遺構からサンプリングした試料１（溝1322最下層：2,194ｇ／約1,404ml）及び、試料２（溝1322タニシ層（図版22－64層）：3,505ｇ／約2,498ml）、試料３（溝246二枚貝層（図版21－13層）：3,568ｇ／約3,741ml）である。これらの試料は５㎜→２㎜→１㎜の篩と0.25㎜のシルクスクリーンを用いて水洗選別し、主にフローテーション法による抽出作業を行い、実体顕微鏡を用いて同定を行った。試料２、試料３については５㎜メッシュの篩から抽出したもののみ、同定と最小個体数の確認を終えている。

３．土壌分析結果

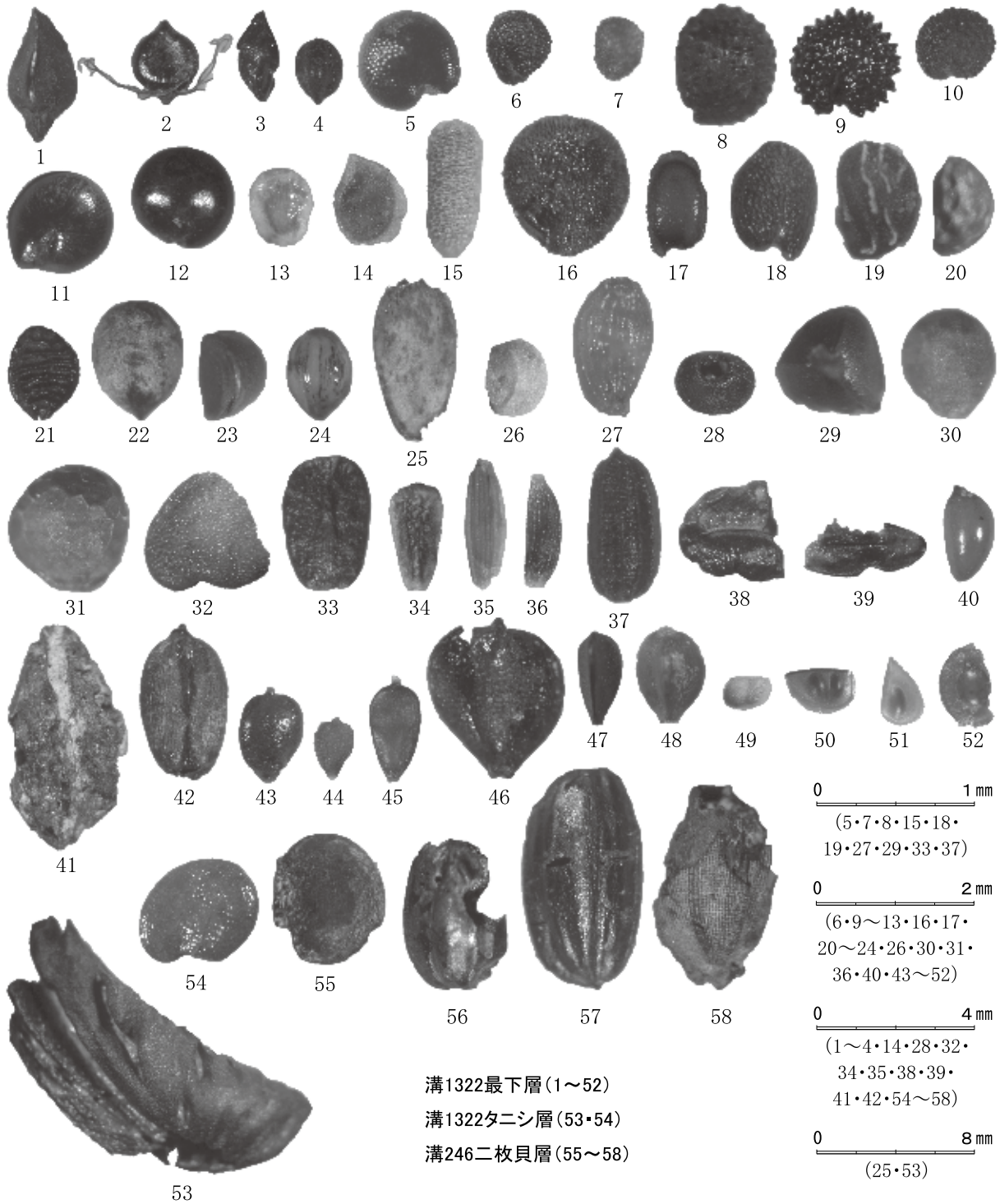
得られた結果を表６に、主な大型植物遺体の顕微鏡写真を図46に示し、概要を以下に述べる。

試料１における大型植物遺体の検出は、木本類はキイチゴ属、ツツジ科のみの検出で、多くは草本類であった。草本類にはザクロソウやスベリヒユ、ナデシコ科、ヒユ属、シソ属といった畑や道端に生育する種と、タデ科やタカサブロウ、スズメノテッポウ属、カヤツリグサ科といった湿地や水田に生育する種が多く確認された。京都ではあまり見ないキケマンも確認した。植物遺体とは異なるが、ミジンコの耐久卵を多数確認した。食用の大型植物遺体では、キイチゴ属、ウリ類（モモルディカメロン）、シソ属、ナス、炭化オオムギ、炭化コムギが挙げられる。炭化した穀物類では端部を失いオオムギ、コムギの分類が困難なものを炭化ムギ類とし、表面を欠失し、被熱で泡状を呈しているものを炭化穀類とした。試料２についてはタニシの破片を多く含み、モモ、ナス、ナス属、ウリ類（モモルディカメロン）、炭化コムギ、炭化ムギ類が確認できた。未同定のものが多いものの、その他、試料１とよく似た構成の大型植物遺体を抽出しており、ミジンコの耐久卵も多い。試料３では炭化マメ類、ナス、炭化オオムギ、炭化イネ、炭化コムギを確認したほか、バラ科の棘もみられる。また、こちらでもミジンコの耐久卵が確認できている。炭化した状態でのイネの

表6　種実一覧表

図No.	和名	部位	科名	生育場所	検出数(最小個体数)		
					溝1322最下層	溝1322タニシ層	溝246二枚貝層
1	ヤナギタデ近似種	果実	タデ	水辺・湿地	4		
2	サナエタデ近似種	果実	タデ	道端・田畑	20		
3	ギシギシ属	果実	タデ	田畑の畔・道端・湿地・水辺	2		
4	タデ科(三稜形)	果実	タデ	水辺・湿地・道端	8		
5	ザクロソウ	種子	ザクロソウ	道端・畑	51		
6	スベリヒユ	種子	スベリヒユ	道端・畑	7		
7	ツメクサ	種子	ナデシコ	道端	24		
8	ノミノフスマ	種子	ナデシコ	水田・畑・野原	26		
9	ハコベ属	種子	ナデシコ	道端・畑	80		
10	ナデシコ科	種子	ナデシコ		172		
11	アカザ属	種子	アカザ	道端・荒地	13		
12	ヒユ属	種子	ヒユ	畑・道端	49		
13	タガラシ	果実	キンポウゲ	水田	47		
14	キンポウゲ属	果実	キンポウゲ	山野・道端	15		
15	オトギリソウ属	種子	オトギリソウ	湿地	6(内2点炭化)		
16	キケマン	種子	ケシ	海岸・道端	26		
17	アブラナ科	種子	アブラナ	水田・水辺・道端	8		
18	イヌガラシ属	種子	アブラナ	野原・道端	13		
19	キジムシロ属	果実	バラ	野原・河原	8		
53	モモ	核	バラ	栽培・庭木		1(食痕あり)	
20	キイチゴ属	核	バラ	山野・道端	3		
55	マメ類(炭化)	種子	マメ	栽培			1
21	カタバミ属	種子	カタバミ	道端・畑	10		
22	エノキグサ	種子	トウダイグサ	道端・畑	8		
23	コミカンソウ属	種子	トウダイグサ	道端・畑	4		
24	スミレ科	種実	スミレ	道端・山野	3		
25	ウリ類(モモルディカメロン)	種子	ウリ	栽培	3	1	
26	チドメグサ属	果実	セリ	道端・庭・野原	14		
27	ツツジ科	種子	ツツジ		16		
28	ヤエムグラ属	果実	アカネ	山野・道端・湿地	2(内1点炭化)		
29	キュウリグサ属	果実	ムラサキ	畑・道端・山地	1		
30	イヌコウジュ属	果実	シソ	山野	6		
31	シソ属	果実	シソ	道端	50		
54	ナス属	種子	ナス	道端・山野		3	
32	ナス	種子	ナス	栽培	2	2	3
33	クワガタソウ属	種子	ゴマノハグサ	畑・道端・水田・沼・山地	2		
34	タカサブロウ	果実	キク	湿地・水田	147		
35	ヤブタビラコ	果実	キク	水田・野原	1		
36	キク科	果実	キク	野原・湿地	1		
37	コナギ	種子	ミズアオイ	水田	30(内3点炭化)		
38	ツユクサ	種子	ツユクサ	畑・道端	1		
39	イボクサ	種子	ツユクサ	水田・沼	2		
40	スズメノテッポウ属	果実	イネ	水田・畑	21		
41	オオムギ(炭化)	果実	イネ	栽培	1		2
56～58	イネ(炭化)	果実	イネ	栽培			4(内2点籾付)
42	コムギ(炭化)	果実	イネ	栽培	5	1	2
—	ムギ類(炭化)	果実	イネ	栽培		3	
—	穀類(炭化)	果実	イネ	栽培	3片		
43	アゼガヤツリ近似種	果実	カヤツリグサ	湿地	2		
44	テンツキ近似種	果実	カヤツリグサ	湿地	3		
45	スゲ属	果実	カヤツリグサ	湿地・水田・山地	2		
46	ホタルイ属	果実	カヤツリグサ	水田・溝・湿地	9		
47	カヤツリグサ属(三稜形)	果実	カヤツリグサ	水田・湿地・道端	52		
48	カヤツリグサ科(三稜形)	果実	カヤツリグサ	湿地・山野・水田・道端	3		
49	ミジンコA(タマミジンコ形)	耐久卵	ミジンコ	水中	331		
50	ミジンコB(プリカリアミジンコ形)	耐久卵	ミジンコ	水中	34		
51	ミジンコC(オカメミジンコ形)	耐久卵	ミジンコ	水中	4		
52	コケムシ類	休眠芽	コケムシ	水中	1		
—	バラ科トゲ	棘	バラ				41
—	不明炭化種実	果実？				2	

溝1322最下層(図版22:67層 2194g、約1,404ml)、溝1322タニシ層(図版22:64層 3505g、約2,498ml)、溝246二枚貝層(図版21:13層 3568g、約3,741ml)



1.ヤナギタデ近似種　2.サナエタデ近似種　3.ギシギシ属　4.タデ科三稜形　5.ザクロソウ　6.スベリヒユ　7.ツメクサ　8.ノミノフスマ
9.ハコベ属　10.ナデシコ科　11.アカザ属　12.ヒユ属　13.タガラシ　14.キンポウゲ属　15.オトギリソウ属　16.キケマン　17.アブラナ科
18.イヌガラシ属　19.キジムシロ属　20.キイチゴ属　21.カタバミ属　22.エノキグサ　23.コミカンソウ属　24.スミレ属
25.ウリ類(モモルディカメロン）　26.チドメグサ属　27.ツツジ科　28.ヤエムグラ属　29.キュウリグサ属　30.イヌコウジュ属　31.シソ属
32.ナス　33.クワガタソウ属　34.タカサブロウ　35.ヤブタビラコ　36.キク科　37.コナギ　38.ツユクサ　39.イボクサ　40.スズメノテッポウ属
41.オオムギ（炭化）　42.コムギ(炭化）　43.アゼガヤツリ近似種　44.テンツキ近似種　45.スゲ属　46.ホタルイ属　47.カヤツリグサ属三稜形
48.カヤツリグサ科三稜形　49.ミジンコ耐久卵(タマミジンコ形）　50.同左(ブリカリアミジンコ形）　51.同左(オカメミジンコ形)
52.コケムシ類休眠芽　53.モモ　54.ナス属　55.マメ類(炭化）　56～58.イネ(炭化)

図46　大型植物遺体等実態顕微鏡写真

確認は、本遺跡において初めてである。

以上のように、大型植物遺体について述べてきたが、１次調査で既報告の鎌倉時代後半の井戸では、乾燥環境に生育する種が多い傾向が表れており、それと比較すると今回対象とした室町時代後半以降の遺構では、湿潤な環境に生育する種の検出が増加している。このような傾向は１次調査での層相観察において述べられている、室町時代前半以降に周辺河川の河床上昇が起きたとする考えと一致するものである。多く検出したミジンコの耐久卵は、水中に生息するミジンコが生存困難な環境に変化した際に有性生殖によって作られるものであり、主に水温の過度な変化や個体過密、水の枯渇といった状況にあったことを示唆している。今回対象とした遺構のように、人為的な溝の場合では様々な条件が考えられるが、常に水が供給され、流れているといった状態ではないと言える。溝1322については遺構が調査区外へ続くため全容が明らかではないが、水溜のような性格であった可能性は高いと考える。この耐久卵がいつ作られたかについては、溝1322の最下層、タニシ層、溝246二枚貝層で確認できるため、これら貝の廃棄時、または廃棄直後には耐久卵が形成される環境にあったと言えるものの、耐久卵の寸法を考えると貝層を抜け試料１の土壌まで落ち込むことは十分可能なため、廃棄前に形成される環境にあったかは不明としたい。終わりに、今後の課題となってしまった試料２、試料３の詳細な同定結果については、改めて別の形での報告とする。

参考文献

中山至大・井之口希秀、南谷忠志『日本植物種子図鑑』 東北大学出版会　2000年

石川茂雄『原色日本植物種子写真図鑑』 石川茂雄図鑑刊行委員会　1995年

林弥栄 編『山渓カラー名鑑　日本の野草』（株）山と渓谷社　1986年

林弥栄 編『山渓カラー名鑑　日本の樹木』（株）山と渓谷社　1986年

浅野貞夫『原色図鑑　芽ばえとたね－植物３態／芽ばえ・種子・成植物－』（株）全国農村教育協会　1996年

中谷正和・伊藤　潔・南　孝雄『富ノ森城跡』京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告2020－６　公益財団法人京都市埋蔵文化財研究所　2021年

付章６　富ノ森城跡出土の柿経（こけら）について

北村　彩・関　晃史（公益財団法人京都市埋蔵文化財研究所）

１．はじめに

安土桃山時代の溝1002から出土した柿経は、写経された薄い板を重ね、その側面に書かれた墨書から、永禄十二年（1569）五月二十六日に完成ないし奉納された資料と考えられる。

柿経は、近畿地方を中心に全国各地で約150例の発見事例がある（表７）。発見に至る経緯は様々であるが、社寺に伝えられてきた資料や御堂の天井裏や床下、仏像胎内といった場所から発見される事例もあり、実際の現存資料はさらに多いものと思われる。これら発掘調査に伴わない資料は、ここでは便宜的に伝世資料として取り扱う。一方、発掘調査で出土する資料でみると池や溝、河川からの出土が多く、出土遺構の性格によるものか、散逸して数枚～数十枚程度の出土が大半であり、千枚を超える出土事例は京都府内では初めてである。柿経に年号の書かれた出土資料としては全国で15例目であり、そのうち束の側面に紀年を有する資料では本例が５例目、出土資料に限ると明確に確認できるのは、清州城下町遺跡と今回の富ノ森城跡出土資料の２例のみである（表８）。今回出土した柿経については、現在も整理作業を続けているため、途中段階での報告となるが、これまでの成果について以下に述べる。

２．柿経について

柿経とは、死者の追善供養や自身の死後の安楽を願い、薄い板に経文を写経したもので、平安時代後期から江戸時代中期にかけて作製されたと考えられている。柿経の形状は斎串や卒塔婆を小型化した形状に似ており、頭部と下端部の形状から分類がなされている[1)]（図47）。写経の対象となる経典は妙法蓮華経（以下、法華経）が最も多いが、般若心経や阿弥陀経など様々な経典を写経したものがみつかっている。これまでに確認されている最も古い柿経は、京都市伏見区の鳥羽離宮跡（124次調査）から出土した12世紀後半の資料とされている。また、同じく鳥羽離宮跡（77次調査）においても平安時代後期の遺構から、柿経が出土している。文献にみられる初見は「百錬抄」養和元年（1181）十月十一日条にあり、ここではこけら葉を俵十二に詰めて東海西海に流したと記されている[2)]。最も時代の下る資料としては、奈良県岩蔵寺の毘沙門天立像胎内から発見された柿経があり、この資料には正徳元年（1711）の紀年銘が確認されている。

３．富ノ森城跡から出土した柿経

富ノ森城跡の発掘調査では、上述した溝1002から大量の柿経が出土している。同溝からは人骨、位牌が出土しており、柿経が被さる形で直下からは卒塔婆が出土している。出土状況は、頭を西側に向けて扇を広げたように倒れ、複数枚が重なっているものも多く（図48）、その側面には墨書が確認できたため、重なりの単位を記録しながら、まとまり毎に取り上げを行った。出土位置と経文

表７　柿経発見例一覧表

	遺跡名または発見地	都道府県名	出土遺構等	点数	年代
1	浪岡城跡	青森		1	中世
2	大光寺新城跡遺跡	〃	堀	65	16～17世紀初期
3	脇本城跡	秋田		1	中世
4	中尊寺	岩手	金色堂須弥壇下、長押内、天井裏から発見	不明	
5	明成寺遺跡	山形	落ち込み	3	平安～江戸時代(遺跡年代)
6	安田遺跡	〃	遺物包含層	2	鎌倉～室町時代
7	立石寺	〃	岩窟内(俵に入れて納められる)	10,000以上	
8	洞ノ口遺跡	宮城		57	中世
9	瑞巌寺境内遺跡	〃		2	中世～近世
10	安子島城跡	福島	城外堀	5	1589(天正17)年前後
11	南A遺跡	〃		約100	中世
12	荒田目条里制遺構・砂畑遺跡	〃		10	中世
13	樺崎寺跡(旧:法界寺跡)	栃木	園池跡	2,500以上(約2,000点は2つの塊状)	鎌倉～江戸時代
14	薬師遺跡	群馬	井戸底	400	14～15世紀(白根山湯釜の事例に類似していることから)
15	白根山湯釜	〃	硫黄堆積中	現存24	15世紀中頃
16	神明遺跡	埼玉	居館堀跡	500	13～16世紀
17	池之端七軒町南遺跡(旧:台東区№107遺跡)	東京	墓の横	103	1690(元禄3)
18	八丁堀三丁目遺跡	〃	池	約4,000(20枚1束を約200重ねる)	17～19世紀
19	五合桝遺跡(仏法寺跡)	神奈川	池跡	1,000	13世紀後半、14世紀後半～15世紀前半(2時期)
20	建長寺境内(鎌倉学園体育館建設用地)	〃		15,000	1330(元徳2)、1368(貞治7)
21	史跡建長寺境内	〃		36	中世
22	覚園寺	〃	倒壊した開山塔の下から発見	59	1332(正慶元)
23	下馬周辺遺跡(鎌倉女学院地点)	〃	沼跡	30(1枚に1文字墨書)	中世
24	浄楽寺	〃	阿弥陀如来坐像内から発見	128	1665(寛文5)
25	御所之内遺跡	静岡	堀	1	中世(14世紀)
26	仁田館遺跡	〃	堀	886	14世紀頃
27	甑塚古墳中世墓	〃	墓	1	中世
28	松本城三の丸跡土井尻	長野	流路	7	15世紀後半～16世紀初頭
29	鳥羽山洞窟	〃		約300	中世～近世
30	清州城下町遺跡(59A)	愛知	溝	断簡16	16世紀～17世紀初頭
31	清州城下町遺跡(61D)	〃	池状遺構	破片1	近世
32	清州城下町遺跡(89G)	〃	溝または池	200以上	近世
33	清州城下町遺跡(90D)	〃	旧河道	110以上	15世紀末～16世紀中頃
34	清州城下町遺跡(01年度調査)	〃	溝	断片10	1586～17世紀初頭
35	清州城下町遺跡(08年度調査)	〃	旧河道	半円筒形の塊で一括＋分離1540	1439(永享11)
36	岩倉市大山寺町	〃		約3,500(二束)	1439(永享11)
37	天白元屋敷遺跡	〃		16	中世
38	海部郡佐屋町	〃			

	遺跡名または発見地	都道府県名	出土遺構等	点数	年代
39	墨股廃寺	岐阜		1	平安時代末期
40	養老町蛇持	〃	池底	11	13世紀
41	本巣郡般木村美江寺	〃			
42	稲葉郡佐波村	〃			
43	馬見坂遺跡	新潟	自然流路	1	9～12世紀
44	浦廻遺跡	〃	遺物散布地	64	13世紀前半～14世紀後半
45	堀切遺跡	富山	溝	22,855	15世紀後半～16世紀
46	千田北遺跡(2次)	石川		1	中世
47	千田北遺跡(4次)	〃		1	古代～中世
48	(仮称)大野川遺跡 (粟崎出土)	〃	河岸拡幅工事中に木箱に入って出土	現存7	14世紀後半～15世紀前半頃? (柿経の形状や文字より推定)
49	湯谷地内	〃	念佛堂の地下	80余り(断簡18片が残存)	室町時代後期
50	宮保館跡	〃	堀	2以上	15世紀
51	普正寺遺跡(1次)	〃	旧河道	1	15世紀中頃
52	普正寺遺跡(2次)	〃	旧河道	28	15世紀中頃
53	木越光徳寺跡	〃		1	中世
54	某寺	〃	伝世品		
55	石子遺跡	〃	井戸か	現存せず	
56	福智院	福井	伝世品	4,100弱か	1498(明応7)
57	一乗谷朝倉氏遺跡 (70年度緊急発掘調査)	〃		4	中世
58	一乗谷朝倉氏遺跡(9次)	〃		14	中世
59	一乗谷朝倉氏遺跡(46次)	〃	墓地跡	2万数千 (4,000枚程度の束が6本)	15世紀後半～16世紀
60	一乗谷朝倉氏遺跡 (61次・62次)	〃		4	中世
61	一乗谷朝倉氏遺跡 (07年度調査)	〃		5	中世
62	浄林寺遺跡	滋賀	立会調査	1,870(完形)	鎌倉～江戸時代
63	神照寺坊遺跡	〃		12,023	中世～近世
64	小谷城跡(95年度調査)	〃	堀	数十(結ばれた束)	16世紀初頭～中期
65	小谷城跡(伝知善院跡) (97年度調査)	〃	堀、園地	116	16世紀初頭～中期
66	国領遺跡	〃		316(墨書確認は206)	南北朝期
67	慈恩寺遺跡	〃	寺院跡	379	鎌倉～室町時代、 室町時代後期～桃山時代(2時期)
68	松尾神社	〃	本殿の厨子内から発見	4,975＋断片	1365～1368(貞治4～応安元)
69	柳遺跡	〃	洪水層の最下層	14	14世紀末
70	天神畑遺跡	〃	旧河道の堆積層	115	15～16世紀
71	北萱遺跡	〃	河川跡	3	南北朝期
72	光明寺遺跡(27次)	〃	方形館堀跡	断片17(復元6)	14世紀末～16世紀初
73	大宮遺跡(2次)	〃	河川跡	38	14世紀末前後
74	上御殿遺跡	〃		115	中世
75	塩津港遺跡	〃		32	不明

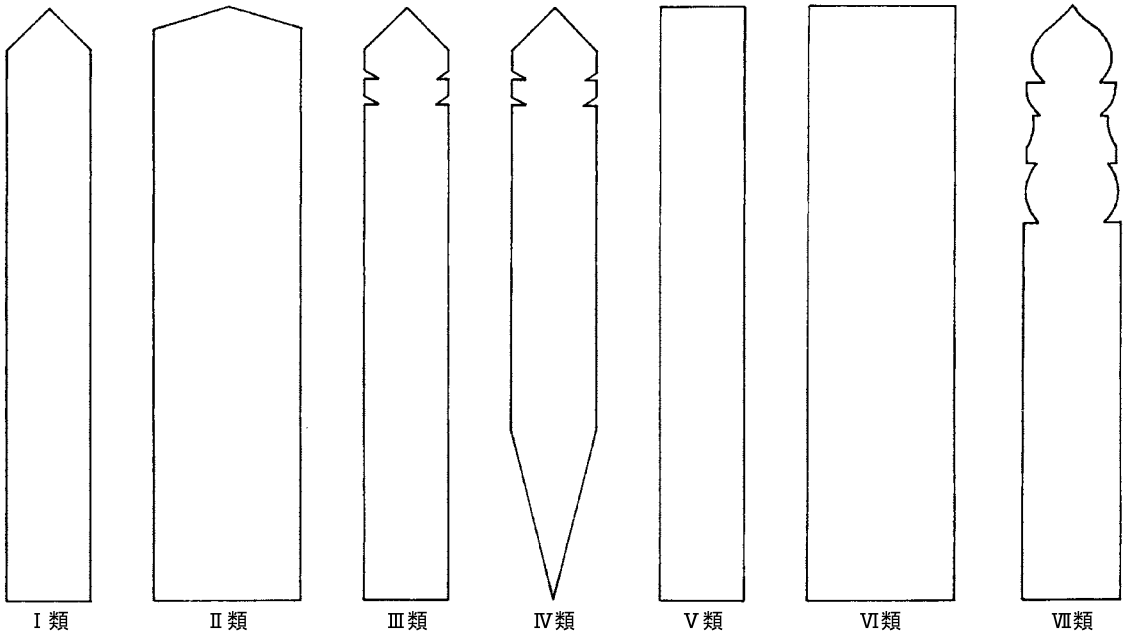
	遺跡名または発見地	都道府県名	出土遺構等	点数	年代
76	鳥羽離宮跡(44次)	京都	溝か		室町時代
77	鳥羽離宮跡(77次)	〃	溝		平安時代後期
78	鳥羽離宮跡(96次)	〃	溝	9	室町時代
79	鳥羽離宮跡(124次)	〃	堀状遺構腐食土中	16	12世紀後半
80	鳥羽離宮跡(145次)	〃	トレンチ10層	断片10以上	室町時代
81	佐山遺跡	〃	B2地区	1	13世紀
82	平等院庭園	〃	橋脚柱穴埋土	約80	13～16世紀
83	大藪遺跡・大藪城跡	〃	溝		室町時代
84	本圀寺跡	〃	溝	30	15世紀前半
85	相国寺旧境内(5次)	〃	堀	1	16世紀前半
86	相国寺旧境内(6次)	〃	堀	26	16世紀前半
87	富ノ森城跡	〃	溝	約2,220(推定)	1569(永禄12)
88	平安京右京八条三坊	〃	溝		室町時代後半
89	東向観音寺	〃	本堂天井裏から発見		江戸時代か
90	平安京左京九条二坊十三町	〃	濠		江戸時代
91	寺町旧域	〃	土坑	297	近世
92	平安京右京五条・六条四坊	〃	溝状遺構	965(墨書確認は282)	近世初頭(柿経の幅より)
93	元興寺極楽坊	奈良	本堂天井裏から発見	約27,000	1225(嘉禄元)、1399(応永6)、1539(天文8)
94	元興寺極楽坊	〃	土坑	10,100	1305(嘉元4)以降、1393(明徳4)、1408(応永15)、1580(天正8)
95	元興寺極楽坊	〃	池跡下底	52(束になって出土)	1399(応永6)、1532～1554(天文)
96	金峰山寺	〃	仁王像内からと伝わる	二束(束状に巻く)	1338～1339(延元3～4)(仁王像の年紀)
97	興福寺旧境内(賤院地区)	〃	井戸廃棄後に投棄の粘質土	約290	14～15世紀
98	興福寺旧境内	〃	土坑	約600	中世
99	東大寺	〃	獅子像胎内から発見		1420(応永27)
100	奈良市役所建設地	〃			1498(明応7)、1517(永正14)
101	松尾寺	〃	本堂床下から発見	146	1516(永正13)
102	平城京左京三条二坊十五坪	〃	旧河川の氾濫砂層中	約9,500	中世
103	平城京左京三条三坊三坪	〃	旧河川の堆積層及び氾濫砂層中	約10,000	中世
104	八王子神社	〃	鏡像・懸仏の間	82	中世
105	不退寺	〃	本堂天井裏から発見	6,389	1646(正保3)、1649(慶安2)
106	円成寺	〃	本堂解体修理で発見	41	17世紀
107	西大寺奥院骨堂	〃	骨堂内に納入	1,400以上	1700(元禄13)
108	岩蔵寺	〃	毘沙門天立像胎内から発見	2束	1711(正徳元)
109	大御輪寺	〃	明治に廃寺となった際に堂内から持出し		
110	当麻寺	〃	曼荼羅堂から発見	91	
111	室生寺	〃	須弥壇下の木箱から発見	断片3	
112	十輪院	〃	骨臓器(廃仏毀釈の際に隠蔽)から発見		
113	東大寺	〃	金剛力士像胎内から発見		

	遺跡名または発見地	都道府県名	出土遺構等	点数	年代
114	上清滝遺跡	大阪	流路	17	平安～室町時代、 共伴の題箋軸年紀は1184(寿永3)
115	慈眼院	〃	本堂天井裏から発見		鎌倉時代か
116	五反島遺跡	〃	河道跡	1	南北朝期か
117	大坂城跡 (91年度調査、2D調査区)	〃	堀	5	室町時代後半以降
118	大坂城跡(OS94-33次)	〃		1	近世
119	高槻城跡	〃	堀	20(束になって出土)	15～16世紀後期
120	勝山遺跡	〃	溝	1	中世
121	堺環濠都市遺跡 (SKT19地点)	〃		2	中世
122	堺環濠都市遺跡 (SKT261地点)	〃			中世
123	堺環濠都市遺跡 (SKT153地点)	〃		440	近世
124	普賢寺遺跡	〃		25	中世
125	池島・福万寺遺跡	〃	洪水層	7	16～17世紀
126	浜口町出土資料	〃		49	
127	速玉大社境内礫石経塚群	和歌山	銅板線刻十一面観音像残欠の 裏面に付着	断片4	中世
128	書写坂本城跡	兵庫	堀底	17	15世紀
129	宮内堀脇遺跡	〃	堀	3	中世
130	大桝遺跡	鳥取		1	古代
131	高住宮ノ谷遺跡	〃		1	中世
132	百間川米田遺跡	岡山	自然流路	3	中世～近世
133	金山寺	〃	五重塔須弥壇下から発見		
134	奉納山経塚	島根		1か	中世
135	吉川元春館跡	広島	井戸	9	16世紀
136	草戸千軒町遺跡(13次)	〃		10か	中世
137	草戸千軒町遺跡(22次)	〃		1か	中世
138	草戸千軒町遺跡(26次)	〃		1	中世
139	草戸千軒町遺跡(28次)	〃		5	中世
140	草戸千軒町遺跡(32次)	〃	池底	4＋細片	室町時代後半
141	草戸千軒町遺跡(33次)	〃		2	中世
142	敷地遺跡	徳島	自然流路	2,289(判読点数は765)	15～16世紀
143	中島田遺跡	〃	自然流路	5	16世紀
144	勝瑞館跡 (旧:守護町勝瑞遺跡)	〃		9	16世紀
145	岩屋寺	愛媛	洞窟内から見つかる	約5,200(断簡含む)	
146	如法寺遺跡	福岡	遺物包含層	1	11～13世紀
147	大宰府史跡	〃	溝	5	共伴の卒塔婆年紀は1304(嘉元2)
148	井相田C遺跡	〃	池状遺構最下層	4,200(復元で2,141)	共伴の板塔婆年紀は1459(長禄3)・ 1464(寛正5)
149	観世音寺跡南門前面域	〃	溝	5＋墨痕のないもの2	中世

表８　経締め資料と有紀年資料一覧表

番号	遺跡名または発見地	都道府県名	年代	形	紀年墨書	側面墨書	巻束番号	経面	経面巻き方	写経経典	特記事項
1	慈眼院	大阪	鎌倉時代か					両面	巻首から巻く。	法華経	
2	元興寺極楽坊	奈良	1225(嘉禄元)	圭頭状	○			両面		法華経	「嘉禄元年丙午南無阿弥陀仏」。
3	元興寺極楽坊	奈良	1305(嘉元４)年以降	圭頭状	○			両面		地蔵菩薩本願経	「地蔵菩薩本誓願　釈尊功利附属説　□□所明発信心　故更刻模伝未来　□□□徳及法界先救三途極重苦　人天獣生死海　自他同獲菩薩化　嘉元四年　六月廿四日願主南都興福寺僧　覚性」。同文の版刻の刊記をもつ経典が唐招提寺に残る。
4	建長寺境内(鎌倉学園体育館建設用地)	神奈川	1330(元徳２)		○						元徳二年銘あり。
5	覚園寺	神奈川	1332(正慶元)	圭頭状	○			両面		阿弥陀経	「正慶元年十一月廿四日円信□阿二丁」、「正慶元年十一月十八日比丘尼道阿聖霊住極楽為也敬白孝子法橋円信花押」と願文。
6	金峰山寺	奈良	1338～1339(延元３～４)(仁王像の年紀)	圭頭状に切り欠き、五輪塔状				片面両面		法華経、般若理趣経など	束状に巻いたものが二束。
7	松尾神社	滋賀	1365～1368(貞治４～応安元)	圭頭状	○		○	片面	右巻き。巻きの中心は観普賢経で巻末から巻く。	無量義経、法華経、観普賢経	竹製篦輪。20枚毎に束ね、紙縒で下部一箇所を巻きとめる。貞治五年(1366)銘、貞治六年(1367)銘、貞治七年(1368)銘、応安元年(1368)銘、同一人物の名前。
8	建長寺境内(鎌倉学園体育館建設用地)	神奈川	1368(貞治７)		○						「貞治七年正月廿五日」。
9	元興寺極楽坊	奈良	1393(明徳４)	五輪塔状	○		○	両面		般若理趣経	「明徳四年三月十二日　金剛仏子頼□敬白」。
10	元興寺極楽坊	奈良	1399(応永６)		○			両面			表面に「［　］供養得如是利益佛言」、裏面に「［　］応永六年五月廿二日　静乾敬白」。
11	元興寺極楽坊	奈良	1399(応永６)	圭頭状	○			両面		千手千眼観世音菩薩広大円満無礙大悲心陀羅尼経	表面に「［　］大臣謀反病気流行水旱不調」と願文、裏面に「［　］難者　□臼於年若為一切写五種大陀羅尼妙文願益　明永［　］　善哉巻属　此懇志報彼広思矣応永六年十一月四日［　］」。
12	元興寺極楽坊	奈良	1408(応永15)	五輪塔状	○						五大種字と「南無地蔵菩薩応永十五年二月五日」。
13	東大寺	奈良	1420(応永27)		○			両面		法華経	「［　］通知応永廿七年［　］」。
14	清州城下町遺跡(08年度調査)	愛知	1439(永享11)	頭部と下端部が共に圭頭状	○	○	○	片面	右巻き。巻きの中心は阿弥陀経で巻末から巻く。	無量寿経、観無量寿経、阿弥陀経	木製の蔓状のもので篦締め。側面に「□荘白菊香道場　〔比風ヵ〕　落葉□□随□□无定也　西方非西方　我有身　地獄非地獄　我有身　一念弥陀佛即滅無量　罪現受无比楽後生清浄土　南無阿弥陀佛　永享十己未一年　十月十一日　□□　□□□□敬白」。
15	岩倉市大山寺町	愛知	1439(永享11)	圭頭状	○			片面		法華経	「永享十一年　□□　施主　□□」。

番号	遺跡名または発見地	都道府県名	年代	形	紀年墨書	側面墨書	巻束番号	経面	経面巻き方	写経経典	特記事項
16	福智院	福井	1498(明応７)	圭頭状	○	○	○		右巻き。巻きの中心は第八巻で巻末から巻くと推定。	法華経	竹製の籠で締めていたとみられる。側面に「奉書写 妙法蓮華経一部 奉法楽 山王二十一社御 神前 大施主 福禄壽御圓□ 息災安穏心中御 願皆令満足仍祈所如右 明應七年十一月十一日 大施主 冬永 敬白」。
17	奈良市役所建設地	奈良	1498(明応７)		○			片面		法華経	明応七年銘あり。
18	松尾寺	奈良	1516(永正13)	圭頭状	○			両面		法華経	永正十三年銘あり。
19	奈良市役所建設地	奈良	1517(永正14)		○			片面		法華経	永正十四年銘あり。
20	元興寺極楽坊	奈良	1532～1554(天文)		○						「天ヵ文ヵ」。
21	元興寺極楽坊	奈良	1539(天文８)		○			片面			「天文八年六月廿五日」。
22	富ノ森城跡	京都	1569(永禄12)	圭頭状	○	○	○	片面一部両面	右巻き。巻きの中心は第八巻で巻末から巻く。	法華経	側面に「□西 □□ □□ 蓮華 経一部 永禄 十二年 五月廿六日 □□」。
23	元興寺極楽坊	奈良	1580(天正８)	頭部欠損	○			片面			「為順□(「笙」の下に「并?」)良延坊得業 天正八年 二月廿一日祐政」。
24	不退寺	奈良	1646(正保３)	圭頭状	○	○	○	片面		法華経	側面に「正保三年八月九日 敬白」。
25	不退寺	奈良	1649(慶安２)	圭頭状	○	○	○	片面		法華経	側面に「一乗妙典 開結心阿回向経等 右意趣者 為奉祈往生 極楽頓証 菩提也乃至法界平等利益 慶安二年四月□日 逆修妙性」。
26	浄楽寺	神奈川	1665(寛文５)		○						寛文五年銘あり。
27	池之端七軒町南遺跡(台東区No.107遺跡)	東京	1690(元禄３)		○						１枚ごとに元禄三年銘と供養対象者の女性の名前が経文とともに記される。
28	西大寺奥院骨堂	奈良	1700(元禄13)	圭頭状	○			片面		無量義経、法華経、観普賢経	「為露白童子菩提之元禄十三年十月廿八日 敬白 施主英芳」。
29	岩蔵寺	奈良	1711(正徳元)	短冊状	○			片面		毘沙門天王功徳経	正徳元年銘あり。
30	東向観音寺	京都	江戸時代か	圭頭状					右巻き。擬宝珠風上端部を持つ軸木を中心に巻末から巻く。	法華経	籠は金属線。



柿経の形態
7類型

Ⅰ類：圭頭状で、方形の下端部を持つ細身のもの。
Ⅱ類：圭頭状で、方形の下端部を持つ幅広のもの。
Ⅲ類：圭頭状かつ、切込みの入る頭部で、方形の下端部を持つ細身のもの。
Ⅳ類：圭頭状かつ、切込みの入る頭部で、下端部を尖らせた細身のもの。
Ⅴ類：頭部、下端部とも方形の細身のもの。
Ⅵ類：頭部、下端部とも方形の幅広のもの。
Ⅶ類：五輪塔状の頭部で、方形の下端部をもつやや幅広のもの。

図47　柿経の形態分類（松浦・原田1993より転載）

図48　富ノ森城跡柿経の出土状況（西から）

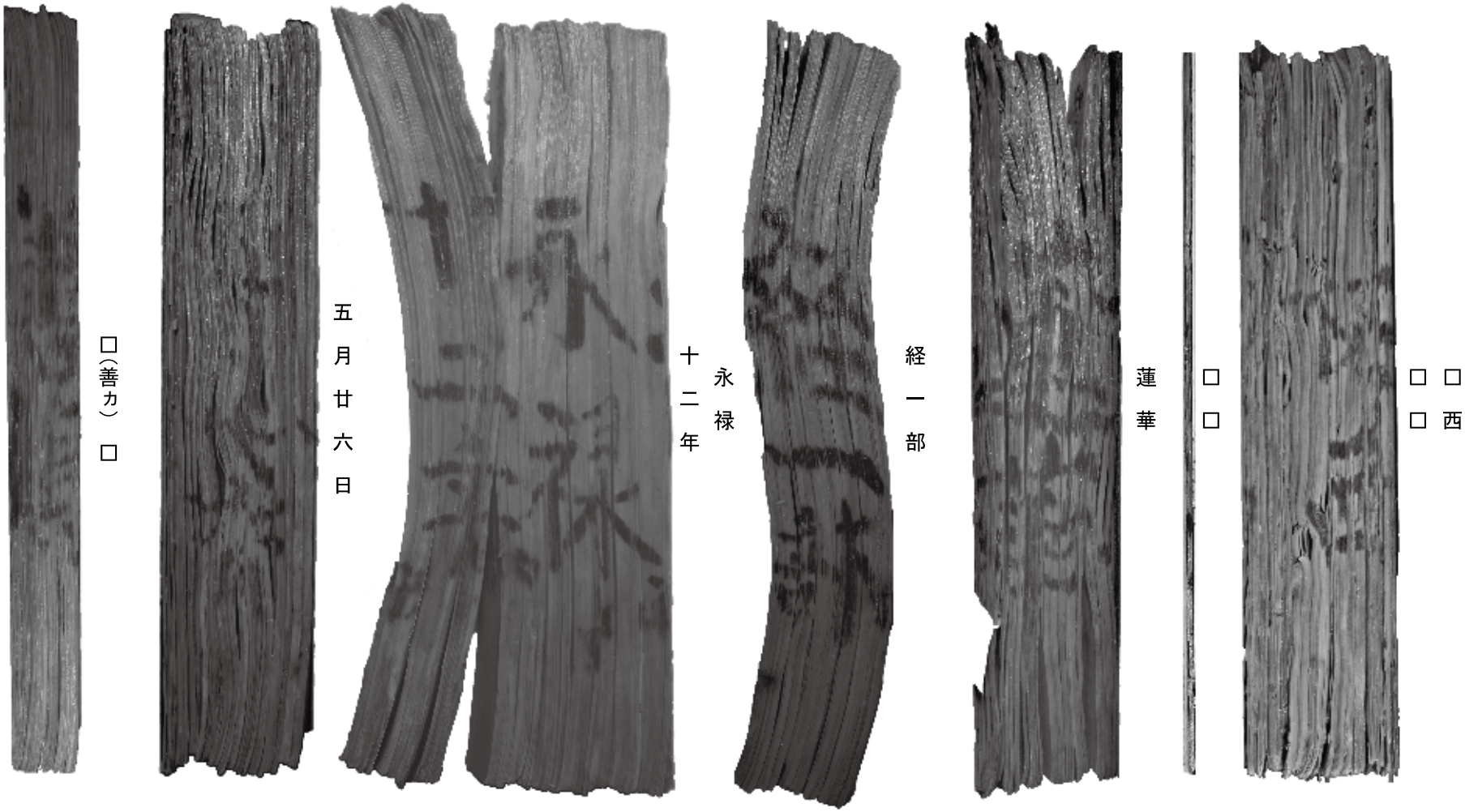


図49　富ノ森城跡出土柿経の側面墨書（赤外線画像を加工）

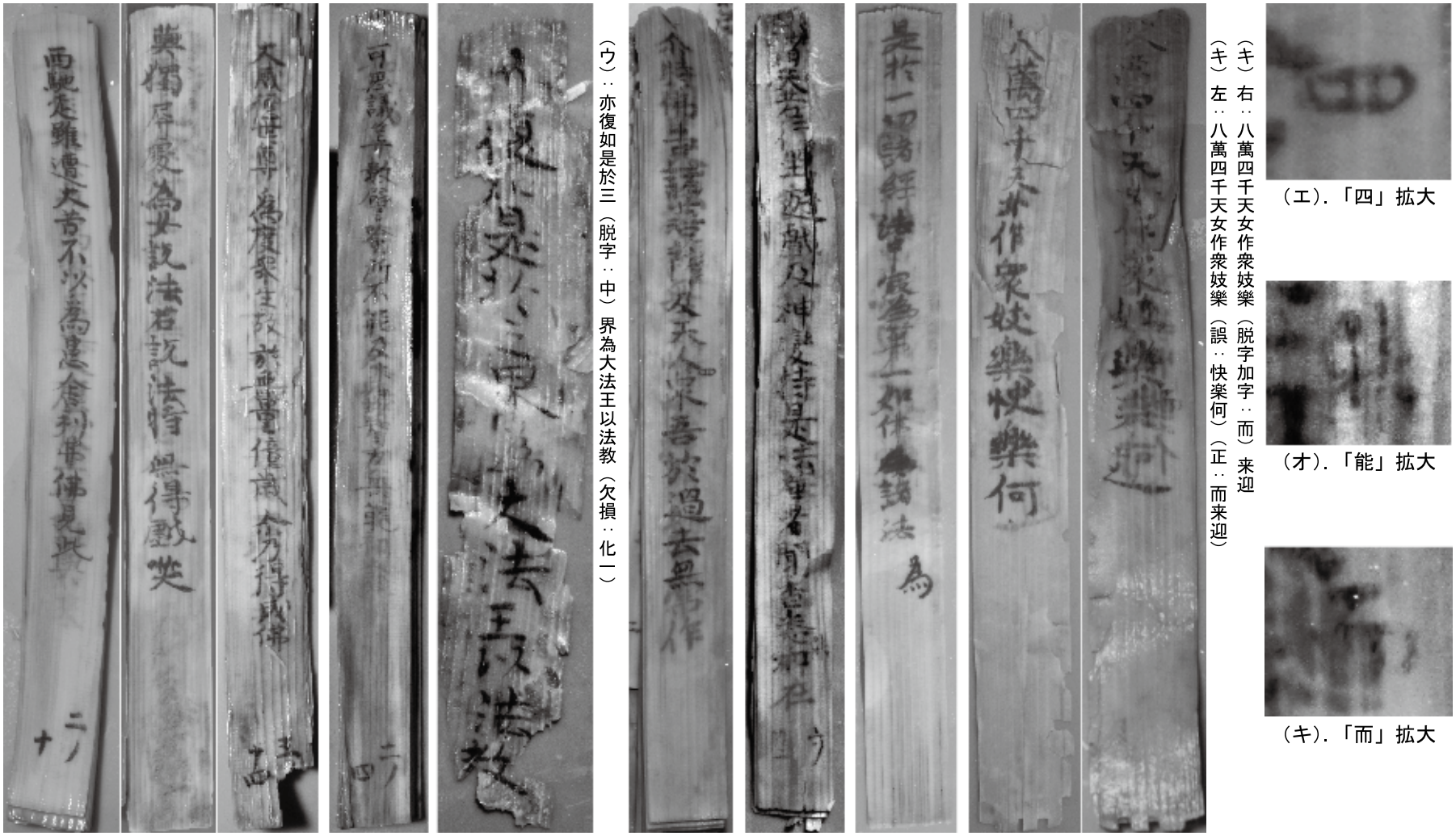
の順序から検討した結果、束の側面にみられる墨書は、第一巻から第三巻の側面に書かれており、「□西　□□　□□　蓮華　経一部　永禄　十二年　五月廿六日　□□」と記されている[3]ことが確認できた（図49）。また、この検討によって、経文の末尾にあたる第八巻を中心に右巻きし、最外面には第一巻から第三巻が配されていることもわかった。これまでの類例や絵図などから、恐らくはこけらを円筒状にした上で竹箍（たが）などを使って結束されていたものと推測されるが、その痕跡を確認することはできなかった。一枚毎のこけらの法量には多少の違いがあるものの、概ね縦269㎜×幅26㎜×厚み0.5㎜である。先端は山形に尖らせた圭頭状、下端部は方形を呈しており、こけらの片面には法華経が写経されている（図50・51）。

法華経は「序品第一」から「普賢菩薩勧発品第二十八」まで、二十八品八巻で構成され、全文の文字数は69,384文字である。法華経には長行（じょうごう）と呼ばれる散文と偈頌（げじゅ）と呼ばれる韻文があり、一枚のこけらに対し、長行は17文字、偈頌は16文字や20文字で書き写されるのが基本的な写経方法である（図50（ア））。この場合、こけらの両面に写経したとして2,000枚以上、片面のみでは倍の4,000枚以上のこけらが必要となる。片面写経で2,220枚程度が出土しており、一枚のこけらには基本に則り、長行で一枚に17文字、偈頌で16文字または20文字で書かれている。このことから、あるべき柿経の半分以上は出土していることになる。経文の判読からも、第一巻から第八巻までのうち、第四巻「授学無学人記品第九」を除く二十七品を確認することができ、本来は法華経一冊分が揃っていたものと考えられる。なお、今回の調査では複数枚が重なったこけらについては現段階では剥がさず、束の表と裏の赤外線観察から、両面に書かれた経文の範囲を確認し、中間にあるこけらについては推定として枚数に加えた。

柿経は20枚ないし40枚を一つの単位としていることが多く、本例も20枚を一束とし、束の先頭一枚目には経文の下に漢数字で巻数と巻の頭から数えて何束目にあたるのかが記されている（図50）。例えば「二ノ四」と書かれたもの（イ）は第二巻の四束目を表している。一束毎に紙縒りなどでまとめられる例もあるが、これについては確認できない。例外として、一部のこけらに両面墨書が認められたものもあるが、裏面に書かれている経文には誤字脱字などが含まれており、これが修正に伴う再利用であることが分かる。ほか、束の末尾のこけらの裏面に「南無妙法蓮華経」と裏書されているものもある。

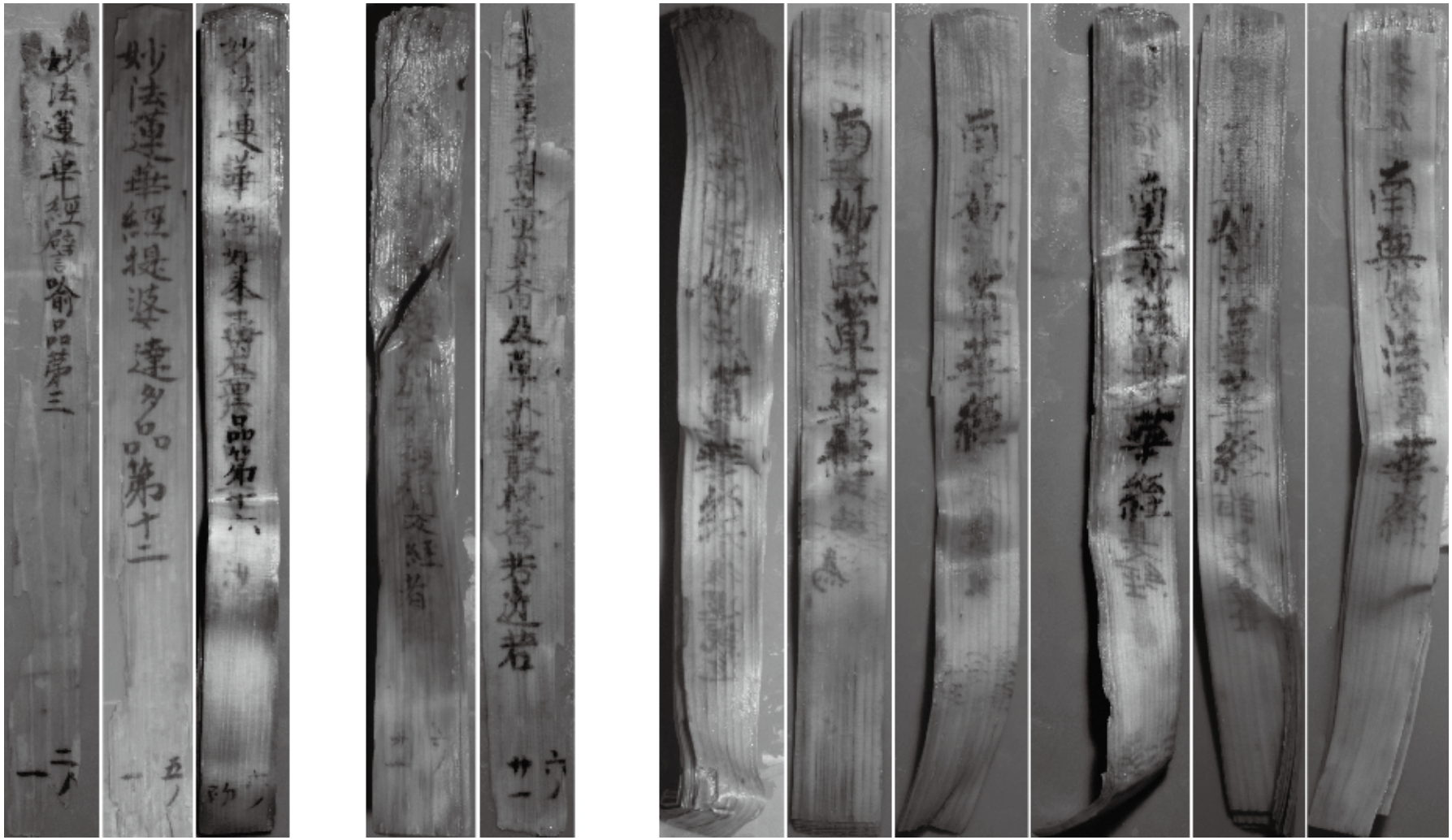
４．富ノ森城跡出土の柿経にみられる特徴

今回の柿経には、筆跡が異なる筆者が複数人存在しており、表記の違いや誤字、脱字、加字などが見られた[4]（図50）。例えば（ウ）では、経文中から「中」の文字が抜けている。加字をしている例では、（エ）に示すように「四」が抜け、（オ）では「能」が抜けており、後に右側に足されている。（カ）では、両面に同じ経文を書いているが、一面では途中で隣の行にある「快楽何」を誤って写しており、もう一面では「而」が抜け、文字の右に足している。前者が先の失敗であろう。また、（キ）では、誤って別の文字を書いたのか塗り潰され、該当箇所の文字である「為」が行末に書き加えられている。行中の文字と、書き加えられた「為」の文字では筆跡が異なっているように



凡 例：（ア）. 左から 17 文字（長行）・16 文字（偈頌）・20 文字（偈頌）。 （イ）. 下部巻束番号「二ノ四」。 （ウ）. 脱字「中」。 （エ）. 加字「四」。
（オ）. 加字「能」。 （カ）. 加字「為」。 （キ）. 両面墨書（左：行間違い「快楽何」、右：加字「而」）。

図50　富ノ森城跡出土柿経の墨書１（赤外線画像を加工）



（ク）　（ケ）　（コ）

凡 例：（ク）．異なる表記（左から二ノ一・五ノ一・六ノ初）。　（ケ）．重複巻束番号（左から束１枚目・束２枚目の六ノ廿一）。
（コ）．裏書「南無妙法蓮華経」（いずれも七巻、右から七ノ十二（推定）・十五（推定）・十六・十七・十九・二十一）。

図51　富ノ森城跡出土柿経の墨書２（赤外線画像を加工）

見えることから、校正や取り纏めを役目とする勧進聖と呼ばれる人物が存在する可能性が高い。

巻束番号の表記が他と異なる例もある（図51）。（ク）では、「妙法蓮華経譬喩品第三」、「妙法蓮華経提婆達多品第十二」、「妙法蓮華経如来寿量品第十六」と、それぞれの品題を記しているが、下部の巻束番号の表記は、「二ノ一」、「五ノ一」、「六ノ初」の様に異なる。また、（ケ）の様に、連続する２枚で巻束番号「六ノ二十一」が重複するものも見られた。先に少し触れたが裏面に「南無妙法蓮華経」と書かれるものがある。この裏書は全てにあるものではなく、確認できたものは（コ）に示した「七ノ十二（推定）」、「七ノ十五（推定）」、「七ノ十六」、「七ノ十七」、「七ノ十九」、「七ノ二十一」の末尾である。

５．小結

これまで述べてきたように、富ノ森城跡から出土した柿経は、柿経の標準的とも言える特徴が多い一方で、側面に紀年銘を有する全国的にも珍しい資料である。また、複数人の筆者と勧進聖の存在は、柿経の写経作業が専従集団による事業として行われていることを示唆しており、役割分担や組織的な特徴の有無などを知る手掛かりとしても大変興味深い資料である。今後の調査においては筆跡の変化点からみた一個人の作業単位や異体字などの特異点から手本となった経典の特徴を上げていく予定である。

謝辞

今回の柿経を調査するにあたり、以下の方々には数多くの御教示を賜った。付して感謝申し上げる（順不同・敬称略）。

京都大学名誉教授　西山良平、京都産業大学　吉野秋二、独立行政法人国立文化財機構奈良文化財研究所　山本　崇・藤間温子、滋賀県立大学　佐藤亜聖、公益財団法人元興寺文化財研究所　服部光真・山田哲也・三宅徹誠、龍谷大学　山田卓志、大阪大谷大学　竹本　晃。

註

１）　松浦五輪美・原田憲二郎「柿経の考察－分類と編年について－」『奈良市埋蔵文化財調査センター紀要1992』　奈良市教育委員会　1993　図５より転載。

２）　於院書柿葉於心經千卷供養。納俵十二。為被入東海西海也。

３）　20の表記は、十を２つ横並びで書いている場合は「廿」とし、未確認のものは「二十」として表記する。

４）　誤字、脱字、加字の分類については、瀧本正志ほか1988、八尾隆夫ほか2013を参考にしている。

参考文献

山本　崇「薄板に書かれた「こけら経」」『木簡　古代からの便り』独立行政法人国立文化財機構奈良文化財研究所　岩波書店　2020

柴垣哲彦ほか『清州城下町遺跡出土箍締め柿経』清須市埋蔵文化財調査報告Ⅺ　清須市教育委員会　2018

磯部　勝ほか「第124次調査」『鳥羽離宮跡発掘調査概報　昭和62年度』京都市文化観光局・財団法人京都市埋蔵文化財研究所　1988

吉崎　伸ほか「第77次調査」『昭和57年度　京都市埋蔵文化財調査概要』財団法人京都市埋蔵文化財研究所　1984

瀧本正志ほか『井相田Ｃ遺跡Ⅱ』福岡市埋蔵文化財調査報告書第179集　福岡市教育委員会　1988

八尾隆夫ほか『堀切遺跡Ｆ区出土こけら経調査報告書－国道８号バイパス建設工事にかかる埋蔵文化財調査－』黒部市教育委員会　2013

戸澗幹夫「加賀出土のこけら経」『石川県立歴史博物館紀要第五号』石川県立歴史博物館　1992

井上　優「滋賀県における「こけら経」について－東近江市松尾神社本殿伝来法華経を中心に－」『滋賀県立琵琶湖文化館研究紀要第三十三』滋賀県立琵琶湖文化館　2017

「鳥羽離宮跡44次調査」『昭和53年度　京都市埋蔵文化財調査概要』財団法人京都市埋蔵文化財研究所　2011

堀内明博ほか「第96次調査」『鳥羽離宮跡発掘調査概報　昭和59年度』京都市文化観光局・財団法人京都市埋蔵文化財研究所　1984

尾藤徳行ほか「鳥羽離宮跡145次調査（第３区工区）」『鳥羽離宮跡・下鳥羽遺跡」京都市埋蔵文化財研究所発掘調査概報2001－８　財団法人京都市埋蔵文化財研究所　2002

木下保明ほか『大藪遺跡・大藪城跡』京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告2010－９　財団法人京都市埋蔵文化財研究所　2010

若林邦彦ほか『相国寺旧境内発掘調査報告書　今出川キャンパス整備に伴う発掘調査（第４次～第６次)』同志社大学歴史資料館調査研究報告第13集　同志社大学歴史資料館　2015

上村和直ほか「平安京左京八条三坊２」『平成８年度　京都市埋蔵文化財調査概要』財団法人京都市埋蔵文化財研究所　1998

丸川義広ほか「平安京左京九条二坊」『昭和59年度　京都市埋蔵文化財調査概要』財団法人京都市埋蔵文化財研究所　1987

久世康博ほか『西部幹線公共下水道工事に伴う遺跡調査概報　1977年度』財団法人京都市埋蔵文化財研究所　1978

奥野義雄「中世仏教信仰におけるこけら経の存在形態」『元興寺仏教民俗資料研究所年報1974』財団法人元興寺仏教民俗資料研究所　1975

柴田　實ほか『日本仏教民俗基礎資料集成六　元興寺極楽坊Ⅵ』　中央公論美術出版　1975

『不退寺こけら経民俗資料緊急調査報告書』財団法人元興寺仏教民俗資料研究所　1977

鋤柄俊夫ほか『大坂城跡発掘調査報告Ⅰ－大阪府庁舎・周辺整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書－』財団法人大阪府文化財センター調査報告書第78集　財団法人大阪府文化財センター　2002

寺内　浩「愛媛県久万高原町岩屋寺こけら経・笹塔婆について」『愛媛大学法文学部論集人文学科編vol.40』愛媛大学法文学部　2016

付表１　土器類一覧表

（ ）は残存値、単位はcm

No.	器種	器形	遺構名	口径	器高	底径	色調	胎土	備考
1	須恵器	杯身	4区Ⅸ層 砂礫層		(2.4)	10.6	N6/0	φ1㎜前後の長石	
2	土師器	皿	溝2037	7.3	1.1		10YR7/2	雲母、赤色粒	乙訓在地形
3	土師器	皿	溝2037	7.4	1.2		7.5YR7/3	雲母、赤色粒	乙訓在地形
4	土師器	皿	溝2037	7.6	1.2		10YR8/2	雲母、赤色粒	乙訓在地形
5	土師器	皿	溝2037	7.6	1.0		2.5Y8/2	赤色粒	乙訓在地形
6	土師器	皿	溝2037	7.7	1.1		10YR8/2	赤色粒	乙訓在地形
7	土師器	皿	溝2037	7.9	1.3		7.5Y8/3	雲母、赤色粒	乙訓在地形
8	土師器	皿	溝2037	8.6	1.2		10YR8/3	雲母	乙訓在地形
9	土師器	皿	溝2037	8.6	1.5		10YR7/3	雲母、赤色粒	乙訓在地形
10	土師器	皿	溝2037	8.9	1.8		5YR8/3	赤色粒	乙訓在地形
11	土師器	皿	溝2037	8.9	1.5		7.5YR8/4	雲母、赤色粒	乙訓在地形
12	土師器	皿	溝2037	8.9	1.4		10YR7/3	雲母、赤色粒	乙訓在地形
13	土師器	皿	溝2037	9.2	1.4		2.5Y8/2	雲母	乙訓在地形
14	土師器	皿	溝2037	9.2	1.6		10YR7/2	雲母	乙訓在地形
15	土師器	皿	溝2037	9.3	1.8		10YR7/2	雲母、赤色粒	乙訓在地形
16	土師器	皿	溝2037	9.8	1.4		7.5YR8/3	雲母	乙訓在地形
17	土師器	皿	溝2037	10.2	1.9		7.5YR7/4	雲母、赤色粒	乙訓在地形
18	土師器	皿	溝2037	10.2	2.0		10YR7/4	雲母、赤色粒	乙訓在地形
19	土師器	皿	溝2037	10.3	2.3		7.5YR7/4	雲母、赤色粒	乙訓在地形
20	土師器	皿	溝2037	10.4	2.0		10YR8/2	雲母、赤色粒	乙訓在地形
21	土師器	皿	溝2037	10.4	1.9		7.5YR7/4	雲母、赤色粒	乙訓在地形
22	土師器	皿	溝2037	10.6	2.2		7.5YR8/3	雲母、赤色粒	乙訓在地形
23	土師器	皿	溝2037	10.8	2.2		10YR8/2	雲母、赤色粒	乙訓在地形
24	土師器	皿	溝2037	10.8	1.9		10YR7/3	雲母、赤色粒	乙訓在地形
25	土師器	皿	溝2037	13.4 ～13.9	2.4		10YR7/2	赤色粒	乙訓在地形
26	土師器	皿	溝2037	13.7	2.3		10YR7/2	雲母	乙訓在地形
27	土師器	皿	溝2037	13.9	2.5		10YR7/2	雲母	乙訓在地形
28	土師器	皿	溝2037	14.0	2.7		7.5YR8/2	雲母	乙訓在地形
29	土師器	皿	溝2037	14.2	2.7		10YR8/3	雲母、赤色粒	乙訓在地形
30	土師器	皿	溝2037	14.2	2.9		10YR7/2	雲母、赤色粒	乙訓在地形
31	土師器	皿N	溝2037	8.7	1.6		10YR7/4		
32	土師器	皿N	溝2037	9.2	1.7		10YR7/4		

（ ）は残存値、 単位はcm

No.	器種	器形	遺構名	口径	器高	底径	色調	胎土	備考
33	土師器	皿N	溝2037	13.8	3.1		10YR6/3		
34	土師器	皿N	溝2037	13.8 ～14.3	3.1		10YR7/4		
35	土師器	皿	溝2037	17.0	3.3		10YR7/2		ロクロ成型・回転糸切り
36	土師器	台付皿	溝2037		1.0	9.8	10YR7/2	赤色粒、長石、白色砂粒	
37	瓦器	椀	溝2037	13.6	4.9	5.2	N5/～2.5Y8/1		楠葉型　口縁内沈線 高台高い台形　暗文長楕円
38	瓦器	椀	溝2037	14.6	5.3	5.6	N4/0		楠葉型　口縁内沈線 高台高三角形　暗文長楕円
39	瓦器	椀	溝2037	15.2	4.6		N4/0		楠葉型　口縁内沈線
40	瓦器	椀	溝2037	14.1	5.1	5.7	N4/0		楠葉型　口縁内沈線 高台高三角形　暗文長楕円
41	瓦器	椀	溝2037	14.6	5.3	6.2	N4/0		楠葉型　口縁内沈線 高台高い台形　暗文長楕円
42	瓦器	椀	溝2037	14.8	5.1	5.8	N4/0		楠葉型　口縁内沈線 高台高三角形　暗文連結輪
43	瓦器	椀	溝2037	15.0	5.1	5.7	N5/0		楠葉型　口縁内沈線 高台高三角形　暗文連結輪
44	瓦器	皿	溝2037	9.4	1.8		N6/0		楠葉型　暗文ジグザグ
45	瓦器	皿	溝2037	9.8	2.2		N6/0		楠葉型　暗文ジグザグ
46	須恵器	鉢	溝2037	27.0	(9.8)		N5/0	φ0.5～3㎜の長石	東播系
47	土師器	皿	溝2036		(0.8)		7.5YR7/4	雲母、赤色粒	乙訓在地形
48	土師器	皿	溝2036		(0.9)		10YR8/3	雲母	乙訓在地形
49	土師器	皿	溝2036		(1.4)		7.5YR7/4	雲母、赤色粒	乙訓在地形
50	土師器	皿Ac	溝2036		(1.1)		7.5YR7/4	雲母、赤色粒	
51	瓦器	椀	溝2036	8.6	3.0	3.6	N4/0		楠葉型　口縁内沈線？ 高台高三角形　暗文ジグザグ
52	瓦器	椀	溝2036	12.0	4.1	3.8	N3/0		楠葉型　高台痕跡的・馬蹄形 暗文ジグザグ
53	瓦器	椀	溝2036	14.6	5.5	5.5	N4/0		楠葉型　口縁内沈線 高台高三角形　暗文連結輪
54	瓦器	椀	溝2036	15.0	4.9	5.3	2.5Y7/1		和泉型　高台高い台形 内外面ミガキ
55	土師器	皿	溝2038	9.0	1.2		5YR7/4	雲母、赤色粒	乙訓在地形
56	土師器	皿	溝2038	10.4	2.0		7.5YR7/4	雲母、赤色粒	乙訓在地形
57	土師器	皿	溝2038	11.2	1.7		7.5YR8/3	雲母	乙訓在地形
58	土師器	皿	溝2038	13.4	2.2		2.5Y6/4	雲母	乙訓在地形
59	土師器	台付皿	溝2038	8.6	2.4	4.6	7.5YR7/4	雲母、赤色粒	
60	白色土器	皿	溝2038	8.6	1.2		10YR8/2	φ～1㎜の長石	
61	瓦器	皿	溝2038	9.6	2.0		N4/0		楠葉型　暗文ジグザグ
62	瓦器	椀	溝2038	14.6	5.1	6.1	N4/0		楠葉型　口縁内沈線 高台高三角形　暗文長楕円
63	瓦器	鍋	溝2038	22.0	(8.0)		N6/0		
64	瓦器	羽釜	溝2038	17.0	(8.6)		N5/0		

（ ）は残存値、単位はcm

No.	器種	器形	遺構名	口径	器高	底径	色調	胎土	備考
65	瓦器	羽釜	溝2038	18.6	(10.0)		N5/0		
66	土師器	皿	溝2030	8.2	1.1		7.5YR7/3	赤色粒	乙訓在地形
67	土師器	皿	溝2030	8.6	1.5		10YR6/3		乙訓在地形
68	土師器	皿	溝2030	9.0	1.6		10YR8/3	赤色粒	乙訓在地形
69	土師器	皿	溝2030	9.0	1.3		10YR7/3	赤色粒	乙訓在地形
70	土師器	皿	溝2030	11.6	2.2		2.5Y7/2	雲母	乙訓在地形
71	土師器	皿	溝2030	12.4	2.4		10YR7/2	雲母	乙訓在地形
72	土師器	皿	溝2030	13.0	2.1		10YR8/2	雲母、赤色粒	乙訓在地形
73	土師器	皿	溝2030	13.0	1.9		10YR7/2	雲母、赤色粒	乙訓在地形
74	土師器	皿	溝2030	13.8	2.7		7.5YR7/4	赤色粒	乙訓在地形
75	土師器	皿	溝2030	14.6	2.2		10YR7/4		乙訓在地形
76	瓦器	椀	溝2030	14.1	5.0		N5/0		楠葉型　口縁内沈線 高台三角形　暗文連結輪
77	瓦器	椀	溝2030	14.2 ～14.6	5.1	5.4 ～5.6	N4/0		楠葉型　口縁内浅い沈線 高台三角形
78	瓦器	椀	溝2030	14.3	4.9	5.2	N5/0		楠葉型　口縁内浅い沈線 高台三角形
79	瓦器	椀	溝2030	14.5	4.8	5.2 ～5.6	N5/0		楠葉型　口縁内沈線 高台三角形　暗文連結輪
80	瓦器	椀	溝2030	13.6	4.8	5.1	N4/0		楠葉型　口縁内浅い沈線 高台三角形　暗文長楕円
81	瓦器	椀	溝2030	14.0 ～14.7	4.7	4.7	N5/0		楠葉型　口縁内沈線 高台三角形　暗文長楕円
82	瓦器	椀	溝2030	14.1	4.9	6.2	N4/0		楠葉型　口縁内浅い沈線 高台三角形　暗文長楕円
83	瓦器	椀	溝2030	15.0 ～14.6	5.1	5.0	N5/0		楠葉型　口縁内浅い沈線 高台三角形　暗文長楕円
84	輸入白磁	合子蓋	溝2030	5.2	1.6		白色		産地不明
85	土師器	皿	土坑2033	8.3	1.5		7.5YR7/3	雲母、赤色粒	乙訓在地形
86	土師器	皿	土坑2033	8.4	1.3		10YR7/2	雲母	乙訓在地形
87	土師器	皿	土坑2033	8.4	1.5		7.5YR8/3	雲母、赤色粒	乙訓在地形
88	土師器	皿	土坑2033	8.5	1.4		7.5YR7/3	雲母、赤色粒	乙訓在地形
89	土師器	皿	土坑2033	8.5	1.6		7.5YR8/3	雲母、赤色粒	乙訓在地形
90	土師器	皿	土坑2033	8.6	1.6		7.5YR8/3	雲母、赤色粒	乙訓在地形
91	土師器	皿	土坑2033	8.6	1.7		10YR8/2	雲母、赤色粒	乙訓在地形
92	土師器	皿	土坑2033	8.9	1.1		7.5YR8/3	雲母、赤色粒	乙訓在地形
93	土師器	皿	土坑2033	8.9	1.5		7.5YR7/6	雲母、赤色粒	乙訓在地形
94	土師器	皿	土坑2033	9.2	1.3		7.5YR7/3	雲母、赤色粒	乙訓在地形
95	土師器	皿	土坑2033	12.6	2.3		7.5YR7/6	雲母、赤色粒	乙訓在地形
96	土師器	皿	土坑2033	12.6	2.6		10YR8/3	雲母、赤色粒	乙訓在地形

（ ）は残存値、 単位はcm

No.	器種	器形	遺構名	口径	器高	底径	色調	胎土	備考
97	土師器	皿	土坑2033	12.9	2.1		7.5YR8/3	雲母	乙訓在地形
98	土師器	皿	土坑2033	13.2	2.1		7.5YR8/4	雲母、赤色粒	乙訓在地形
99	瓦器	皿	土坑2033	9.3	1.6		N5/0		楠葉型 暗文ジグザグ
100	瓦器	皿	土坑2033	9.4	1.6		N5/0		楠葉型 暗文ジグザグ
101	瓦器	皿	土坑2033	9.8	1.8		N4/0		楠葉型 暗文ジグザグ
102	瓦器	椀	土坑2033	12.2	4.2	4.0	N5/0		楠葉型 口縁内沈線 高台矮小三角形 暗文ジグザグ
103	瓦器	椀	土坑2033	12.6	4.2	4.4	N4/0		楠葉型 口縁端丸い 高台三角形
104	瓦器	椀	土坑2033	13.2	4.3	4.6	N5/0		楠葉型 口縁端丸い 高台矮小三角形 暗文渦巻
105	瓦器	椀	土坑2033	13.6	4.1	5.2	N4/0		楠葉型 口縁内浅い沈線 高台矮小三角形 暗文渦巻
106	瓦器	椀	土坑2033	14.2 ～14.6	4.8	4.9	N5/0		楠葉型 口縁内沈線 高台矮小三角形 暗文長楕円
107	瓦器	椀	土坑2033	14.2	4.9	5.7	N5/0		楠葉型 口縁内沈線 高台矮小三角形 暗文長楕円
108	瓦器	椀	土坑2033	14.4	4.4	5.4	N5/0～5Y8/1		楠葉型 口縁内浅い沈線 高台三角形 暗文連結輪
109	瓦器	椀	土坑2033	14.6	5.0	5.9	N5/0		楠葉型 口縁内沈線 高台矮小三角形 暗文長楕円
110	土師器	皿	土坑2034	8.0	1.2		2.5Y7/2		乙訓在地形
111	土師器	皿	土坑2034	8.9	1.2		7.5YR8/4	雲母、赤色粒	乙訓在地形
112	土師器	皿	土坑2034	9.1	1.4		2.5Y7/2	雲母、赤色粒	乙訓在地形
113	土師器	皿	土坑2034	9.4	1.5		10YR7/2	雲母	乙訓在地形
114	土師器	皿	土坑2034	12.0	2.4		10YR7/2	雲母、赤色粒	乙訓在地形
115	土師器	皿	土坑2034	12.4	2.0		7.5YR7/4	雲母、赤色粒	乙訓在地形
116	土師器	皿	土坑2034	13.0	2.4		7.5YR7/3	雲母、赤色粒	乙訓在地形
117	土師器	皿	土坑2034	13.4	2.7		7.5YR7/4	雲母、赤色粒	乙訓在地形
118	土師器	皿	土坑2034	13.8	2.9		2.5Y7/1	石英、長石、雲母	乙訓在地形
119	土師器	皿N	土坑2034	13.8	2.7		7.5YR7/6		
120	瓦器	椀	土坑2034	12.4	4.0	5.0	N5/0		楠葉型 口縁内浅い沈線 高台矮小三角形
121	瓦器	椀	土坑2034	13.6	4.4	4.4	N5/0		楠葉型 口縁内浅い沈線 高台三角形
122	瓦器	椀	土坑2034	14.0	5.2	4.6	N5/0		楠葉型 口縁内沈線 高台矮小三角形 暗文連結輪
123	土師器	皿	土坑2014	9.1	1.4		10YR7/3	雲母	乙訓在地形
124	土師器	皿	土坑2014	9.1	1.2		10YR7/3	雲母	乙訓在地形
125	土師器	皿	土坑2014	9.1	1.4		10YR8/1	雲母	乙訓在地形
126	土師器	皿	土坑2014	9.4 ～8.9	1.2		10YR7/3	雲母	乙訓在地形
127	土師器	皿	土坑2014	14.4	2.5		10YR7/3	雲母	乙訓在地形
128	土師器	皿	土坑2014	15.2	2.1		10YR7/3	雲母	乙訓在地形

（ ）は残存値、 単位はcm

No.	器種	器形	遺構名	口径	器高	底径	色調	胎土	備考
129	土師器	皿	土坑2039	7.6	1.6		7.5YR7/3	雲母、赤色粒	乙訓在地形
130	土師器	皿	土坑2039	8.6	1.3		2.5Y7/2	雲母	乙訓在地形
131	土師器	皿	土坑2039	8.6	1.2		7.5YR7/6	雲母、赤色粒	乙訓在地形
132	土師器	皿	土坑2039	9.3	2.6		7.5YR7/4	雲母、赤色粒	乙訓在地形
133	土師器	皿	土坑2039	15.0	2.4		5YR8/3	石英、長石、雲母、赤色粒	乙訓在地形
134	瓦器	皿	土坑2039	9.0	1.7		N4/0		楠葉型 暗文ジグザグ
135	瓦器	椀	土坑2039	13.4	4.0	5.4	N4/0		楠葉型 口縁内浅い沈線 高台三角形 暗文長楕円
136	瓦器	椀	土坑2039	13.8	4.1	4.9	N4/0		楠葉型 口縁内沈線 高台矮小三角形 暗文長楕円
137	瓦器	椀	土坑2039	13.2	4.7	5.0	N5/0		楠葉型 口縁端丸い 高台矮小三角形 暗文長楕円
138	土師器	皿	土坑2018	8.3	1.7		5YR7/3	雲母	乙訓在地形
139	土師器	皿	土坑2018	8.2	1.3		10YR8/3	雲母、赤色粒	乙訓在地形
140	土師器	皿	土坑2018	8.5	1.3		7.5YR7/3	雲母、赤色粒	乙訓在地形
141	土師器	皿	土坑2018	8.5	1.3		7.5YR7/4	赤色粒	乙訓在地形
142	土師器	皿	土坑2018	8.5	1.3		10YR6/3	雲母、赤色粒	乙訓在地形
143	土師器	皿	土坑2018	8.6	1.3		7.5YR7/4	赤色粒	乙訓在地形
144	土師器	皿	土坑2018	8.6	1.1		10YR7/2	雲母、赤色粒	乙訓在地形
145	土師器	皿	土坑2018	8.7	1.6		10YR7/3	雲母、赤色粒	乙訓在地形
146	土師器	皿	土坑2018	8.7	1.3		7.5YR8/3	赤色粒	乙訓在地形
147	土師器	皿	土坑2018	8.8	1.4		10YR8/2	赤色粒	乙訓在地形
148	土師器	皿	土坑2018	12.6	2.3		10YR7/2		乙訓在地形
149	土師器	皿	土坑2018	13.0	2.3		7.5YR7/3	雲母、赤色粒	乙訓在地形
150	土師器	皿	土坑2018	13.0	2.4		10YR7/2	雲母、赤色粒	乙訓在地形
151	土師器	皿	土坑2018	14.4	3.0		5YR7/4	雲母、赤色粒、長石	乙訓在地形
152	瓦器	椀	土坑2018	7.8	2.8	3.6	5YR8/～N5/0		楠葉型 口縁内沈線 高台矮小三角形
153	瓦器	椀	土坑2018	13.5	4.4	5.2	N5/0		楠葉型 口縁内沈線 高台矮小三角形 暗文長楕円
154	瓦器	椀	土坑2018	13.5	4.8	5.4	N4/0		楠葉型 口縁内沈線 高台矮小三角形 暗文長楕円
155	瓦器	椀	土坑2018	13.4 ～14.0	4.8	4.7 ～5.2	N5/0		楠葉型 口縁端丸い 高台矮小三角形 暗文渦巻
156	瓦器	椀	土坑2018	14.2	5.0	4.9	N4/0		楠葉型 口縁内沈線 高台矮小三角形 暗文長楕円
157	瓦器	椀	土坑2018	13.1	4.5	4.7	N6/0		楠葉型 口縁内浅い沈線 高台矮小三角形 暗文長楕円
158	瓦器	椀	土坑2018	14.1	4.9	4.6	N4/0		楠葉型 口縁内沈線 高台矮小三角形 暗文長楕円
159	瓦器	椀	土坑2018	13.9	5.0	5.9	N5/0		楠葉型 口縁内浅い沈線 高台矮小三角形 暗文長楕円
160	瓦器	椀	土坑2018	14.4	4.7	4.7	N4/0		楠葉型 口縁内浅い沈線 高台矮小三角形 暗文長楕円

（ ）は残存値、 単位はcm

No.	器種	器形	遺構名	口径	器高	底径	色調	胎土	備考
161	瓦器	皿	土坑2018	8.8	1.7		N5/0		楠葉型 暗文ジグザグ
162	須恵器	鉢	土坑2018	27.4	11.1	7.0	N6/0～N7/0		東播系
163	輸入青磁	皿	土坑2018	10.8	2.4		胎:2.5Y7/1 釉:7.5Y6/2		同安窯系
164	土師器	皿	土坑1627	6.8 ～7.2	1.05		10YR7/3	雲母、赤色粒	乙訓在地形
165	土師器	皿	土坑1627	7.0 ～7.8	1.4		5YR7/4	雲母、赤色粒	乙訓在地形
166	土師器	皿	土坑1627	7.4	1.2		10YR7/3	雲母	乙訓在地形
167	土師器	皿	土坑1627	7.4	1.3		7.5YR7/3	雲母、赤色粒	乙訓在地形
168	土師器	皿	土坑1627	7.4	0.9		7.5YR7/3	雲母、赤色粒	乙訓在地形
169	土師器	皿	土坑1627	7.6	1.4		7.5YR8/3	雲母	乙訓在地形
170	土師器	皿	土坑1627	7.7	1.3		7.5YR7/3	赤色粒	乙訓在地形
171	土師器	皿	土坑1627	7.7 ～7.3	1.3		2.5Y7/2	雲母、赤色粒	乙訓在地形
172	土師器	皿	土坑1627	7.8	1.2		10YR7/2	雲母	乙訓在地形
173	土師器	皿	土坑1627	7.8	1.0		10YR7/2	赤色粒	乙訓在地形
174	土師器	皿	土坑1627	7.8	1.5		10YR7/2	雲母、赤色粒	乙訓在地形
175	土師器	皿	土坑1627	7.8	1.0		7.5YR8/4	雲母、赤色粒	乙訓在地形
176	土師器	皿	土坑1627	7.9	1.2		2.5Y7/2	雲母、赤色粒	乙訓在地形
177	土師器	皿	土坑1627	8.1	1.1		10YR7/3	雲母、赤色粒	乙訓在地形
178	土師器	皿	土坑1627	10.0	1.8		10YR8/2	赤色粒	乙訓在地形
179	瓦器	椀	土坑1627	10.6	(2.5)		N5/0～N8/0		楠葉型 口縁端丸い
180	瓦器	壷	土坑1627	5.1	(7.2)		N4/0		
181	土師器	皿	4区Ⅶ層	7.1 ～7.5	1.2		10YR7/3	雲母、赤色粒	乙訓在地形
182	土師器	皿	4区Ⅶ層	7.2	1.4		10YR7/3	雲母	乙訓在地形
183	土師器	皿	4区Ⅶ層	7.2	1.2		7.5YR8/3	雲母、赤色粒	乙訓在地形
184	土師器	皿	4区Ⅶ層	7.6	1.0		7.5YR7/4	雲母、赤色粒	乙訓在地形
185	土師器	皿	4区Ⅶ層	7.6	1.5		7.5YR7/6	雲母、赤色粒	乙訓在地形
186	土師器	皿	4区Ⅶ層	7.65	1.3		7.5YR7/4	赤色粒	乙訓在地形
187	土師器	皿	4区Ⅶ層	7.7	1.5		10YR7/3	雲母、赤色粒	乙訓在地形
188	土師器	皿	4区Ⅶ層	8.0	1.2		7.5YR7/4	雲母、赤色粒	乙訓在地形
189	土師器	皿	4区Ⅶ層	9.0	1.5		5YR7/6	雲母、赤色粒	乙訓在地形
190	土師器	皿	4区Ⅶ層	9.2	1.5		7.5YR8/4	雲母、赤色粒	乙訓在地形
191	土師器	皿	4区Ⅶ層	9.2	1.5		10YR7/4	雲母、赤色粒	乙訓在地形
192	土師器	皿	4区Ⅶ層	10.0	1.7		7.5YR7/4	雲母、赤色粒	乙訓在地形

（ ）は残存値、 単位はcm

No.	器種	器形	遺構名	口径	器高	底径	色調	胎土	備考
193	土師器	皿S	4区Ⅶ層	12.0	3.0		2.5Y8/1		
194	土師器	皿S	4区Ⅶ層	12.6	2.9		10YR8/2	チャート粒	
195	土師器	皿N	4区Ⅵb層	7.5	1.6		10YR7/3	雲母、赤色粒	
196	土師器	皿Sh	4区Ⅵb層	7.0	1.7		7.5YR8/3		
197	土師器	皿Sh	4区Ⅵb層	7.5	1.8		7.5YR8/3		
198	土師器	皿	4区Ⅵb層	7.3	1.4		7.5YR7/4	雲母、赤色粒	乙訓在地形
199	土師器	皿	4区Ⅵb層	7.3	1.4		10YR8/2	雲母、赤色粒	乙訓在地形
200	土師器	皿	4区Ⅵb層	7.2	1.2		7.5YR7/4	雲母、赤色粒	乙訓在地形
201	土師器	皿	4区Ⅵb層	7.5	1.7		7.5YR7/4	雲母、赤色粒	乙訓在地形
202	土師器	皿	4区Ⅵb層	7.7	1.2		7.5YR7/3	雲母、赤色粒	乙訓在地形
203	土師器	皿	4区Ⅵb層	7.7	1.4		7.5YR7/4	雲母、赤色粒	乙訓在地形
204	土師器	皿	4区Ⅵb層	7.7	1.4		7.5YR7/6	雲母、赤色粒	乙訓在地形
205	土師器	皿	4区Ⅵb層	8.2	1.5		10YR7/4	雲母、赤色粒	乙訓在地形
206	土師器	皿	4区Ⅵb層	9.0	1.7		7.5YR8/4	雲母、赤色粒	乙訓在地形
207	土師器	皿	4区Ⅵb層	9.1	1.6		7.5YR7/3	雲母、赤色粒	乙訓在地形
208	土師器	皿	4区Ⅵb層	9.9	1.4		7.5YR7/6	雲母、赤色粒	乙訓在地形
209	土師器	皿	4区Ⅵb層	9.9	1.7		7.5YR7/4	雲母、赤色粒	乙訓在地形
210	土師器	皿	4区Ⅵb層	10.0	2.4		7.5YR7/4	雲母、赤色粒	乙訓在地形
211	土師器	皿	4区Ⅵb層	10.4	2.1		7.5YR7/3	雲母	乙訓在地形
212	土師器	皿S	4区Ⅵb層	15.2	(2.7)		7.5YR7/3	赤色粒	
213	土師器	皿	土器溜1383	7.2	1.4		7.5YR7/3	雲母、赤色粒	乙訓在地形
214	土師器	皿	土器溜1383	7.3	1.5		7.5YR7/4	雲母、赤色粒	乙訓在地形
215	土師器	皿	土器溜1383	7.3	1.3		7.5YR8/3	雲母、赤色粒	乙訓在地形
216	土師器	皿	土器溜1383	7.4	1.3		7.5YR7/4	雲母、赤色粒	乙訓在地形
217	土師器	皿	土器溜1383	7.4	1.3		7.5YR7/3	赤色粒	乙訓在地形
218	土師器	皿	土器溜1383	7.4	1.1		7.5YR7/4	雲母、赤色粒	乙訓在地形
219	土師器	皿	土器溜1383	7.4	1.3		7.5YR7/3	雲母、赤色粒	乙訓在地形
220	土師器	皿	土器溜1383	7.8	1.0		7.5YR7/4	雲母、赤色粒	乙訓在地形
221	土師器	皿	土器溜1383	7.8	1.4		7.5YR7/3	雲母、赤色粒	乙訓在地形
222	土師器	皿	土器溜1383	9.8	1.4		7.5YR7/4	雲母、赤色粒	乙訓在地形
223	土師器	皿	土器溜1383	10.2	2.1		10YR7/3	雲母、赤色粒	乙訓在地形
224	土師器	皿N	土器溜1383	7.6	1.7		7.5YR7/4	雲母	

（ ）は残存値、 単位はcm

No.	器種	器形	遺構名	口径	器高	底径	色調	胎土	備考
225	土師器	皿S	土器溜1383	14.4	2.6		7.5YR8/3 ～10YR8/2		
226	土師器	皿S	土器溜1383	15.2	2.7		10YR7/2		
227	施釉陶器	平椀	土器溜1383	14.6	5.5	5.0	胎:2.5Y8/2 釉:7.5Y7/2		瀬戸美濃系
228	灰釉陶器	卸皿	土器溜1383	15.8	3.6	8.0	表:10YR7/3 釉:10Y6/2		瀬戸美濃系
229	土師器	皿	溝1322	10.2	1.7		2.5Y7/2	赤色粒	乙訓在地形
230	土師器	皿S	溝1322	13.2	(2.9)		10YR7/2	雲母	
231	施釉陶器	花瓶	溝1322	3.8	(6.4)		胎:10YR6/6 釉:5Y6/2		瀬戸美濃系
232	瓦器	深鉢	溝256(古)	32.4	(10.6)		N4/0		
233	土師器	皿	溝1160	5.7 ～5.4	1.5		7.5YR8/4	雲母、赤色粒	乙訓在地形
234	土師器	皿	溝1160	7.2	1.4		5YR7/4	雲母、赤色粒	乙訓在地形
235	土師器	皿	溝1160	7.2	1.3		7.5YR7/4	雲母、赤色粒	乙訓在地形
236	土師器	皿	溝1160	7.3	1.5		10YR7/3	雲母、赤色粒	乙訓在地形
237	土師器	皿	溝1160	7.3	1.4		7.5YR7/4	雲母、赤色粒	乙訓在地形
238	土師器	皿	溝1160	7.3	1.4		7.5YR7/4	雲母、赤色粒	乙訓在地形
239	土師器	皿	溝1160	7.4	1.5		7.5YR7/6	雲母、赤色粒	乙訓在地形
240	土師器	皿	溝1160	8.4	1.8		10YR7/2	雲母、赤色粒	乙訓在地形
241	土師器	皿	溝1160	11.4	1.7		7.5YR8/2	雲母、赤色粒	乙訓在地形
242	瓦器	羽釜	溝1160		(7.2)		2.5Y8/1		
243	瓦器	羽釜	溝1160		(6.1)		N4/0	雲母	
244	瓦器	羽釜	溝1160		(10.4)		2.5Y6/2	雲母、長石	
245	瓦器	羽釜	溝1160		(6.1)		10YR5/2	雲母	
246	瓦器	羽釜	溝1160		(6.7)		2.5Y7/1	雲母	
247	土師器	皿	溝1321	6.4	1.6		10YR7/4	雲母	乙訓在地形
248	土師器	皿	溝1321	6.6	1.4		10YR7/2	雲母	乙訓在地形
249	土師器	皿	溝1321	7.1	1.3		10YR7/2	雲母、赤色粒	乙訓在地形
250	土師器	皿	溝1321	7.4	1.3		10YR7/3	雲母、赤色粒	乙訓在地形
251	土師器	皿	溝1321	7.6	1.2		10YR7/3	雲母、赤色粒	乙訓在地形
252	土師器	皿	溝1321	8.0	1.6		10YR7/3	雲母、赤色粒	乙訓在地形
253	瓦器	羽釜	溝1321	31.0	(11.3)		2.5Y7/2		
254	瓦器	羽釜	溝1321	24.6	(13.7)		2.5Y7/2		
255	瓦器	羽釜	溝1321	28.4	(14.7)		2.5Y7/1		
256	瓦器	ミニチュア 羽釜	溝1321	6.4	(6.6)		N4/0		

（ ）は残存値、 単位はcm

No.	器種	器形	遺構名	口径	器高	底径	色調	胎土	備考
257	瓦器	羽釜	溝1321	15.2	(11.7)		2.5Y6/1		
258	瓦器	羽釜	溝1321	17.2	(8.9)		7.5YR4/1		
259	瓦器	火鉢	溝1321	40.0	11.8	32.6	2.5Y7/1		
260	施釉陶器	平椀	溝1321	15.4	(4.4)		胎:5Y8/1 釉:7.5Y7/2		瀬戸美濃系
261	土師器	皿	柱穴1080	6.8	1.8		7.5YR7/4	雲母、赤色粒	乙訓在地形
262	土師器	皿	柱穴1080	6.8	1.4		7.5YR7/4	雲母、赤色粒	乙訓在地形
263	土師器	皿	柱穴1080	6.9	1.4		7.5YR8/4	雲母、赤色粒	乙訓在地形
264	土師器	皿	柱穴1080	6.9	1.5		2.5Y8/2	雲母、赤色粒	乙訓在地形
265	土師器	皿	柱穴1080	7.0	1.4		10YR7/3	雲母、赤色粒	乙訓在地形
266	土師器	皿	柱穴1080	7.8	1.8		10YR7/3	雲母、赤色粒	乙訓在地形
267	土師器	皿	柱穴1080	10.6	1.7		5YR7/4	雲母、赤色粒	乙訓在地形
268	土師器	皿	柱穴1080	11.0	2.1		7.5YR7/4	雲母、赤色粒	乙訓在地形
269	土師器	皿	柱穴1080	13.8	2.2		7.5YR7/4	雲母、赤色粒	乙訓在地形
270	土師器	皿	溝1323	7.0	1.4		10YR7/3	雲母、赤色粒	乙訓在地形
271	土師器	皿	溝1323	7.6	2.1		7.5YR6/4	雲母、赤色粒	乙訓在地形
272	土師器	皿	溝1323	7.6	1.3		10YR8/2	赤色粒	乙訓在地形
273	土師器	皿	溝1323	7.6	1.4		7.5YR7/4	雲母、赤色粒	乙訓在地形
274	瓦器	ミニチュア 羽釜	溝1323	6.6	(3.2)		10YR7/2		体部上半に孔を穿つ 1箇所確認
275	土師器	皿	溝1003	6.9	1.9		10YR7/3	雲母、赤色粒	乙訓在地形
276	土師器	皿	溝1003	7.0	1.3		10YR7/3	雲母	乙訓在地形
277	土師器	羽釜	溝1003	19.6	(16.6)		10YR7/3		
278	瓦器	羽釜	溝1003	14.0	(8.5)		N4/0		
279	輸入青磁	椀	溝1003	17.6	(5.9)		胎:N8/0 釉:5GY7/1		産地不明
280	土師器	皿	溝256(新)	8.0	2.0		10YR7/3	雲母	乙訓在地形
281	土師器	皿S	溝256(新)	12.4	(2.5)		2.5Y8/1		
282	土師器	皿S	溝256(新)	13.0	2.6		10YR8/3		
283	瓦器	羽釜	溝256(新)	26.8	(11.0)		N6/0		
284	瓦器	羽釜	溝256(新)	15.0	(19.8)		N4/0		
285	瓦器	風炉	溝256(新)	23.4	(7.2)		N3/0		
286	焼締陶器	壷	溝256(新)		(16.8)	14.2	10YR4/3		信楽産
287	土師器	皿	溝1002	6.8	1.4		7.5YR7/3	雲母、赤色粒	乙訓在地形
288	土師器	皿	溝1002	7.3	1.4		7.5YR7/4		乙訓在地形

（ ）は残存値、 単位はcm

No.	器種	器形	遺構名	口径	器高	底径	色調	胎土	備考
289	土師器	皿N	溝1002	6.7	1.1		7.5YR8/3	φ～1㎜の長石、 雲母、赤色粒	
290	土師器	皿Sb	溝1002	8.6	1.7		7.5YR4/1		
291	土師器	皿Sb	溝1002	9.4	2.1		5YR7/4	赤色粒	
292	土師器	羽釜	溝1002	19.0	(11.1)		2.5Y8/3		
293	瓦器	擂鉢	溝1002	22.2	(11.0)		N4/0		
294	瓦器	深鉢	溝1002	48.4	45.6	37.0	N8/0		
295	焼締陶器	壷	溝1002	14.2	(6.9)		N5/0		備前産
296	施釉陶器	筒形椀	溝1002	11.2	6.1		胎:10YR7/2 釉:5Y6/2		瀬戸美濃系(大窯)
297	施釉陶器	丸皿	溝1002	10.6	2.5	6.3	胎:2.5Y8/2 釉:5Y7/2		瀬戸美濃系(大窯)
298	施釉陶器	天目椀	溝1002	11.6	5.9	4.4	胎:2.5Y6/1 釉:5YR2/2		瀬戸美濃系(大窯)
299	輸入陶器	丸椀	溝1002	10.4	7.6	4.6	胎:7.5YR5/1 釉:5YR3/1		産地不明
300	土師器	皿	溝1320	7.0	1.8		10YR7/2	雲母、赤色粒	乙訓在地形
301	土師器	皿	溝1320	7.0	1.5		10YR7/3	雲母、赤色粒	乙訓在地形
302	土師器	皿S	溝1320	12.0	2.3		7.5YR7/4	赤色粒	乙訓在地形
303	土師器	皿S	溝1321	12.2	(1.9)		2.5Y7/1		
304	土師器	皿S	溝1320	13.2	1.9		2.5Y8/2		
305	土師器	羽釜	溝1320	19.0	(16.1)		2.5Y5/2		
306	瓦器	香炉	溝1320	13.0	(4.5)		内:10YR7/2 外:5YR7/3	φ1㎜前後の長石	3足の脚が付くか
307	輸入白磁	椀	溝1320	7.0	2.5	2.9	胎:N8/0 釉:N8/0		産地不明
308	土師器	皿S	溝246	12.4	2.0		7.5YR7/4		
309	土師器	小壷	溝246	2.4	2.2		2.5Y8/1		
310	輸入青磁	椀	溝246	13.4	5.2	5.1			産地不明
311	瓦器	香炉	溝1158	11.4	4.6	10.8	5Y6/1		
312	瓦器	香炉	溝1158	17.6	6.5		N4/0		
313	施釉陶器	皿	溝1158	11.2	2.7	4.8	胎:10YR7/2 釉:10YR6/2		唐津産
314	輸入青磁	皿	土坑2018			5.0	胎:2.5Y8/2 釉:2.5Y7/2		同安窯系 底部外面に「大」
315	輸入青磁	椀	溝1322			6.6	胎:N8/0 釉:2.5GY7/2		龍泉窯系 底部外面に「上」?
316	輸入白磁	椀	4区Ⅵ層			4.1	胎:N8/0 釉:2.5Y8/1		同安窯系 底部外面に「十」
317	施釉陶器	椀	4区Ⅱ～Ⅳ層			4.2	胎:7.5Y7/2 釉:5Y7/1		唐津産 底部外面に「大」

付表２　瓦類一覧表

No.	種類	遺構名	文　様	成形技法等	備　考
瓦1	軒平瓦	溝2027	外行唐草文	瓦当:裏面・側面ナデ、瓦当面中位の裏に平瓦を当て上下面から補足粘土 平瓦:凸面ナデ、凹面布目	播磨産。 明石市林崎三本松窯に同文(NH-30) ※1
瓦2	軒平瓦	4区Ⅶ層	連珠文・外区は界線	瓦当:段顎、裏面・側面ナデ 頸部に凹型調整台の痕跡 平瓦:凸面縦ナデ、凹面布目	京都市常盤仲ノ町遺跡に同文(図版18 No.5) ※2
瓦3	軒平瓦	溝1711	外行唐草文・外区は界線	瓦当:段顎、裏面・側面ナデ、凹面ケズリ 頸部に凹型調整台の痕跡 平瓦:凸面縦ナデ、凹面布目	京都市東福寺に同文(No.66) ※3
瓦4	軒平瓦	溝1321	外行唐草文・外区は界線	瓦当:段顎、裏面・側面ナデ、凹面ケズリ 平瓦:凸面縦ナデ、凹面布目	京都市東福寺に同文(No.66) ※3 煤付着
瓦5	軒平瓦	溝1320	唐草文	瓦当:段顎、裏面・側面ナデ、凹面ケズリ 頸部に凹型台の痕跡 平瓦:凸面ナデ、凹面ヘラナデ(平滑)	長岡京市勝龍寺城に同文(SJH-06) ※4 煤付着
瓦6	軒平瓦	井戸1124	唐草文	瓦当:裏面・側面ナデ 平瓦:凸面・凹面ナデ	

※１　『林崎三本松瓦窯跡群発掘調査報告書』明石市文化財調査報告６　明石市文化・スポーツ部文化振興課　2017年
※２　『常盤仲ノ町集落跡発掘調査報告』京都市埋蔵文化財研究所調査報告-Ⅲ 財団法人京都市埋蔵文化財研究所　1978年
※３　『東福寺防災施設工事・発掘調査報告書』 大本山東福寺　1990年
※４　『勝龍寺城発掘調査報告』長岡京市埋蔵文化財調査報告書第６集 長岡京市教育委員会・勝竜寺城公園整備に伴う発掘調査委員会　1991年

付表３　土製品一覧表

（ ）は残存値

No.	種類	遺構名	法　量(cm)	色調	胎　土	備　考
土1	坩堝	土坑2018	口径14.0、器高5.7	2.5Y7/1	φ9.5㎜以下の長石・雲母・チャートを含む	蛍光X線分析
土2	鞴羽口	土坑2018	長さ(9.7)、幅(7.5)、高さ(7.2)	2.5Y6/1	φ7.0㎜以下の長石・石英・チャート・赤色粒を含む	
土3	鞴羽口	土坑2018	長さ(5.7)、幅(6.9)、高さ(6.6)	N5/0	φ4.0㎜以下の長石・石英・チャートを含む	

付表４　石器・石製品一覧表

（ ）は残存値

No.	種類	遺構名	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	石材	備　考
石1	石硯	溝1158	13.1	5.9	0.9	102.0	粘板岩	硯面・硯陰に使用痕
石2	石硯	溝1160	(9.6)	7.8	1.3	(131.0)	粘板岩	
石3	石鍋	溝1003		口径 (29.2)	器高 (6.0)	(478.0)	滑石	煤付着
石4	石鍋	溝1321		口径 (33.0)	器高 (9.0)	(558.0)	滑石	煤付着
石5	砥石	4区Ⅴ層	12.8	3.5	1.7	142.0	粘板岩	
石6	砥石	溝1003	(8.5)	4.0	3.0	(123.0)	堆積岩	U字溝2条・線状痕・河原石を利用
石7	砥石	4区Ⅴ層	(10.3)	(10.8)	6.6	(555.0)	砂岩	U字溝3条・線状痕
石8	石臼	柱穴1274	(29.3)	(23.8)	12.2	(11500.0)	深成岩(花崗岩)	
石9	別石五輪塔	湿地状堆積2043	23.3	16.1	16.1	7000.0	深成岩(花崗岩)	空風輪・表面剥離大

付表５　木製品一覧表

（ ）は残存値

No.	種類	遺構名	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	備　考
木1	柿経	溝1002	26.9	2.6	0.05	約2,220枚　頭部圭頭状・下端部方形　側面墨書(年号紀ほか)
木2	卒塔婆	溝1002	(53.5)	6.0	1.0	A・B面浮き上がり文字残存
木3	位牌	溝1002	26.1	5.2	1.1	表裏面黒漆
木4	魚形	溝1322	6.0	1.6	0.9	
木5	木球	溝1303	3.7	3.9	2.7	
木6	椀	土坑1010		口径 (9.8)	器高 (5.8)	全面黒漆　挽物
木7	椀	溝1321		口径 13.4	器高 6.3	全面黒漆、内外面に朱漆で草文　挽物
木8	椀	溝1321		口径 (15.6)	器高 (9.2)	外面黒漆・内面朱漆、外面に朱漆で草文　挽物
木9	組合せ箱	溝256(古)	8.5	17.6	0.9	側板　組合せ部の枘上面に釘穴(一部木釘残存)
木10	用途不明	溝1321	(27.6)	1.9	2.7	枘穴あり
木11	下駄	溝1003	18.9	(8.5)	(3.7)	連歯下駄　台上面の後壷側に線刻
木12	下駄	溝256(古)	20.1	10.3	2.8	連歯下駄　台上面の後壷側に線刻
木13	杖	溝1002	117.8		2.1 ～2.3	握りに滑り止めの刻目

付表６　金属製品一覧表

（ ）は残存値

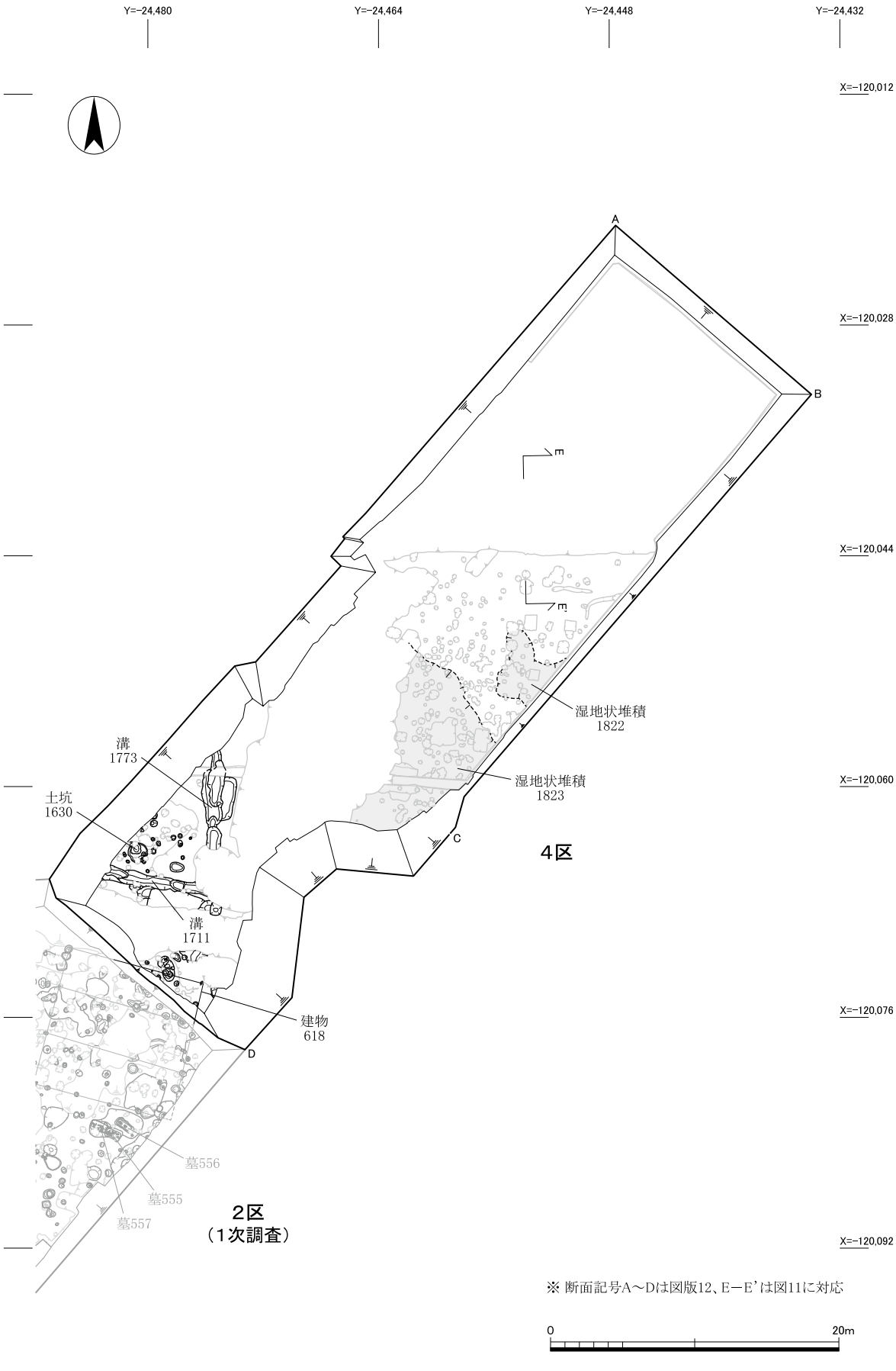
No.	種類	遺構名	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	備　考
金1	刀子	溝246	(17.9)	(1.4)	0.3	(19.2)	鉄製・平造り
金2	小柄	溝1323	(10.3)	1.3	0.5	(19.7)	銅柄・鉄刀欠損
金3	小柄	柱穴1382	(7.4)	1.5	0.6	(16.9)	銅柄・鉄刀欠損
金4	菊花形紅皿	溝1320	口径 4.5	底径 1.8	器高 1.8	12.5	銅製・全面鍍金・高台鋲留 福井県一乗谷朝倉氏遺跡第50次調査に類例　※1
金5	椀	4区Ⅱ～Ⅳ層	口径 6.8	底径 3.2	器高 3.5	42.3	銅製
金6	鎌	4区Ⅵa層	(8.7)	(3.0)	(1.0)	29.0	鉄製
金7	釘隠	4区Ⅱ～Ⅳ層	(1.6)	(1.6)	0.3	0.7	銅製・巴文
金8	用途不明	土坑1630	12.6	0.9	0.6	16.8	鉄製・釘か

※１　『特別史跡一乗谷朝倉氏遺跡発掘調査報告Ⅸ　第49・50次調査』　福井県立朝倉氏遺跡資料館　2007年

付表７　銭貨一覧表

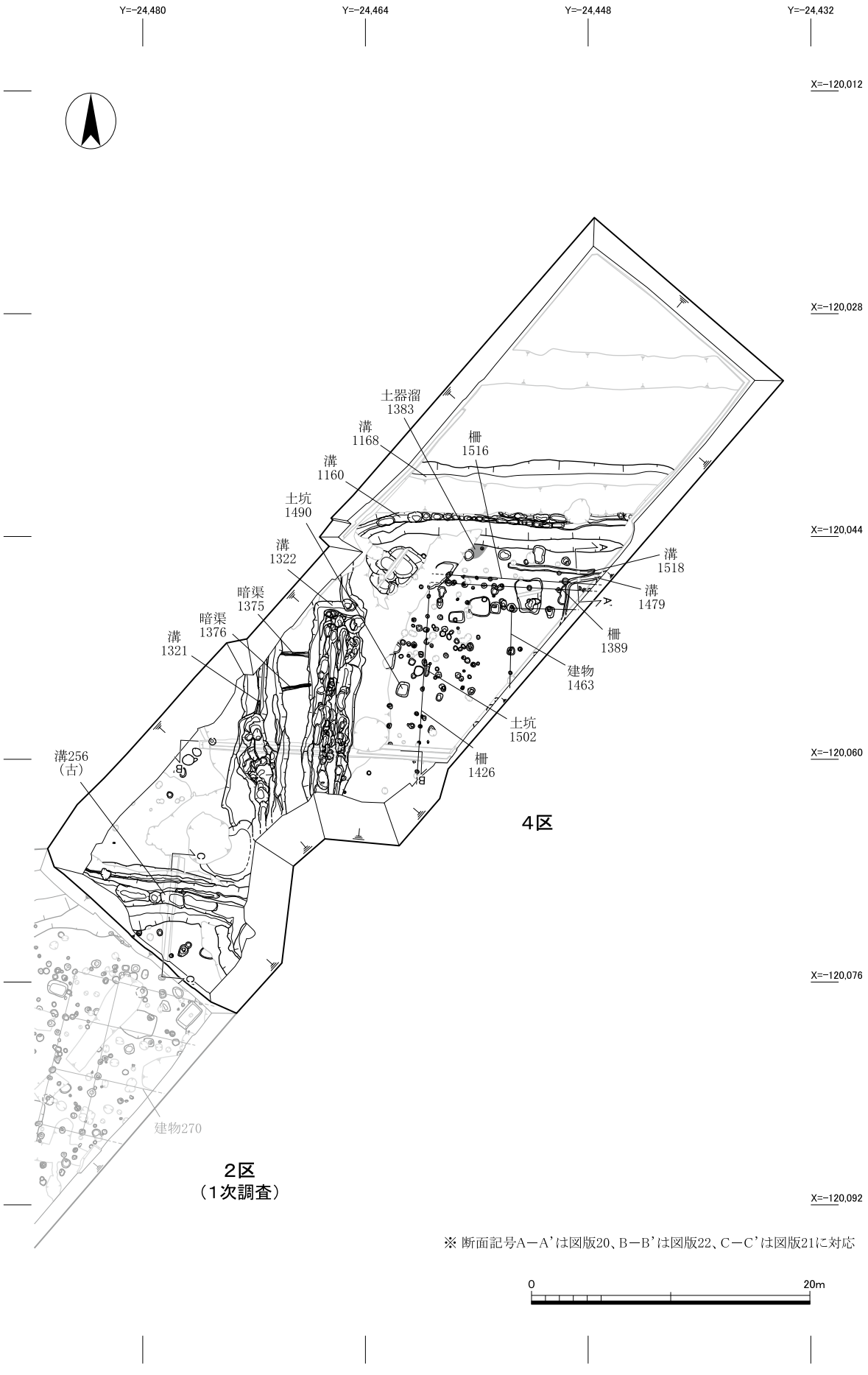
No.	種類	遺構名	外径(cm)	孔径(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	初鋳年	備考
銭1	宋通元寶	溝1711	2.53	0.58	0.13	3.5	960	
銭2	咸平元寶	溝1711	2.47	0.58	0.16	4.1	998	真書体
銭3	祥符元寶	溝1711	2.50	0.63	0.15	2.9	1008	真書体
銭4	天禧通寶	溝1711	2.58	0.60	0.15	3.6	1017	真書体
銭5	政和通寶	溝1711	2.50	0.57	0.19	4.5	1111	篆書体
銭6	皇宋通寶	柱穴1723	2.28	0.67	0.12	2.2	1038	真書体
銭7	紹聖元寶	建物1463	2.35	0.70	0.15	2.4	1094	篆書体
銭8	元豊通寶	土坑1490	2.10	0.70	0.11	1.7	1078	行書体
銭9	元祐通寶	土坑1490	2.42	0.68	0.13	3.1	1086	行書体
銭10	聖宋元寶	溝1321	2.47	0.69	0.14	3.6	1101	行書体
銭11	景徳元寶	溝1322	2.44	0.56	0.14	3.3	1004	真書体
銭12	永楽通寶	土坑1502	2.51	0.58	0.14	3.4	1408	
銭13	開元通寶	溝1002	2.45	0.67	0.13	3.2	621	背月
銭14	至和元寶	溝1002	2.37	0.66	0.14	3.2	1054	真書体
銭15	熙寧元寶	4区VIa層	2.39	0.64	0.15	3.2	1068	真書体
銭16	天聖元寶	4区Ⅴ層	2.54	0.70	0.14	3.1	1023	真書体
銭17	洪武通寶	4区Ⅴ層	2.14	0.48	0.18	3.4	1368	背に「一銭」
銭18	古寛永通寶	5区Ⅲ・Ⅳ層	2.37	0.60	0.10	1.9	1636	

図　　版

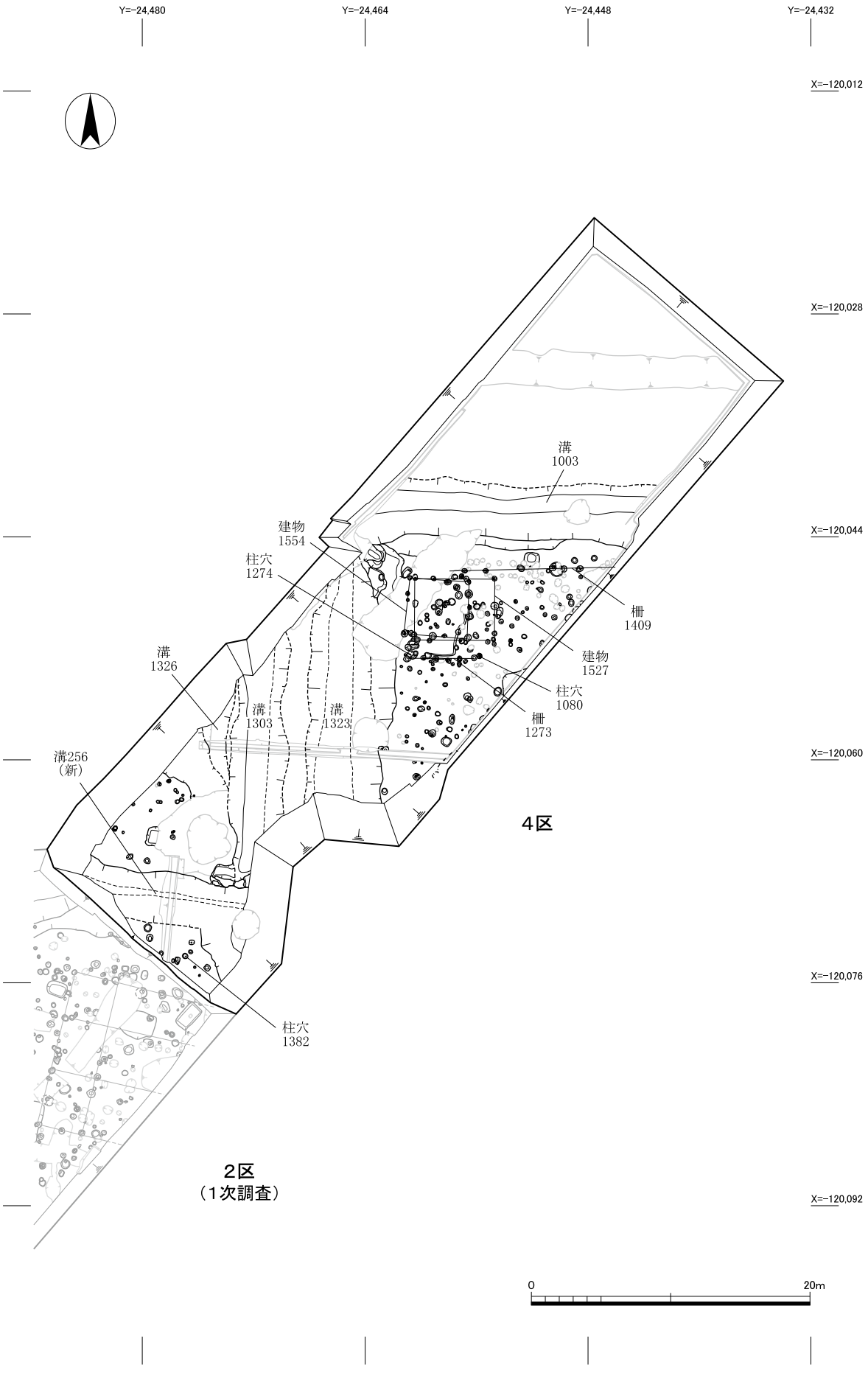


4区 第4ｂ面（鎌倉時代中葉から後葉）平面図（1：400）

4区 第4a面（鎌倉時代末から室町時代前半）平面図（1：400）

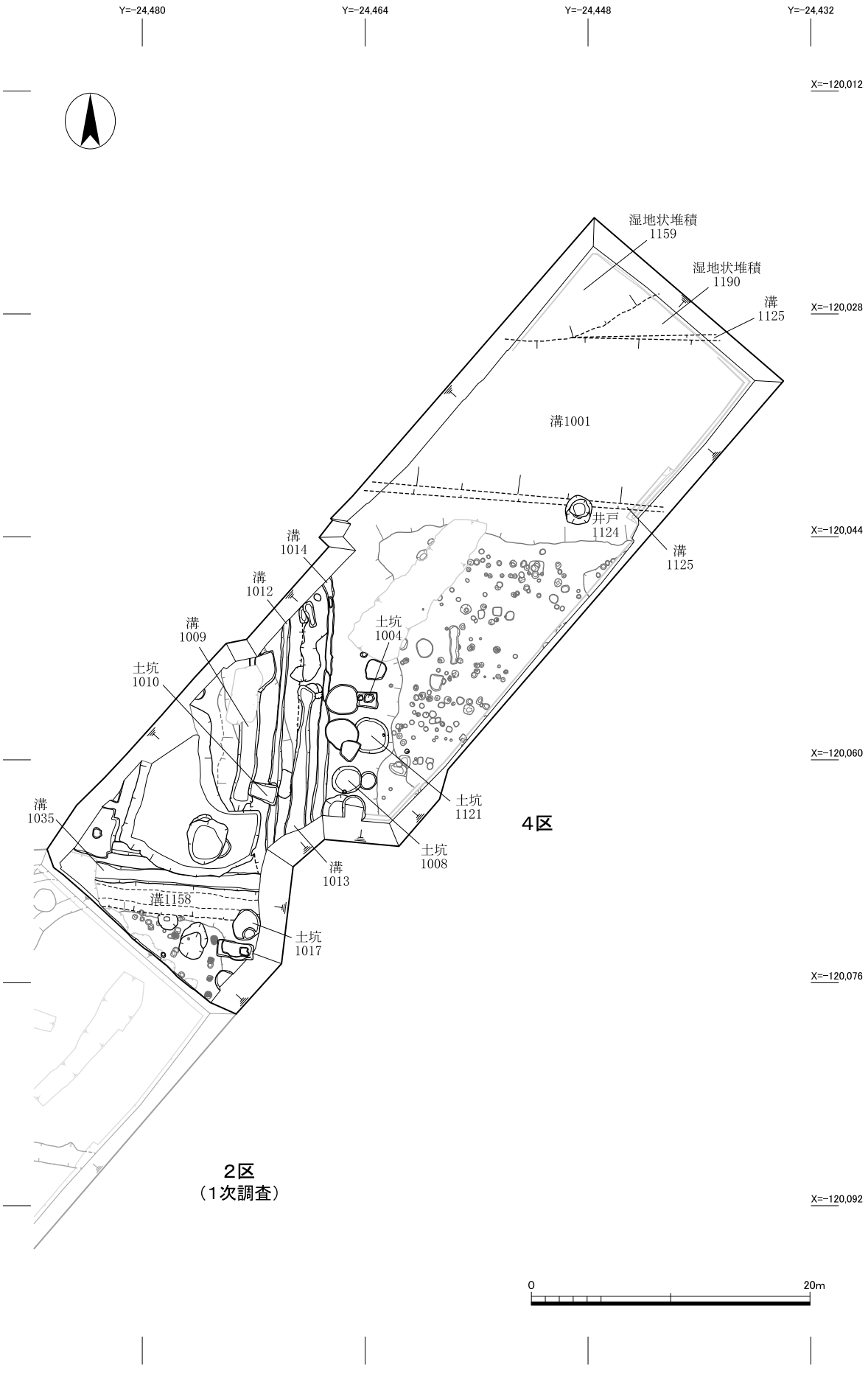


4区 第3面（室町時代後半〔古段階〕）平面図（1：400）

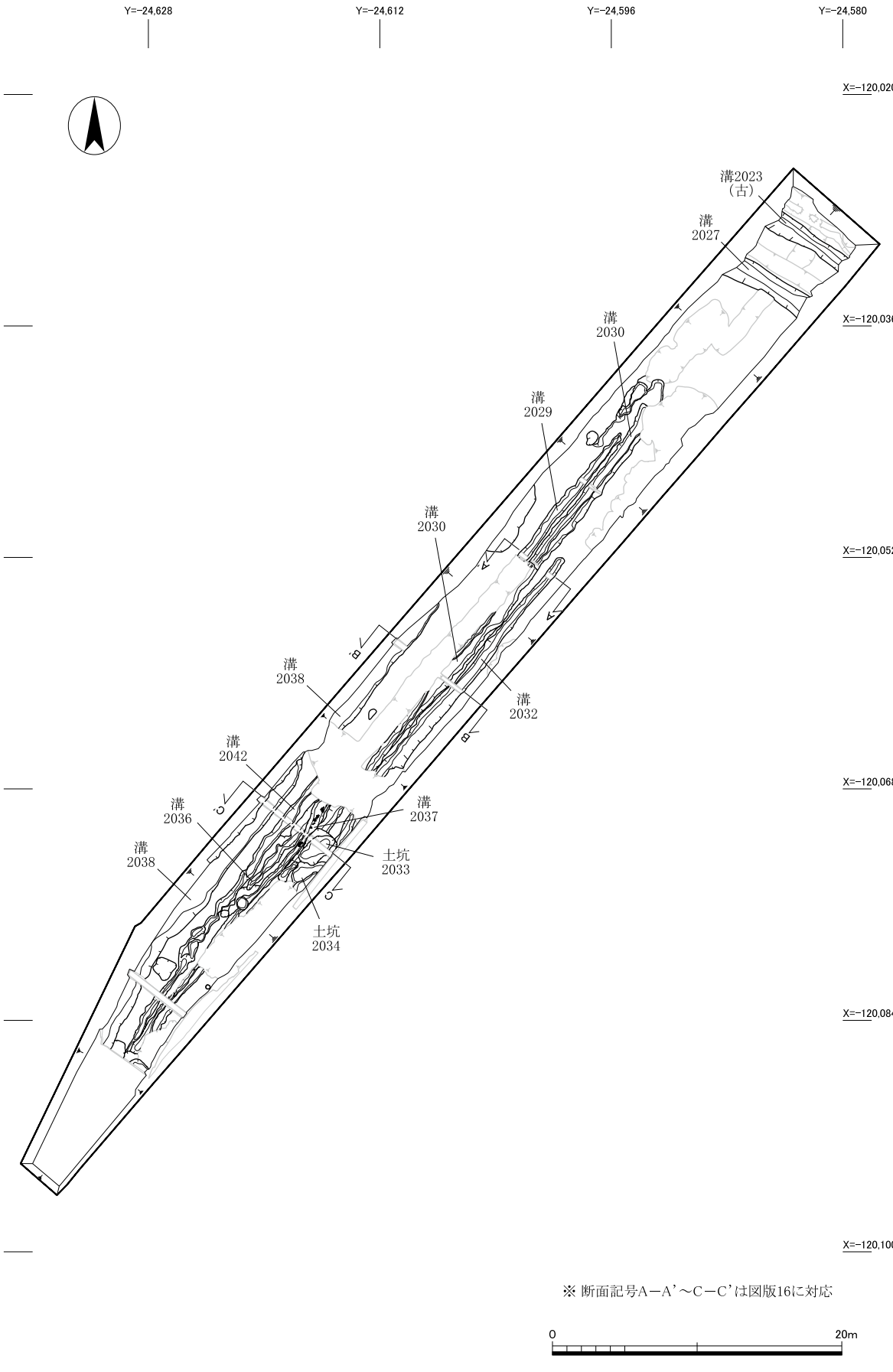


4区 第2面（室町時代後半〔新段階〕）平面図（1：400）

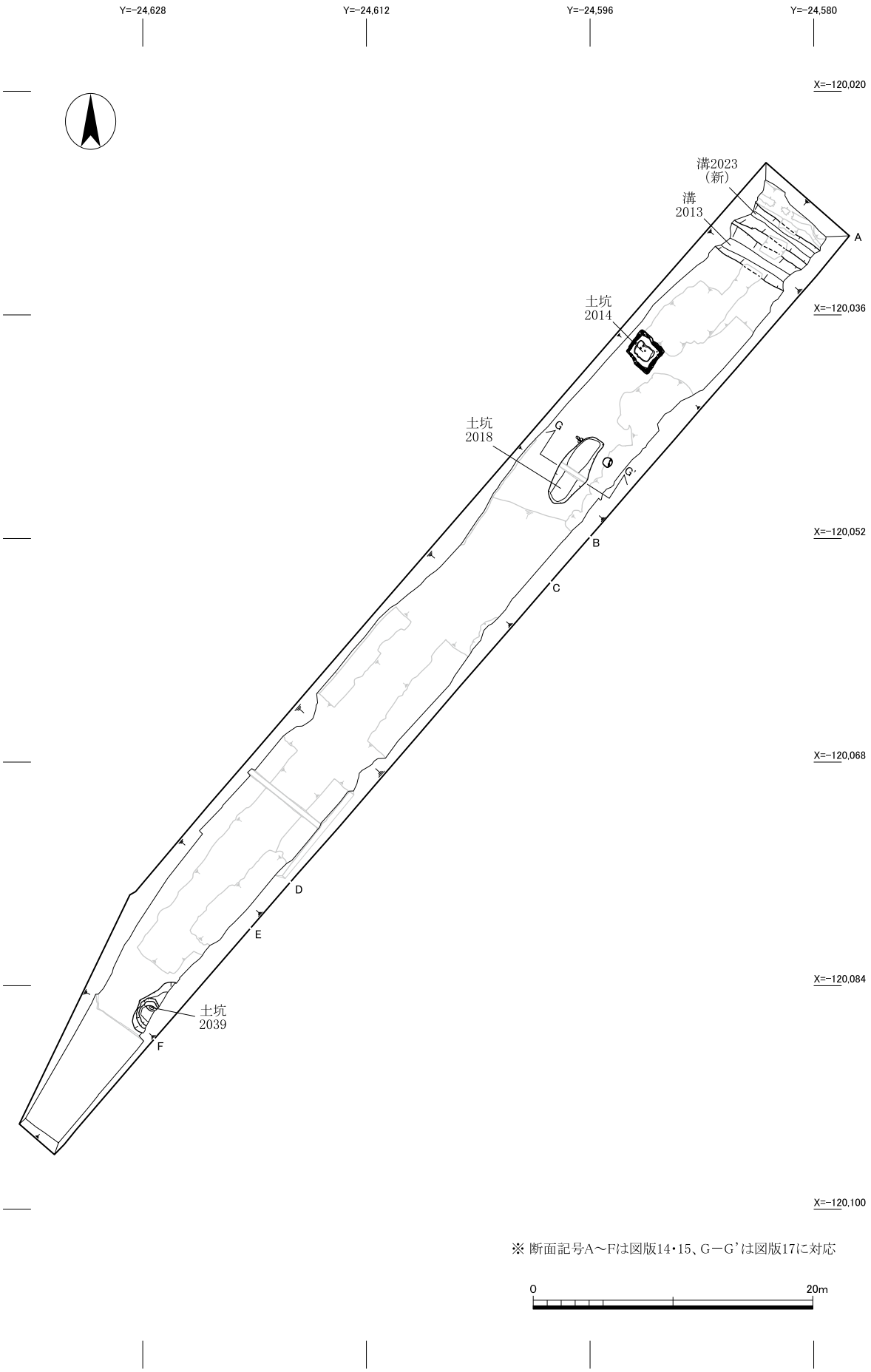
4区 第1ｂ面（安土桃山時代）平面図（1：400）



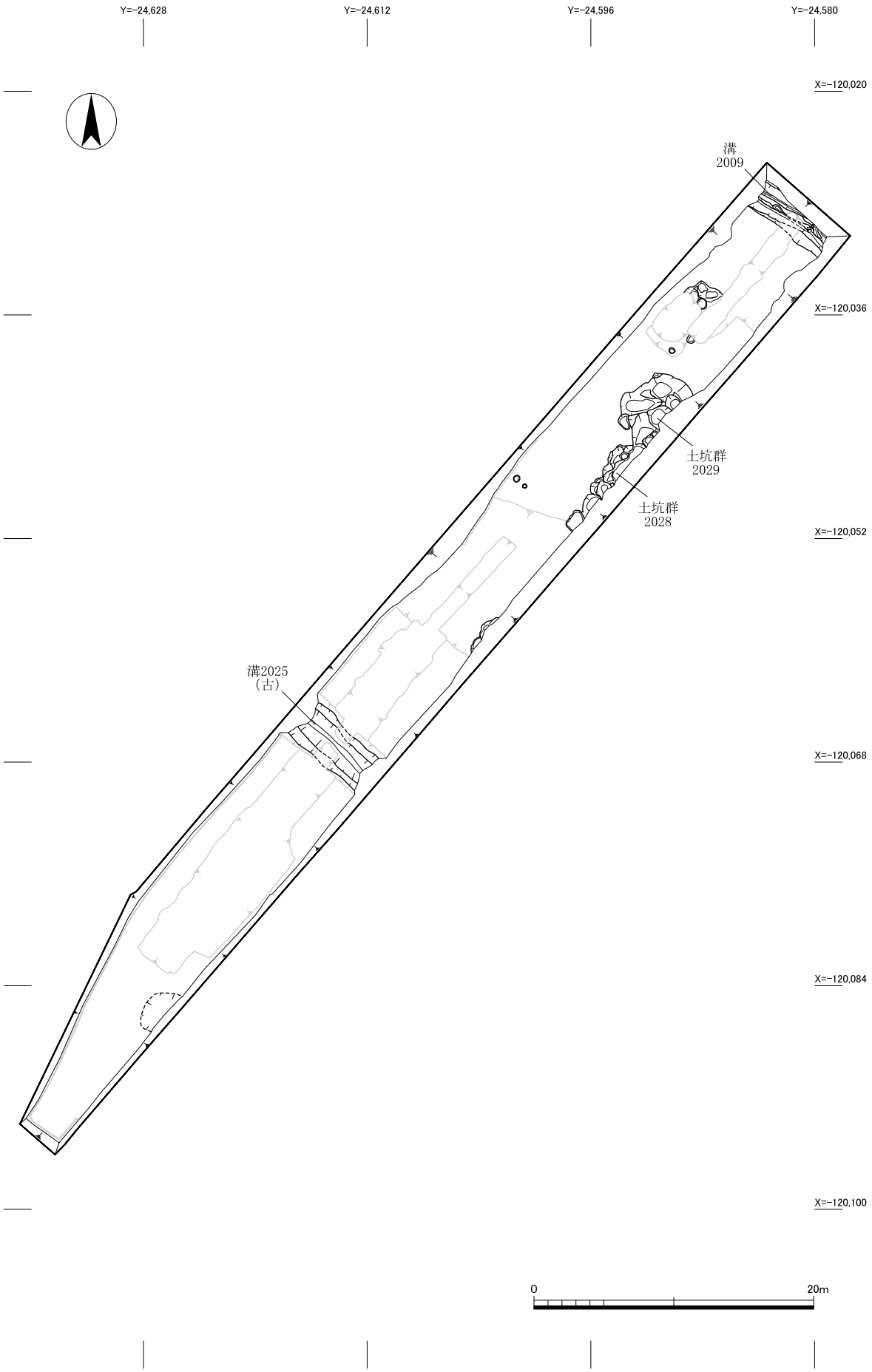
4区 第1a面（江戸時代）平面図（1：400）



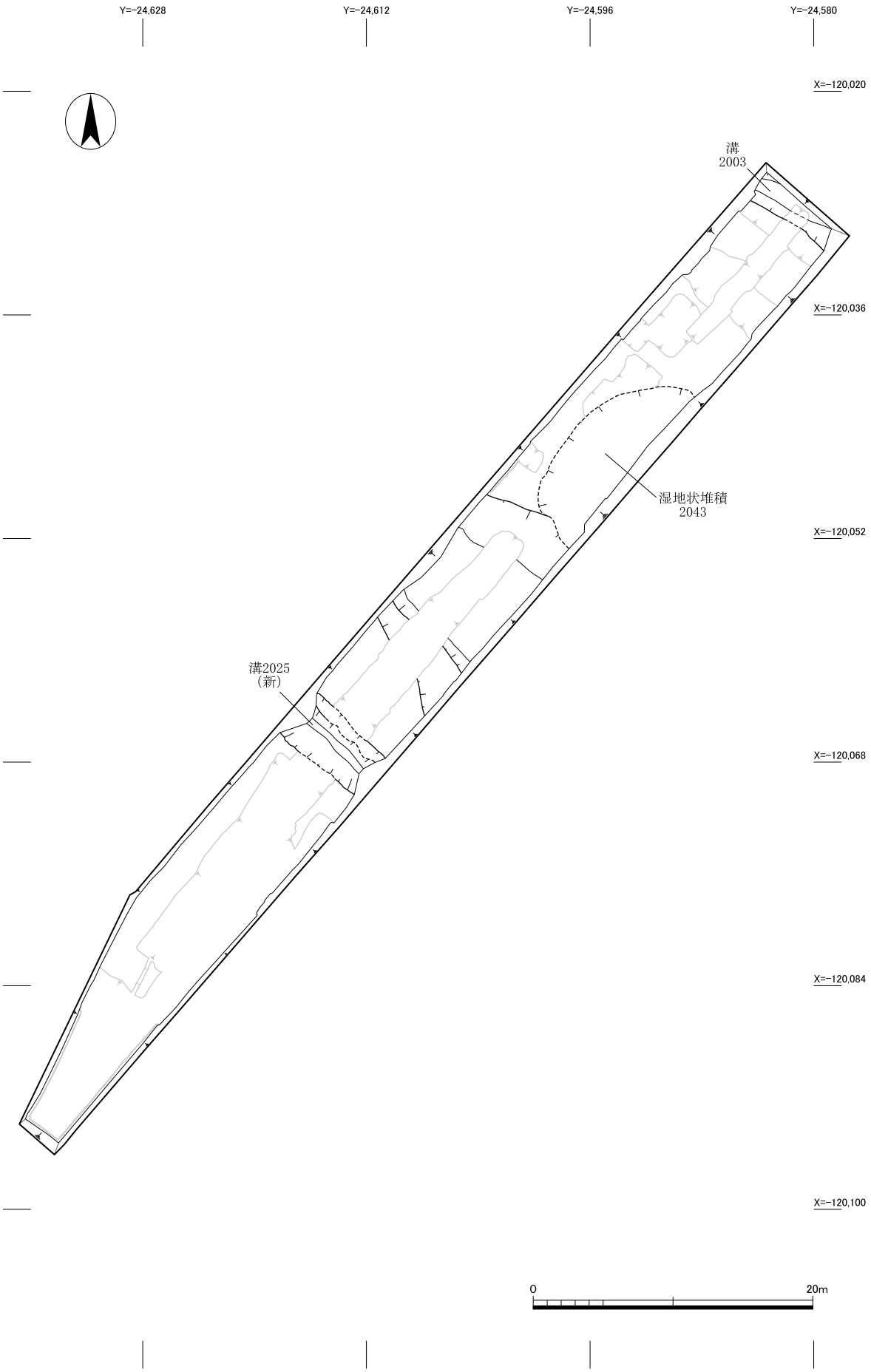
5区 第3面（平安時代後期から鎌倉時代前葉）平面図（1：400）



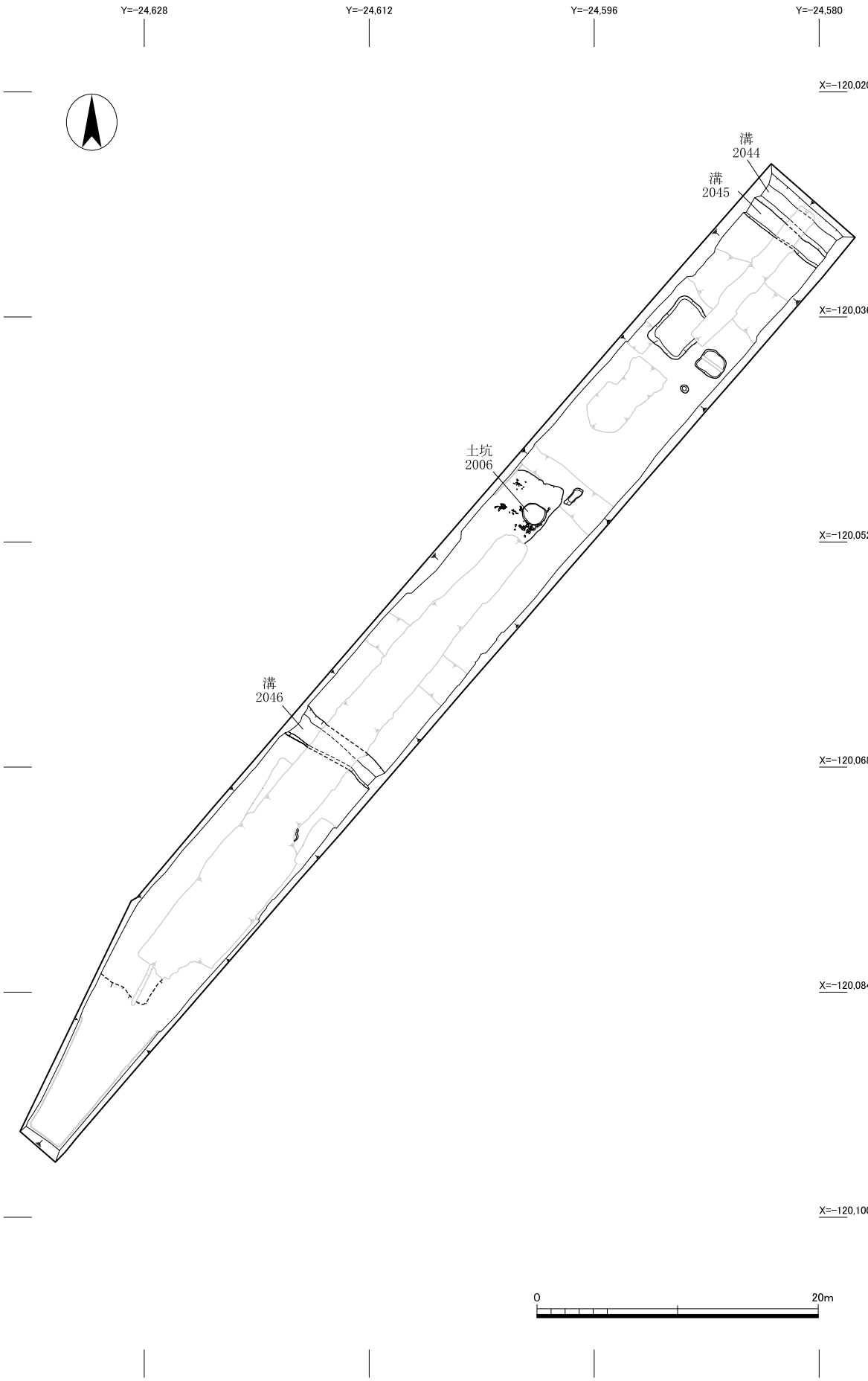
5区 第2b面（鎌倉時代中葉から後葉）平面図（1：400）



５区 第２a面（室町時代後半）平面図（１：400）

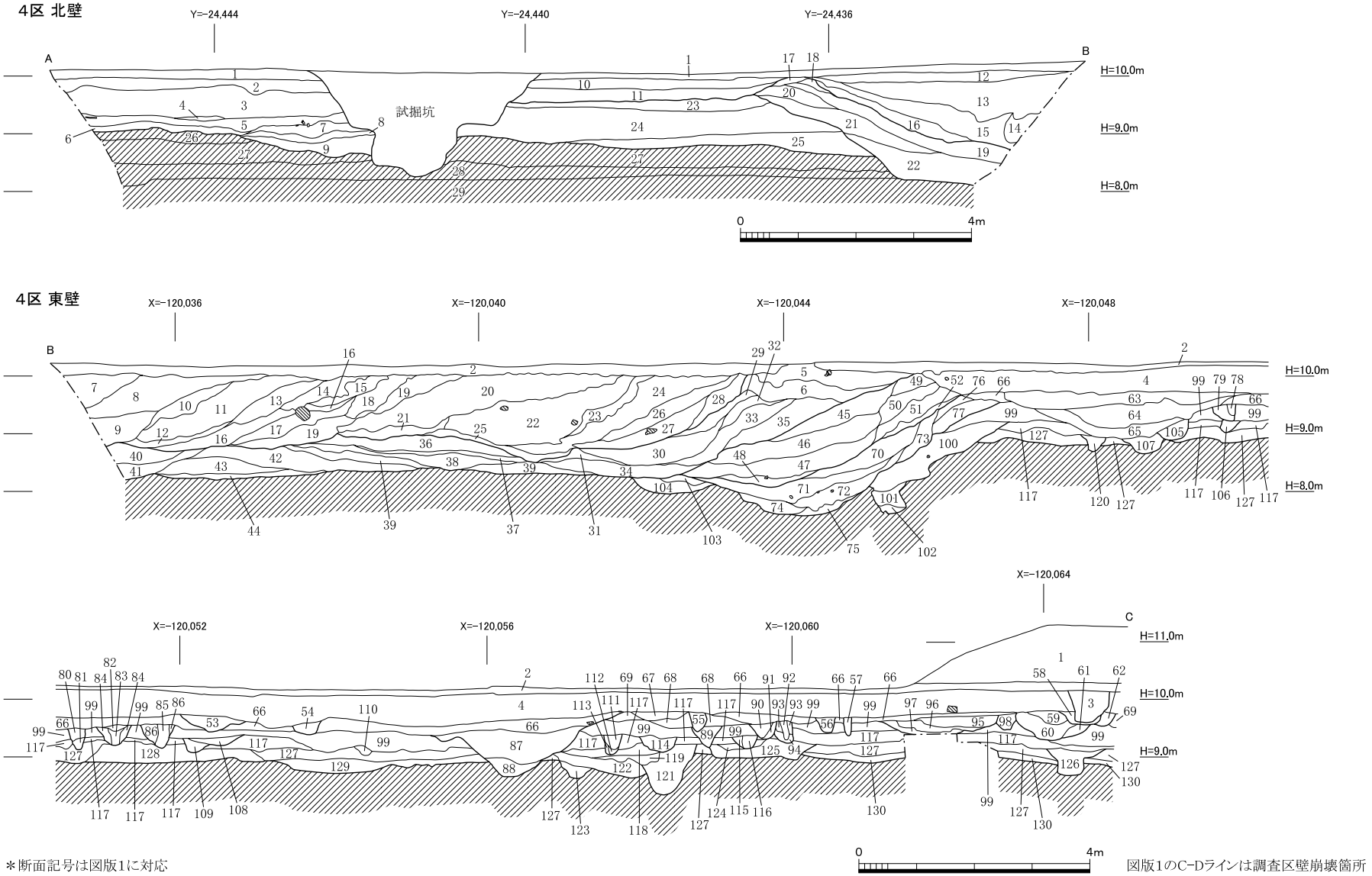


5区 第1b面（安土桃山時代）平面図（1：400）



5区 第1a面（江戸時代）平面図（1：400）

4区 北壁・東壁断面図1（1：100）



＊断面記号は図版1に対応

図版1のC-Dラインは調査区壁崩壊箇所

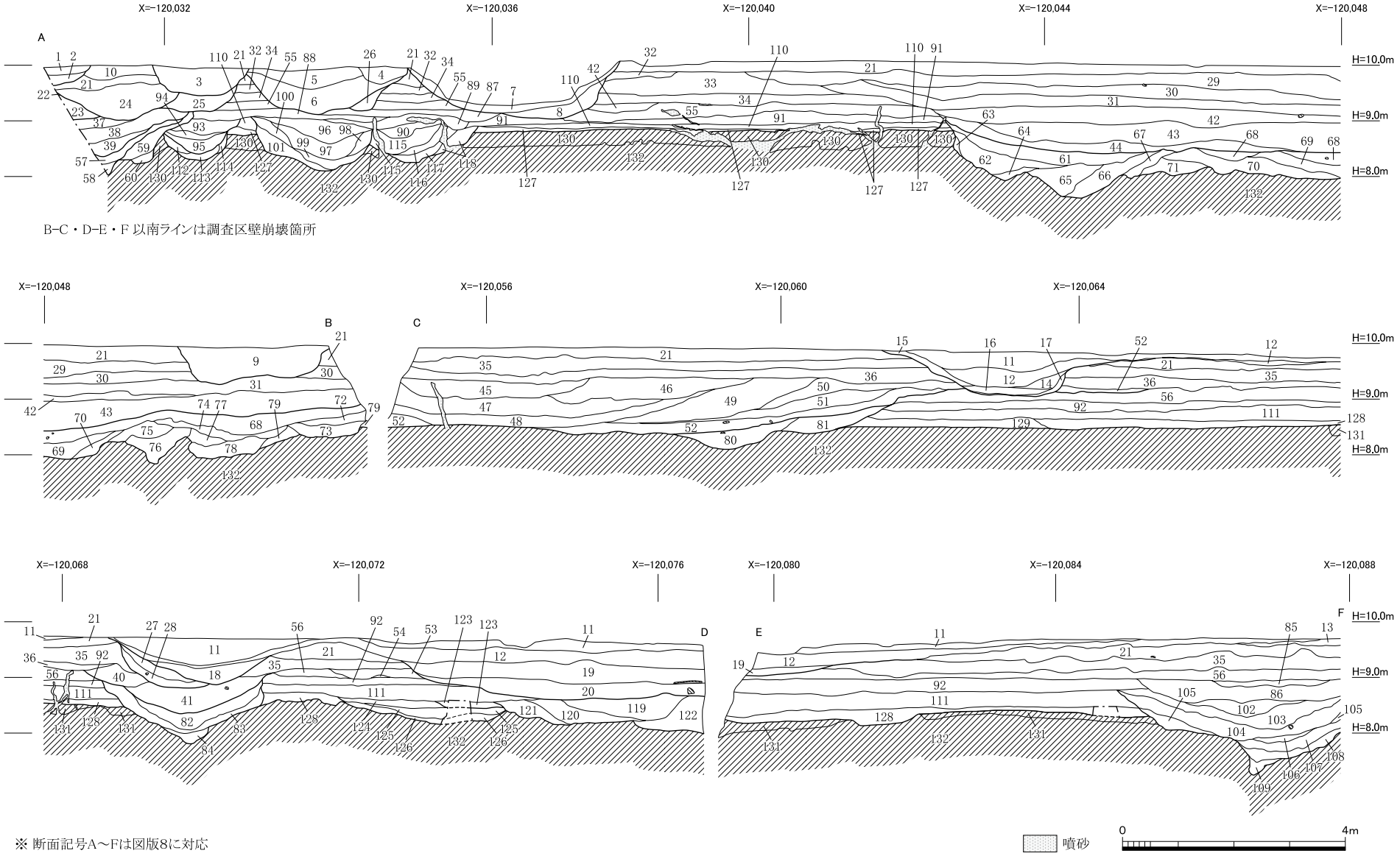
4区 北壁

1 2.5Y4/2 暗灰黄色 砂泥 — Ⅰ層
2 10YR4/1 褐灰色 シルト φ0.5～3cmの礫少量含
3 2.5Y5/1 黄灰色 砂泥 +7.5Y4/4 褐色 粗砂多量含
4 7.5Y4/1 灰色 シルト
5 5Y5/1 灰色 シルト +7.5Y3/1 オリーブ黒色 シルト 木片含
6 5Y3/2 オリーブ黒色 シルト
7 5Y3/1 オリーブ黒色 シルト 木片含
8 7.5Y4/1 灰色 シルト
9 7.5Y5/1 灰色 シルト — 湿地状堆積1159
10 10YR5/2 灰黄褐色 砂泥 φ0.5～4cmの礫少量含
11 2.5Y4/1 黄灰色 シルト — Ⅱ層
12 10YR4/3 にぶい黄褐色 極細砂
13 10YR4/1 褐灰色 砂 炭・焼土少量含
14 N3/0 暗灰色 砂泥
15 5Y3/1 オリーブ黒色 シルト
16 7.5Y3/1 オリーブ黒色 泥砂 粗砂多量含 — 溝1001
17 2.5Y5/1 黄灰色 泥砂 φ0.5～1cmの礫少量含 — 畦畔
18 2.5Y4/1 黄灰色 砂泥 φ0.5～2cmの礫少量含
19 5Y4/1 灰色 シルト φ0.5～2cmの礫少量含
20 10YR5/2 灰黄褐色 シルト φ0.5～2cmの礫少量含
21 2.5Y4/1 黄灰色 シルト
22 7.5Y4/1 灰色 シルト φ1～2cmの礫極少量含 — 溝1125
23 2.5Y4/2 暗灰黄色 砂泥
24 2.5Y5/3 黄褐色 砂泥
25 5Y4/1 灰色 砂泥 — 湿地状堆積1190
26 5Y4/1 灰オリーブ色 泥砂
27 7.5Y4/2 灰オリーブ色 泥砂
28 7.5Y4/2 灰オリーブ色 泥砂
29 7.5YR4/4 褐色 砂礫 — Ⅸ層（基盤層）

4区 東壁

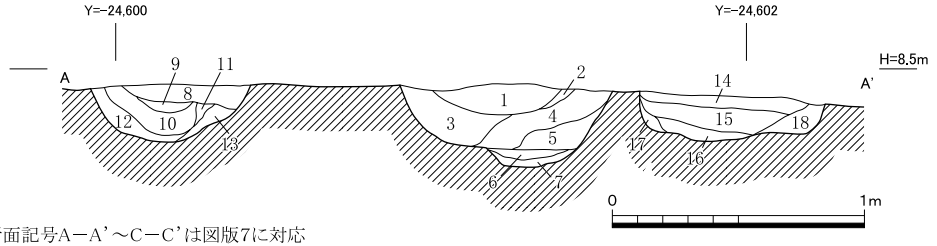
1 2.5Y5/2 暗灰黄色 泥砂 礫多量含 — Ⅰ層
2 2.5Y4/2 暗灰黄色 砂泥 — Ⅰ層
3 10YR4/3 にぶい黄褐色 細砂
+10YR5/1 褐灰色 シルトブロック、炭・焼土少量含 — 土坑
4 10YR4/4 褐色 砂泥 炭・焼土少量含
5 2.5Y4/2 暗灰黄色 砂礫
6 10YR5/1 褐灰色 砂泥 粗砂含 — Ⅱ～Ⅳ層
7 10YR4/1 褐灰色 砂 炭・焼土少量含
8 N3/0 暗灰色 砂泥
9 5Y3/1 オリーブ黒色 シルト
10 10YR4/3 にぶい黄褐色 砂礫 φ0.5～8cmの礫多量含
11 5Y4/1 灰色 シルト +10YR4/3 にぶい黄褐色 砂礫
12 5Y2/1 黒色 シルト
13 10YR4/3 にぶい黄褐色 砂礫 φ0.5～10cmの礫多量含
14 2.5Y4/1 黄灰色 砂礫 φ0.5～10cmの礫多量含む
15 10YR5/1 褐灰色 シルト
16 5Y2/1 黒色 シルト +10YR2/3 黒褐色 シルトの互層
17 2.5Y5/2 暗灰黄色 泥砂
18 2.5Y5/1 黄灰色 砂礫 φ0.5～10cmの礫多量含
19 10YR5/1 褐灰色 砂 +2.5Y4/1 黄灰色 シルト
20 2.5Y5/1 黄灰色 砂礫
+2.5Y5/3 黄褐色 粗砂 φ0.5～10cmの礫多量含
21 2.5Y4/2 暗灰黄色 シルト 細砂含 — 溝1001
22 5Y6/1 灰色 粗砂 +2.5Y6/1 黄灰色 粗砂
23 2.5Y5/1 黄灰色 砂礫 φ0.5～5cmの礫多量含
24 2.5Y6/2 黄灰色 粗砂
25 10YR4/1 褐灰色 シルト 細砂含
26 5Y6/1 灰色 砂礫 φ0.5～10cmの礫多量含
27 2.5Y4/2 暗灰黄色 シルト +10YR2/3 黒褐色 植物遺体含
28 10YR5/2 灰黄褐色 シルト — 溝1001
29 2.5Y5/2 暗灰黄色 シルト 粗砂・φ1～8cmの礫含
30 10YR4/2 灰黄褐色 シルト
+10YR2/3 黒褐色 シルト 粗砂・φ1～8cmの礫少量含
31 2.5Y6/1 黄灰色 シルト
32 5Y6/1 灰色 シルト
33 5Y6/3 オリーブ黄色 シルト φ0.5～5cmの礫極少量含
34 5Y3/1 オリーブ黒色 シルト 粗砂・φ0.5～5cmの礫少量含
35 5Y6/2 灰オリーブ色 シルト φ0.5～3cmの礫極少量含
36 5Y4/1 灰色 シルト
37 5Y6/1 灰色 シルト
38 5Y5/1 灰色 シルト
39 2.5Y4/1 黄灰色 シルト 粗砂・φ0.5～5cmの礫含
40 5Y4/1 灰色 シルト φ0.5～2cmの礫少量含
41 7.5Y4/1 灰色 シルト φ1～2cmの礫極少量含
42 5Y5/1 灰色 シルト
43 5Y4/1 灰色 シルト 粗砂・φ0.5～5cmの礫少量含
44 2.5Y4/1 黄灰色 シルト 粗砂・φ0.5～5cmの礫含 — 溝1125
45 5Y5/2 灰オリーブ色 シルト φ0.5～3cmの礫少量含
46 7.5Y5/1 灰色 シルト φ1～5cmの礫含
47 5Y4/2 灰オリーブ色 シルト φ1～5cmの礫極少量含
48 2.5Y3/2 黒褐色 シルト φ1～5cmの礫少量、植物遺体含
49 2.5Y5/1 黄灰色 砂泥 φ0.5～3cmの礫多量含
50 2.5Y5/3 黄褐色 砂泥 φ0.5～5cmの礫多量含
51 2.5Y5/2 暗灰黄色 砂礫 φ0.5～3cmの礫多量含
52 2.5Y6/3 にぶい黄色 泥砂 φ0.5～1cmの礫少量含 — 溝1002
53 10YR4/4 褐色 シルト 炭・焼土微量含 — 土坑
54 2.5Y5/2 暗灰黄色 シルト — 柱穴
55 2.5Y5/2 暗灰黄色 シルト — 柱穴
56 2.5Y5/2 暗灰黄色 シルト 炭・焼土少量含 — 柱穴
57 10YR4/3 にぶい黄褐色 シルト 炭・焼土少量含 — 柱穴
58 10YR4/2 灰黄褐色 シルト 炭・焼土少量含 — 柱穴
59 2.5Y5/2 暗灰黄色 シルト 炭少量含
60 10YR5/4 にぶい黄褐色 泥砂 炭・焼土極微量含 — 土坑
61 2.5Y4/4 オリーブ褐色 シルト 炭・焼土極微量含
62 2.5Y5/2 暗灰黄色 シルト 炭・焼土微量含 — 柱穴
63 2.5Y4/2 暗灰黄色 泥砂
φ1～3cmの礫少量、炭・焼土微量含
64 2.5Y5/1 黄灰色 砂 φ0.5～4cmの礫多量含
65 10YR4/2 灰黄褐色 細砂
φ0.5～2cmの礫少量、炭・焼土極微量含
66 2.5Y5/2 暗灰黄色 泥砂 φ2～10cmの礫含
67 10YR5/1 褐灰色 シルト 炭・焼土極微量含
68 2.5Y4/2 暗灰黄色 泥砂 炭・焼土極微量含
69 7.5Y4/1 灰色 シルト — Ⅴ層
70 5Y4/1 灰色 シルト
71 2.5Y3/2 黒褐色 シルト φ1～4cmの礫少量、植物遺体含
72 5Y3/1 オリーブ黒色 シルト φ0.5～3cmの礫含
73 7.5Y3/2 オリーブ黒色 シルト
74 5Y4/1 灰色 泥砂 0.5～4cmの礫多量含 — 溝1003
75 2.5Y3/2 黒褐色 泥砂 φ0.5～3cmの礫多量含
76 2.5Y4/2 暗灰黄色 シルト 土器片含 — 溝1003
77 2.5Y4/2 暗灰黄色 泥砂
78 10YR5/3 にぶい黄褐色 シルト φ0.5～1cmの礫少量含 — 柱穴
79 10YR5/2 灰黄褐色 砂泥
80 10YR5/2 灰黄褐色 泥砂 φ0.5～2cmの礫・炭・焼土少量含 — 柱穴
81 2.5Y4/2 暗灰黄色 砂泥
82 10YR5/2 灰黄褐色 シルト
83 2.5Y5/2 暗灰黄色 泥砂 φ1～3cmの礫少量含 — 柱穴
84 10YR4/2 灰黄褐色 シルト
85 10YR4/2 灰黄褐色 シルト 炭・焼土極微量含
86 2.5Y4/2 暗灰黄色 シルト 炭・焼土極微量含 — 柱穴
87 2.5Y5/2 暗灰黄色 シルト φ1～3cmの礫含
88 2.5Y4/1 黄灰色 砂泥 — 土坑
89 2.5Y4/2 暗灰黄色 泥砂 — 柱穴
90 2.5Y5/2 暗灰黄色 シルト
91 10YR6/2 灰黄褐色 シルト — 柱穴
92 2.5Y5/3 黄褐色 シルト
93 10YR5/4 にぶい黄褐色 シルト — 柱穴
94 2.5Y5/2 暗灰黄色 シルト
95 2.5Y4/2 暗灰黄色 シルト φ2～5cmの礫・炭・焼土微量含
96 2.5Y5/1 黄灰色 シルト 炭・焼土極微量含 — 土坑
97 2.5Y4/2 暗灰黄色 シルト
98 2.5Y4/2 暗灰黄色 シルト 炭・焼土極微量含 — 柱穴
99 2.5Y5/1 黄灰色 泥砂 炭・焼土微量含 — Ⅵa層
100 7.5Y3/2 オリーブ黒色 シルト 土器片少量含
101 5Y3/2 オリーブ黒色 泥砂 粗砂・φ0.5cm以下の礫多量含 — 溝1160
102 7.5Y2/1 黒色 泥砂 粗砂・φ0.5cm以下の礫多量含
103 2.5Y4/1 黄灰色 シルト
104 2.5Y3/2 黒褐色 泥砂 φ2～5cmの礫・少量含 — 溝1168
105 2.5Y4/1 黄灰色 シルト — 柱穴
106 2.5Y4/2 暗灰黄色 泥砂 φ2cm以下の礫微量含 — 柱穴
107 2.5Y5/1 黄灰色 砂泥
108 10YR5/2 灰黄褐色 シルト — 溝1479
109 10YR5/1 褐灰色 砂泥 炭・焼土微量含
110 2.5Y5/2 暗灰黄色 砂泥 炭・焼土少量含 — 柱穴
111 2.5Y4/2 暗灰黄色 砂泥 +2.5Y4/1 黄灰色 シルト
112 2.5Y4/4 オリーブ褐色 シルト — 柱穴
113 2.5Y5/1 黄灰色 砂泥
114 2.5Y5/2 暗灰黄色 シルト 炭・焼土・土器片微量含 — 柱穴
115 2.5Y5/2 暗灰黄色 シルト
116 2.5Y4/2 暗灰黄色 シルト — 柱穴
117 2.5Y6/1 黄灰色 泥砂 +2.5Y5/3 黄褐色 砂
118 2.5Y4/2 暗灰黄色 シルト +2.5Y5/1 黄灰色 砂泥粒含 — Ⅵb層
119 N4/0 灰色 砂泥
120 2.5Y5/2 暗灰黄色 砂泥 — 柱穴
121 10Y4/1 灰色 砂泥 — 柱穴
122 5Y4/2 灰オリーブ色 シルト — 土坑
123 10Y4/1 灰色 砂泥 — 柱穴
124 2.5Y6/2 灰黄色 泥砂 炭・焼土極微量含
125 5Y4/1 灰色 シルト — 土坑
126 10Y4/1 灰色 シルト — 柱穴
127 2.5Y5/2 暗灰黄色 シルト
128 5Y4/2 灰オリーブ色 シルト — Ⅶ層
129 2.5Y5/2 暗灰黄色 シルト — 湿地状堆積1822
130 2.5Y5/2 暗灰黄色 シルト — 湿地状堆積1823

5区 東壁断面図1（1：100）



5区 東壁断面図2（土層名）

1 2.5Y5/2 暗灰黄色 砂泥
2 2.5Y3/2 黒褐色 シルト　→ 溝
3 2.5Y5/2 暗灰黄色 砂泥　鉄分多量、φ2～5cmの礫含　→ 溝
4 10YR6/2 灰黄褐色 砂泥　φ3～10cmの礫多量含
5 2.5Y7/2 灰黄色 砂泥　鉄分多量含
6 5Y4/1 灰色 砂泥　鉄分多量、φ1～3cmの礫含　→ 溝
7 7.5Y5/1 灰色 シルト　+5Y4/1 灰色 泥砂
鉄分・φ5cmの礫含　→ 溝
8 5GY5/1 オリーブ灰色 砂泥　鉄分・炭含　→ 溝
9 2.5Y6/2 黄灰色 砂泥　鉄分多量、φ1～5cmの礫含　→ 溝
10 2.5Y6/1 黄灰色 砂泥　鉄分多量、φ1～5cmの礫含
11 2.5Y5/1 黄灰色 シルト　+7.5YR3/4 暗褐色 泥砂
12 2.5Y5/1 黄灰色 シルト　+5YR3/6 暗赤褐色 砂泥
13 2.5Y6/2 灰黄褐色 砂泥　+7.5YR3/2 黒褐色 シルト　→ Ⅰ層
14 2.5Y5/2 暗灰黄色 砂泥
15 2.5Y5/1 黄灰色 砂泥
16 2.5Y6/1 黄灰色 シルト　+2.5Y3/1 黒褐色 シルト
植物遺体多量含　→ 溝
17 2.5Y6/1 黄灰色 シルト
18 2.5Y4/2 暗灰黄色 シルト　+2.5Y3/2 黒褐色 シルト
植物遺体多量含　→ 溝
19 2.5Y4/2 暗灰黄色 シルト　植物遺体多量含　→ 溝
20 7.5Y5/1 灰色 シルト　炭・鉄分・土器片含
21 2.5Y5/2黄灰色　砂泥　φ2～5cmの礫含　→ Ⅱ層
22 10YR4/4 褐色 砂泥　φ0.5cm以下の円礫少量含
23 2.5Y5/2 暗灰黄色 砂泥　φ5cm以下の円礫・炭微量含　→ 溝
24 5Y6/1 灰色 シルト　φ2～5cmの礫含　→ 溝2044
25 10Y4/1 灰色 シルト　炭含　→ 溝2045
26 2.5Y6/1 黄灰色 砂泥　→ 溝2046
27 5Y4/1 灰色 砂泥
28 5Y5/1 灰色 砂泥　φ1～5cmの礫・炭・土器片・含
+10Y5/1 灰色 シルト　φ2～5cmの礫含　→ 溝
29 10YR5/2 灰黄褐色 砂泥　+10YR5/6 黄褐色 シルト
30 2.5Y4/2 暗灰黄色 砂泥　φ1～5cmの礫含
31 5Y6/2 灰オリーブ色 砂泥　φ1～3cmの礫含
32 2.5Y5/2 黄灰色 砂泥　φ2～5cmの礫含
33 2.5Y5/1 黄灰色 砂泥
34 2.5Y5/1 黄灰色 砂泥
35 2.5Y5/2 黄灰色 砂泥　φ2～5cmの礫含
36 5Y6/1 灰色 砂泥　+7.5YR3/4 暗褐色 泥砂ブロック　→ Ⅲ～Ⅳ層
37 5Y4/1 灰色 砂泥
38 5Y3/2 オリーブ黒色 シルト　φ15cm以下の礫少量含
39 7.5Y3/2 オリーブ黒色 シルト　φ1cm以下の円礫少量含　→ 溝2003
40 2.5Y5/2 暗灰黄色 砂泥　炭・土器片含
41 10Y4/1 灰色 シルト　φ10cmの礫・植物遺体・炭含　→ 溝2025（新）
42 5GY5/1 オリーブ灰色 シルト
43 5Y5/1 灰色 砂泥
44 10Y5/1 灰色 シルト　→ 湿地状堆積2043
45 5Y5/1 灰色 砂泥　炭・土器片含
46 2.5Y5/2 暗灰黄色 砂泥　+10YR8/8 黄橙色 砂泥ブロック、
炭・土器片含
47 2.5Y6/2 灰黄色 砂泥　+10YR8/8 黄橙色 砂泥ブロック、
φ1～3cmの礫含
48 5Y5/9 灰オリーブ色 砂泥　φ2～5cmの礫・炭含
49 5Y6/2 灰オリーブ色 極細砂
50 2.5Y6/2 灰黄色 砂泥　炭含
51 2.5Y4/2 暗灰黄色 砂泥　φ1～5cmの礫含
52 2.5Y4/3 オリーブ褐色 砂泥　炭少量含　→ 溝？
53 2.5Y5/1 黄灰色 砂泥
54 2.5Y4/2 暗灰黄色 砂礫
55 7.5Y5/1 灰色 砂泥　φ1～3cmの礫含
56 2.5Y5/1 黄灰色 砂泥　土器片含　→ Ⅴ層
57 10GY5/1 緑灰色 シルト　φ1～5cmの礫含
58 2.5Y4/4 オリーブ褐色 泥砂　φ5cm以下の礫多量含
59 7.5GY4/1 暗緑灰色 砂泥　φ1～5cmの礫含
60 7.5GY5/1 緑灰色 シルト　φ1～3cmの礫含　→ 溝2009
61 10Y5/1 灰色 砂泥　φ1～5cmの礫・炭含
62 2.5GY5/1 オリーブ灰色 砂泥　φ2～5cmの礫・・含
63 7.5GY5/1 緑灰色 砂泥　φ1～3cmの礫少量含
64 7.5Y5/1 灰色 砂泥　φ1～5cmの礫含
65 10Y5/1 灰色 砂泥　φ1～3cmの礫含
66 7.5Y5/1 灰色 シルト　+2.5Y5/2 暗灰黄色 砂　φ1～3cmの礫含
67 5GY5/1 オリーブ灰色 シルト　+5Y5/1 灰色 砂
φ1～3cmの礫含　→ 土坑群2029
68 10Y5/1 灰色 シルト　炭多量含
69 2.5GY5/1 オリーブ灰色 砂泥　φ1～5cmの礫含
70 7.5Y5/1 灰色 砂泥
71 7.5GY6/1 緑灰色 砂礫　+10Y5/1 灰色 シルト　炭含
72 7.5Y5/1 灰色 砂泥　φ1～5cmの礫・炭含
73 5Y5/2 灰オリーブ色 細砂　φ1～3cmの礫・炭含
74 5Y5/2 灰オリーブ色 砂礫
75 10Y5/1 灰色 砂泥　φ1～3cmの礫含
76 7.5GY6/1 緑灰色 細砂　φ1～5cmの礫含
77 5Y5/1 灰色 砂　φ1～5cmの礫含
78 7.5Y6/1 灰色 砂泥
79 7.5GY5/1 緑灰色 砂泥　φ1～3cmの礫含
80 5Y6/2 灰オリーブ色 砂泥　炭・遺物片含
81 5Y5/3 灰オリーブ色 細砂　→ 土坑群2028
82 10Y5/1 灰色 シルト　+5Y5/3 灰オリーブ色 砂　炭含
83 7.5GY4/1 暗緑灰色 シルト　+5Y5/3 灰オリーブ色 砂　炭含　→ 溝2025（古）
84 5Y4/2 灰オリーブ色 砂
85 10YR5/1 褐灰色 粘砂泥　炭多量、土器片含
86 2.5GY4/1 暗オリーブ灰色 砂泥　φ1～5cmの礫・炭・土器含　→ 湿地状堆積
87 7.5Y5/1 灰色 砂泥　炭含
88 7.5GY4/1 暗緑灰色 砂泥　φ1～5cmの礫含
89 2.5Y6/2 灰黄色 砂　+7.5Y4/1灰色 シルト　φ1～5cmの礫含
90 2.5Y5/2 暗灰黄色 砂
91 5GY4/1 暗オリーブ灰色 砂泥　炭含
92 2.5Y4/2 暗灰黄色 砂泥　土器片含　→ Ⅵ層
93 2.5GY4/1 暗オリーブ灰色 シルト
94 10Y4/1 灰色 砂泥
95 10Y5/1 灰色 シルト　+7.5Y4/1 灰色 シルト　炭含　→ 溝2023（新）
96 5Y5/2 灰オリーブ色 細砂　φ1～5cmの礫含
97 10Y4/1 灰色 シルト　φ1～3cmの礫・炭・土器片含
98 10Y6/1 灰色 シルト　+5Y5/2 灰オリーブ色 砂
99 2.5GY4/1 暗オリーブ灰色 シルト
100 10Y4/1 灰色 砂泥
101 5Y4/2 灰オリーブ色 泥砂　φ1～3cmの礫含　→ 溝2013
102 10Y4/1 灰色 砂泥　炭多量含
103 7.5Y4/1 灰色 砂泥　+2.5Y6/3 にぶい黄色 砂
104 7.5Y5/1 灰色 シルト　φ2～10cmの礫・炭・土器片含
105 10Y4/1 灰色 シルト
106 10Y4/1 灰色 砂泥　粗砂・φ1～3cmの礫・炭含
107 10Y5/1 灰色 シルト
108 7.5Y5/1 灰色 砂泥
109 10Y5/1 灰色 砂泥　φ5cmの礫含　→ 土坑2039
110 2.5GY4/1 暗オリーブ灰色 極細砂
111 5Y4/1 灰色 シルト
+5Y4/4 暗オリーブ色 細砂　粗砂多量、炭・土器片含　→ Ⅷa層
112 10Y4/1 灰色 砂泥　+5Y4/2 灰オリーブ色 泥砂
113 2.5GY4/1 暗緑灰色 泥砂
114 2.5GY5/1 オリーブ灰色 泥砂　→ 溝2023（古）
115 7.5Y4/1 灰色 極細砂
116 7.5Y4/1 灰色 シルト　炭含
117 7.5Y5/1 灰色 泥砂
118 2.5GY5/1 オリーブ灰色 極細砂　→ 溝2027
119 10Y4/1 灰色 砂泥　炭・土器片含
120 7.5Y4/1 灰色 泥砂　焼土・炭含
121 10Y5/1 灰色 砂泥　+7.5Y6/1 灰色 細砂　炭・土器片含
122 10Y5/1 灰色 砂泥　炭・土器片含　→ 土坑2034
123 7.5Y4/1 灰色 砂泥　遺物・炭少量含　→ 土坑2033
124 7.5Y4/1 灰色 泥砂　炭・土器片含
125 2.5GY4/1 暗オリーブ灰色 砂泥
126 7.5Y5/1 灰色 泥砂　→ 溝
127 7.5GY5/1 緑灰色 泥砂
128 10Y4/1 灰色 泥砂
129 10Y5/1 灰色 細砂　→ Ⅷb層
130 2.5GY5/1 オリーブ灰色 細砂
131 5Y5/1 灰色 砂泥
132 10YR5/4 にぶい黄褐色 砂礫　→ Ⅸ層（基盤層）



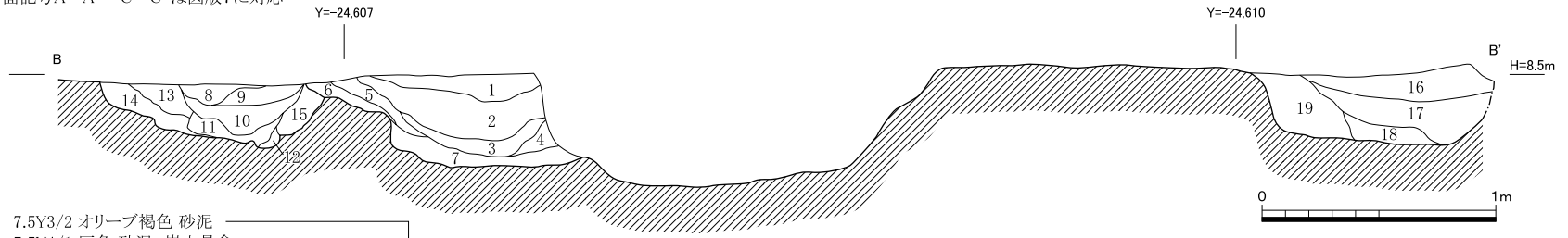
※ 断面記号A－A'～C－C'は図版7に対応

1 10Y4/1 灰色 泥砂
2 5Y4/3 暗オリーブ色 細砂
3 5Y4/2 灰オリーブ色 泥砂
4 7.5Y4/1 灰色 シルト
+5Y4/4 暗オリーブ色 シルト
5 5Y4/2 灰オリーブ色 中砂
6 10Y4/1 灰色 泥砂
7 7.5Y4/1 灰色 細砂
溝2030

8 2.5Y4/2 暗灰黄色 砂泥
9 2.5Y4/3 オリーブ褐色 砂泥
溝2032

10 2.5Y4/4 オリーブ褐色 シルト
11 5Y4/2 灰オリーブ色 砂泥
12 2.5Y4/2 暗灰黄色 泥砂
13 2.5Y4/3 オリーブ褐色 シルト
溝2032

14 7.5Y4/1 灰色 シルト
15 5Y4/2 灰オリーブ色 シルト
16 2.5Y4/4 オリーブ褐色 砂泥
17 7.5Y4/2 灰オリーブ色 細砂
18 5Y4/2 灰オリーブ色 シルト
溝2029

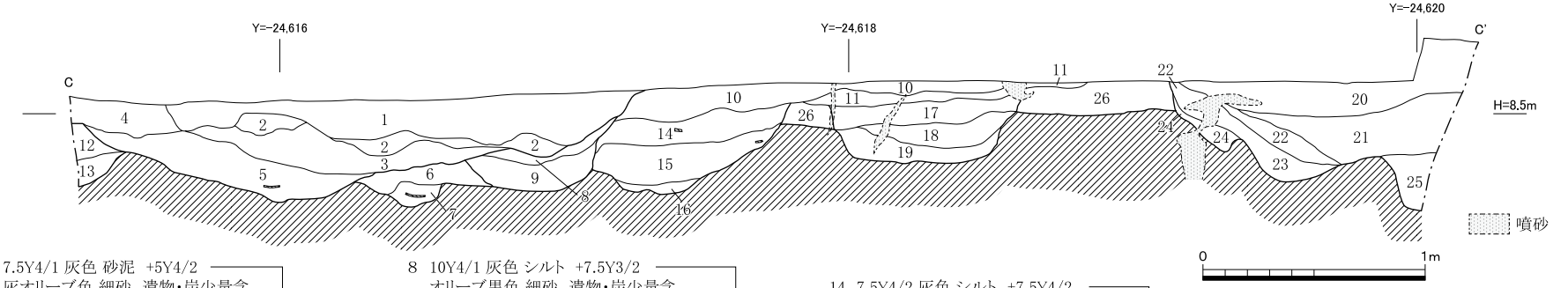


1 7.5Y3/2 オリーブ褐色 砂泥
2 7.5Y4/1 灰色 砂泥 炭少量含
3 10Y4/1 灰色 シルト
4 5Y4/2 灰オリーブ色 細砂
5 7.5Y3/2 オリーブ黒色 シルト
6 7.5Y4/2 灰オリーブ色 極細砂
7 5Y4/2 灰オリーブ色 泥砂 φ0.05～2cmの礫少量含
溝2030

8 5Y4/1 灰色 極細砂
+7.5Y4/2 灰オリーブ色 砂泥
9 7.5Y4/2 灰オリーブ色 砂泥
10 10Y4/1 灰色 砂泥
11 7.5Y4/1 灰色 泥砂
溝2032

12 7.5Y4/2 灰オリーブ色 細砂
13 5Y4/2 灰オリーブ色 シルト
14 5Y4/3 暗オリーブ色 細砂
15 5Y4/3 暗オリーブ色 泥砂
溝2032

16 7.5Y4/1 灰色 砂泥
17 10Y4/1 灰色 砂泥
18 2.5GY4/1 暗オリーブ色 細砂
19 5Y4/3 暗オリーブ色 シルト
溝2038



1 7.5Y4/1 灰色 砂泥 +5Y4/2
灰オリーブ色 細砂 遺物・炭少量含
2 5Y4/1 灰色 シルト 遺物・炭少量含
3 10Y4/1 灰色 シルト
4 7.5Y4/1 灰色 砂泥 遺物・炭少量含
5 10Y4/1 灰色 砂泥
+5Y4/2 灰オリーブ色 細砂
土坑2033

6 5Y4/2 灰オリーブ色 泥砂
+5Y4/4 暗オリーブ色 砂
7 10Y4/1 灰色 砂泥 遺物少量含
溝2037

8 10Y4/1 灰色 シルト +7.5Y3/2
オリーブ黒色 細砂 遺物・炭少量含
9 10Y4/1 灰色 砂泥 +5Y4/2
灰オリーブ色 細砂 遺物・炭少量含
溝

10 5Y4/1 灰色 シルト
+5Y4/4 暗オリーブ色 細砂 炭少量含
11 5Y5/3 灰オリーブ色 シルト
+7.5Y4/1 灰色 シルト
Ⅷa層

12 2.5GY4/1 暗オリーブ灰色 砂泥
13 7.5Y5/1 灰色 泥
溝

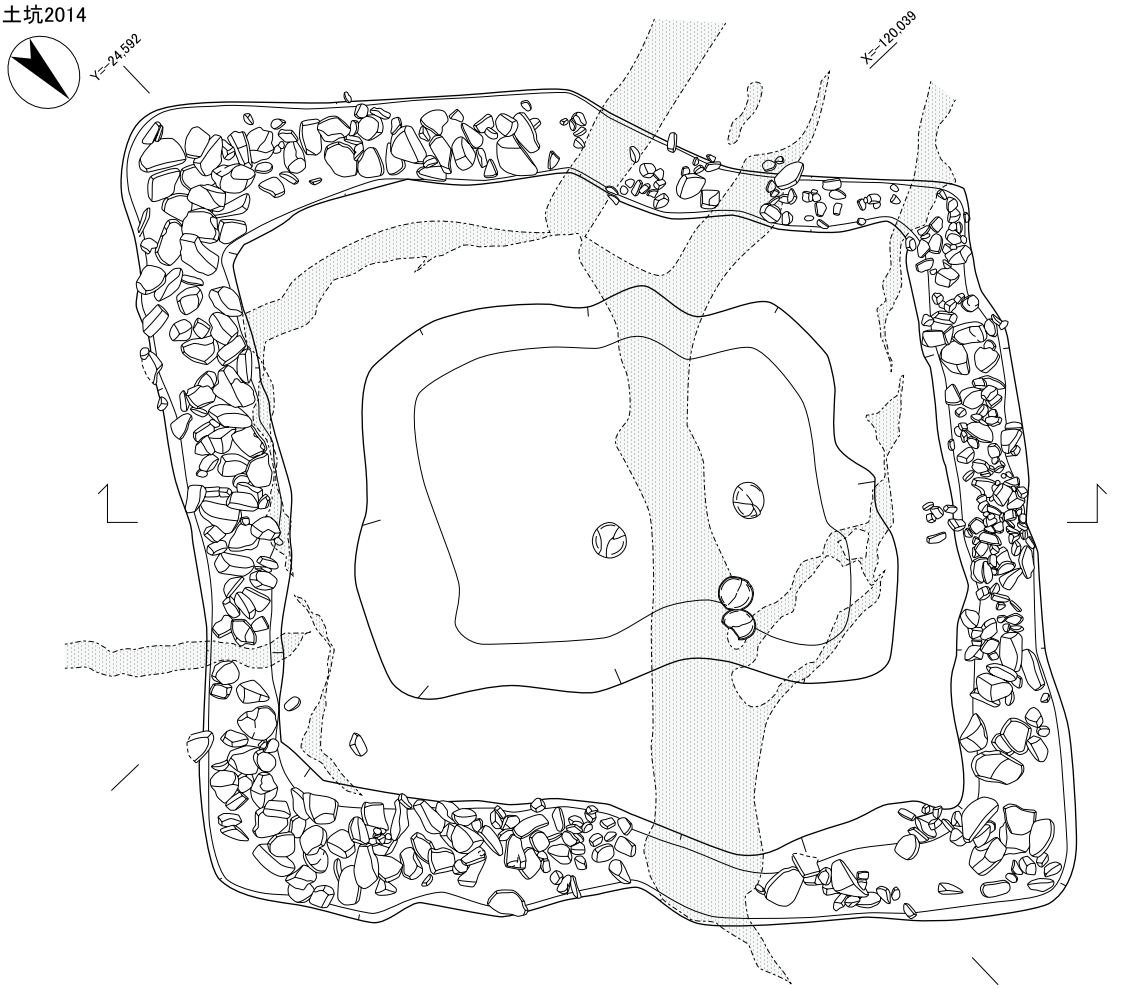
14 7.5Y4/2 灰色 シルト +7.5Y4/2
灰オリーブ色 シルト 遺物・炭少量含
15 5Y4/1 灰色 砂泥
+2.5Y4/3 オリーブ褐色 砂 炭少量含
16 10Y4/1 灰色 泥砂
溝2036

17 7.5Y4/1 灰色 シルト
18 2.5GY4/1 暗オリーブ灰色 細砂
19 10Y4/1 灰色 泥砂
+2.5Y4/4 オリーブ褐色 細砂
溝2042

20 10Y4/1 灰色 シルト 炭少量含
21 7.5Y4/1 灰色 砂泥 炭少量含
22 7.5Y4/1 灰色 シルト
23 2.5GY4/1 暗オリーブ灰色 シルト
24 10Y4/1 灰色 シルト
25 5Y4/1 灰色 砂泥
溝2038

26 5GY4/1 暗オリーブ灰色 泥砂
+7.5Y4/2 灰オリーブ色 細砂
Ⅷb層

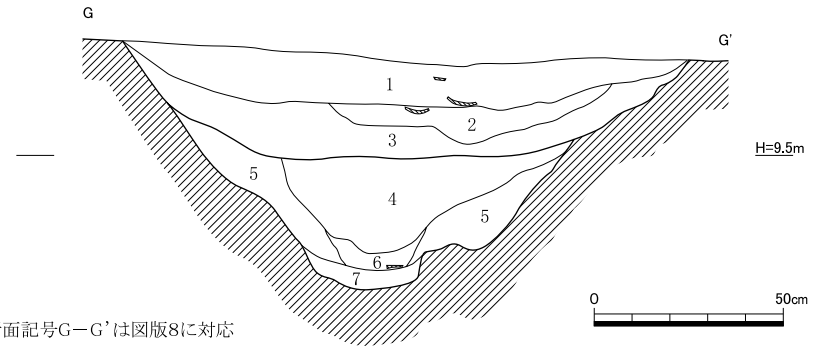
土坑2014



1 2.5Y4/4 オリーブ褐色 細砂・中砂(噴砂)
2 2.5Y2/1 黒色 炭 +5Y3/2 オリーブ黒色 シルト
3 2.5Y4/3 オリーブ褐色 シルト
4 5Y4/1 灰色 シルト 炭含
5 2.5Y4/2 暗灰黄色 シルト φ2～10㎝の礫多量に含

噴砂

土坑2018・溝2030

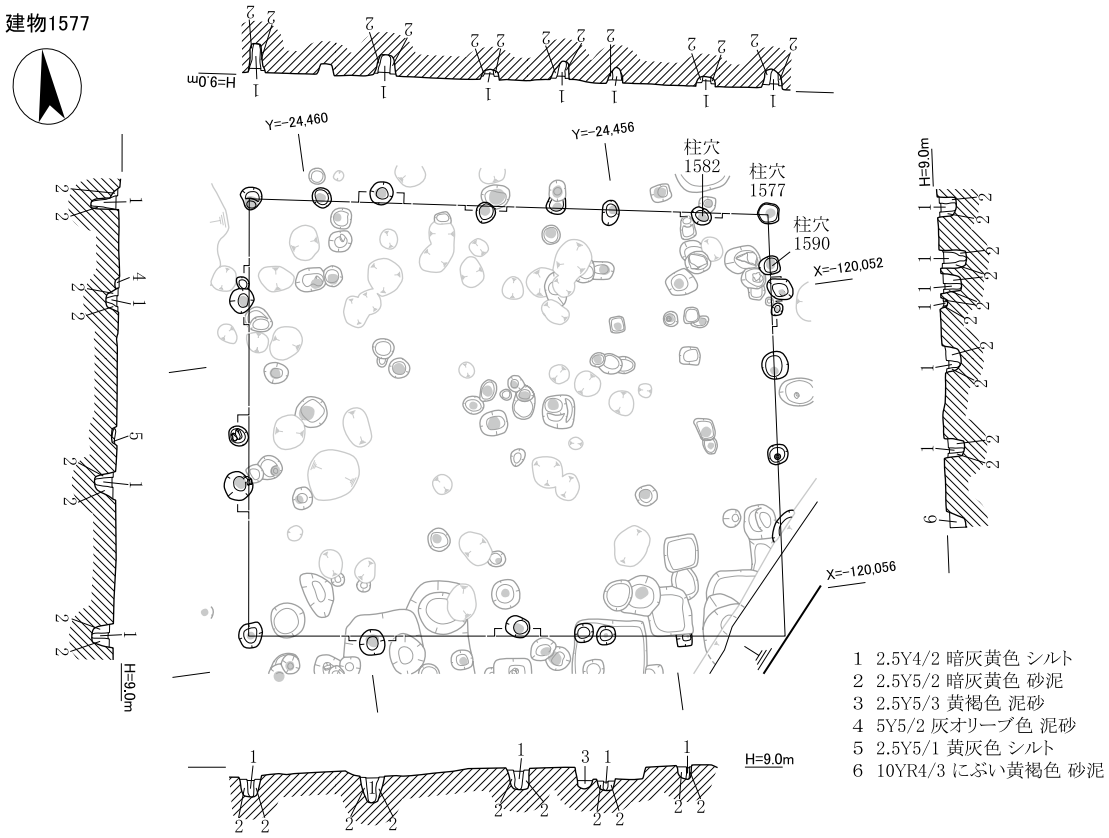


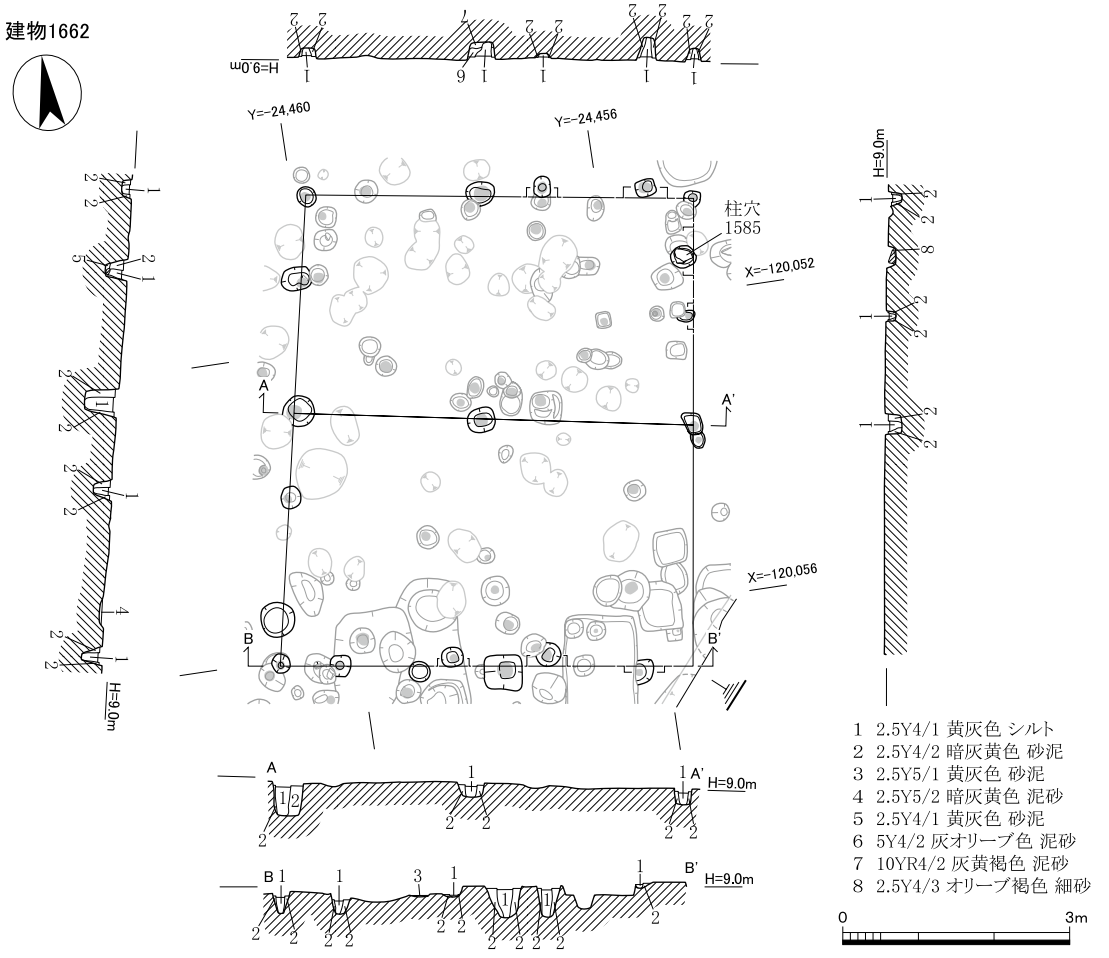
※ 断面記号G－G'は図版8に対応

1 5Y4/1 灰色 泥砂 炭・遺物多量含
2 7.5Y4/1 灰色 泥砂
+5Y5/2 灰色 泥砂 炭・遺物含
3 10YR4/1 灰色 シルト
+7.5Y5/1 灰色 泥砂 炭・遺物少量含
土坑2018

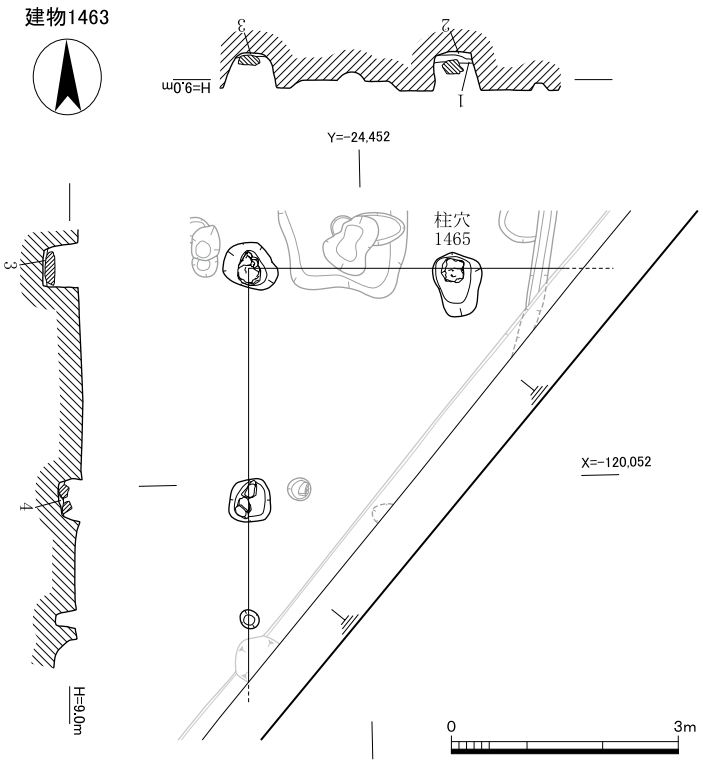
4 10YR5/1 灰色 砂泥 炭・礫少量含
5 5Y4/2 灰色オリーブ色 細砂
6 5Y4/1 灰色 砂泥 遺物少量含
7 7.5Y4/2 灰オリーブ色 泥砂
溝2030

土坑2014実測図、土坑2018・溝2030断面図（1：20）





建物1577・1662実測図（1 ：100）



建物1463

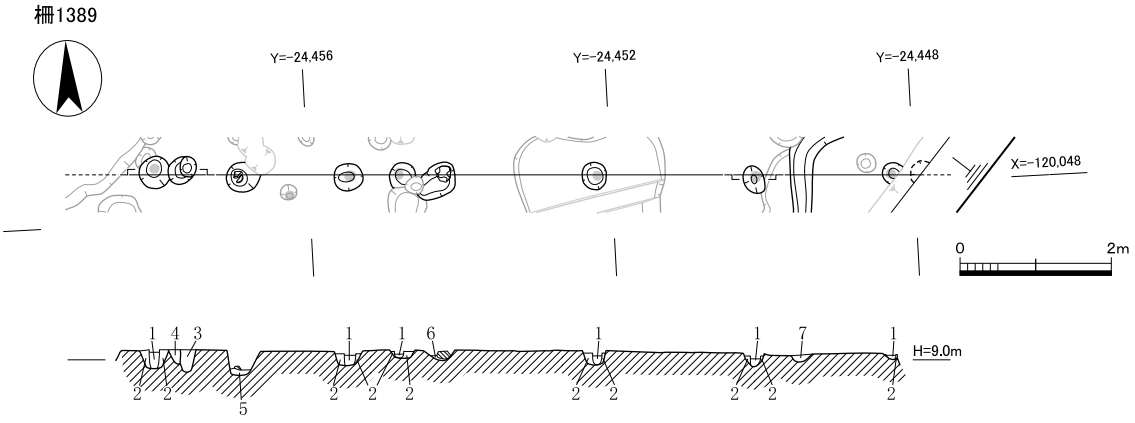
1 2.5Y4/2 暗灰黄色 砂泥
+2.5Y4/4 オリーブ褐色 シルトブロック含
2 2.5Y4/1 黄灰色 粘土
3 2.5Y5/1 黄灰色 砂泥
+2.5Y4/6 オリーブ褐色 シルトブロック含
4 5Y4/1 灰色 砂泥
+2.5Y4/4 オリーブ褐色 シルトブロック含

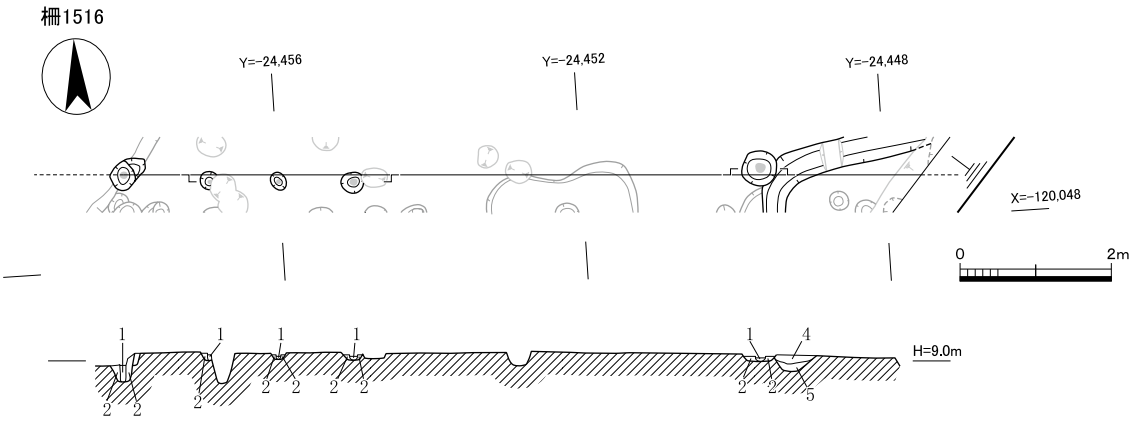
柵1389

1 2.5Y4/6 オリーブ褐色 泥砂
2 2.5Y5/6 黄褐色 砂泥
+2.5Y6/6 明黄褐色 シルトブロック含
3 2.5Y5/3 黄褐色 砂泥
4 2.5Y4/3 オリーブ褐色 泥砂
5 5Y4/2 灰オリーブ色 シルト 炭微量含
6 5Y5/2 灰オリーブ色 シルト
7 5Y4/1 灰色 シルト

柵1516

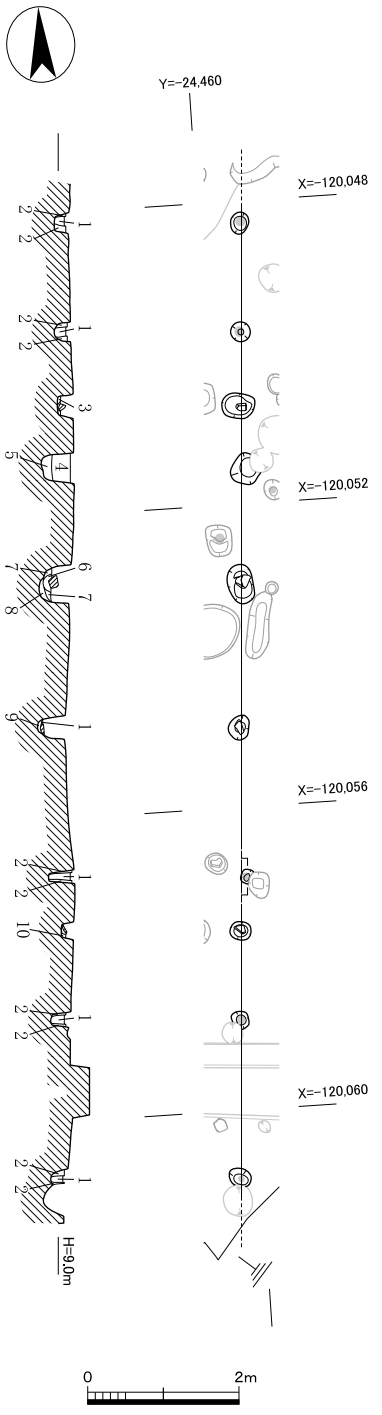
1 2.5Y4/6 オリーブ褐色 泥砂
2 2.5Y5/6 黄褐色 砂泥
+2.5Y6/6 明黄褐色 シルトブロック含
3 5Y4/1 灰色 砂泥
4 2.5Y4/4 オリーブ褐色 砂泥
5 2.5Y5/3 黄褐色 砂泥





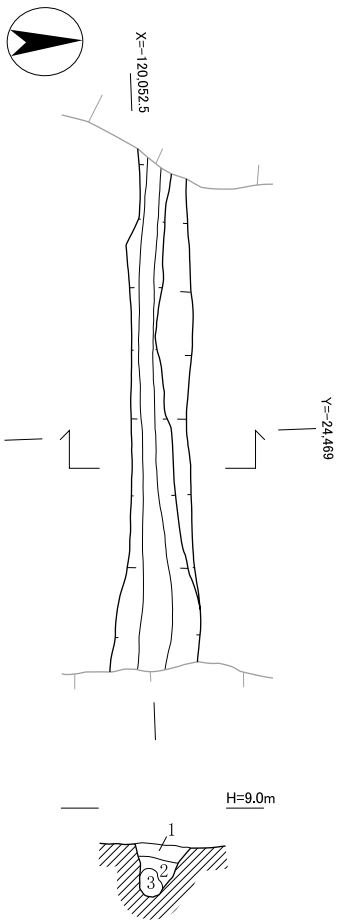
建物1463、柵1389・1516実測図（1：100）

柵1426



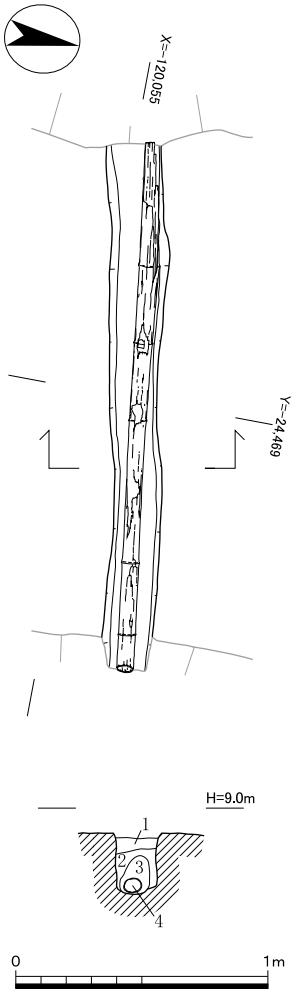
1 2.5Y4/6 オリーブ褐色 泥砂
2 2.5Y5/6 黄褐色 砂泥
+2.5Y6/6 明黄褐色 シルトブロック含
3 5Y4/2 灰オリーブ色 シルト
4 2.5Y4/4 オリーブ褐色 砂泥
5 2.5Y5/3 黄褐色 砂泥
6 5Y4/2 灰オリーブ色 シルト 炭微量含
7 7.5Y5/1 灰色 シルト 炭微量含
8 5Y5/2 灰オリーブ色 砂泥
9 2.5Y5/3 黄褐色 シルト
10 5Y3/2 オリーブ黒色 砂泥

暗渠1375



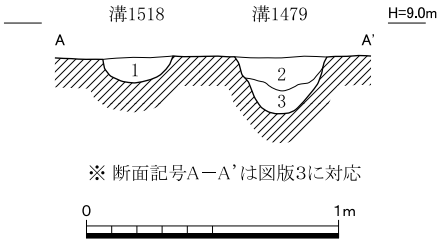
1 10YR4/3 にぶい黄褐色 シルト
2 10YR5/6 黄褐色 細砂
3 10YR5/2 灰黄褐色 砂泥

暗渠1376



1 10YR4/4 褐色 泥砂
2 10YR4/4 褐色 細砂
3 10YR5/2 灰オリーブ色 泥砂
4 10YR4/1 褐灰色 シルト(竹樋内埋土)

溝1518・1479



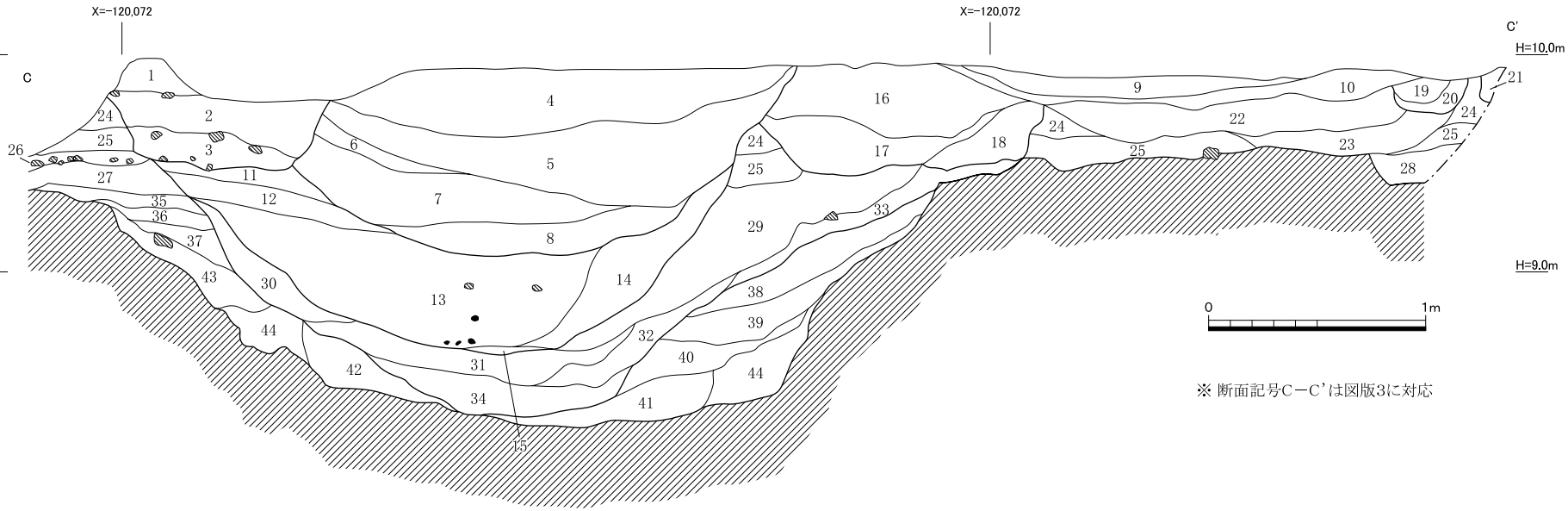
※ 断面記号A－A'は図版3に対応

1 10YR4/3 にぶい黄褐色 泥砂
+10YR3/3 暗褐色 シルトブロック含 ― 溝1518
2 10YR5/4 にぶい黄褐色 泥砂
3 10YR4/3 にぶい黄褐色 泥砂 ― 溝1479

柵1426、暗渠1375・1376実測図、溝1479・1518断面図（1：100、1：30）

図版21 遺構

4区 第3面C－C'ライン断面図（1：30）



1 7.5YR5/6 明褐色 泥砂 粗砂含
2 7.5YR6/3 にぶい褐色 砂泥
3 7.5YR6/6 橙色 泥砂 粗砂・φ1～15cmの礫多量含
+7.5YR6/2 灰褐色 シルトの互層
→ 溝1035

4 2.5Y5/2 明灰黄色 砂泥 φ3cm以下の礫・焼土微量含
5 2.5Y4/2 明灰黄色 シルト φ10cm以下の礫微量・炭・ビビアナイト少量含
6 5Y5/2 灰オリーブ色 砂泥 粗砂・φ3cm以下の礫少量含
7 5Y4/2 灰オリーブ色 砂泥 粗砂・φ1cm以下の礫微量含
8 2.5Y4/2 明灰黄色 シルト 粗砂・ビビアナイト少量・土器片微量含
→ 溝1158

9 10YR6/6 明黄褐色 シルト しまり強
+10YR5/3 にぶい黄褐色 砂泥 炭・焼土粒少量含
→ Ⅳ層
10 10YR5/4 にぶい黄褐色 砂泥 炭・焼土粒微量含

11 7.5YR5/6 明褐色 泥砂 粗砂・φ1cm以下の礫多量含
12 2.5Y4/4 オリーブ褐色 砂泥 炭少量含
13 5Y4/2 灰オリーブ色 シルト +5Y2/2 オリーブ黒色 シルトブロック
φ3～10cmの礫微量、炭・ビビアナイト少量、貝殻含
14 5Y5/4 オリーブ色 砂泥 粗砂少量含
15 5Y3/2 オリーブ黒色 シルト
→ 溝246

16 10YR5/2 灰黄褐色 砂泥 粗砂・φ3cm以下の礫・炭微量含
17 2.5Y5/2 暗灰黄色 砂泥 φ2cm以下の礫微量、炭・土器片・ビビアナイト少量含
18 10YR4/4 褐色 砂泥 粗砂・φ1cm以下の礫・炭・土器片微量含
→ 土坑

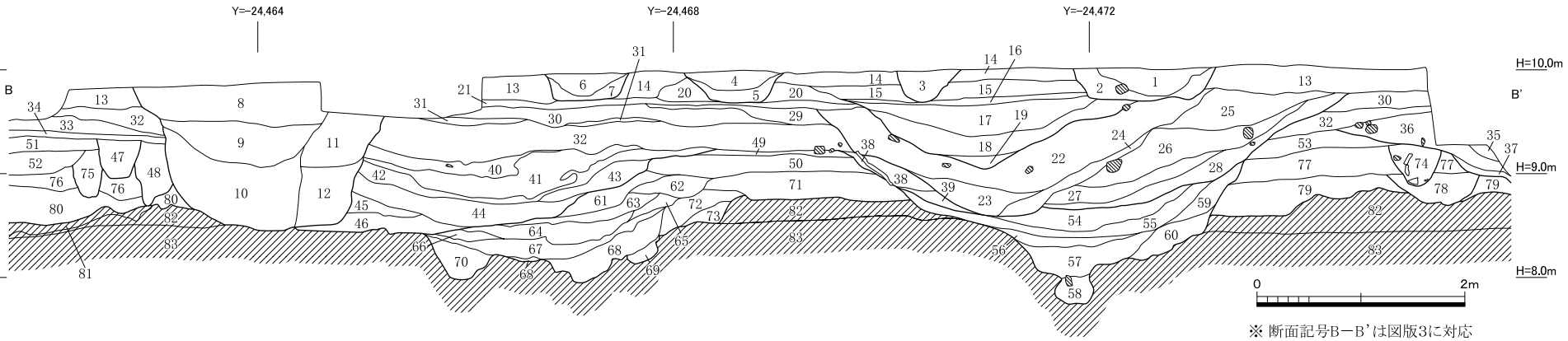
19 10YR4/6 褐色 砂泥 炭・焼土粒少量含
→ 柱穴
20 10YR5/4 にぶい黄褐色 砂泥 炭・焼土粒少量含
→ 柱穴
21 7.5YR4/2 灰褐色 砂泥 焼土粒微量含
→ 柱穴

22 10YR5/6 黄褐色 砂泥 φ1cm以下の礫少量、炭・土器片微量含
23 10YR5/3 にぶい黄褐色 砂泥 φ1cm以下の礫・炭微量含
24 10YR5/6 黄褐色 砂泥
25 10YR5/4 にぶい黄褐色 砂泥 炭微量含
→ Ⅴ層
26 10YR6/6 明黄褐色 泥砂 粗砂・φ1～15cmの礫多量含 しまり有
→ 路面・路盤
27 10YR5/4 にぶい黄褐色 砂泥 粗砂含
→ 路面・路盤
28 10YR3/4 暗褐色 砂泥 炭・焼土・土器片少量含
→ 柱穴
29 5Y5/2 灰オリーブ色 砂泥 粗砂・φ2～5cmの礫・炭・焼土少量含
30 5Y5/4 オリーブ色 砂泥 粗砂少量含
31 5Y2/2 オリーブ黒色 シルト +5Y5/2 灰オリーブ色 シルトブロック
φ3cm以下の礫・炭・ビビアナイト微量含
32 10YR4/4 褐色 砂泥 炭・焼土多量含
33 5Y4/3 暗オリーブ色 砂泥 粗砂・炭・φ1～10cmの礫微量含
34 7.5Y3/1 オリーブ黒色 シルト φ5～15cmの礫微量、植物遺体含
→ 溝256（新）

35 10YR5/6 黄褐色 泥砂 粗砂・φ1～10cmの礫多量含 しまり有
36 5Y4/3 暗オリーブ色 砂泥 しまり有
37 7.5Y4/2 灰オリーブ色 砂泥 粗砂多量、φ3～5cmの礫微量含
38 7.5Y4/2 灰オリーブ色 砂泥 粗砂多量、φ3～5cmの礫微量含
39 7.5Y3/2 オリーブ黒色 砂泥 粗砂多量、φ1cm以下の礫含
40 7.5Y4/3 暗オリーブ色 砂泥
41 7.5Y3/1 オリーブ黒色 シルト φ3～10cmの礫微量、植物遺体含
42 7.5Y4/2 灰オリーブ色 砂泥
43 7.5Y4/3 暗オリーブ色 砂泥 粗砂多量、炭微量含
44 7.5Y5/3 灰オリーブ色 泥砂
→ 溝256（古）

図版22 遺構

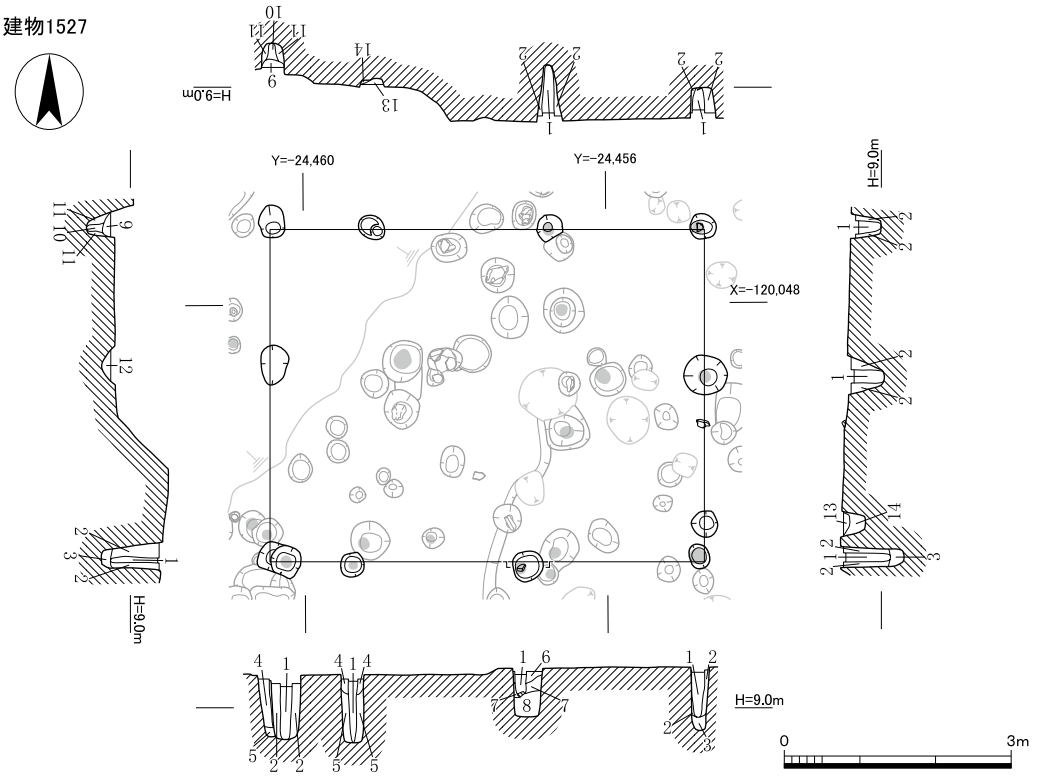
4区 第3面B－B’ ライン断面図（1：60）



※ 断面記号B－B’は図版3に対応

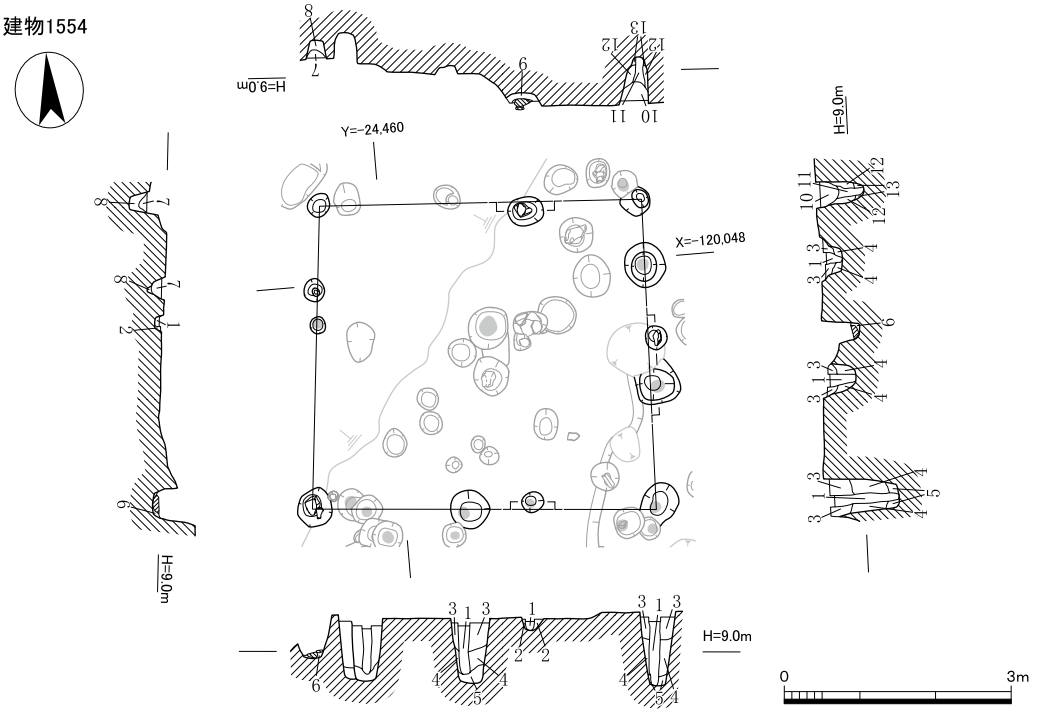
1 10YR4/6 褐色 泥砂 粗砂・φ0.2～2cmの礫・炭含 ― 溝1009
2 10YR4/2 灰黄褐色 砂泥 粗砂・φ0.2～1cmの礫少量含 ― 溝1009
3 2.5Y5/2 暗灰黄色 砂泥 ― 溝1012
4 5Y4/1 灰色 シルト ― 溝1013
5 10Y4/1 灰色 砂泥 ― 溝1013
6 2.5Y5/1 黄灰色 シルト ― 溝1014
7 2.5Y4/1 黄灰色 砂泥 ― 溝1014
8 10YR5/2 灰黄褐色 砂泥 粗砂少量含 ― 円形土坑1121
9 2.5Y4/1 黄灰色 砂泥 粗砂・φ1cm以下の礫・木炭微量含 ― 円形土坑1121
10 5Y3/1 オリーブ黒色 砂泥 粗砂・φ1cm以下の礫・木炭少量含 ― 円形土坑1121
11 5Y4/2 灰オリーブ色 砂泥 φ1cm以下の礫少量、炭・土器片微量含 ― 円形土坑1121
12 5Y3/1 オリーブ黒色 砂泥 粗砂・φ1cm以下の礫微量、炭・木片・ビピアナイト少量含 ― 円形土坑1121
13 10YR5/6 黄褐色 砂泥 φ5cm以下の礫・木片微量含 ― Ⅲ層
14 7.5YR4/3 褐色 砂礫 しまり強 ＋5Y5/3灰オリーブ色 泥砂 ― 路面・路盤
15 2.5Y5/3 黄褐色 砂泥 粗砂、φ0.5～1cmの礫少量含 ― 路面・路盤
16 2.5Y4/4 オリーブ褐色 砂泥 +2.5Y7/4 浅黄色 細砂の薄層を複数含 ― 溝1157
17 2.5Y5/2 暗灰黄色 砂泥 粗砂含 +2.5Y7/4 浅黄色 細砂をラミナ状に含 ― 溝1157
18 2.5Y3/2 黒褐色 シルト +2.5Y5/2 暗灰黄色 細砂の互層 粗砂・φ0.5cm以下の礫微量、植物遺体少量含 ― 溝1157
19 2.5Y3/1 黒褐色 シルト +2.5Y5/2 暗灰黄色 細砂含 粗砂・植物遺体少量含 ― 溝1157
20 2.5Y5/2 暗灰黄色 砂泥 粗砂含 +5Y4/3 暗オリーブ色 泥砂 ― 路面・路盤
21 5Y5/2 灰オリーブ色 砂泥 粗砂・φ0.5cm以下の礫少量含 ― Ⅳ層
22 5Y2/2 オリーブ黒色 シルト +5Y3/2 オリーブ黒色 泥砂の互層 φ5～12cmの礫少量、貝殻・植物遺体・木器片含 ― 溝1320（新）
23 5Y3/1 オリーブ黒色 シルト φ2～5cmの礫少量、貝殻・植物遺体・木器片含 ― 溝1320（新）
24 5Y2/2 オリーブ黒色 砂泥 粗砂・φ2～5cmの礫・木器片少量含 ― 溝1320（新）
25 2.5Y4/2 暗灰黄色 砂泥 φ1～3cmの礫・土器片微量含 ― 溝1320（古）
26 5Y4/2 灰オリーブ色 砂泥 φ1～3cmの礫・土器片微量含 ― 溝1320（古）
27 5Y3/2 オリーブ黒色 シルト 細砂・炭少量、土器片微量含 ― 溝1320（古）
28 2.5Y5/6 黄褐色 砂泥 粗砂、φ2～3cmの礫微量含 ― 溝1320（古）
29 5Y5/2 灰オリーブ色 泥砂 粗砂・φ0.5cm以下の礫含 ― 路面・路盤
30 5Y5/4 オリーブ色 泥砂 +5Y3/2 オリーブ黒色 砂泥の互層 ― V層
31 5Y5/4 オリーブ色 泥砂 粗砂微量含 ― V層
32 7.5Y3/2 オリーブ黒色 シルト 炭微量含 +7.5Y6/3 オリーブ黄色 細砂(噴砂)を筋状に含 ― V層
33 10YR4/4 褐色 砂礫 シルト・φ1～3cmの礫含 しまりあり ― V層
34 2.5Y4/1 黄灰色 砂泥 ― V層
35 2.5Y4/2 暗灰黄色 砂泥 φ5～10cmの礫微量・炭・土器片少量含 ― 溝1326
36 10YR4/6 褐色 砂泥 粗砂・φ6～10cmの礫微量、炭・土器片少量含 ― 溝1326
37 2.5Y4/6 オリーブ褐色 泥砂 ― 溝1326
38 5Y3/2 オリーブ黒色 泥砂 粗砂・木器片微量含 ― 溝1303
39 5Y3/2 オリーブ黒色 砂泥 粗砂・φ0.5cm以下の礫・植物遺体含 ― 溝1303
40 5Y2/2 オリーブ黒色 シルト φ3cm以下の礫微量、炭・ビピアナイト少量含(地震による変形) ― 溝1323
41 7.5Y4/2 灰オリーブ色 シルト ビピアナイト微量含 +7.5Y7/2 灰白色 細砂の薄層を含(地震による変形) ― 溝1323
42 2.5Y3/2 黒褐色 シルト 炭・植物遺体、ビピアナイト少量含(地震による変形) ― 溝1323
43 5Y3/2 オリーブ黒色 シルト 細砂・粗砂・φ0.5cm以下の礫微量含 ― 溝1323
44 7.5Y3/1 オリーブ黒色 シルト +7.5Y3/2 オリーブ黒色 シルトの互層 粗砂含 7.5Y3/2 灰白色 細砂 がラミナ状に混 φ0.5cm以下の礫・炭微量含 ― 溝1323
45 5Y3/1 オリーブ黒色 砂泥 粗砂、φ1cm以下の礫・炭・植物遺体微量含 ― 溝1323
46 7.5Y3/2 オリーブ黒色 砂泥 粗砂・φ0.5cm以下の礫少量、木片・ビピアナイト微量含 ― 溝1323
47 5Y4/2 灰オリーブ色 シルト +2.5Y4/3 オリーブ褐色 泥砂を少量含 ― 柱穴
48 2.5Y5/3 黄褐色 砂泥 ― 柱穴
49 5Y4/1 灰色 泥砂 粗砂・φ1cm以下の礫多量含 ― 路面・路盤
50 5Y4/2 灰オリーブ色 砂泥 粗砂・φ1cm以下の礫多量含 ― 路面・路盤
51 5Y4/1 灰色 砂泥 ― VIa層
52 2.5Y4/1 黄灰色 シルト ― VIa層
53 2.5Y4/3 オリーブ褐色 砂泥 粗砂・炭微量含 ― VIa層
54 7.5Y2/2 オリーブ黒色 シルト φ5～8cmの礫微量、炭・植物遺体・貝殻含 ― 溝1321
55 7.5Y3/2 オリーブ黒色 シルト φ5～10cmの礫微量、炭・植物遺体含 粗砂・φ1～3cmの礫微量、炭・植物遺体・木器片・ビピアナイト少量含 ― 溝1321
56 7.5Y4/1 灰色 シルト 炭微量含 ― 溝1321
57 5Y2/2 オリーブ黒色 シルト 炭・植物遺体・貝殻含 ― 溝1321
58 7.5Y3/1 オリーブ黒色 シルト ― 溝1321
59 5Y3/2 オリーブ黒色 砂泥 粗砂・φ0.5～3cmの礫少量・炭微量含 ― 溝1321
60 7.5Y5/2 灰オリーブ色 泥砂 ― 溝1321
61 5Y2/2 オリーブ黒色 シルト 粗砂・φ5cm以下の礫・炭・木片少量含 ― 溝1322
62 5Y4/3 暗オリーブ色 砂泥 粗砂・φ1cm以下の礫多量含 ― 溝1322
63 7.5Y3/1 オリーブ黒色 シルト +7.5Y3/2 オリーブ黒色 シルトブロック多量、φ3～7cmの礫・炭微量含 ― 溝1322
64 貝殻層 ― 溝1322
65 5Y4/2 灰オリーブ色 砂泥 粗砂・φ1cm以下の礫多量含 ― 溝1322
66 5Y3/2 オリーブ黒色 シルト 粗砂・炭少量含 ― 溝1322
67 5Y3/1 オリーブ黒色 シルト 粗砂少量、炭・植物遺体含 ― 溝1322
68 10Y 4/1 灰色 シルト 炭微量含 ― 溝1322
69 7.5Y3/2 オリーブ黒色 砂泥 ― 溝1322
70 7.5Y4/1 灰色 泥砂 ― 溝1322
71 5Y4/3 暗オリーブ色 粗砂・φ1cm以下の礫多量含 ― 路面・路盤
72 7.5Y4/2 灰オリーブ色 泥砂 炭・ビピアナイト微量含 ― 溝1322
73 7.5Y5/2 灰オリーブ色 泥砂 ― 溝1322
74 2.5Y5/3 黄褐色 砂泥 +2.5Y7/6 明黄褐色 砂泥ブロック φ5～10cmの礫少量・土器片微量含 ― 柱穴
75 5Y4/1 灰色 泥砂 +5Y3/2 オリーブ黒色 シルトブロック含 ― 柱穴
76 2.5Y4/3 オリーブ褐色 泥砂 ― VIb層
77 2.5Y4/4 オリーブ褐色 砂泥 炭化物微量含 ― VIb層
78 2.5Y5/2 暗黄灰色 シルト +2.5Y7/6 明黄褐色 砂泥ブロック含 ― 溝1773
79 2.5Y5/4 黄褐色 砂泥 ― Ⅶ層
80 5Y3/1 オリーブ黒色 泥砂 ― 湿地状堆積1823
81 5Y5/2 灰オリーブ色 泥砂 +7.5Y3/2 オリーブ黒色 シルト 82 7.5YR4/2 灰オリーブ色 泥砂 ― Ⅸ層（基盤層）
83 2.5Y3/3 暗オリーブ褐色 砂礫 ― Ⅸ層（基盤層）

建物1527



1 10YR3/2 黒褐色 シルト +2.5Y4/3 オリーブ褐色 砂泥
2 2.5Y6/3 にぶい黄色 砂泥
3 5Y4/1 灰色 泥砂
4 2.5Y5/2 暗灰黄色 砂泥
5 2.5Y5/4 黄褐色 砂泥 +2.5Y5/1 青灰色 シルトブロック含
6 2.5Y4/4 オリーブ褐色 砂泥
7 2.5Y5/3 黄褐色 泥砂
8 2.5Y4/3 オリーブ褐色 泥砂 +2.5Y4/1 青灰色 シルトブロック含
9 2.5Y6/6 明黄褐色 泥砂
10 2.5Y5/2 暗灰黄色 シルト
11 2.5Y5/4 黄褐色 泥砂
12 2.5Y5/3 黄褐色 砂泥
13 2.5Y4/6 オリーブ褐色 泥砂 +2.5Y6/6 明黄褐色 砂泥ブロック含
14 2.5YR5/2 暗灰黄色 泥砂

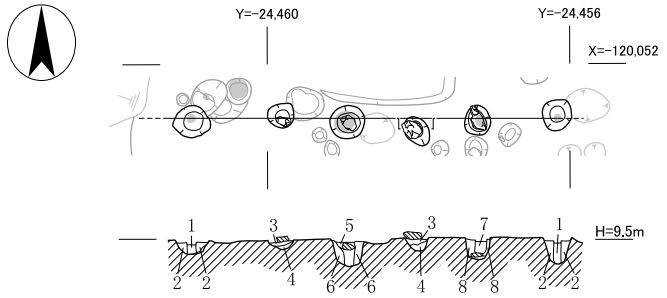
建物1554



1 10YR3/2 黒褐色 シルト 炭含
2 2.5Y4/1 黄灰色 砂泥
3 10YR4/3 にぶい黄褐色 砂泥
4 10YR4/2 灰黄褐色 砂泥
5 2.5Y5/3 黄褐色 泥砂 焼土微量含
6 2.5Y4/2 暗灰黄色 砂泥
7 2.5Y4/2 暗灰黄色 砂泥 炭・焼土少量含
8 2.5Y4/3 オリーブ褐色 泥砂
9 10YR4/3 にぶい黄褐色 シルト
10 10YR4/2 灰黄褐色 砂泥 炭含
11 10YR3/1 黒褐色 シルト
12 2.5Y5/3 黄褐色 泥砂
13 2.5Y4/3 オリーブ褐色 泥砂

建物1527・1554実測図（1：100）

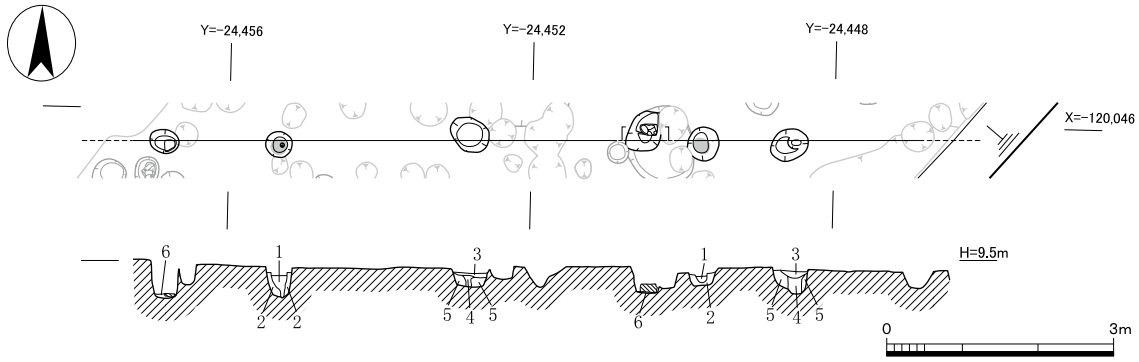
柵1273



柵1273
1 2.5Y5/1 黄灰色 シルト
2 2.5Y4/2 暗灰黄色 泥砂
3 10YR4/1 褐灰色 泥砂
4 2.5Y4/2 暗灰黄色 シルト 焼土少量含
5 2.5Y4/2 暗灰黄色 砂泥
6 2.5Y4/1 黄灰色 砂泥 焼土少量含
7 10YR4/2 灰黄褐色 シルト
8 2.5Y5/2 暗灰黄色 泥砂

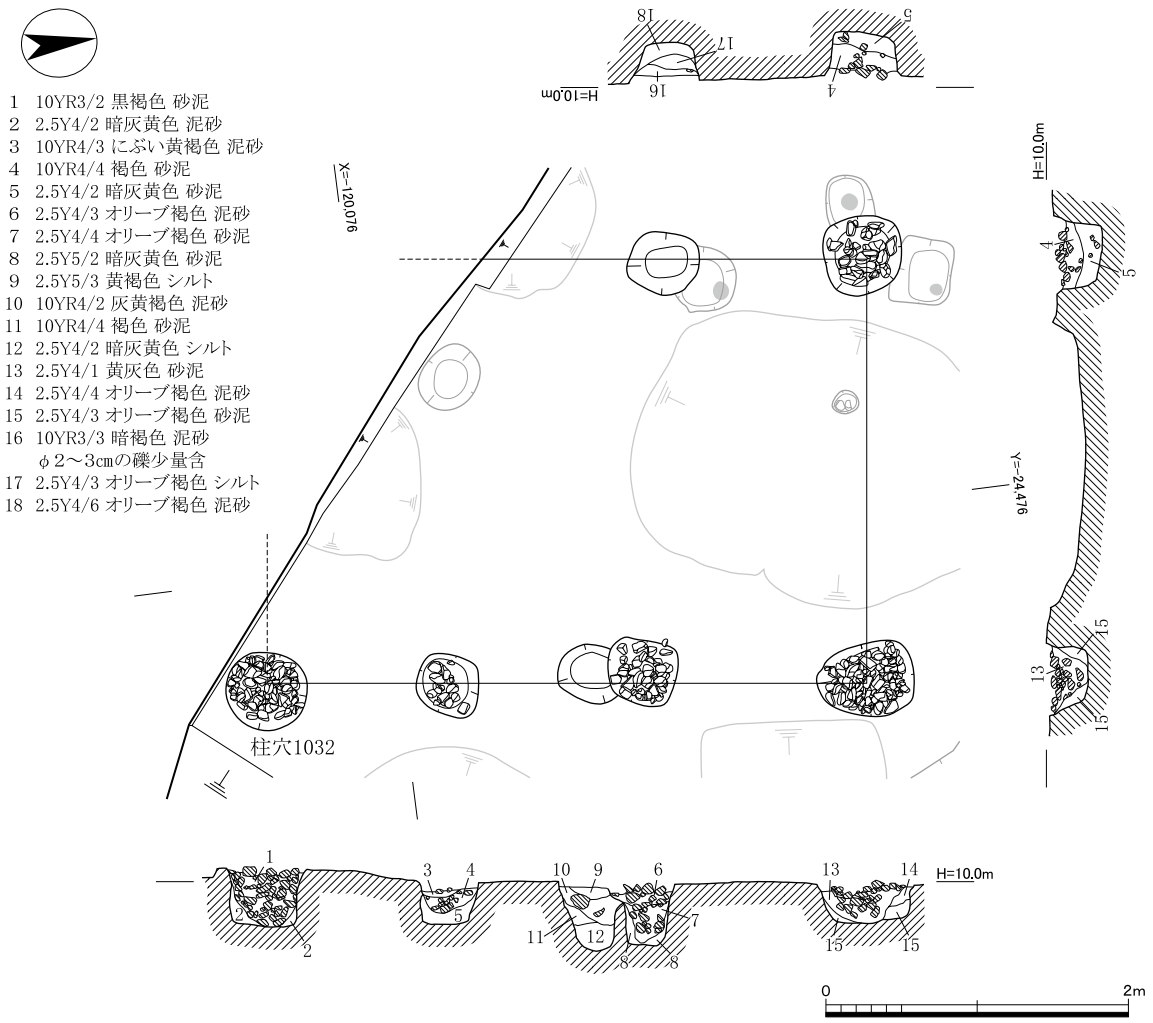
柵1409
1 2.5Y4/2 暗灰黄色 シルト
2 2.5Y5/3 黄褐色 泥砂
3 2.5Y4/3 オリーブ褐色 泥砂
4 2.5Y4/1 黄灰色 シルト
5 2.5Y5/2 暗灰黄色 泥砂
6 10YR4/3 にぶい黄褐色 シルト

柵1409

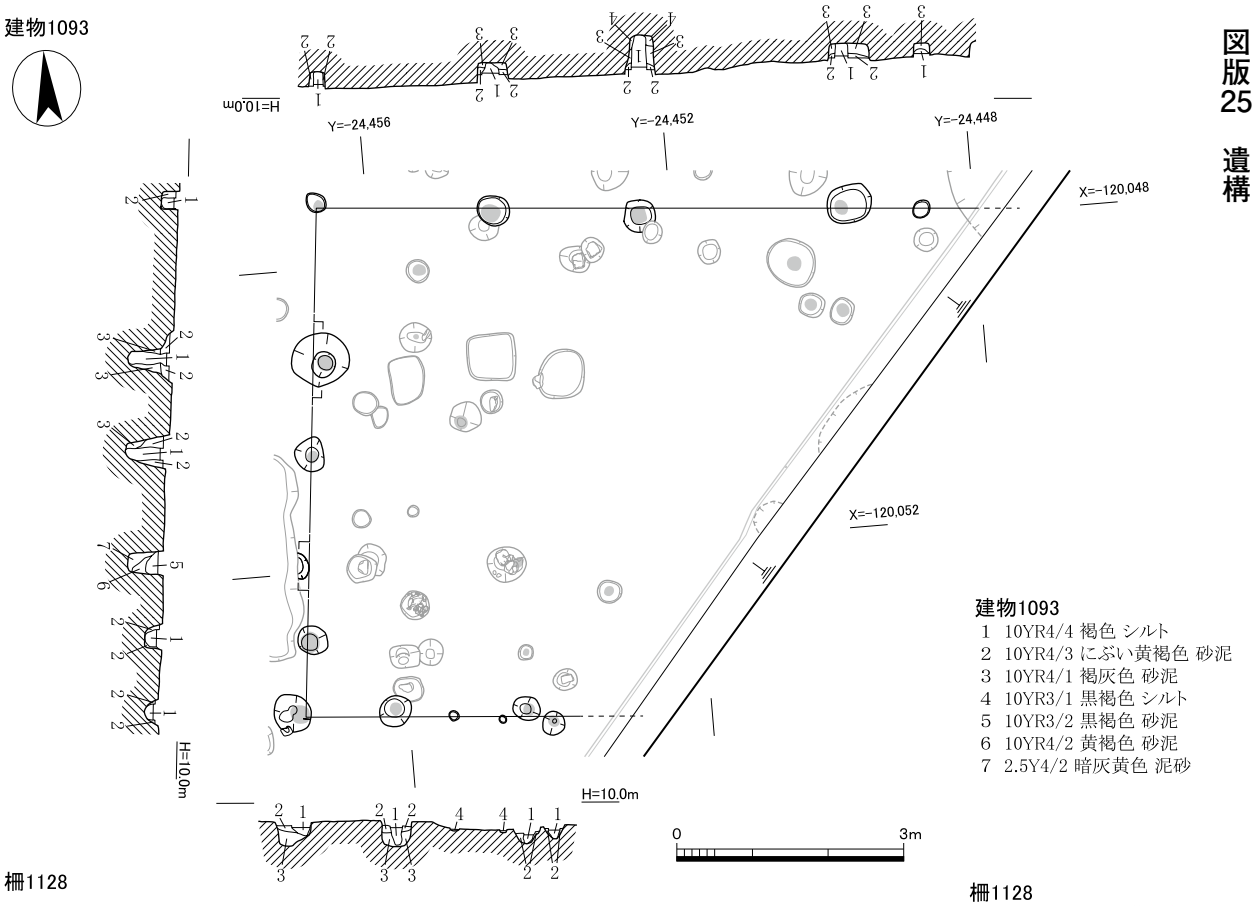


建物1027

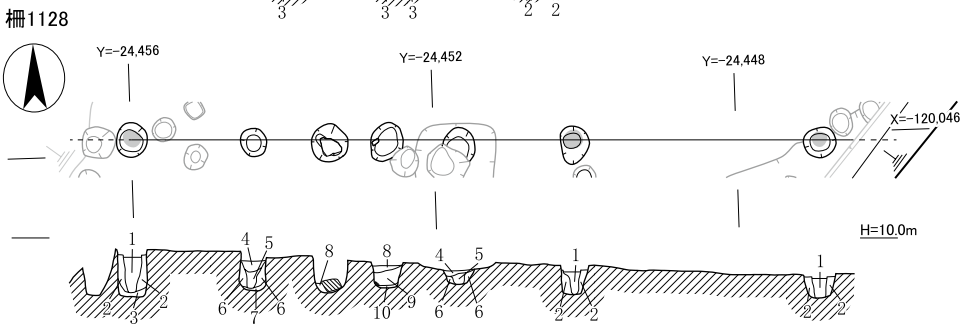
1 10YR3/2 黒褐色 砂泥
2 2.5Y4/2 暗灰黄色 泥砂
3 10YR4/3 にぶい黄褐色 泥砂
4 10YR4/4 褐色 砂泥
5 2.5Y4/2 暗灰黄色 砂泥
6 2.5Y4/3 オリーブ褐色 泥砂
7 2.5Y4/4 オリーブ褐色 砂泥
8 2.5Y5/2 暗灰黄色 砂泥
9 2.5Y5/3 黄褐色 シルト
10 10YR4/2 灰黄褐色 泥砂
11 10YR4/4 褐色 砂泥
12 2.5Y4/2 暗灰黄色 シルト
13 2.5Y4/1 黄灰色 砂泥
14 2.5Y4/4 オリーブ褐色 泥砂
15 2.5Y4/3 オリーブ褐色 砂泥
16 10YR3/3 暗褐色 泥砂
φ2～3㎝の礫少量含
17 2.5Y4/3 オリーブ褐色 シルト
18 2.5Y4/6 オリーブ褐色 泥砂



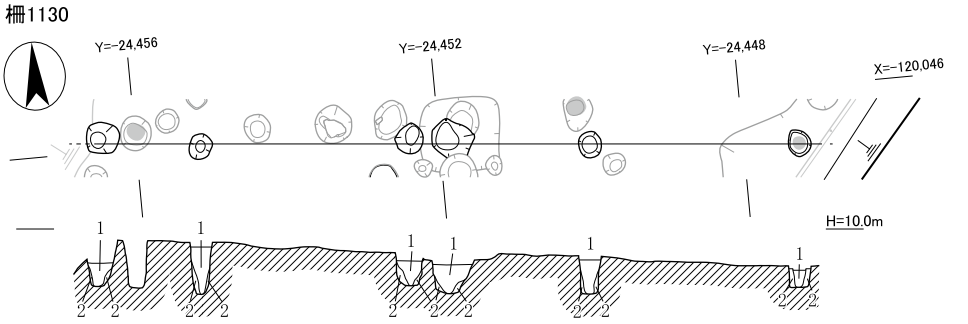
柵1273・1409、建物1027実測図（1：100、1：50）



建物1093
1 10YR4/4 褐色 シルト
2 10YR4/3 にぶい黄褐色 砂泥
3 10YR4/1 褐灰色 砂泥
4 10YR3/1 黒褐色 シルト
5 10YR3/2 黒褐色 砂泥
6 10YR4/2 黄褐色 砂泥
7 2.5Y4/2 暗灰黄色 泥砂



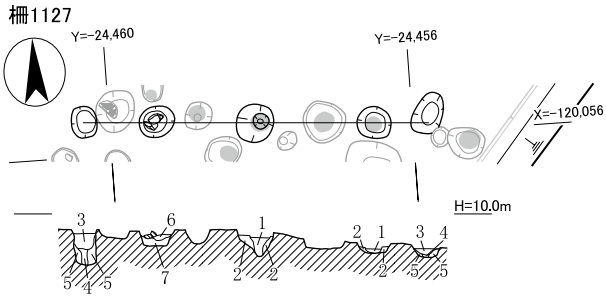
柵1128
1 10YR4/3 にぶい黄褐色 シルト
2 2.5Y4/3 オリーブ褐色 砂泥
φ1～3cmの礫多量含
3 2.5Y4/1 黄灰色 砂泥
4 2.5Y5/2 暗灰黄色 砂泥
φ0.5～4cmの礫多量含
5 10YR5/1 褐灰色 シルト
6 10YR4/2 灰黄褐色 砂泥
7 2.5Y5/2 暗灰黄色 泥砂
8 10YR3/2 黒褐色 砂泥
9 10YR4/3 にぶい黄褐色 泥砂
φ0.5～4cmの礫多量含
10 2.5Y4/1 黄灰色 泥砂

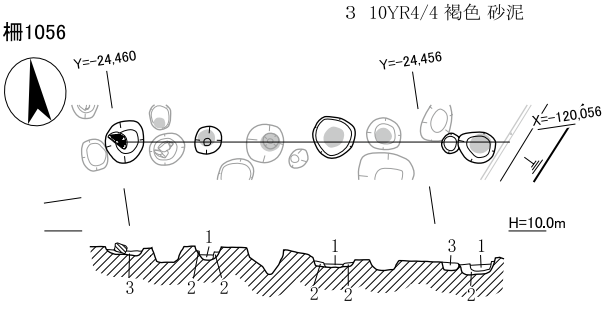


柵1130
1 2.5Y5/2 暗灰黄色 砂泥
φ0.5～4cmの礫多量含
2 2.5Y4/1 黄灰色 砂泥

柵1127
1 2.5Y4/2 暗灰黄色 シルト
2 10YR4/2 灰黄褐色 砂泥
3 10YR4/3 にぶい黄褐色 砂泥
4 10YR4/2 灰黄褐色 シルト
5 10YR4/4 褐色 砂泥
6 10YR3/4 暗褐色 砂泥
7 2.5Y4/2 暗灰黄色 砂泥

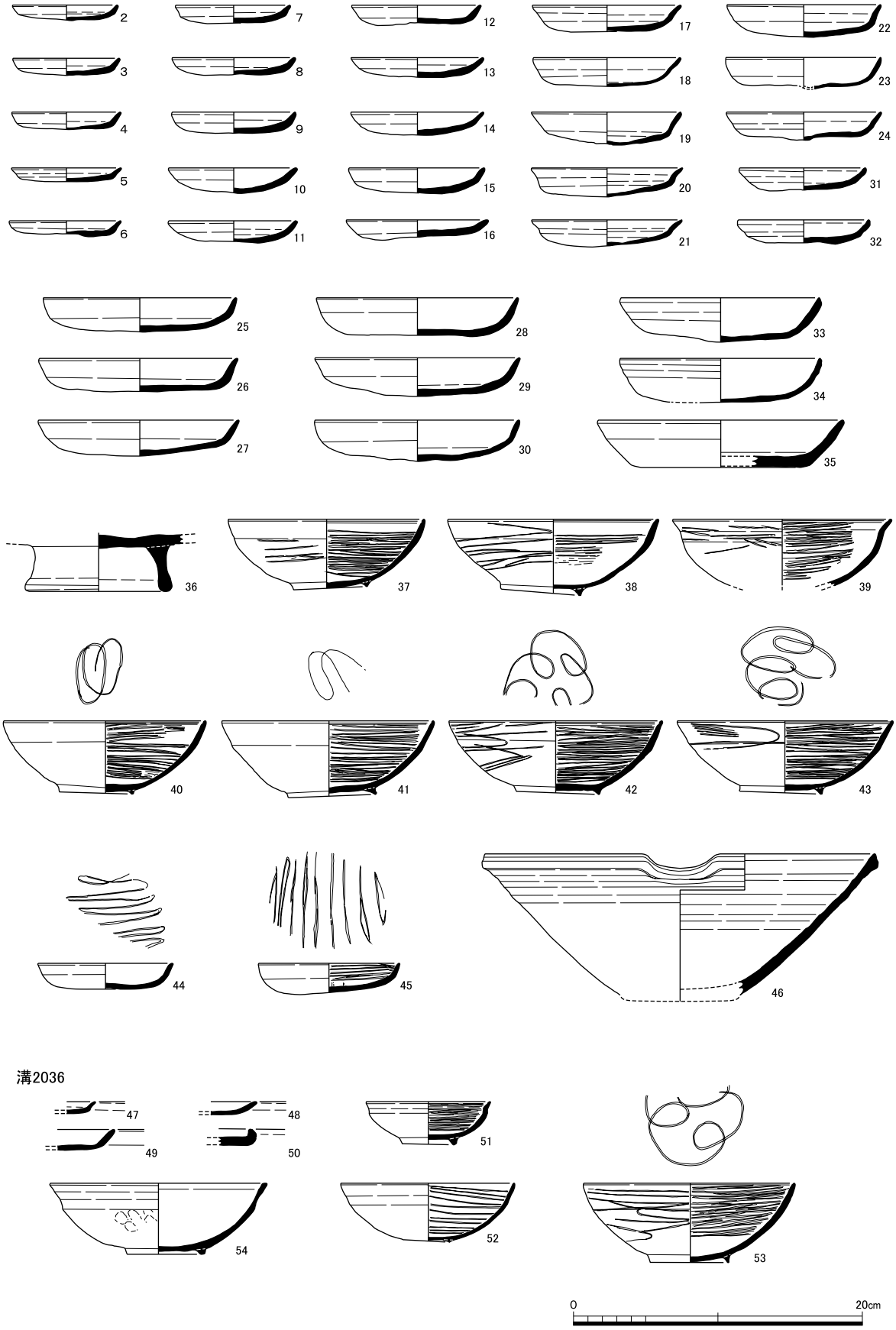
柵1056
1 2.5Y4/2 暗灰黄色 シルト
2 10YR4/3 にぶい黄褐色 砂泥
3 10YR4/4 褐色 砂泥





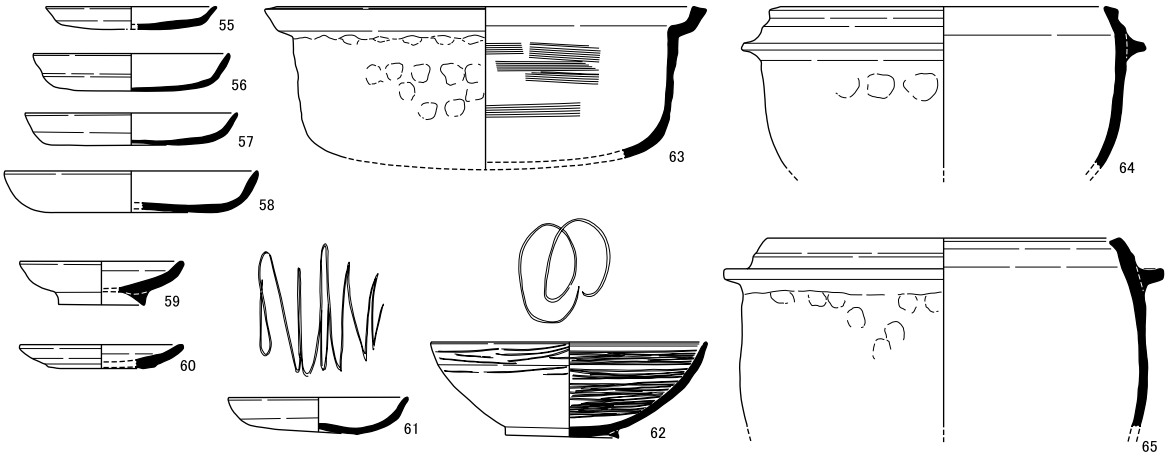
建物1093、柵1056・1127・1128・1130実測図（1：100）

溝2037

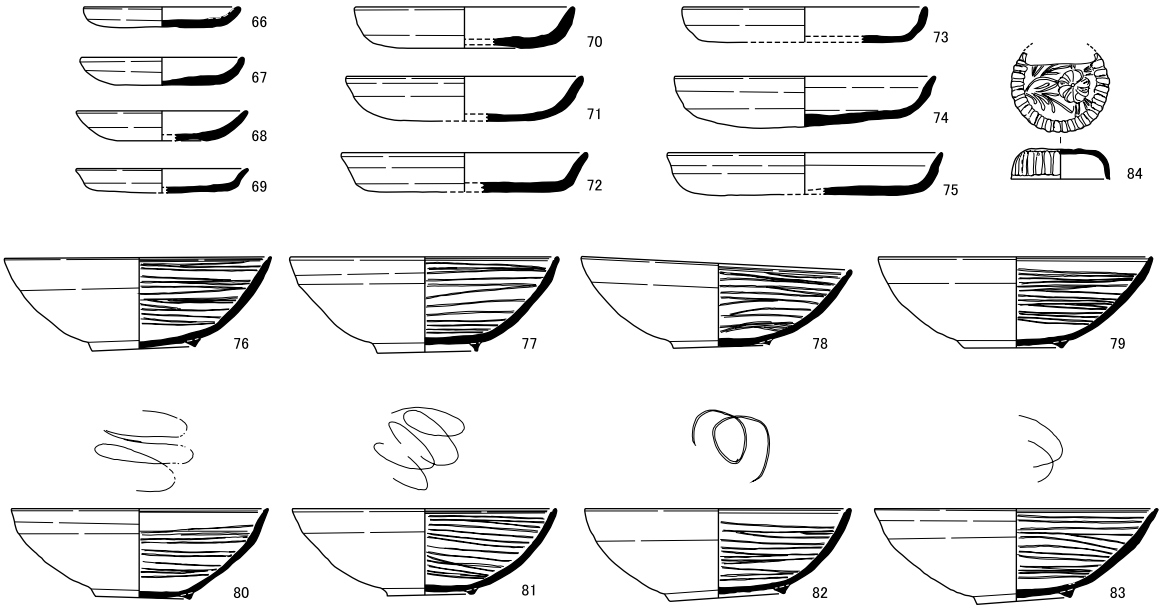


溝2037・2036出土土器実測図（１：４）

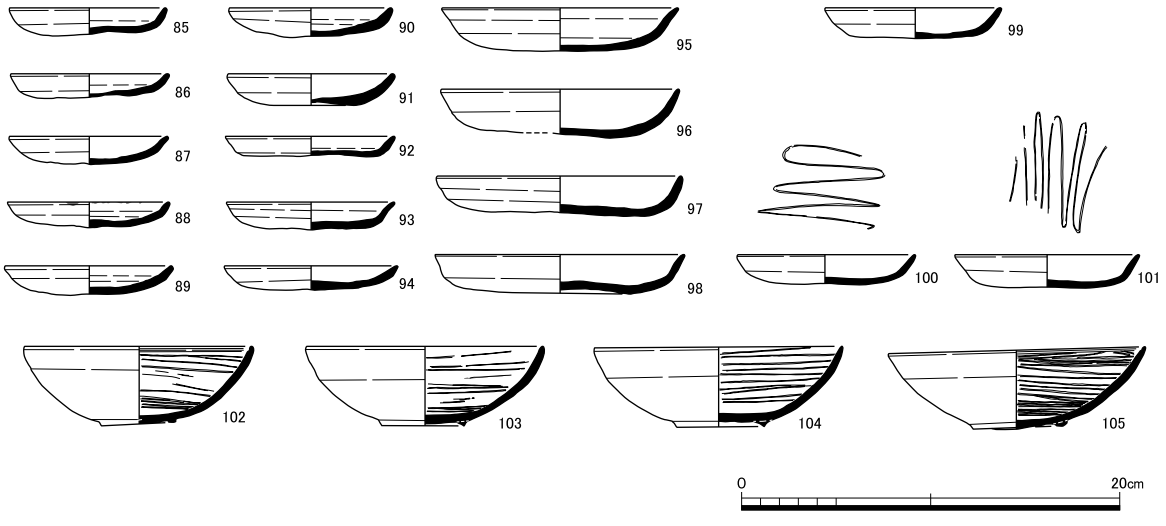
溝2038



溝2030

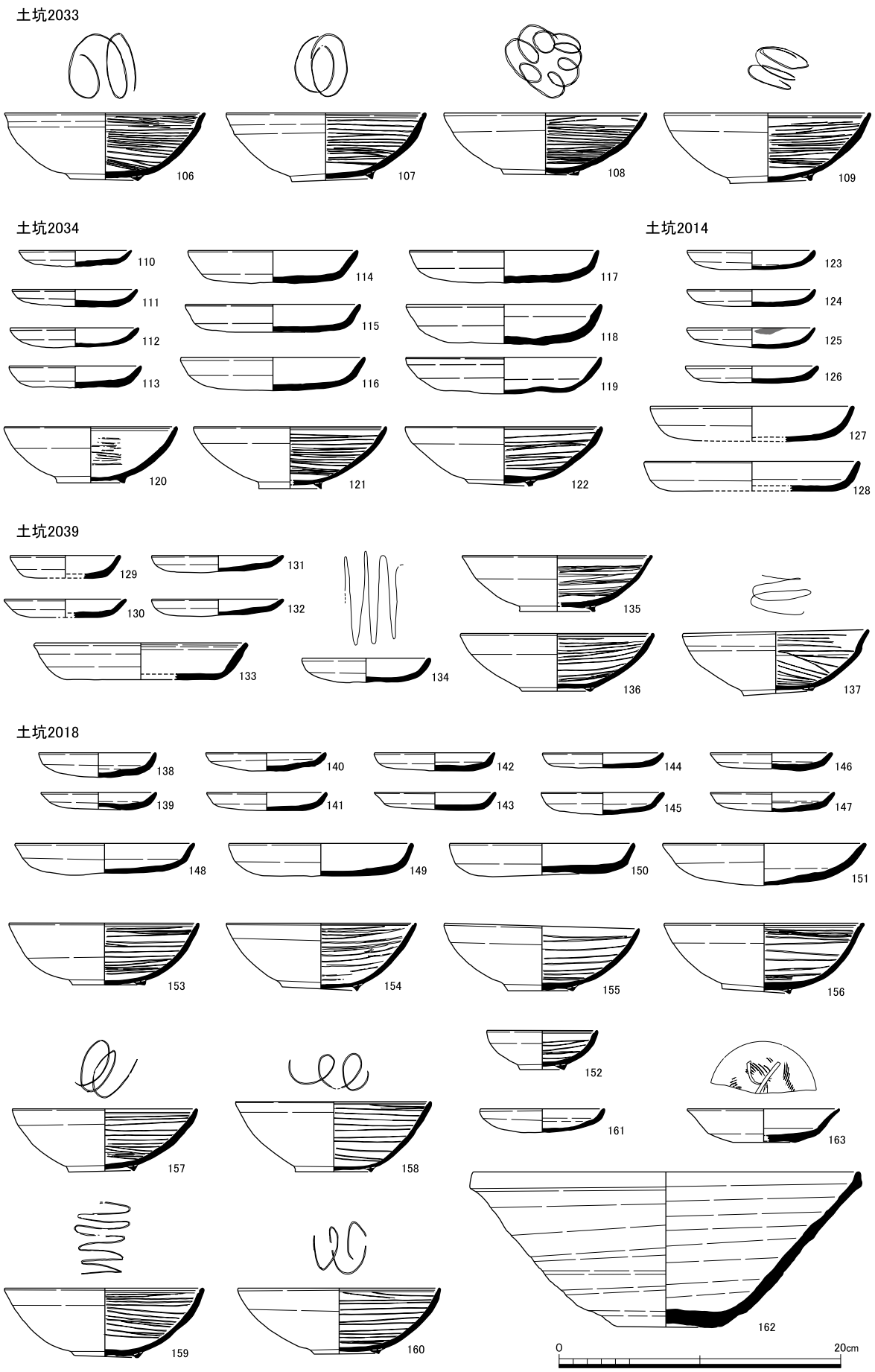


土坑2033



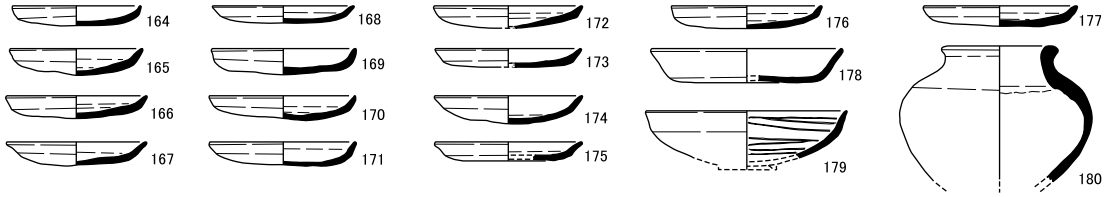
溝2038・2030、土坑2033出土土器実測図（１：４）

図版28 遺物

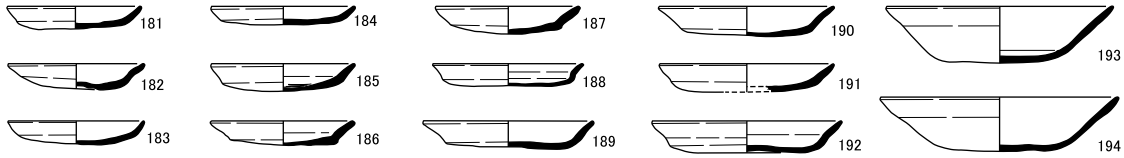


土坑2033・2034・2014・2039・2018出土土器実測図（１：４）

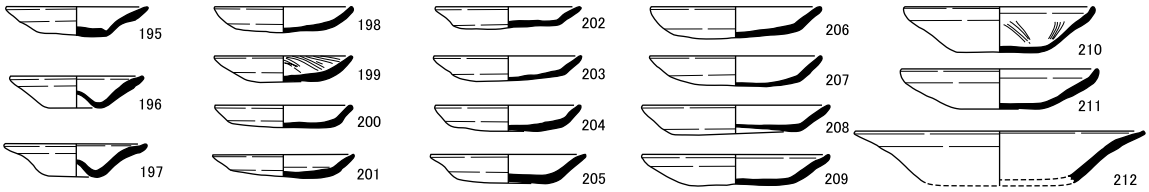
土坑1627



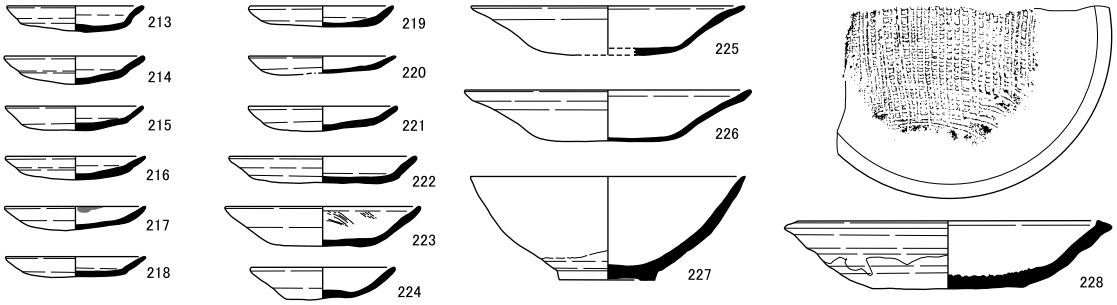
4区Ⅶ層



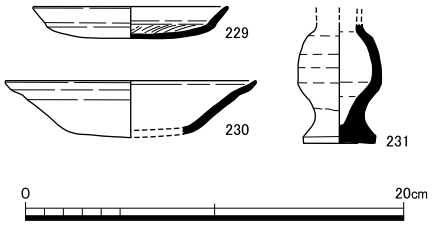
4区Ⅵb層



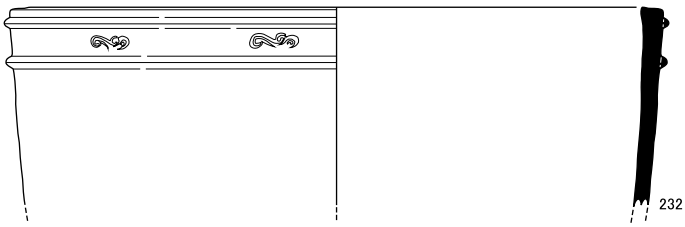
土器溜1383



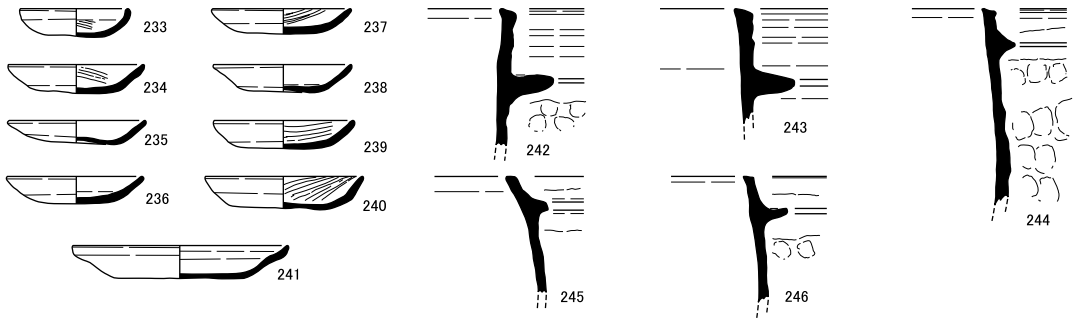
溝1322



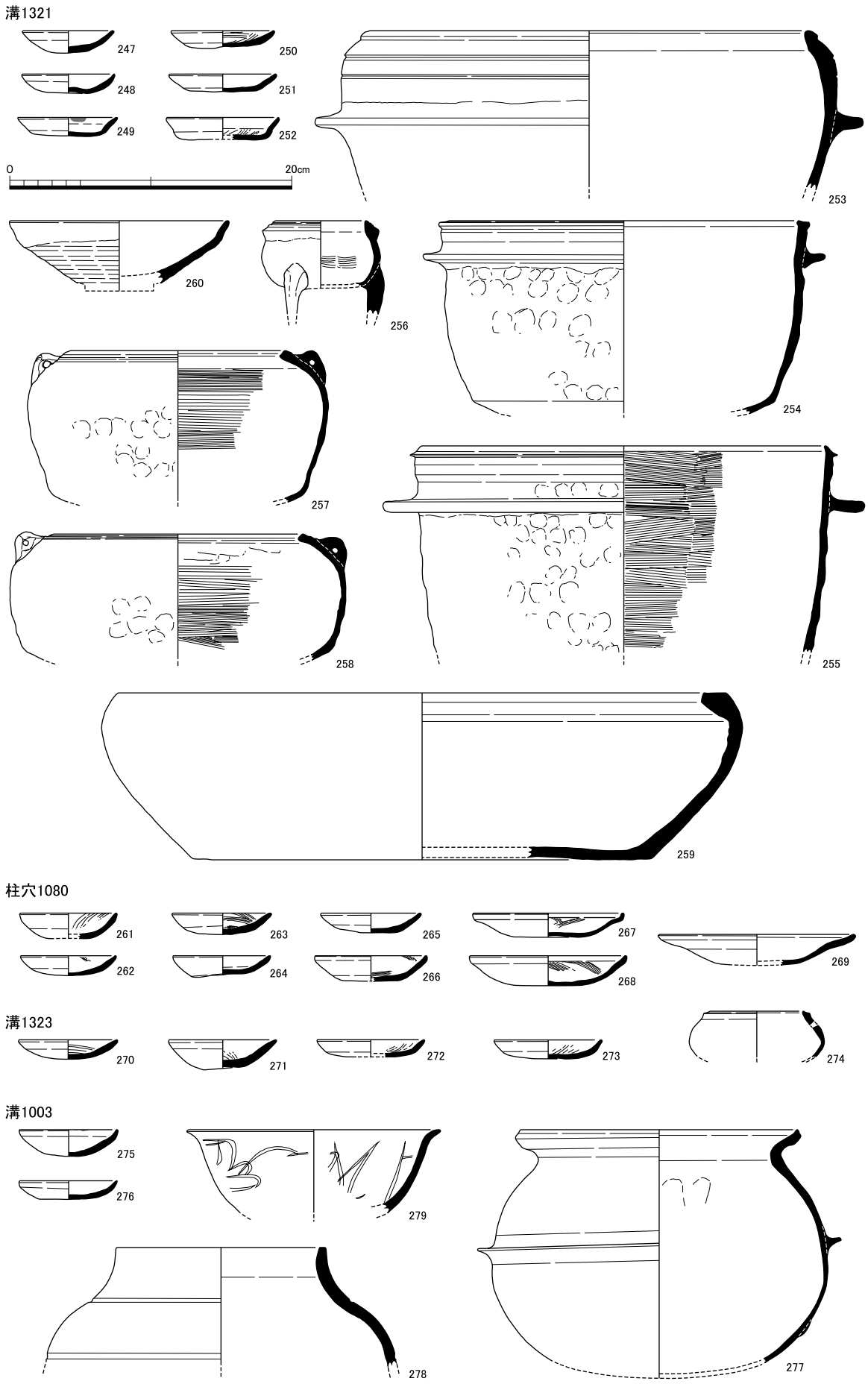
溝256（古）



溝1160

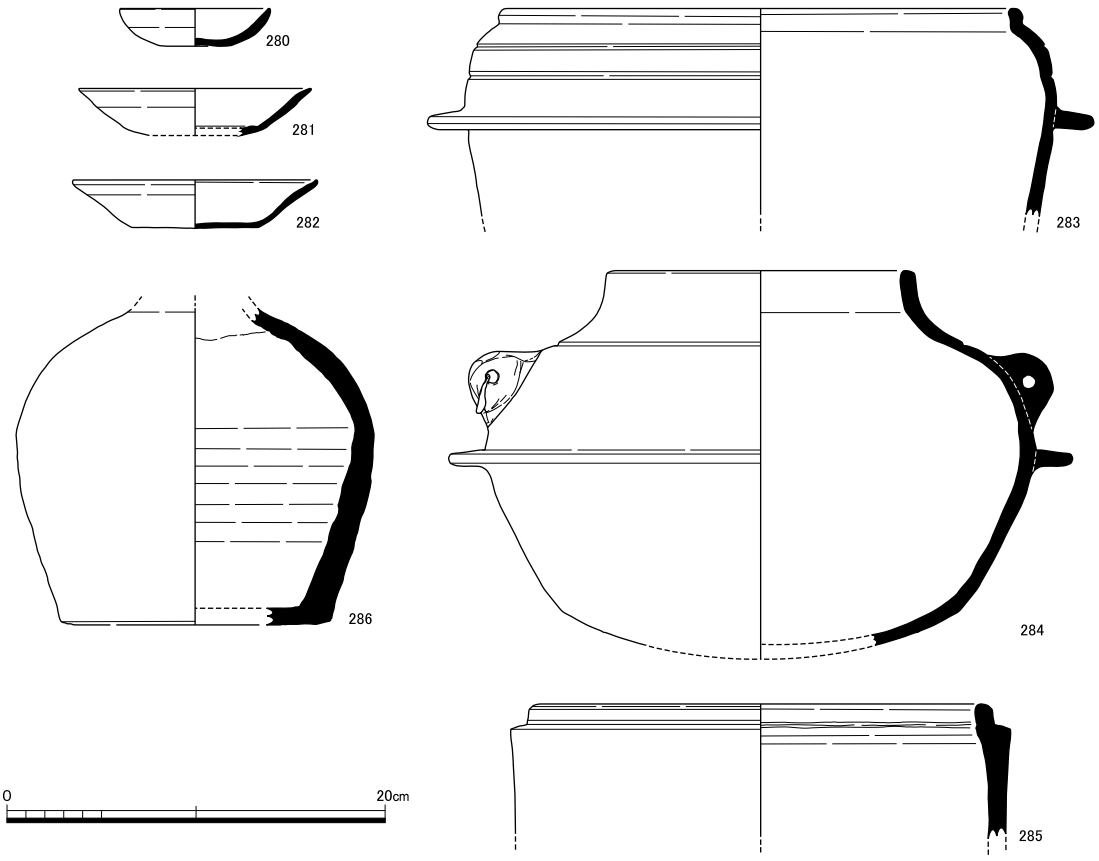


土坑1627、４区Ⅶ層・Ⅵｂ層、土器溜1383、溝1322・256（古）・1160出土土器実測図（１：４）

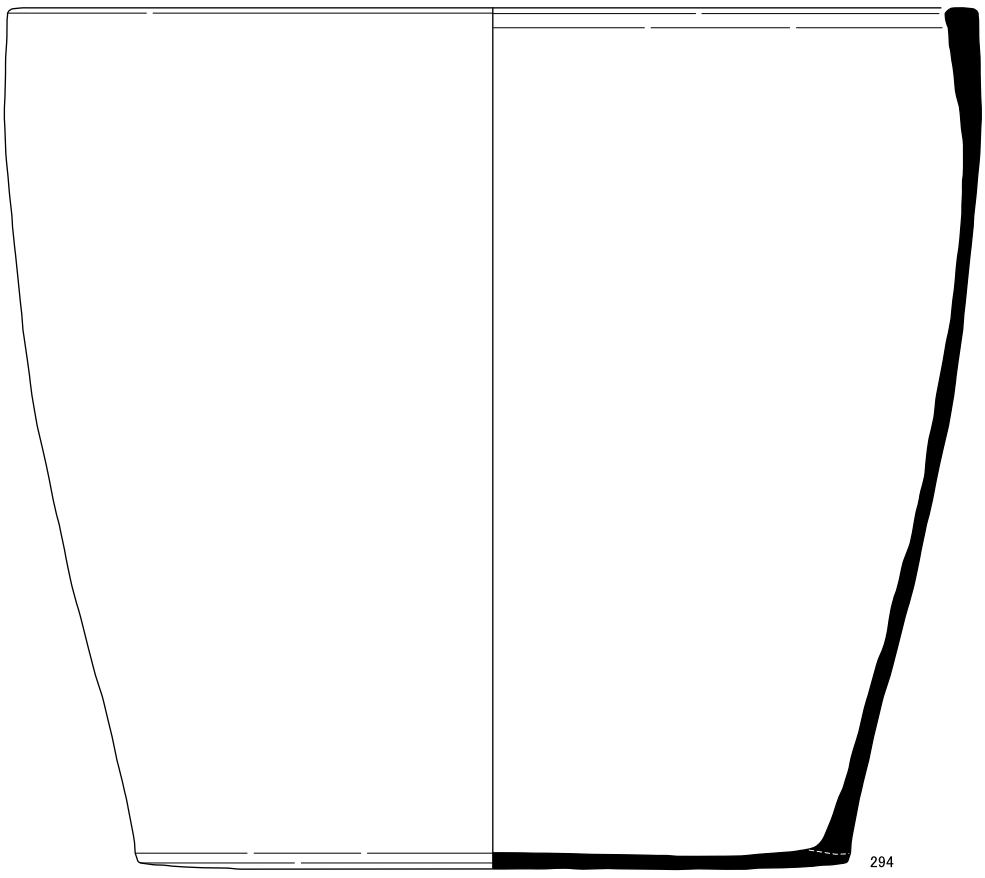


溝1321、柱穴1080、溝1323・1003出土土器実測図（１：４）

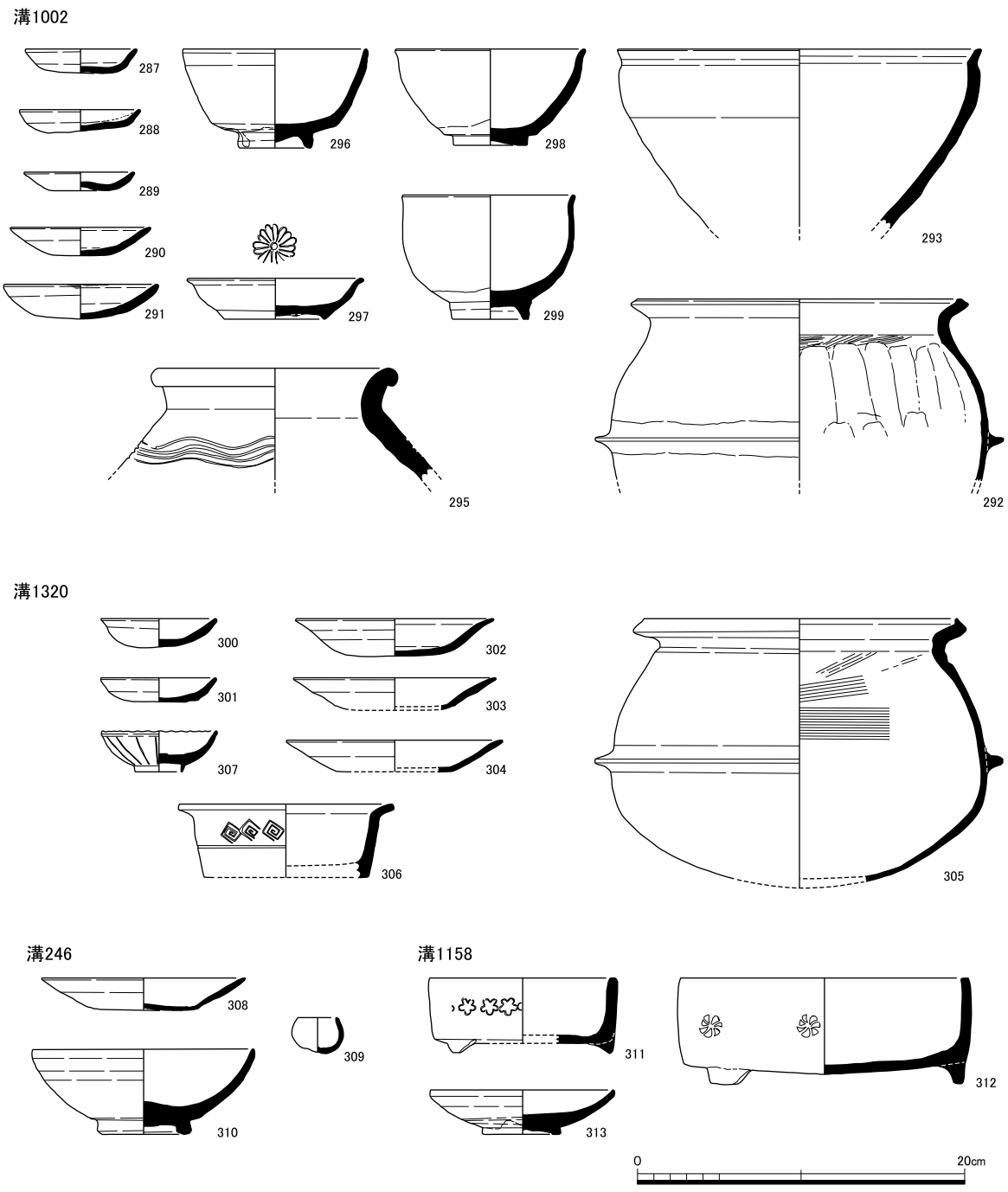
溝256（新）



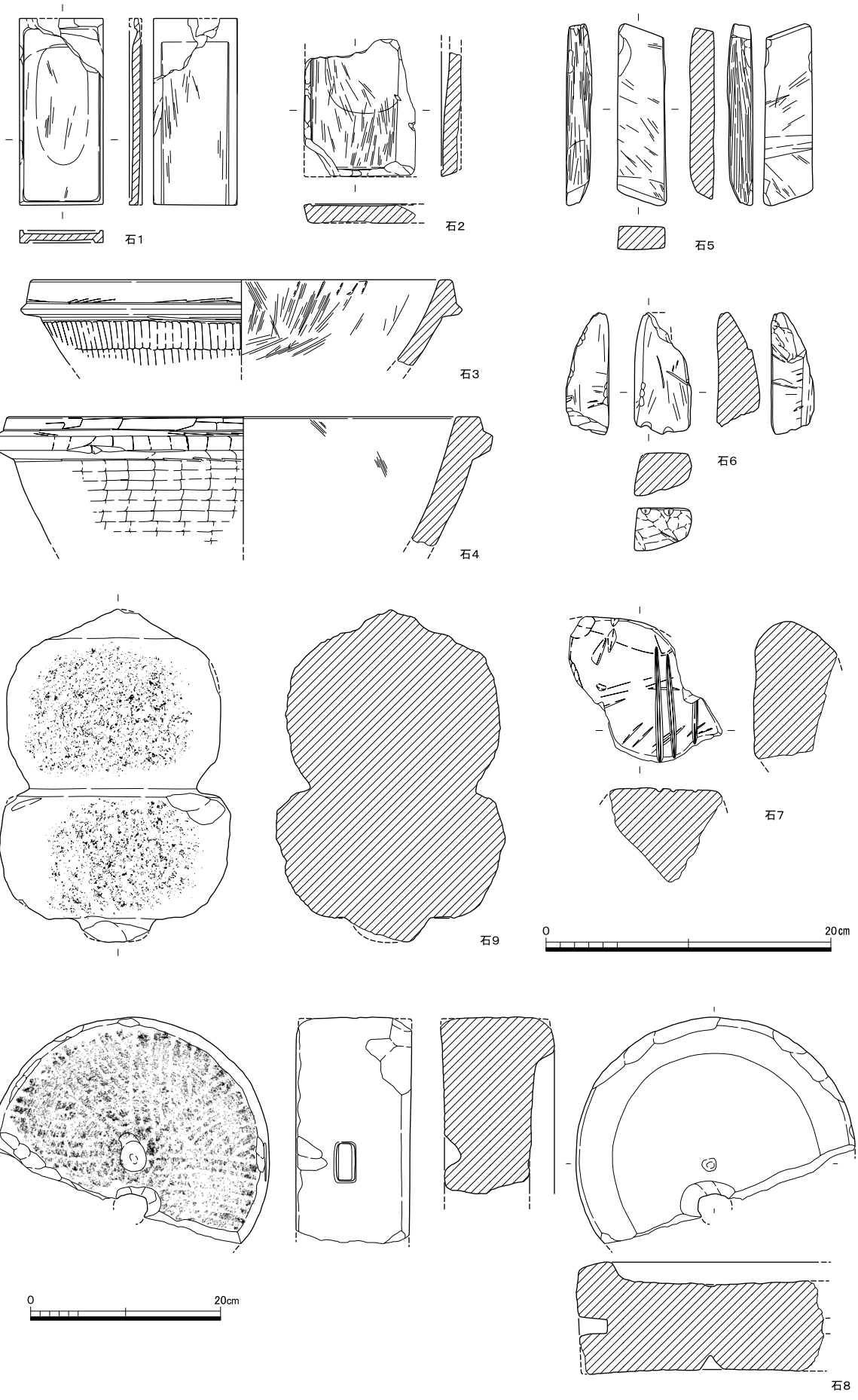
溝1002



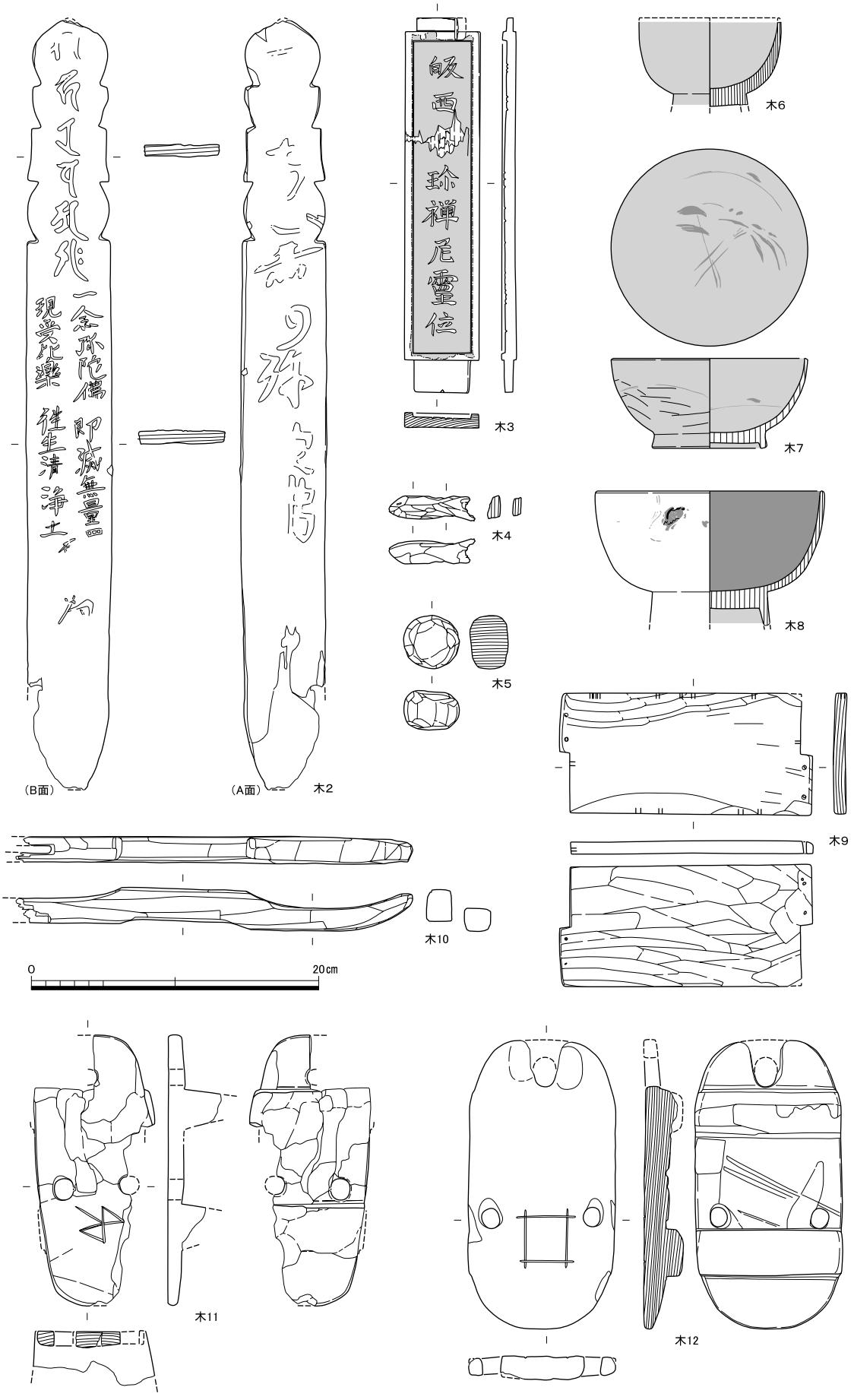
溝256（新）・1002出土土器実測図（１：４）



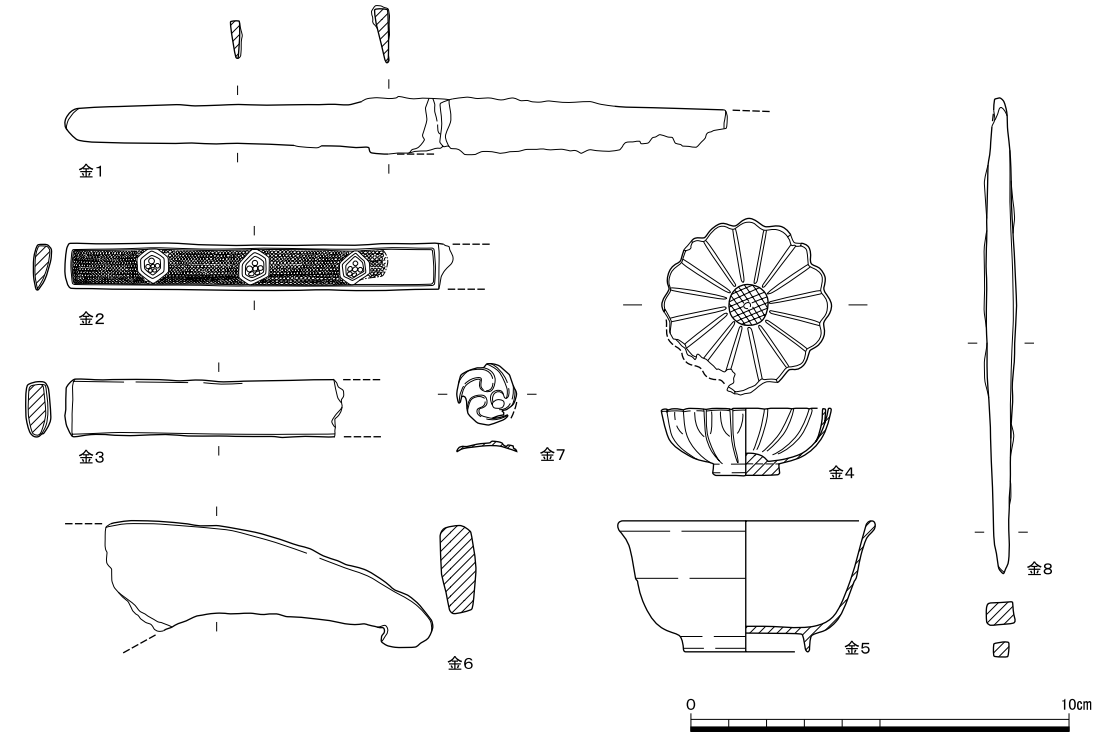
溝1002・1320・246・1158出土土器実測図（1 : 4）

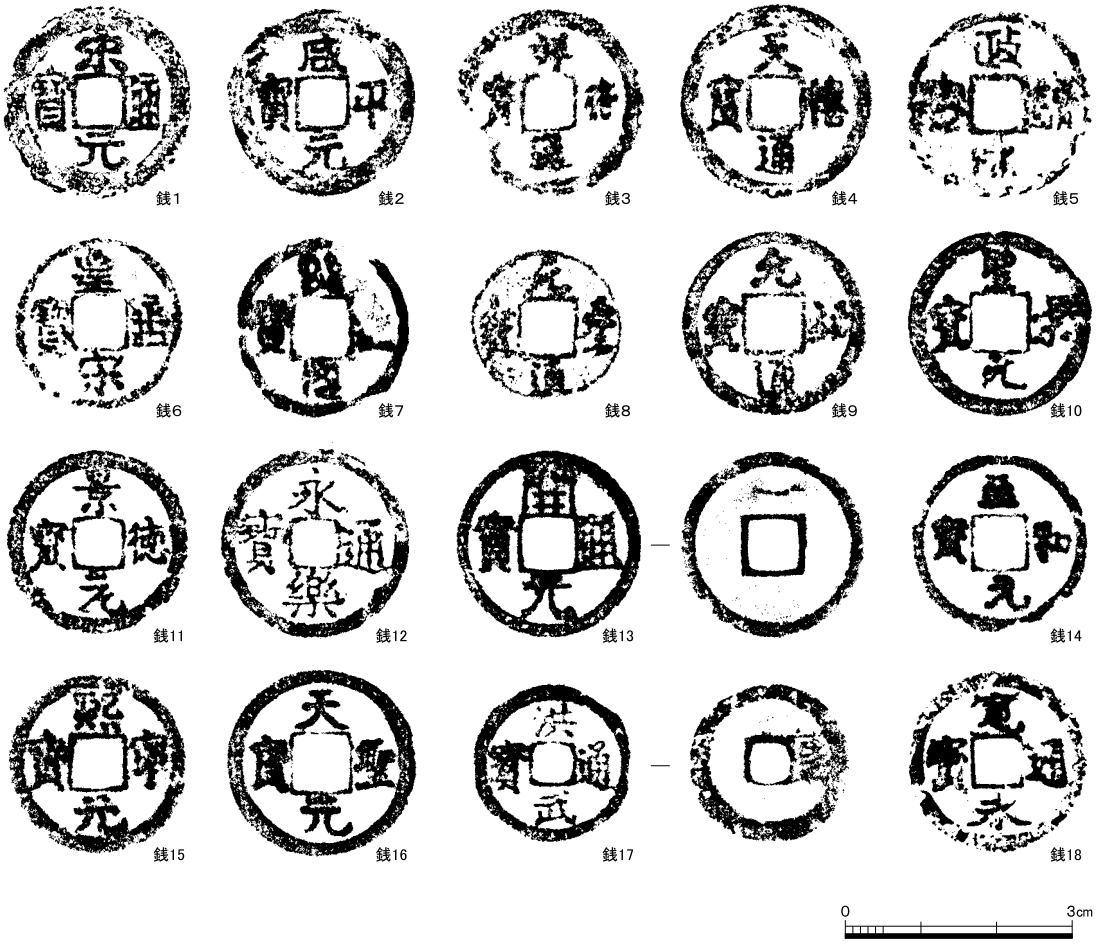


石製品拓影及び実測図（１：４、石８のみ１：６）



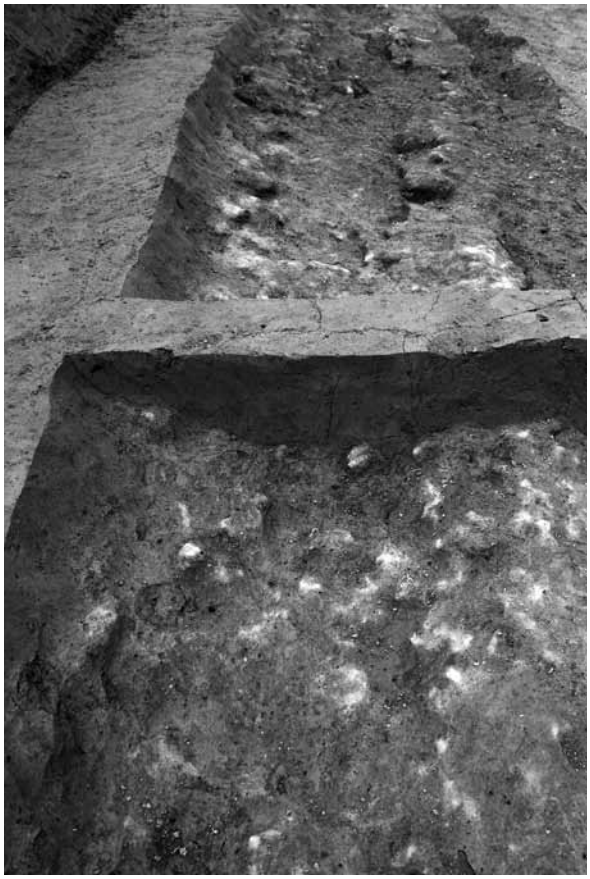
木製品実測図（1：4）



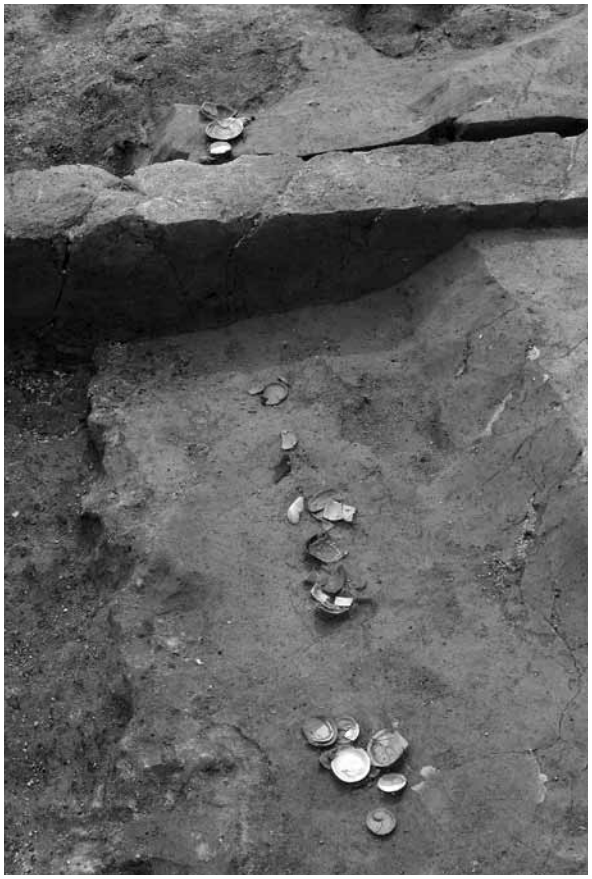


金属製品実測図（１：２）、銭貨拓影（１：１）

1　５区 第３面（平安時代後期から鎌倉時代前葉）全景（北東から）



2　５区 溝2032（北から）



3　５区 溝2037土器出土状況（北から）

1　4区 第4面（鎌倉時代中葉から室町時代前半）全景（南西から）

2　5区 第2面（鎌倉時代中葉から室町時代後半）全景（北から）

1　５区 溝2013・2023・2027（南東から）

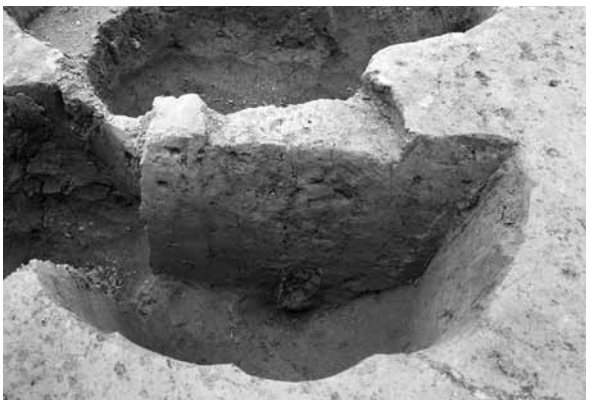
2　５区 土坑2014（北西から）

3　５区 土坑2039（北から）

1　4区 建物1577・1662（北から）

2　4区 柱穴1582・1585（北から）

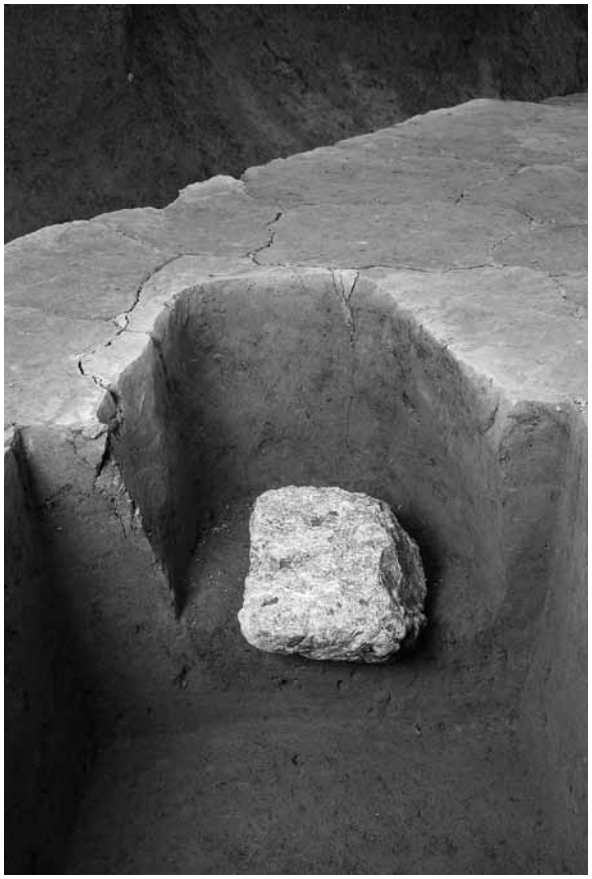
3　4区 柱穴1577（東から）



4　4区 柱穴1590（東から）

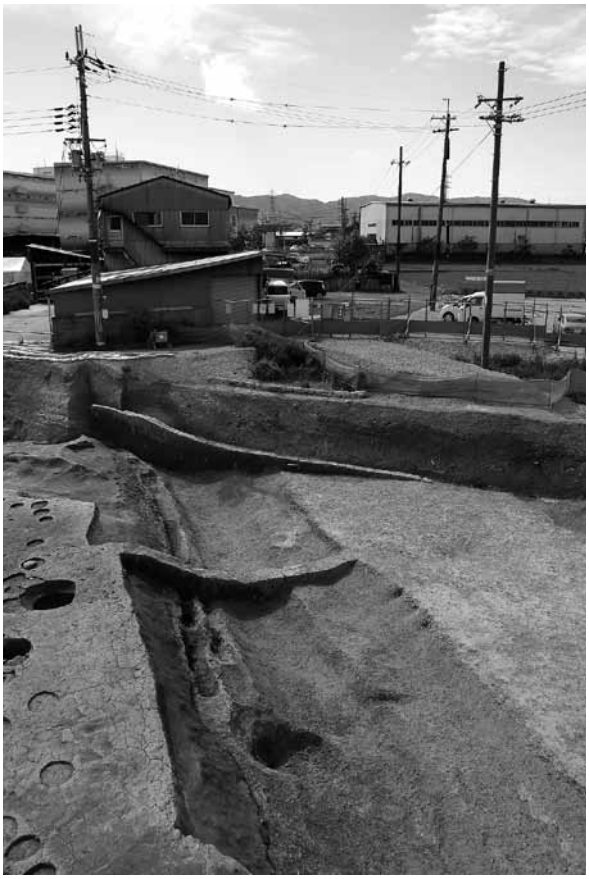
1　4区 第3面（室町時代後半〔古段階〕）全景（西から）

2　4区 建物1463（北から）

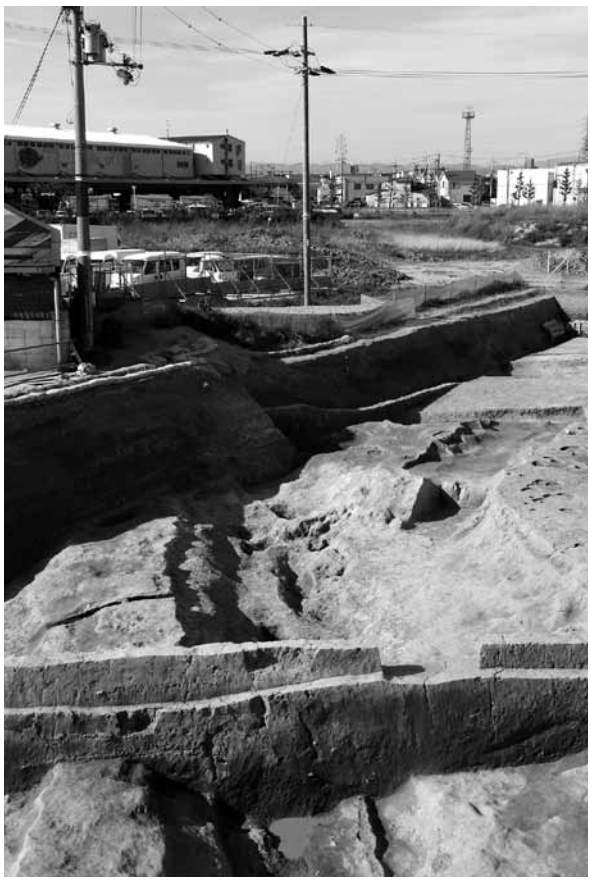


3　4区 柱穴1465（北から）

1　4区 溝256（東から）



2　4区 溝1003・1160・1168（東から）



3　4区 溝1322（南から）

4　4区 溝1322 貝殻堆積状況（北から）

5　4区 暗渠1376（東から）

1　4区 第2面（室町時代後半〔新段階〕）全景（北から）

2　4区 第2面 中央部柱穴群（西から）

1　5区 溝2025（南東から）

2　5区 溝2009（南から）

3　5区 土坑群2028・2029（北から）

1　4区 第1面（安土桃山時代から江戸時代）全景（北東から）

2　4区 建物1093、柵1056（西から）

1　4区 建物1027（東から）

2　4区 柱穴1032（西から）

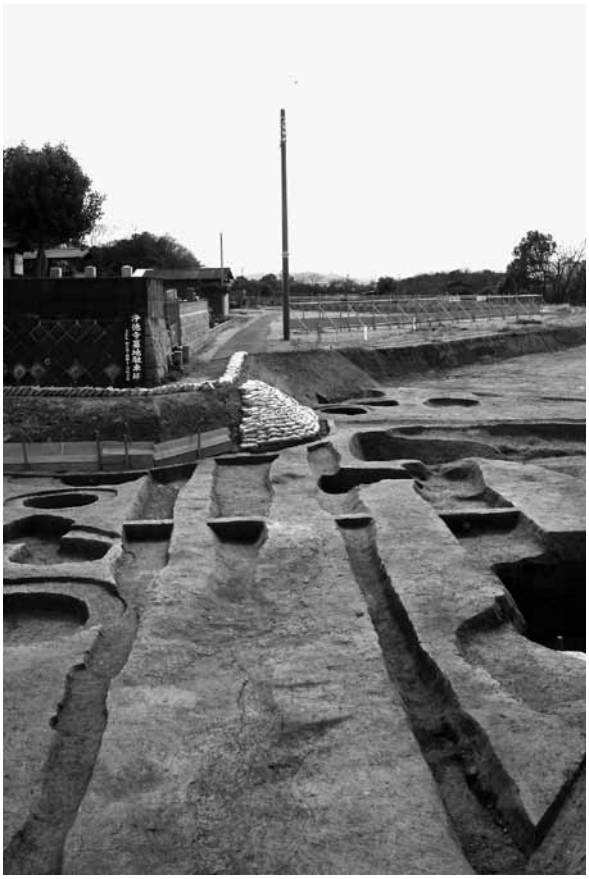
3　4区 柱穴1032半裁状況（西から）

1　4区 溝1001～1003・1125・1160・1168堆積状況（西から）

2　4区 溝1002 柿経出土状況（北東から）

3　4区 溝1002 卒塔婆出土状況（西から）

1　５区 第１面（安土桃山時代から江戸時代）全景（北東から）



2　４区 溝1009・1012～1014（北から）

3　４区 土坑1008（西から）

4　４区 土坑1004（北東から）

11

19

25

29

34

36

59

45

42

38

62

溝2037・2038出土土器

84

77

74

81

140

151

163

157

162

溝2030、土坑2018出土土器

216

224

222

226

227

228

264

268

284

土器溜1383、柱穴1080、溝256（新）出土土器

288

289

291

308

310

296

297

311

313

305

溝1002・1320・246・1158出土土器

瓦3

瓦1

瓦2

土1

土2

石1

石8

石9

瓦類、土製品、石製品

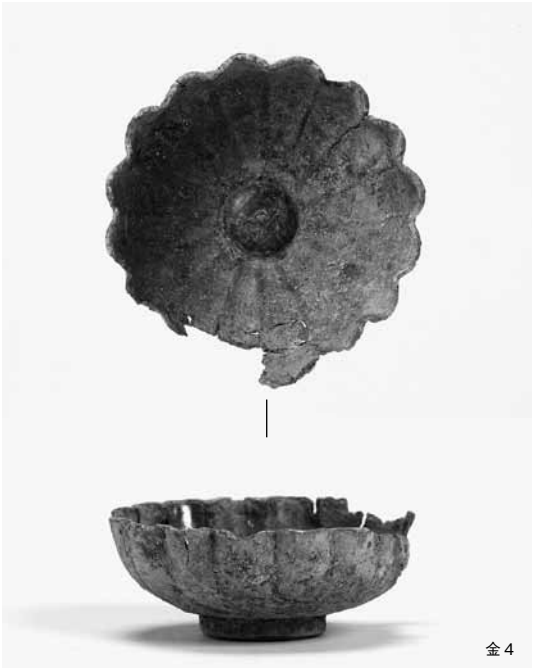
木2

木3

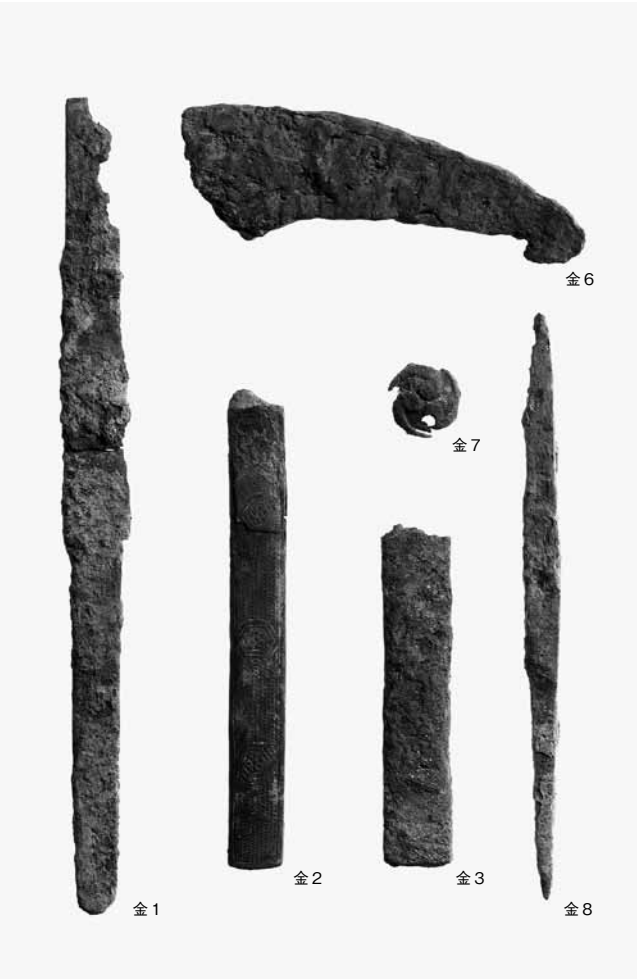
木4

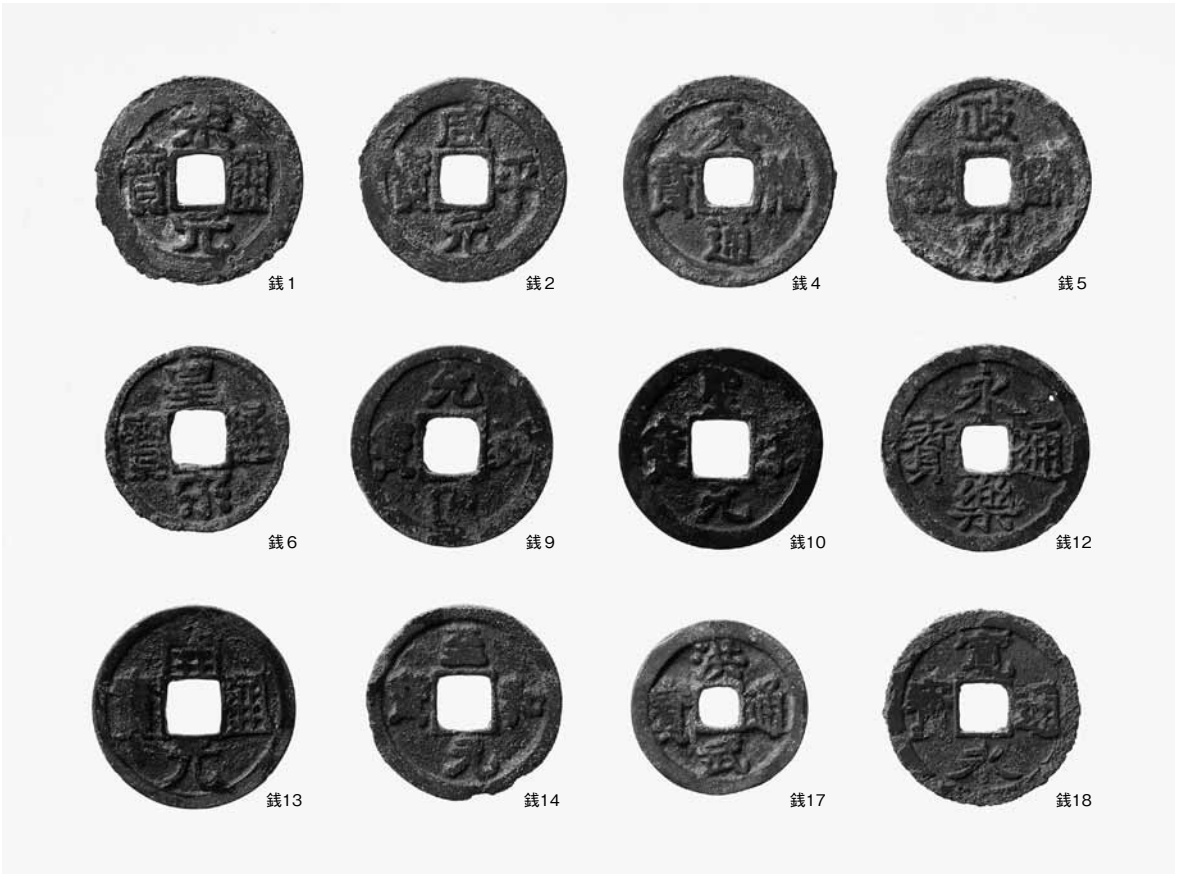
木12

木製品


金4

金5


金1 金2 金3 金6 金7 金8


銭1 銭2 銭4 銭5 銭6 銭9 銭10 銭12 銭13 銭14 銭17 銭18

金属製品

報　告　書　抄　録

ふ り が な	とみのもりじょうあと
書　　名	富ノ森城跡
シ リ ー ズ 名	京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告
シリーズ番号	２０２１－８
編 著 者 名	中谷正和・伊藤 潔・南 孝雄
編 集 機 関	公益財団法人　京都市埋蔵文化財研究所
所　在　地	京都市上京区今出川通大宮東入元伊佐町265番地の1
発　行　所	公益財団法人　京都市埋蔵文化財研究所
発 行 年 月 日	西暦2022年３月15日

所収遺跡名（ふりがな）	所在地（ふりがな）	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
富ノ森城跡（とみのもりじょうあと）	京都市伏見区（きょうとしふしみく）横大路北ノ口町（よこおうじきたのくちちょう）他 地内（ほか ちない）	26100	1189	34度55分01秒	135度43分54秒	2021年１月18日～2021年11月２日	1,776㎡	都市計画道路整備

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
富ノ森城跡	平城跡	平安時代	溝	土師器、瓦器、須恵器、白色土器	平安時代から安土桃山時代の囲郭集落を確認した。集落北限の溝から永禄12年(1569)の側面墨書を持つ柿経が出土した。
		鎌倉時代	建物、土坑、溝、湿地状堆積	土師器、瓦器、須恵器、輸入陶磁器、瓦類、土製品、金属製品、銭貨	
		室町時代	建物、柵、柱穴、溝、暗渠、土坑、土器溜	土師器、瓦器、焼締陶器、施釉陶器、輸入陶磁器、瓦類、石製品、木製品、金属製品、銭貨	
		安土桃山時代	建物、柵、溝、湿地状堆積、噴砂	土師器、瓦器、焼締陶器、施釉陶器、輸入陶磁器、石製品、木製品、金属製品、銭貨	
		江戸時代	溝、井戸、土坑、湿地状堆積	瓦器、施釉陶器、瓦類、石製品、木製品、金属製品、銭貨	

京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告　2021-8

富ノ森城跡

発行日　2022年3月15日

編　集
発　行　公益財団法人　京都市埋蔵文化財研究所

住　所　京都市上京区今出川通大宮東入元伊佐町265番地の1
〒602-8435　TEL 075-415-0521
http://www.kyoto-arc.or.jp/

印　刷　三星商事印刷株式会社

住　所　京都市中京区新町通竹屋町下る弁財天町298番地
〒604-0093　TEL 075-256-0961